

がん研究助成金事業  
事後評価報告書  
(案)

がん研究助成金事業事後評価委員会

平成24年2月



## 序

がん研究助成金は、がん対策の企画及び行政を推進し、並びにがん医療の向上を図ることを目的に厚生労働大臣が必要な研究に対して交付する補助金として、1963年(昭和38年)より国立高度専門医療センター特別会計(設立当時は国立病院特別会計)で予算措置されてきたものである。その研究費の配分機能は、1963年の国立がんセンター(当時)の設立時から国立がんセンター総長に委任されており、学識経験者を中心に構成される運営委員会を設置の上、研究課題及び研究者の選定や研究費の配分、研究成果の評価が実施されてきた。(参考資料3参照)

がん研究助成金は、昭和38年度に7つの研究課題、総研究費20百万円にて開始され、以後、年を追うごとに課題数及び総研究費は増加し、最終年度の平成21年度は108研究課題、総研究費は1904百万円であり、累積では3,000課題以上の研究課題に対し600億円以上が交付された。研究課題は各時代の学会や社会の要請や最新の知見に照らして決定され、昭和52年度からは公募型研究と指定型研究2形態で運用されてきた。(参考資料4参照)

研究班は国立がんセンターを含む研究機関や大学の他、がん医療を担う全国の国立病院やがん専門医療施設の研究者を中心に組織され、各班員の緊密な協力のもと、がんの原因解明、がんの診断・治療・予防法の確立、がんの診断・治療に必要な機械開発を目的とした研究、疫学研究、萌芽的な研究、さらに、がん対策を推進していく上での基盤づくりのための研究が行われた。(参考資料5参照)

がん研究助成金は、平成22年4月の国立がんセンターの独立行政法人化に伴い、平成21年度をもって終了するまで、およそ50年にわたって幅広い分野の多くのがん研究を支援し、わが国のみならず世界のがん医療の飛躍的な向上に著しい成果をもたらしてきた。

がん研究助成金事業の終了に伴い、「厚生労働省の科学研究開発評価の指針」に「研究開発施策及び研究開発課題については、原則として事前評価及び事後評価を行う。」と定められており、その内容に基づきがん研究助成金事業の事後評価を実施することとした。

そのために、がん研究助成金事業事後評価委員会(参考資料11参照)を組織し、がん研究助成金研究事業の事後評価に資するため、独立行政法人国立がん研究センターや厚生労働省医政局国立病院課と協力して過去の全研究課題を見直し、がん研究助成金が支援した研究のうち特筆すべき成果と、それがどのようにがんの診断・治療技術の向上に結び付いてきたか、さらにそれが国民にとってどれだけメリットがあったかを明かにすることとした。

がん研究助成金に関する資料は限られているが、可能な限り、現存する資料を活用しがん研究助成金事業の総括を行い、報告書を編纂した。がん研究助成金終了の後も、がん研究が推進されることを祈念するものであり、本報告書ががん研究助成金の歩みを知るよすがとなれば幸いである。

平成24年2月

がん研究助成金事業事後評価委員会

## 目次

### I がん研究助成金 全体の展望

1. がん研究助成金の概要 .....	2
1) 概要	
2) 文部省「がん特別研究」との対比	
3) 対がん 10 力年総合戦略	
2. がん研究助成金の必要性 .....	3
1) 行政的意義	
2) 専門的・学術的意義	
3) 目的の妥当性	
4) 科学的・技術的意義	
5) 社会的・経済的意義	
3. がん研究助成金の効率性 .....	5
1) 計画・実施体制・目標・達成管理の妥当性	
2) 費用構造や費用対効果の妥当性	
3) 研究開発の手段やアプローチの妥当性	
4. がん研究助成金の有効性 .....	7
1) 目標の達成度	
2) 新しい知の創出への貢献	
3) 社会・経済への貢献	
4) 人材の養成	
5) 直接の成果の内容	
6) 効果や波及効果の内容	
7) 実用化・事業化の見通し	
8) 行政施策実施への貢献	
9) 知的基盤の整備への貢献	
5. 考察 .....	12

## II 参考資料

1. (参考資料 1) がん研究助成金事業の研究成果大要 ..... 1 5
2. (参考資料 2) JCOG と研究班の歩み ..... 6 8
3. (参考資料 3) がん研究助成金運営委員会名簿 ..... 6 9
4. (参考資料 4) がん研究助成金予算額・研究課題数の推移 ..... 7 4
5. (参考資料 5) がん研究助成金 研究課題一覧表 ..... 7 7
6. (参考資料 6) がん研究助成金によるシンポジウム ..... 1 5 6
7. (参考資料 7) がん研究に関する受賞者へのがん研究助成金の貢献 ..... 1 5 9
8. (参考資料 8) 研究課題名に特定の部位名が記載されている研究班数 ..... 1 6 9
9. (参考資料 9) がん研究助成金による国民の健康増進への貢献 ..... 1 7 1
10. (参考資料 10) がんセンターの職員が主任研究者である研究班数と割合 ..... 1 7 6
11. (参考資料 11) がん研究助成金事後評価委員会委員名簿 ..... 1 7 7



---

がん研究助成金 全体の展望

## 1. がん研究助成金の概要

### 1) 概要

がん対策は厚生労働省における最も重要な施策の一つとして位置づけられている。がん研究助成金は「がん対策の企画及び行政を推進し、並びにがん医療の向上を図る」ことを目的に厚生労働大臣が必要な研究に対して交付する補助金として、1963年(昭和38年)より国立高度専門医療センター特別会計(設立当時は国立病院特別会計)で予算措置されてきたものである。

がん研究助成金による研究は厚生労働省のがん政策医療推進の一環として行われていたものであり、厚生労働省として実施する行政的意義は非常に大きい。がん研究助成金は、わが国のがん対策を推進していく上での基盤づくりのための研究、がん予防、診断・治療に係る臨床研究や疫学研究、萌芽的な研究などに重点を置いており、がん政策医療の目的に沿って実施されていたことから、行政施策との関連性は非常に強い。

がん研究助成金においては、がん政策医療ネットワークを構成する全国の国立病院をはじめ、がん専門医療施設、大学等の積極的な参加のもとに多施設共同による研究が実施されており、参加施設のレベルアップを図るとともに厚生労働省のがん政策医療やがん医療の均てん化を全国的に推進する上でも重要な役割を果たしてきたものである。

### 2) 文部省「がん特別研究」との対比

文部省「がん特別研究」は昭和41年度に発足し、平成5年度に第28年次をもって終了した事業である。文部省の研究施設および科学研究費は、がんの研究、特に基礎研究を推進せんとするものであった。他方、厚生省がん研究助成金による研究対象は具体的ながんの診断、治療の改善にあり、集学的治療法の確立など多くの成果を上げてきた。このように厚生省のがん助成金と文部省のがん特別研究による研究は重複することなく車の両輪として相互補完の形で日本のがん研究を推進してきたものである。

### 3) 対がん10カ年総合戦略

「対がん10カ年総合戦略」は厚生省・文部省・科学技術庁の三省庁が力を合わせて最先端のがん研究を推進し、10年をめどに本態解明を図り、その成果を予防・診断・および治療に反映させ、がんで苦しむ人のために役立てようとするものである。「対がん10カ年総合戦略」は1984年から1993年に実施された。「対がん10カ年総合戦略」は1994年に「がん克服10カ年戦略」へ引き継がれ、2004年からは「第3次対がん10カ年戦略」が行われている。基礎そして診療研究の発展、普及を目指すがん研究助成金とともに全国のがん診療、研究レベルの向上に貢献してきた。



## 2. がん研究助成金の必要性（参考資料 1 参照）

### 1) 行政的意義（厚生労働省として実施する意義及び緊急性等）

がん研究助成金により行われた、発がん機構の研究は、当時汎用されていた食品添加物 AF-2 の使用禁止（昭和 49 年）など、環境中の様々な発がん物質の検索と規制をもたらした。また、1992 年に組織された研究班により、ヘリコバクター・ピロリ菌の感染がヒト胃がんの原因であることが見出されることに大きく貢献する研究が行われ、現在では除菌による胃がん予防が確立しつつある。

このように、厚生労働省のがん政策医療推進の一環として行われていた、がん研究助成金によりもたらされた研究成果は、厚生行政に高く貢献してきた。

また、がん研究助成金はわが国のがん対策を推進していく上での基盤づくりのための研究、がん予防、診断・治療に係る臨床研究や疫学研究、萌芽的な研究などに重点を置いており、がん政策医療の目的に沿って実施されていたことから、行政施策との関連性は強く、国費を用いた研究開発としても妥当であった。

### 2) 専門的・学術的意義（重要性及び発展性等）

1979 年よりがん研究助成金で支援されてきた成人 T 細胞白血病の特性解明の研究成果が、日本発の免疫療法の研究開発に発展し、現在では治療薬として抗 CCR4 ヒト化モノクローナル抗体の臨床試験が進行中である。

また、1989 年の日本型 C 型肝炎ウイルス（HCV）の遺伝子配列の解明が、培養細胞の HCV 感染複製系の樹立につながり、抗 HCV 薬の研究開発に展開した。

さらに、小細胞肺がんの腫瘍マーカーとして見出された血中ガストリン放出ペプチド前駆体の測定法は小細胞肺がんの診断法として利用されている。

上述の例をはじめ、がん研究助成金により臨床や研究に役立つ成果が多数もたらされている。

### 3) 目的の妥当性

がん研究助成金は「がん対策の企画及び行政を推進し、並びにがん医療の向上を図る」ことを目的に厚生労働大臣が必要な研究に対して交付する補助金として、1963 年（昭和 38 年）より国立高度専門医療センター特別会計（設立当時は国立病院会計）で予算措置されてきたものである。交付対象課題において高い有効性が示されており、がん研究助成金は多種のがん研究を支えることによって、がん医療水準の向上に大きく貢献してきた。

### 4) 科学的・技術的意義（独創性、革新性、先導性及び発展性等）

がん研究助成金によるこれまでの研究により、肺がんについては肺腺がん及び肺扁平上皮がんの感受性遺伝子が同定され、リスク診断を目指した探索研究が継続中である。

また、アルコール代謝酵素の遺伝的多型から、食道がんや頭頸部がんの発がん感受性の予測

が可能となり、個人レベルのがん予防の周知に活かされている。また、がん組織を構成する間質細胞には生物学的変異があることが明らかにされ、がん細胞のみでなく周辺の間質細胞を含むがん組織を標的とした治療法開発も検討されている。

がん研究助成金では、多くの発がん促進物質や発がん抑制物質を明らかにするとともに、数々の新しい抗がん剤の有効性と作用メカニズムを明らかにし、合理的な抗がん剤投与による治療成績の向上に貢献してきた。また、がんの本態解明や大規模疫学研究によって、新たながん予防の開発につなげる役割も果たしてきている。

#### 5) 社会的・経済的意義

がん研究助成金により行われた、がん治療における病理診断の標準化に関する研究ではがん腫による診断一致率の違いが検討された結果、診断一致率の重要性が臨床医の間でも認知されつつある。また、増殖性の高い病変である表面型大腸がんについては、その粘膜内病変の組織像の形態学的観察から、腺腫を伴わず粘膜から直接がん化する可能性が見出され、早期発見に貢献した。さらに早期肺腺がんについては、その悪性度判定因子となりうる遺伝子を同定するとともに、薄切胸部 CT 画像による悪性度の術前診断法が開発され、早期発見と治療の発展に貢献した。がん研究助成金による、がん治療法の向上に貢献した研究成果は多数存在する。

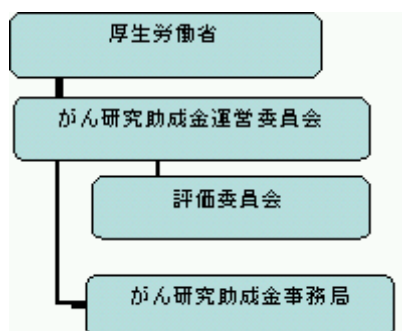
他にも、各種がんに対する標準的治療の進歩のための臨床試験の実施を目的として組織された多施設共同臨床研究グループ(日本臨床腫瘍研究グループ JCOG)は全国のがん専門医療施設約 190カ所の多施設共同によるがん臨床試験の実施体制を構築し、がん臨床試験の品質管理及び品質保証の方法論を確立した(参考資料 2 参照)。

このように、がん研究助成金においては、がん政策医療ネットワークを構成する全国の国立病院をはじめ、がん専門医療施設、大学等の積極的な参加のもとに多施設共同による研究が実施されており、参加施設のレベルアップを図るとともに厚生労働省のがん政策医療やがん医療の均てん化を全国的に推進する上でも重要な役割を果たしてきた。

### 3. がん研究助成金の効率性

#### 1) 計画・実施体制・目標・達成管理の妥当性

がん研究助成金にかかる事務は国立がんセンター総長に委任されており、学識経験者や行政関係者で構成される運営委員会を設置の上、研究課題及び研究者の選定や研究費の配分、研究成果の評価を実施してきた。(参考資料 3 参照)



(がん研究助成金事業概略図)

がん研究助成金は運営委員会により、運営方針等事業展開が決定される。課題評価のための評価委員会は運営委員会委員により構成されている。運営委員会の決定事項は事務局により処理され、シンポジウムの運営、備品選考等にあたっての委員会等が事務局により開催され、常に公正かつ多角的な判断がなされる体制となっている。

がん研究助成金の交付対象となる研究課題及び研究者の選定、研究費の配分並びに研究課題の評価にあたっては、行政関係者及び有識者で構成する運営委員会において、社会の要請や最新の知見に照らして審議決定されており、適正な運用が図られてきた。(参考資料 3 参照)

研究課題については、研究者は研究計画やこれまでの成果などについて報告し、それらを運営委員会委員が評価し、必要な指摘は研究者にフィードバックをするような体制となっていた。

#### 2) 費用構造や費用対効果の妥当性

評価基準を定めて研究課題を評価し、その結果を課題の選定及び研究費の配分に反映させていたほか、研究期間を原則 2 年間ないし 3 年間で単位とし、研究の成果及び評価結果に応じて研究課題の見直しや継続の可否を判断するなど、有効性と効率性を十分配慮した、適正な運用が図られてきた。

### 3) 研究開発の手段やアプローチの妥当性

がん研究助成金は昭和 38 年度に 7 課題の研究課題にて開始され、年を追うごとに研究課題数は増加の一途をたどった。昭和 52 年度からは公募研究と指定研究の 2 形態で運用された。また、公募研究にあっては、総合研究、計画研究、機械開発研究に分け、より効率的かつ効果的に研究が出来るように配慮された。(参考資料 4 参照)

研究の形態としては、臨床的研究、基礎的研究並びに行政的研究を含めて実施する「総合研究」、関連学会や研究関連学会等で重要性が認識され、社会的要請に基づき計画的かつ集中的に実施する必要のある課題について研究する「計画研究」、がんの診断・治療に必要な機械器具を開発する「機械開発研究」、関連学会や社会的要請に基づき計画的かつ集中的に実施する「指定研究」で構成されていた。

研究責任者である主任研究者が全国的な視野に立ち各分野から専門家を選出して研究班を構成し、各班員の緊密な協力のもとに研究を推進してきた。各研究の研究者は全国の国立、公立、私立の医療機関に広く分布し、その研究は各分野において着実に成果をおさめ、がんの予防、診断、治療に大きく貢献してきた。(参考資料 5 参照)

研究形態		研究期間	研究者数	概要
公募研究	総合研究	3 年以内	10-12 人	がんの診断、治療、予防法を確立するため、臨床研究を中心として推進する。
	計画研究	2 年以内	4-6 人	関連の学会等で研究の重要性が認識され且つ重要な課題について焦点を絞り推進する。
	機械開発研究	2 年以内	8-10 人	がんの診断、治療に必要な機械器具を開発する。
指定研究		3 年以内	定数なし	関連学会または社会的要請に基づき、研究課題を指定し、計画的かつ集中的に行う。

#### 4. がん研究助成金の有効性

##### 1) 目標の達成度

がん研究助成金によるこれまでの研究より、世界的に通用する質の高いがん臨床試験体制が確立されたのをはじめ、内視鏡治療や機能温存手術の開発のように既に実用化され体への侵襲が少なくかつ安全性の高い根治療法を可能としたもの、固形がんに対する同種細胞免疫療法のように副作用が少なく有効な治療法の開発に結びついたものなど、臨床や研究に役立つ成果が多数出ている。

##### 2) 新しい知の創出への貢献

がん研究助成金による支援のもと、研究者の懸命な努力により多くの領域において著しい研究成果が上がった。ことに、研究を大きくリードした優れた研究が多くなされ、国内外において高く評価されたことは特筆されるべきことである。

例えば、がん研究助成金で実施された、抗がん剤内包ミセル製剤の開発では、シスプラチンやタキソールなどのミセル製剤の治験が進められ、抗腫瘍効果の増強と有害事象の軽減が認められている。また、ポリ ATP リボース合成酵素(PARP)阻害剤の開発では、PARP の機能解析等の研究から PARP 阻害が DNA 修復応答を阻害し、さらにはがん細胞致死を増強することも見出され、同阻害剤の臨床応用が進行中である。

ヘリカル X 線 CT の開発は、連続した切れ目のない画像情報によって診断能の向上をもたらすとともに、被ばくの低線量化にも貢献した。現在普及している CT のほぼすべてがヘリカル X 線 CT であり、肺がん等の検診に積極的に利用されている。また CT の普及は、MRI と組み合わせた診断体系の構築に寄与するとともに、デジタル画像診断の普及に貢献した。

##### 3) 社会・経済への貢献

がん研究助成金においては、がん政策医療ネットワークを構成する全国の国立病院機構をはじめ、がん専門医療施設、大学等の積極的な参加のもとに多施設共同による研究が実施されており、参加施設のレベルアップを図るとともに厚生労働省のがん政策医療やがん医療の均てん化を全国的に推進する上でも重要な役割を果たしてきた。

がん研究助成金により行われたがん登録では、県(市)単位の地域がん登録データを全国集計し、国レベルの統計としては唯一のがん罹患率の全国推計値の計算が行われ、がん対策の優先順位付けに重要な情報源を提供した。また、患者単位の院内がん登録データの収集も全国規模で行われ、がん診療の質を評価する点で重要な施設別 5 年生存率を算出し、がん患者の治療選択の際の重要な情報源を提供した。

大規模コホート研究をはじめとする疫学研究によって、日本人ががんに罹る主な要因とその要因を保有することによるがん罹患リスクの大きさ、要因の制御により予防可能ながんの割合など

をエビデンスとして定量的に示すことが可能となり、がんに関する正しい知識の実践によってがんのリスクを下げるのが可能となった。

がん検診については、有効性評価に資する多数の研究から、がん検診による死亡率減少効果に関する科学的根拠が蓄積され、がん検診有効性ガイドラインの策定と市町村によるがん検診を科学的根拠に基づいて行う基盤を提供した。また、公衆衛生施策として行う対策型検診と個人の判断で受ける任意型検診の概念の導入にも貢献した。さらに、X線二重造影法による胃がん検診、免疫学的便潜血検査、低線量CTによる肺がん検診など、新たな検診手法も開発され、がん検診に導入された。

また、研究成果は発表会やシンポジウムのほか、「厚生労働省がん研究助成金報告集」やインターネットで公表するなど、成果の普及と研究の透明性確保にも努めてきた。(参考資料6参照)

#### 4) 人材の養成(目標の実現可能性や達成のための研究者の存在)

がん研究助成金による研究班は、大学・研究機関の研究者に偏らず、がん医療を担う全国の国立病院機構、がん専門医療施設等の研究者、医療従事者を中心に構成しているほか、班友制度を設け、研究意欲のある国立病院機構の職員に研究へ参加する機会を提供しており、研究者の養成や資質向上といった人材の養成にも貢献してきた。

がんの臨床・公衆衛生に密接に関連した研究を行い、研究所と病院部門の協力によるプロジェクト研究の推進に加え、国内研究者とのネットワークを構築し、国内外の優れた研究者が共同しがん研究を推進する体制が整えられていた。

がん研究助成金による研究班は、大学・研究機関の研究者に偏らず、がん医療を担う全国の国立病院機構、がん専門医療施設等の研究者、医療従事者を中心に構成しているほか、班友制度を設け、研究意欲のある国立病院機構の職員に研究へ参加する機会を提供するなど、国内のがん研究の第一人者により研究事業が行われてきた。

がん研究助成金により行われた研究の質は高く、がん研究に関連する賞を受賞する研究者も多数輩出してきた。(参考資料7参照)

#### 5) 直接の成果の内容

多くの新しい発がん促進物質や発がん抑制物質を明らかにしてきた基礎研究分野、種々の新しい抗がん剤の有効性と作用機序を明らかにし合理的な抗がん剤投与による治療成績の向上に貢献してきた臨床研究分野、鮮明な画像や立体映像を得ることで従来の方法では検出できなかったがんを見出し新たな治療法の開発へ貢献してきた機械開発研究など、がん研究助成金による研究により、多くの領域において著しい研究成果が上げられた。また疫学研究や公衆衛生上の観点から意義のある研究に関しても多くの成果があげられてきた。

#### 6) 効果や波及効果の内容(研究開発への質の向上への貢献)

がん研究助成金の研究事業による直接の研究成果以外にも、がん研究助成金の交付を受け

た多施設共同研究の質の向上に関する研究によって、臨床試験の品質管理・品質保証を行い、有害事象報告の把握など適切な臨床試験実施体制を築き上げ、我が国の臨床研究の費用対効果の向上に貢献してきた経緯から、我が国におけるがん研究全体の質の向上が期待される。

また、がんの臨床・公衆衛生に密接に関連した研究を行い、研究所と病院部門の協力によるプロジェクト研究の推進に加え、国内研究者とのネットワーク構築、国際協力や若手研究者育成にも寄与してきたことから、がん研究助成金により養成されてきた人材が、今後は国内外の第一線でがん研究に寄与し効果が波及していくと考えられる。

## 7) 実用化・事業化の見通し

がん研究助成金では、様々な新規治療法を開発するなど、実用化・事業化に結びついたものも多い。例えば、1994年からはじまった、内視鏡の画像強調観察のひとつ Narrow Band Imaging (NBI)の開発では、頭頸部から大腸まで、がんの早期診断、鑑別診断を容易にし、侵襲の小さい又は臓器温存治療が可能となった。また早期胃がんに対する内視鏡的粘膜切除術は、IT ナイフを用いた新たな手技の開発によって、大型の病変や潰瘍瘢痕合併例の根治切除も可能にし、標準手技として確立した他、食道がんや大腸がんにも適応が拡大され、根治性が高まった。さらに、消化器悪性腫瘍のなかでも胃悪性リンパ腫や食道がんに対しては、標準治療として化学放射線療法が開発され、侵襲性の低い非外科的治療で治癒が得られるようになった。

がん治療における病理診断の標準化に関する研究ではがん腫による診断一致率の違いが検討された結果、診断一致率の重要性が臨床医の間でも認知されつつある。また、増殖性の高い病変である表面型大腸がんについては、その粘膜内病変の組織像の形態学的観察から、腺腫を伴わず粘膜から直接癌化する可能性が見出され、早期発見に貢献した。さらに早期肺腺がんについては、その悪性度判定因子となりうる遺伝子を同定するとともに、薄切胸部CT画像による悪性度の術前診断法が開発され、早期発見と治療の発展に貢献した。

肝胆膵外科領域の悪性腫瘍、特に胆道がんの根治を目指した拡大手術においては、非手術的な術前減黄処置、門脈塞栓術、血行再建術といった技術が開発され、広範囲肝切除の安全性が大きく向上した。また、がんの根治手術では身体機能の欠失を最小限にするため、脳神経、眼球、発声、肺、肝、肛門、排尿などの各機能を温存が行えるようになった。さらに、頭頸部悪性腫瘍の外科的治療においては顔貌(上顎骨や下顎骨)再建手術が、乳がんの外科的治療においては乳房温存手術、乳房再建手術が、それぞれ開発され、患者のQOLを著しく改善した。一方、低侵襲性手術の開発では、内視鏡下手術が大腸がんや胃がん、肺がんに適応拡大され、さらに難易度の高い食道がんや直腸がん或いは肝胆膵の領域においても、内視鏡下手術が積極的に行われるようになった。

また、がん疼痛の治療、療養の質や痛み以外の症状緩和に関する研究の成果は、日本緩和医療学会の複数のガイドラインに採用された。特に、がん疼痛に使用される医療用麻薬の消費量はガイドライン刊行後、大きく伸長した。また、患者・家族への精神心理的ケアに関する研究では、うつ病が最大・最悪の精神心理的苦痛であることが明かにされ、その成果はがん患者のうつ病に

対する症状緩和プログラムの開発と普及に繋がり、患者・家族の療養生活の質の向上に大きく貢献した。

がん研究助成金では鮮明な画像や立体映像を得ることで従来の方法では検出できなかったがんを見出し、新たな診断・治療機器の開発に貢献するとともに、内視鏡治療や機能温存手術の開発のように、既に実用化され体への侵襲が少なく安全性の高い根治療法を可能としたものや、固形がんに対する同種細胞免疫療法のように副作用が少なく有効な治療法の開発に結び付いたものなど、実用化に結び付く研究開発を行ってきた。

このように、延命効果の改善や侵襲の少ない手術術式の確立などを含む、その質の高い臨床試験の結果は、がんの標準治療として国内外の各種学会の診療ガイドラインに採択されており、企業治験による抗がん剤開発と並んで、がんの標準治療の開発に大きく貢献してきた。

#### 8) 行政施策実施への貢献

昭和 56 年から「がん」は我が国の死因の第一位となり、社会的に大きな問題となった。がんの本態を解明することは国を挙げて取り組むべき重要課題とされがん研究の推進が図られてきた。

がん研究助成金は、がん対策を企画・推進していく上で有用な研究やがんの予防法、診断・治療法の開発普及に結びつく臨床研究を主体としており、こうした研究費の性格から、がん研究助成金の社会的必要性や行政的意義は大きかった。

例えば、がん研究助成金により、がん登録の法制化を例として政策提言に必要な調査研究が行われ、その提言は平成 23 年のがん対策推進協議会への報告を経て、第 2 期がん対策推進基本計画素案に反映されることとなった。また、がんの代替療法に関する実態調査や健康食品に関する文献調査が行われ、その正確な実態や情報は一般向けのガイドブック、医療者向けのガイドラインとしてそれぞれ、ホームページや冊子にて公表し、補完代替療法に対する普及啓発に寄与した。

このように、がん検診の導入、がん登録の普及、正確ながん情報の提供など、公衆衛生やがん対策の施策に直接的な役割を果たすとともに、がん研究助成金による研究成果は予防、診断、治療を含めたがん対策に応用され、行政施策を実施する上で大きく貢献してきた。

#### 9) 知的基盤の整備への貢献

がんの集学的治療の開発を担う多施設共同研究グループ体制として、1990年に日本臨床腫瘍研究グループ(Japan Clinical Oncology Group: JCOG)が組織され、国際標準の質の確保された研究者主導の臨床試験が数多く実施され、世界的に通用する質の高い臨床試験体制整備が行われたことも特筆すべきことである。

JCOG 試験の結果は 2011 年現在、各種がんの診療ガイドラインに 21 試験採択されており、各種がんの標準治療の確立に貢献してきた。JCOG 試験により新たな標準治療が生み出されるとともに患者の予後も改善している。具体例としては、進展型小細胞肺がんの予後は生存期間中央値で 9.4 か月から 12.8 か月に(JCOG9511 試験)、切除不能/再発胃がんの予後は生存期間中央



値で 7.1 か月から 11.4 か月に改善した(JCOG9204 試験、JCOG9912 試験)。従来手術単独が標準治療であった病理病期 II/III 期食道がんにおいては、術後補助化学療法の導入により 5 年生存割合が 45%から 61%に改善し(JCOG8806 試験、JCOG9204 試験)、さらに術前化学療法の導入によって臨床病期 II/III 期の 5 年生存割合が 43%から 55%へ改善した(JCOG9907 試験)。こうした一連の JCOG 試験の成果により、現在臨床病期 II/III 期食道がんの標準治療は術前化学療法＋手術となっている。

他にも、1980 年から 1990 年代にかけて、外科手術による根治性を高めることを目指して、拡大リンパ節郭清や他臓器合併切除といった侵襲的な拡大手術が広く行われるようになったが、これらの有効性についてのエビデンスは確立されていなかった。JCOG により、これらの有効性を検証する多施設共同試験が行われ、傍大動脈周囲リンパ節の予防郭清の有効性や、胃噴門部がんに対する開胸による縦隔リンパ節郭清の有効性は否定された。これらの結果は New Engl J Med 誌や Lancet Oncology 誌に掲載され、より低侵襲な手術手技の確立へ貢献した。

また、JCOG の研究成果により、進行・再発胃がんの初回治療における標準治療として TS-1＋シスプラチン併用療法が推奨されるようになった。その結果、進行・再発胃がんの予後は、1990 年代前半に生存期間中央値が 7.1 か月であったのに対し(JCOG9205 試験の 5-FU 単剤群)、2010 年代には 11.4 か月(JCOG9912 試験の S-1 群)にまで改善した。

このように、治療薬や診断機器以外にも、がん研究助成金では医師主導による多施設共同臨床試験の品質管理・品質保証を支援し、国際水準の質の確保された臨床試験実施体制を構築することで、がんの標準治療の決定に貢献してきた。

## 5. 考察

がん研究助成金は昭和 38 年に 7 つの研究班から開始され、最終年度である平成 21 年には 108 の研究班を数えるまでになった。がん研究助成金が創設された頃の昭和 39 年、ときの池田勇人首相(1960 年から 1964 年まで在任)が喉頭がんのため国立がんセンターに入院し、池田首相の入院は世間へ大きな衝撃を与えた。このような背景もあり、がん研究に一層の拍車がかかり、厚生省のがん研究助成金も具体的な目標を志向して、大幅に予算額が伸びていった。昭和 56 年から「がん」は我が国の死因の第一位となり、社会的に大きな問題となった。がんの本態を解明することは国を挙げて取り組むべき重要課題とされ、「対がん 10 力年総合戦略」などととも、がん研究の推進が図られた。

時代の変遷とともに様々な観点からがん研究が推進されたが、がん研究助成金により行われた研究はその時代のがんの傾向を反映したものとなっている。例えば、「がんの主な部位別死亡者数の年次推移」と「がん研究助成金の研究課題名に特定の部位名が記載されている研究班数」を比較分析すると(参考資料 8 参照)、死亡者数が横ばい傾向にある胃がんの研究課題数は年を経るごとに減少傾向にあり、一方、死亡者数が増加傾向にある、大腸がん、肝及び肝内胆管がん、気管、気管支及び肺がん、乳がんに関しては、研究課題数が増加傾向にあった。がん研究助成金による研究課題が、がんの死亡者数にどのような影響を与えたのかについて分析を行うのは難しいが、がんを克服すべく取り組まれた研究は 5 年相対生存率の向上やがん検診の受診率の向上など、国民の健康増進へ大きく寄与したと考えられる。(参考資料 9 参照)

がん研究助成金により取り組まれた幅広い分野にわたる研究は、臨床現場にも影響を及ぼすとともに、予防、診断、治療を含めたがん対策へ広く貢献してきたことは、時代が移り変わろうとも評価することが出来る客観的な事実である。

がん研究助成金は、全国の研究施設に幅広く配分されることで我が国のがん研究の底上げを図る目的を強く帯びた研究費であり、全国の幅広い分野や場所において人材育成に強く貢献してきた。がん研究助成金事業が開始された当初、主任研究者が国立がんセンター職員である割合は 2 割以下であったが、最終年度には国立がんセンター職員が主任研究者である割合は 5 割を超えるようになった。(参考資料 10 参照)「国立がんセンターにおいては、がん患者に対して、科学的根拠に基づく最善の医療を提供するために積極的に臨床研究に取り組むとともに、多施設が共同して実施する臨床研究に対して、必要な技術的支援を行っていく」(がん対策基本計画)と定められていることもあり、国立がんセンターがその使命を果たすための基盤的な研究経費として、国立高度専門医療センター特別会計(設立当時は国立病院特別会計)で研究費が措置されてきたことは意義深く、国立がんセンターへ研究費を集中させることで、がん研究を効率的に推進し、がん研究の相互調整等に係る研究や、主力研究機関として高度・先駆的医療の開発等を主体的に実施することができたと考察できる。国立がんセンターを中心に行われてきた長期的戦略に基

づく他施設共同型の大規模研究等を厚生労働省科学研究費補助金といった研究費で実施することは困難であり、JCOG や JPHC Study に代表される特色ある研究が実施され、我が国のがん研究を牽引してきたことは特筆すべきことである。

がん研究助成金は平成 21 年度をもって終了したが、これまでにがん研究助成金が日本のがん研究に貢献してきた役割は非常に大きい。がん研究助成金によりがん対策の研究が昭和 38 年度から平成 21 年度まで推進され、その結果、多くの知見が得られ、診断法、治療法などが飛躍的に向上してきた。しかし、確実な早期診断や治療法の確立には至っておらず、現在でもがんは日本人の死亡原因の約 3 割(第 1 位)を占める重要な疾患であることから、今後とも引き続き研究を推進すべき分野であることは確かである。がん研究助成金が構築してきた様々な研究体制や研究成果が今後も継続され、発展していくことを強く望むものである。

なお、独立行政法人がん研究センターにより作成された、参考資料 1 「がん研究助成金の成果大要」にも、独立行政法人がん研究センターの立場から記述された『今後の展望』が記されており、御参考として頂きたい。

がん研究助成金事業の事後評価を実施するにあたり、50 年にわたる研究事業の成果を評価することには様々な困難があった。研究体制(企画、実施、管理)、成果報告・評価などの仕組みは時代とともに整備されてきた経緯があり、現存する資料から長期にわたる成果を今日的な視点から評価することは困難であった。また、国民健康、社会、経済などの領域への影響も少なからずあったと考えられるが、それらについてエビデンスを用いて検証することはできなかった。

今回、上述した困難な状況にもかかわらず、がん研究助成金事業事後評価委員会により、研究事業の評価を行った。今後、研究事業の評価を実施する際には、行政にあたえた成果を様々な観点から検証・評価する仕組みが必要であると考えられる。



---

参考資料

1. (参考資料 1) がん研究助成金事業の研究成果大要
2. (参考資料 2) JCOG と研究班の歩み
3. (参考資料 3) がん研究助成金運営委員会名簿
4. (参考資料 4) がん研究助成金予算額・研究課題数の推移
5. (参考資料 5) がん研究助成金 研究課題一覧表
6. (参考資料 6) がん研究助成金によるシンポジウム
7. (参考資料 7) がん研究に関する受賞者へのがん研究助成金の貢献
8. (参考資料 8) 研究課題名に特定の部位名が記載されている研究班数
9. (参考資料 9) がん研究助成金による国民の健康増進への貢献
10. (参考資料 10) がんセンターの職員が主任研究者である研究班数と割合
11. (参考資料 11) がん研究助成金事後評価委員会委員名簿



## がん研究助成金の研究成果大要

平成 24 年 1 月 31 日

独立行政法人国立がん研究センター

## I. はじめに

およそ 50 年にわたって幅広い分野の多くのがん研究を支援してきたがん研究助成金については、今般、厚生労働省の研究開発施策としての事後評価を行うことが厚生科学審議会で決定された。がん研究助成金の配分機能は、昭和 37 年の国立がんセンターの設立の直後から国立がんセンター総長に委任されており、当センターにはがん分野の幅広い研究についての知見が蓄積されている。そこで、独立行政法人国立がん研究センターでは、厚生労働省医政局国立病院課の依頼を受け、がん研究助成金の成果と社会に与えた影響について、事後評価に向けた資料をとりまとめることとした。

## II. 経緯

がん研究助成金は、がん対策の企画及び行政を推進し、並びにがん医療の向上を図ることを目的に厚生労働大臣が必要な研究に対して交付する補助金として、1963年（昭和38年）より国立高度専門医療センター特別会計（設立当時は国立病院会計）で予算措置されてきたものである。

その研究費の配分機能は、昭和37年の国立がんセンターの設立の直後から国立がんセンター総長に委任されており、学識経験者を中心に構成される運営委員会を設置の上、研究課題及び研究者の選定や研究費の配分、研究成果の評価が実施されてきた。

がん研究助成金は、昭和38年度に7つの研究課題、総研究費20百万円にて開始され、以後、年を追うごとに課題数及び総研究費は増加し、最終年度の平成21年度は108研究課題、総研究費は1,904百万円であり、累積では3,000課題以上の研究課題に対し600億円以上が交付されたことになる。

研究課題は各時代の学会や社会の要請や最新の知見に照らして決定され、昭和52年度からは公募型研究と指定型研究2形態で運用されてきた。研究班は国立がんセンターを含む研究機関や大学の他、がん医療を担う全国の国立病院やがん専門医療施設の研究者を中心に組織され、各班員の緊密な協力のもと、がんの原因究明・本態解明、がんの診断・治療・予防法の確立、がんの診断・治療に必要な機器開発を目的とした研究、疫学研究、萌芽的な研究、さらに、がん対策を推進していく上での基盤づくりのための研究が行われた。

課題の選定と研究費の配分には運営委員会による評価が反映されたほか、研究期間は原則2～3年間を単位とし、研究成果及び評価結果に応じて研究課題の見直しや継続の可否の判断がなされるなど、適正な運用が図られてきた。

このようにして、がん研究助成金は、平成22年4月の国立がんセンターの独立行政法人化に伴い、平成21年度をもって終了するまで、およそ50年にわたって幅広い分野の多くのがん研究を支援し、わが国のみならず世界のがん医療の飛躍的な向上に著しい成果をもたらした。

今般、がん研究助成金については、「厚生労働省の科学研究開発評価に関する指針」に基づき、研究開発施策としての事後評価を行うことが厚生科学審議会で決定された。そこで、本件の所管課である医政局国立病院課より、がん分野の幅広い研究について知見のある独



立行政法人国立がん研究センターにおいてがん研究助成金研究事業としての成果や社会へ与えた影響など、その基礎となる資料のとりまとめを行うことが依頼された。

独立行政法人国立がん研究センターでは、がん研究助成金研究事業の事後評価に資するため、過去の全研究課題を見なおして、がん研究助成金が支援した研究のうち特筆すべき成果と、それがどのようにがんの診療・治療技術の向上に結び付いてきたか、さらにそれが国民にとってどれだけメリットがあったかを明かにすることとした。

### Ⅲ. 研究成果大要の作成方法

独立行政法人国立がん研究センターでは、企画経営部研究企画課が本件のとりまとめ事務局となり、各研究分野の調整役の専門家と作業グループ※を組織し、以下の要領で作業を進めることとした。

#### ※作業グループ：

中釜 齊 研究所長（基礎）  
飛内賢正 中央病院血液腫瘍科・造血幹細胞移植科科长兼副院長（臨床）  
津金昌一郎 がん予防・検診研究センター予防研究部長（疫学・公衆衛生）  
若尾文彦 がん対策情報センター副センター長兼がん情報提供研究部長（がん対策）  
吉田輝彦 研究所副所長兼遺伝医学研究分野長（がん研究開発費23-A-6）  
山本精一郎 がん対策情報センターがん統計解析室長（がん研究開発費23-A-6）  
（事務局）  
吉田 淳 企画経営部研究企画課長

①がん研究助成金の最終年度である平成21年度分野別指定研究12分野の各分野長※に、がん研究助成金の全研究課題一覧（昭和38年度～平成21年度）を調査して、特記すべきと考える研究成果のリストアップを依頼した。

#### ※平成21年度分野別指定研究分野長：

##### <基礎>

中釜 齊 研究所長  
横田 淳 研究所多段階発がん研究分野長  
落合淳志 東病院臨床開発センター臨床腫瘍病理部長  
落谷孝弘 研究所分子細胞治療研究分野長

##### <臨床>

藤井博史 東病院臨床開発センター機能診断開発部長  
大津 敦 東病院臨床開発センター長  
小菅智男 中央病院肝胆膵腫瘍科科长兼副院長  
田村友秀 中央病院呼吸器腫瘍科科长  
的場元弘 緩和医療科・精神腫瘍科科长

##### <疫学・公衆衛生>

祖父江友孝 がん対策情報センターがん統計研究部長  
津金昌一郎 がん予防・検診研究センター予防研究部長

<がん対策>

若尾文彦 がん対策情報センター副センター長

②リストアップされた研究成果を作業グループで検討、厳選し、研究成果に関する執筆方針を次のように調整した。

【研究成果一覧】

No.	研究成果に関する事項名
1	環境性変異原性・発がん物質の同定 (AF-2 を含む)
2	ヘリコバクタピロリ菌と胃がんの関連性に関する研究
3	T 細胞白血病ウイルス(HTLV-1)による成人 T 細胞白血病の特性の解明
4	肝炎ウイルスと肝がんの関連性：①肝がんとオーストラリア抗原 (HBV) の関連性、②NANB 肝炎と肝がん・C 型肝炎ウイルス (HCV) ゲノムの全塩基配列解明
5	肺小細胞がんの腫瘍マーカー及び特異的抗体の発見
6	発がん感受性遺伝子の単離 (肺がん、胃がん)、食道がんや頭頸部がんの早期病変と遺伝子多型との関係
7	がん生物像を規定するがん組織微小環境に関する研究
8	病理診断における問題点とその標準化に関する研究
9	表面型大腸がんの悪性度解析および発育進展に関する研究
10	早期肺腺がんの概念の確立
11	抗がん剤内包ミセル製剤の開発
12	PARP 等の DNA 修復応答分子を標的とする制がん法の開発
13	ヘリカル X 線 CT 等の開発
14	デジタル画像診断の精度向上とその体系化に関する研究
15	NBI 内視鏡の開発
16	内視鏡粘膜剥離術の開発
17	非外科的治療の標準化：①胃悪性リンパ腫、②食道がん化学放射線療法
18	拡大手術の安全性向上
19	機能温存手術の開発
20	形態温存・復元手術の開発
21	低侵襲手術の開発
22	標準的治療法の確立に関する臨床研究 (JCOG)
23	疼痛緩和と疼痛コントロールガイドラインの作成
24	心のケアに関する研究成果
25	地域がん登録研究班によるがん罹患率全国集計

26	全がん協研究班による院内がん登録施設別生存率集計
27	大規模コホート研究などの疫学研究による、がん予防に資する日本人のエビデンスの構築
28	がん検診の有効性評価や精度管理に資する疫学・公衆衛生研究による、がん検診に資する日本人のエビデンスの構築
29	日本独自の新たながん検診手法の開発
30	がん医療政策提言に向けた研究
31	がんの代替療法に関する研究

#### 【原案作成協力者】

中釜 斉 研究所長 (No.1～6、12、24)  
 落合淳志 東病院臨床開発センター臨床腫瘍病理部長 (No.7～10)  
 松村保広 東病院臨床開発センターがん治療開発部長 (No.11)  
 森山紀之 がん予防・検診研究センター長 (No.13、14)  
 大津 敦 東病院臨床開発センター長 (No.15～17)  
 小菅智男 中央病院肝胆膵腫瘍科科長兼副院長 (No.18～21)  
 福田治彦 多施設臨床試験支援センター長 (No.22)  
 的場元弘 緩和医療科・精神腫瘍科科長 (No.23)  
 祖父江友孝 がん対策情報センターがん統計研究部長 (No.25、26)  
 津金昌一郎 がん予防・検診研究センター予防研究部長 (No.27～29)  
 若尾文彦 がん対策情報センター副センター長 (No.30、31)

#### 【研究成果の記述の仕方】

原案作成協力者に、各項目とも原則 A4 で 1 枚 (図表等込み。) で、次の要領にて研究成果の紹介文 (案) の作成を依頼した。

- (ア) 研究 (開発) 活動の概要を記す。
- (イ) (ア) で記載した活動が、どのように診療・治療の技術向上に結び付いてきたかについて、具体的に言及する。
- (ウ) (ア) で記載した活動が、国民にとってどれだけメリットがあったかについて、言及する。
- (エ) がんの患者数や死亡率の変遷とともに、がん研究のターゲットが変わってきており、そうした背景を踏まえた言及ができる場合は、内容に盛り込む。

③提出された原案を作業グループで検討し、最終稿を調整した。

#### IV. がん研究助成金の研究成果大要

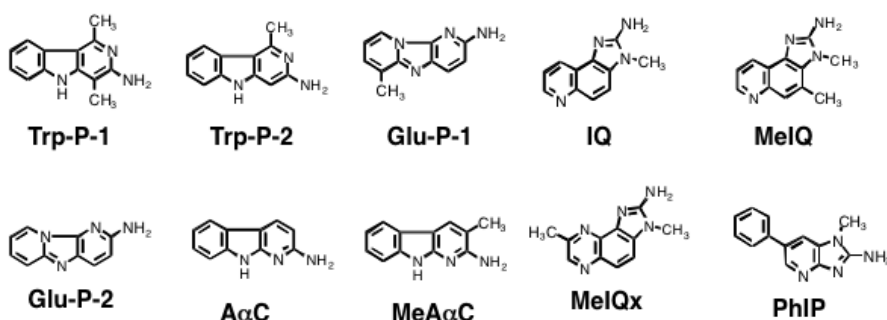
厳選された 31 の研究成果の概要は、次頁以降のとおり。(なお、編集作業において元原稿を出来る限り活かすこととしたので、書式が不揃いであることはご容赦いただきたい。)

## 1. 環境中変異原性・発がん性物質の同定 (AF-2 を含む)

発がん研究の支援において、旧がん研究助成金は大きな役割を果たして来た。1915年のコールタールによる皮膚発がんの実験(山極ら)に始まり、日本は発がん研究において輝かしい成果を挙げて来た。4-NQOの発がん機構の研究が強力に進められ、その分子機構の詳細が纏められた。その後、MNNGによる実験胃がんモデルを確立するなど、発がん研究の国際的な評価も高い。数百種類の化合物について突然変異原性が検討され、発がん性と突然変異原性が強い相関を示す事を明らかにした。さらに、同様の変異原性試験を用いて、加熱した魚や牛肉の焦げた部分や魚を焼いた煙、タバコの煙にも強い変異原性があることを見出し、ヘテロサイクリックアミン類(HCA)などの環境中発がん物質の単離に繋がった。また、各々単独では発がん性を示さないアニリンとトリプトファンから新規の発がん性物質(co-mutagen)が生成されることも見出した。

これらの研究を通じて、発がん性試験の改良が進められ、サルモネラ菌や大腸菌の変異株を用いた簡便で高感度な方法が開発された。改良された変異原性試験により、環境中の様々な変異原性物質の検索が進められた。

その結果、昭和40年以来、食品添加物として汎用されていたAF-2が強い変異原性を持つことを示し、動物実験でも動物実験により発がん性が証明され、最終的に、昭和49年にAF-2の使用禁止の措置がとられた。動物実験で発がん性が示された幾つかのHCAは、国際がん研究機関(IARC)で定められた基準により、Class IIa/IIbの発がん物質として登録され、国際的な視点からも、ヒト発がんへの寄与についての研究が継続的に進められている。



【図】動物実験で発がん性が認められたヘテロサイクリックアミン

Ref.)

41-25 食品中のかびによる発がん性に関する研究

42-2 医薬品、食品添加物及び食品中のかびなどによる発がん性とその試験法に関する研究 など

## 2. ヘリコバクター・ピロリ菌と胃がんの関連性に関する研究

1994年にWHOによりピロリ菌がヒト胃がんの原因であると認定される以前の1992年に、「*Helicobacter pylori*と胃がんの関連に関する研究」班が組織されている。早速、内視鏡による医原性感染の危険性を報告（Kato, JJCR, 1993）、対策を提唱した。また、萎縮による層別化を行った横断的観察で胃がんとの関連を示唆（Fukuda, JJCR, 1995）、1996年から上村氏を班員に加え、同氏の前向き試験によるピロリ菌感染が胃がんの原因であることの証明を支援した（Uemura, New Engl J Med, 2001; 本研究費への謝辞が明記されている）。1997年からは、藤岡氏を中心にスナネズミを用いたモデルの開発を進め、ピロリ菌感染による胃がん解析の基盤を作った。2000年代に入り、食塩による胃がんの促進作用を証明し、また、予防物質の探索や分子機構の解明を目指した幅広い研究を支援した。2005年以降、胃がんの発生にはピロリ菌感染により誘発されたDNAメチル化異常の蓄積が重要であることを第3次対がん研究事業と協力して解明した。MALTリンパ腫に関しては、除菌により消失する可能性が世界の他の研究者により示された（Wotherspoon, Lancet, 1993）後、日本人でも示唆した（1995年報告書）。

消化性潰瘍を伴うピロリ菌感染の除菌は保険収載され、日常臨床に活用されている。除菌により胃がんが予防できるか否かは、対象となる症例を選ぶ必要があるが、現在、ほぼ確立されつつある。内視鏡的治療後の除菌も保険収載されているが、助成金による研究成果等に基づき、浅香氏らが独自の研究資金で研究を推進した成果である。

ピロリ菌感染が胃がんの原因であることは、胃がんの本態解明において画期的・革命的な発見であり、がん研究助成金がそれにつながる研究を支援していたことは国民への大きな貢献と言える。

Ref.)

4-12 *Helicobacter pylori*と胃がんの関連に関する研究

8-14 ヘリコバクター感染と胃がん、胃悪性リンパ腫の関連、予防に関する研究 など

### 3. T細胞白血病ウイルス(HTLV-1)による成人 T細胞白血病の特性の解明

成人T細胞白血病(ATLL)は、1977年に京都大学の内山、高月らによって日本ではじめて報告され、ヒトTリンパ向性ウイルス1型(Human T-lymphotropic Virus Type I: “HTLV-1”)によって引き起こされる。本邦に偏在し、主に西南日本に多く、リンパ節腫脹、肝脾腫大、皮膚病変、高カルシウム血症を特徴とする。悪性リンパ腫の一種であるが、大部分が白血病化する。一般に極めて難治であり、未だ標準治療はない。その生物学的性状も不明な点が多い。日本では120万人、世界では1,000~2,000万人のHTLV-1キャリアがいると推定される。

がん研究助成金による「成人T細胞白血病の特性」に関する支援は、昭和54年(1979年)に始まり、当疾患の臨床、生検、剖検例を全国より収集し、諸外国のT細胞白血病との対比により成人T細胞白血病の特性解明を進めた。平成5年からは、「成人の難治性白血病の分子生物学的機構の解明と薬物療法の確立に関する研究(主任研究者 上田龍三)」が始まり、革新的な治療法開発へ向けての検討が開始された。

平成17年度指定研究-1「高感受性悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究(主任研究者 堀田知光)」において、分担研究者の上田らは、ATLL細胞がCCR4を高度に陽性であり、FoxP3発現と相関を示すことより制御性T細胞(regulatory T cell)由来の可能性を示した。さらに、同細胞株に対してヒトキメラ型抗CCR4単クローン抗体による免疫療法の可能性を検討し、正常人末梢血単核球の存在下で、同抗体がATLL細胞株に対して強い抗体依存性細胞障害性を示し、有効な腫瘍免疫を惹起する可能性が示された。また、HTLV-1 non-endemic 地域でT細胞腫瘍(PTCL)中の最大頻度を占める非特定型T細胞リンパ腫でCCR4発現が独立した予後不良因子であった。

これらの研究成果から、上田らは協和発酵キリンと共同で抗CCR4ヒト化モノクローナル抗体KW-0761を開発した。既に国内フェーズ1試験が終了し、KW-0761は、治療歴を有するCCR4陽性のATLLまたは末梢性T細胞性リンパ腫(PTCL)16人を対象に単剤で投与した国内フェーズ1試験で忍容性が確認され、奏効率は31.3%だった。2010年7月からは、CCR4陽性患者を対象に、VCAP/AMP/VECP(mLSG15)と抗CCR4ヒト化モノクローナル抗体KW-0761の併用療法の国内後期フェーズ2試験が開始され、初発未治療のCCR4陽性ATLLを対象に、mLSG15療法にKW-0761を上乗せした場合の有効性、およびKW-0761の安全性、薬物動態を評価している。基礎研究から医薬品開発、臨床試験まで、国内で開発が行なわれた分子標的薬の第一号となることが期待されている。

Ref.)

54-29 日本におけるT細胞白血病の特性

5-9 成人の難治性白血病の分子生物学的機構の解明と薬物療法の確立に関する研究

17指-1 高感受性悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究 など



#### 4. 肝炎ウイルスと肝がんの関連性

1988年にがん研究助成金の計画研究として、非A非B型肝炎の原因を究明するプロジェクトが開始した。独自にHCVを解析して1989年にHCV遺伝子配列に多様性がある事が分かり、日本型HCV配列として報告した（Proceeding of Japan Academy）。ウイルスコア蛋白質を用いたHCV感染系の検出により、当時市販されていた検査キットに検査漏れが多いことを見いだした。遺伝子型の異なるHCV（HCV-2）を見いだした。

1. HCV遺伝子解析から複数の遺伝子型が存在する事を示した。
2. 日本に存在するHCV遺伝子型のうち、HCV-1bは70%を占め、他はHCV-2型である事を明らかにした。HCV-1bは世界的に最も多い遺伝子型である。
3. 第一世代のHCV抗体検査系には検出漏れが多い事を見いだした。
4. HCV構造遺伝子領域を解明した。
5. 慢性肝炎患者においては、ウイルス遺伝子の変異が早く、中和抗体によるウイルス排除ができない可能性を指摘した。
6. インターフェロンによる治療成績を示した。

本研究はその後、対がん10か年戦略研究事業に引き継がれて、HCVの複製等の解析に至るきっかけになった。日本の非A非B型慢性肝炎患者に由来するHCVゲノムのほぼ全構造を明らかにし、HCV蛋白質の産生様式、ゲノムの詳細な解析による完全なゲノム構造の決定、ウイルス蛋白質の産生様式、HCV蛋白質の機能解析へと展開した。抗HCV剤開発などに向けた研究へと進んだ。その他、培養細胞へのHCV感染複製系の開発や、HCVゲノムが自立的に複製する培養細胞系を樹立し、抗HCV作用を示す薬剤の開発へと展開した。

本研究をきっかけとして、ウイルスがコードするプロテアーゼの機能解析と抗HCV剤の標的としての有用性を示すことが出来た。最近になり、サイクロスポリンおよびその誘導体が抗HCV作用を示すことがわかり、治療抵抗性のHCVに対する新たな抗HCV薬の開発研究へと展開している。

Ref.)

63-8 非A非B型肝炎と肝がんに関する研究 など

## 5. 小細胞肺がんの新たな腫瘍マーカーの発見と臨床応用

小細胞肺がんは進行が速く、化学療法や放射線療法が極めて有効であるにも拘わらず、診断時に多数の症例で既に進展しているため、生命予後は著しく不良である。一方、小細胞肺がんを診断できる腫瘍マーカーにより早期発見ができれば、早期治療により、現有の治療法でも生命予後の大幅な改善が期待できる。既にニューロン特異的エノラーゼが、小細胞肺がんの腫瘍マーカーとして用いられていたが、限局型肺がんの検出感度が低いことや、健常者と肺がん患者の識別が困難なことなどの欠点のために、新たな特異的マーカーの開発が求められてきた。

ガストリン放出ペプチド (GRP) は、腸管ホルモンとして同定された小分子ペプチドであり、小細胞肺がん細胞でも産生されることが知られていた。がん研究助成金による研究により GRP 測定法が開発され、種々の組織における GRP 産生能が検討された。その結果、GRP が小細胞肺がんをはじめとする、数種類の神経内分泌腫瘍において高頻度に産生されることが示された。一方、この原法では血液から GRP を抽出する必要があるため時間を要し、GRP そのものを腫瘍マーカーとして臨床的に利用することは困難と考えられた。そこでさらに GRP 前駆体 (ProGRP) の 31~98 番目のアミノ酸配列をもつ断片 (ProGRP (31-98)) を化学合成し、この分子に対する測定法を開発した。この方法では、血液からペプチドを抽出することなく測定することが可能になるとともに、小細胞肺がんに一層特異的な腫瘍マーカー測定法となることが明らかになった。すなわち、多数の健常者、良性肺疾患患者、非小細胞肺がん患者、および小細胞肺がん患者の血中 ProGRP を測定した結果、健常者および小細胞肺がん以外の患者で血中 ProGRP 濃度が 10 pM 以上を示す者の割合は 3% 以下であった。一方、小細胞肺がん患者では 76% で 10 pM 以上であり、限局型小細胞肺がん患者においても 73% と高い陽性率を示した。以上のように、血中 ProGRP (31-98) 濃度は、比較的早期の小細胞肺がんをも検出できる腫瘍マーカーとなることが示された。さらに、血中 ProGRP (31-98) は、小細胞肺がんの治療奏効性の判定にも有用であると考えられる結果が得られた。

本研究成果の公表後、小細胞肺がんの診断における本法の有用性は、諸外国の研究者により追認され、多数の学術論文として発表された。本研究により開発された血中 ProGRP (31-98) の測定法は、小細胞肺がんの診断法として保険収載され、現在も肺がんの診療に利用されている。その結果、本邦では一層正確な肺がんの診断がなされるようになり、国民はより適切な肺がんの診療を受けることが可能になったと言えよう。

Ref.)

61-1 肺小細胞がんの病理・生物学的研究とその成果の臨床応用

4-4 肺腺がんの発生と特性の解析並びに治療法の開発 など

## 6. 発がん感受性遺伝子の単離（肺がん、胃がん）、食道がんや頭頸部がんの早期病変と遺伝子多型との関係

発がんの原因としての遺伝的要因に関しては、候補遺伝子探索法により OGG1 遺伝子を、ゲノム網羅的関連解析により HLA-DQA1 遺伝子を肺腺がんの感受性遺伝子として同定した。日本人の肺腺がんでは、OGG1、HLA-DQA1、TERT、TP63 が、日本人の肺扁平上皮がんでは OGG1、HLA-DQA1、CHRNA3、TP53 が感受性遺伝子であることを明らかにした。また、食道がん、頭頸部がんのリスクとアルコール代謝酵素に関連する研究では、アルコール脱水素酵素（ADH）及びアルデヒド脱水素酵素（ALDH）の遺伝的多型が食道がんや頭頸部がんの発生に大きく寄与することを見出した。

その結果、肺がんに関しては、将来的にがん検診において血液検査により個々人のリスクを査定することが可能になると思われるが、現時点ではまだ探索的研究が続いており、がん予防を目指したリスク診断などには使われていない。食道がん・頭頸部がんに関しては、アルコール及びアルデヒド分解酵素の機能により発がん感受性の予測が可能となった。

肺がんに関しては、現時点では国民にとって明らかなメリットがあるとまでは言えないが、将来、リスク診断をできるスクリーニング法が確立できれば、死亡率の最も高い肺がんの罹患率や死亡率の減少に大きく貢献できる。また、食道がん・頭頸部がんに関しては、その一因としてのアルコール摂取の影響を明らかにすることが出来、個人の遺伝的多型に応じたアルコール摂取の習慣を身につけることが、食道がんの予防の観点から重要であること周知することが出来た点がメリットである。

Ref.)

12-12 食道がん、頭頸部がんのリスクとアルコール代謝酵素の関連に関する研究

13 指-1 ヒトがん発生に係る環境要因及び感受性要因に関する研究 など

## 7. がん生物像を規定するがん組織微小環境に関する研究

がん組織は、がん細胞のみならず、周囲を取り巻く間質細胞からも構成されている。そして、これら間質細胞は、がん細胞との相互作用を介し、特異な構造的および生物学的変異を獲得し、がん細胞の悪性像に影響を及ぼしている。このことは、“がん”を、“がん細胞の固まり”ではなく、“がん組織”として捉えることの重要性を意味する。すなわち、がん細胞のみを対象にした治療ではなく、間質細胞を含むがん組織を標的としなければ、効果的ながん治療は困難であると思われる。本研究班の最大の目的は、“がん”の悪性度を“がん組織”として評価することにより、がんの真の悪性生物像を把握し、新たな治療法の開発を目指すことである。具体的には、がん組織内に動員される間質細胞の構造学的・生物学的変異に着目し、これらの分子機構を解明することにより、がん組織標的治療の戦略を試みる。

本研究班にて明らかにされた結果を列挙する。

- 1) がん組織を構成する間質細胞（線維芽細胞、血管内皮細胞、マクロファージ）には、生物学的変異（表現形質の変異、分子発現の変異）が認められることを明らかにした。また上記間質細胞は、がん細胞から引き離された状態でも、一度獲得した生物学的変異を長期に渡り持続することが明らかとなった。以上の結果は、がん細胞から離れた組織においても、生物学的変異が起きている可能性を示唆している。
- 2) がん組織に新生される血管の内皮細胞には、膜結合型増殖因子 **proHB-EGF** あるいは増殖因子受容体の発現が亢進しており、増殖因子に対する感受性も亢進していることを明らかにした。以上の結果は、がん組織内間質細胞の生物学的特性を利用することにより、効果的ながん組織治療の可能性を示唆するものと考えられる。
- 3) マウスモデルにおいて、線維芽細胞遊走因子である **PDGF-BB** を介したシグナルを抑制することにより、がん組織内の線維芽細胞が減少し、腫瘍細胞の増殖が抑制されることを明らかにした。また、マクロファージをビスホスホネート処理することにより、腫瘍の骨転移が抑制された。以上の動物モデルを用いた結果は、がん間質細胞を標的とした治療を併用することにより、効果的ながん治療の可能性を示している。

現在のがん治療は、がん細胞のみを標的とした治療がほとんどである。本班研究では、がん組織内間質細胞の生物像に基づいた、新たながん治療の可能性を示した。

Ref.)

15-13 がん生物像を規定するがん組織内微小環境に関する研究 など

## 8. 病理診断における問題点とその標準化に関する研究

病理診断は、がん治療における最終診断であり、がん診断・治療を遂行するためには極めて重要である。一方、病理診断は個々の病理医の経験と判断における主観が入ることが懸念され、必ずしも標準化されているとは考えられない。本研究班の目的は、病理診断における問題点を明らかにするとともに、病理診断をより標準化するための方法を確立することである。病理診断には様々な情報が関与しており、本研究班ではこれらの様々な要因に対して検討してきた。

本研究班にて明らかにされた結果を列挙する。

1) 病理診断のがん種による診断一致率の違いを検討したところ、いわゆる「希少がん」の診断は違いが多いことが明らかになった。これらの結果より、JCOGなどの臨床試験を行う際には悪性リンパ腫、軟部腫瘍、脳神経腫瘍など希少がんに関しては中央診断を行うことが認知され、我が国における適切な病理診断をもとにした臨床研究が行なわれるようになった。

2) また、多数症例が存在する場合でも、病理医間（inter-observer）の診断一致率の重要性、が病理医のみならず臨床医の間でも認知され、これらの結果を基に癌取扱い規約などに判定基準が取り入れられるようになった。

3) 国立がんセンター情報センター内に病理診断レファレンスデータセンターが立ち上がり、これまで多数の病理診断コンサルテーションを受けてきた。これは、日本病理学会コンサルテーションシステムと連携をはかることで、より全国的に展開することを目指している。

4) 分子標的治療における評価法の標準化が求められることより、乳がんHER2の発現をどの様に標準化するかについての検討がなされた。この研究により、乳がんHER2診断のための様々なマニュアル・アトラスなどが作成され、我が国の診断標準化に貢献した。

5) 免疫染色の標準化に関しては、抗体の違いだけでなく病理標本の固定、作製方法、標本の取扱いに関して、どのような状態が影響するかを明らかにした。

6) 我が国の癌取扱い規約の統一や病理診断の精度管理システムの確立を目指し、世界的な状況の把握と、今後我が国における病理精度管理システムの構築のための情報収集を行った。

以上のように、本研究班では、我が国における病理診断の問題点を明らかにするとともに、病理診断精度の向上や精度管理を目指した研究を行うことで、がん治療の均てん化への貢献をしてきた。

Ref.)

16-6 がん診療を標準化するための病理診断基準の確立に関する研究 など

## 9. 表面型大腸がんの悪性度解析および発育進展に関する研究

本研究班の目的は、内視鏡の発達により見出されてきた表面型大腸がんの臨床病理学的解析を行うことにより、表面型大腸がんの発生過程ならびにその生物像を明らかにすることにある。

大腸がんの発生は、Vogelstein らにより一般に正常粘膜に APC 遺伝子の変異を伴い小型ポリープ（腺腫）、大型ポリープ（高度異型腺腫）、粘膜内がん、進行がんと多段階的に進行すると考えられている。一方、我が国を中心に内視鏡の発達により見出されてきた小型の表面型大腸がんが存在するが、形態学的には、これら病変の特徴は異型度の低い腺腫を伴わず、粘膜内において病変全体の細胞異型度および増殖性は高い病変である。本研究班では、この表面型大腸がんの臨床病理を明らかにすることを旨とする。

進行大腸がんの形態学的観察から、がんが発生したと考えられる粘膜内病変の組織像より、大腸がんは Polypoid growth を示す (PG 型) と Non-polypoid growth を示す (NPG 型) に分類できることを明らかにした。Polypoid (growth) neoplasia は大きさが 10mm 以下では多くが腺腫あるいは低異型度腺癌からなり、腫瘍が 10-15mm で高異型度高分化腺癌あるいは中分化腺癌が発生して SM 浸潤をきたす。したがって PG neoplasia での SM 浸潤癌の分布は 15mm から 30mm にかけて多くみられる。また腺腫併存が少なくとも 30-40% にみられる。一方 nonpolypoid neoplasia は 10mm 以下でも高異型度高分化腺癌あるいは中分化腺癌の粘膜内癌で SM 浸潤をきたしやすい。NPG type の SM 浸潤癌の大きさは平均で 13mm で、その分布は 10mm 前後に最も多く、20mm 以上の大きさに NPG type の SM 浸潤癌はほとんど見られない。また NPG type のがんでは腺腫併存が見られない。以上から NPG type は de novo type carcinoma とされ、大腸がんの発生・発育経路では adenoma-carcinoma sequence とは全く異なっており、多くの進行大腸がんの初期病変と考えられた。

このように、これまで大腸がん発生の主体と考えられてきた腺腫を伴う大腸がんに対して、表面型大腸がんは粘膜内病変から異型度、増殖性が強く、浸潤能の高い病変であり、大腸粘膜から直接がん化するがん (de novo がん) である可能性が強く示唆された。本研究班を遂行することにより、分子生物学、病理学による知見が集積され、これらが大腸がんの早期発見、治療に大きく貢献したものと考える。

Ref.)

13-12 表面型大腸がんの悪性度解析及び発育進展に関する研究 など

## 10. 早期肺腺がんの概念の確立

本研究班の目的は、1) 早期肺腺がんの遺伝子発現の異常やゲノム異常を網羅的に解析し、肺がんの発がんや浸潤転移に関与する遺伝子異常に関する情報を蓄積すること、2) 同定された遺伝子異常に関する情報と臨床情報との関連を解析し、肺腺がんの悪性度の重みづけを行い、実地臨床に応用できるような意味のある因子をより多く発見すること、3) 臨床情報に基づく腺がん悪性度を解析するために、術前 CT 診断法を新たに開発すること、である。

1) 肺がんの発がんや浸潤転移に関与する遺伝子異常に関する情報の蓄積；正常気管支上皮細胞および異型腺腫様過形成病変（前がん病変）における発現遺伝子の比較検討を行った。肺腺がんの発生、すなわち早期肺腺がんに関連する遺伝子として、TSC2D2, S100A2, などの数種類の遺伝子を同定した。

2) 肺腺がんの悪性度に関連する因子；末梢小型肺腺がんの浸潤部および非浸潤部から mRNA を抽出し、これらの間での差次的発現遺伝子解析を行った。浸潤部に高発現する遺伝子として、BI-1, MTCO2 などの遺伝子が同定され、悪性度判定因子になりうることを明らかにした。また、小型肺腺がん 119 症例を用いた病理組織学的検討の結果、腫瘍細胞の最大核径、線維芽細胞増殖巣の存在が、置換性腺がんの悪性度と密接に相関することも明らかにした。

3) 腺がん悪性度評価のための術前 CT 診断法の開発；日本を代表する施設における薄切胸部 CT 診断基準の検討を行った。これらの知見および病理学的検討を元に、CT 画像因子を大きく、すりガラス濃度(GGO)と充実濃度(consolidation)に分類した。これらすりガラス濃度、充実濃度が占める比率により症例を分類し、臨床病理学的特徴と比較検討した結果、GGO 主体の腺がんではリンパ節転移をほとんど認めないことが判明した。また、2cm 以下の肺腺がんでは、CT の肺野と縦隔条件の両画像を解析することにより、含気型と充実型に分類され、含気型は充実型に比べて非浸潤がん成分が多く含まれ、予後が良好であり、臨床的に早期がんであることを報告した。

このように、本班研究では、早期肺腺がんの概念を、遺伝子発現の変化、および CT 画像の詳細な解析より捉え、大きな成果をあげてきた。実際、本研究班にて生物学的知見とともに開発された CT 画像による術前診断は、肺腺がんの外科手術の術式に影響を与えており、治療の発展と密接に結び付いている。本研究班を遂行することにより、種々の方法論（分子生物学、病理学）による知見が集積され、これらが肺腺がんの予防、早期発見（画像）、治療に大きく貢献したものとする。

Ref.)

7-2 肺腺がんの発生と特性の解析に関する研究 など

## 1.1. 抗がん剤内包ミセル製剤の開発

### 1) NC-6004 シスプラチン (CDDP) 内包ミセル

非臨床において急性腎不全をもたらすシスプラチンと当量の NC-6004 を投与しても腎機能はまったく正常であることを明らかにした。これをもとに、英国において臨床第 1 相治験が行われ、外来治療として完遂した。消化器毒性も軽度であった。

### 2) NK012 SN-38 内包ミセル

肺がん、腎がん、大腸がん、膵がん、胃がんなどで CPT-11 より毒性が有意に低く、かつ有意に抗腫瘍効果が高いことを証明した。間質が多い腫瘍においても高い抗腫瘍効果を示した。このことは選択的腫瘍ターゲティングと活性体 SN-38 のリリースが効率よく、長時間持続したことによると推察している。また、NK012 はグリオーマの同所移植モデルにおいて、血液脳腫瘍関門は通過するが正常の血液脳関門は通過しないことを確認した。

### 3) NK105 タキソール (PTX) 内包ミセル

非臨床試験において、高い腫瘍集積性に伴う著しい抗腫瘍効果、および末梢神経の障害が軽度であることなど証明した。臨床第 1 相治験では、抗アレルギー剤の前処理を一切なくしても安全に投与できることがわかった。第 2 相における推奨用量である 150mg/m<sup>2</sup> における AUC は従来の PTX の 210mg/m<sup>2</sup> の AUC と比較し 30 倍ほど高かった。

### 4) siRNA 内包ミセル

細胞分裂や血管新生を阻害する siRNA 内包ミセルの薬効研究を行ったが、再現性よく治療効果を示すことができなかった。今後はがん細胞への *internalization* を即す抗体などのパイロット分子をミセル表面に付加すべきとの結論に至った。

NC-6004 は現在アジアにおいて、進行膵がんに対するゲミシタビン併用臨床第 1/2 相試験を行っているが、この治験は水負荷をいっさい行わないプロトコールで現在 CDDP 換算 120mg/m<sup>2</sup> まで到達している。腎毒性がなく消化器毒性が少なく、外来で安全に投与できる CDDP 製剤として期待される。NK012 は日米独立の 2 つの臨床第 1 相治験が終了し、双方で薬理的相違は認めなかった。日本で大腸がんに対し、また米国ではトリプルネガティブ乳がん及び小細胞肺癌に対し、第 2 相試験が進行中である。NK105 は胃がんに対するセカンドラインとして第 2 相治験を 3 週 1 回投与で、点滴は 30 分で行われ、有望な抗腫瘍効果と副作用の軽減がみとめられた。グレード 3 の神経毒性は 57 例中 1 例 (1.8%) と他のタキサン製剤に比べ著明な神経毒性の軽減が認められた。2012 年から第 3 相試験が開始される。

ミセル製剤は抗腫瘍効果の増強と有害事象の軽減が期待できるために、入院治療が外来治療可能になったり、副作用対策費の抑制などにより、患者の身体的、精神的、時間的負



担が軽減するなど、全体的に QOL を向上することができる。また DDS 創薬により、医療経済的負担の軽減が期待される。

Ref.) 15-21 がん化学療法におけるドラッグデリバリーシステム(DDS)の開発に関する研究 など

## 1 2 . PARP 等の DNA 修復応答分子を標的とする制がん法の開発

ポリ(ADP-リボース)合成酵素 (PARP)などの DNA 修復応答因子の機能解析からがん治療への応用の研究が本助成金事業により推進された。PARP 阻害剤は DNA を標的とする抗がん剤ブレオマイシンとの併用による腫瘍縮退効果の増強が、移植腫瘍動物モデルで初めて見出された。DNA 修復応答の研究が進められ、PARP の機能解析と PARP 阻害剤の作用の研究から PARP 阻害剤が、DNA 修復を阻害し、姉妹染色体分体交換頻度を上昇させること、DNA 修復経路の中でも塩基除去修復経路、及び DNA 切断修復経路を阻害することが明らかになった。PARP が転写制御と分化制御にも関わり、PARP 機能阻害が転写制御を阻害し、分化誘導が作用点となることが明らかにされた。一方で PARP 阻害剤の副作用としてのゲノム不安定性誘導の問題を提起した。また、ポリ(ADP-リボース)の生体内での動態の研究からポリ(ADP-リボース)が生体内で存在し、特に自己免疫疾患において抗ポリ(ADP-リボース)抗体レベルが上昇することが判明した。また、ポリ(ADP-リボース)に特異性の極めて高いモノクローナル抗体 10H が開発された。この抗体は PARP の機能解析の基礎研究に役立った他、より特異性の高い PARP 阻害剤の開発研究の基盤となり、2000 年代から英国で開始された PARP 阻害剤の抗がん剤との併用の臨床試験より薬力学的マーカーの解析系に用いられている。PARP 阻害剤が *BRCA1/2* の変異等の相同組み換え修復系の異常を有するがんに対して合成致死を示すことが 2005 年に英国で発表され、乳がんなどを対象にした単剤での PARP 阻害剤の臨床試験も開始され、同様に薬力学的マーカーの解析系に応用されている。ポリ(ADP-リボース)分解に働くポリ(ADP-リボース)グリコヒドロラーゼ(PARG)の遺伝子クローニングと機能解析も本研究助成金の事業で進められ、PARG 阻害剤がアルキル化剤や放射線の DNA 損傷応答を阻害し、がん細胞に対し致死増強作用を示すことが示された。このことから PARG 阻害剤も抗がん剤や放射線の効果増強剤となりうることを示され、厚生労働科学研究費研究事業により研究が展開している。

Ref.)

7-15 DNA 修復調節と発がんに関する研究

15-12 発がんにおける染色体動態異常に関する研究

19-9 発がんにおけるゲノム異常誘発の誘因に関する研究 など

### 13. ヘリカルX線CT等の開発

ヘリカルCTの開発を行い、臨床において胸・腹部領域の診断への応用を行うとともに画像表示方法の開発を行った。従来のCTは身体の水平断面を一定の間隔で撮影していたのに対しヘリカルCTでは撮影台を連続的に移動させながらの撮影を行う。このため、画像情報が連続しており断面はラセン状の切れ目のない画像情報によって構築されている。

主な研究成果は次のとおり。

#### ①ヘリカルCTの胸部領域への応用

世界に先駆けて肺がんの一次検診への応用として38歳から81歳までの重喫煙者520名（男485、女35人）のグループを対象に胸部単純撮影とヘリカルCTとを行った。この結果5例の肺がんが発見されたが、このうち2例は通常の胸部単純撮影では存在診断すら不能であった。胸部単純撮影が一次検診として行われた別のグループの検診において、胸部単純写真で何らかの異常がチェックされた118名に対して、2次検診としてヘリカルCTを行い16例の肺がんが発見され、一次検診、二次検診においてもヘリカルCTの有用性が証明された。しかしながら胸部単純X線を一次検診に用いられた場合、一次検診で見落とされた症例は治療の対象とならないことより、一次検診にCTを導入する必要性が確認された。

#### ②ヘリカルCTの腹部領域への応用

腹部領域の肝、脾、腎に対して経静脈的な造影剤の注入を行いながらのヘリカルCTによる検査の有用性についての研究を行い、ヘリカルCTでは造影剤を用いない単純CTに加えて臓器全体を動脈相で撮影することが可能であり、このことによって診断能が向上することが確認された。

#### ③撮影方法、画像処理

肺がん検診後の病変の質的診断の精査としては通常のCTで用いる10mm幅のX線の代わりに1～2mm幅のX線を用いたthin sliceヘリカルCTを行うことによって質的診断が向上することが確認された。

CTによる肺がん検診においては被曝線量を従来の1/2～1/3に落としても十分な診断能が得られることが判明した。画像処理に関してはデジタル画像情報を直接そのまの型で取り込む方法と、従来のフィルムの形で画像としこれをフィルムデジタイザーとして取り込む方法が存在するが、デジタル画像情報を直接用いて画像モニター上で診断することの優位性が確認された。将来の画像情報の管理・転送による多施設利用の観点からデジタル画像システムの利用が適切と考えられた。このためPACS（Picture imaging And Communication System、医用画像管理システム）の構築と各診断機器別のモニターの精度管理が大切であり、単純撮影、特にマンモグラフィーにおいては高精度モニターが必要との結論が得られた。

研究成果がもたらした利点は次のことが挙げられる。

- ①本研究等が基となってヘリカルCTの普及が進み、現在CTのほぼすべてがヘリカルCTとなっている。CTによる肺がん検診への応用も任意型検診において積極的に行われており、CTによってのみ発見可能な早期の肺がんが数多く発見されている。これらの肺がんの治療後の成績は良好であり、肺がんの死亡数減少に寄与している。
- ②腹部領域臓器に対する造影CTの撮影方法が確立され、単純CT、動脈相CT、遅延相CTの撮影を行うことが我が国を中心に普及し、腹部CTによる診断精度の向上が得られた。
- ③ヘリカルCTによる肺がん検診においては使用するX線量を従来の1/2～1/3に減少させても十分な診断能が得られることが広く知られることとなり、低線量画像診断の普及に貢献した。画像処理、保存、転送についても本研究の結果が広く応用されデジタル画像診断の普及に貢献した。

Ref.)

4-19 ヘリカルCT及びMRIによる胸腹部がん診断能向上と体系化に関する研究など

#### 1 4. デジタル画像診断の精度向上とその体系化に関する研究

デジタル画像診断・画像情報が臨床の場においてどのように利用され、将来どの方向に進むべきかの研究を行った。

主な研究成果は次のとおり。

##### ①臨床におけるデジタル診断機器の応用と体系化

胸部領域の診断には主として胸部X線単純撮影が主体となっていたが肺がんに対する診断能についてはCTが検出可能な肺がんのうち、胸部X線単純撮影で検出可能なものは約1/4であり、多くの早期の肺がんは胸部X線単純写真では発見不能なことが判明した。肺炎に関してもCTで検出できるものの胸部X線単純撮影では発見不能なものが数多くあることが判明し、今後胸部領域の診断にCTを積極的に取り入れることが必要との結論が得られた。MRIの胸部領域への応用では、胸壁・縦隔部の診断においてはCTよりも組織分解能が高くCTよりも優位であることが確認された。肺野病変の存在診断能に関してはCTの方が優位であることが確認されたが、2cm以上の肺野結節のうち辺縁の形態診断からは良悪性の診断が困難なものに関してMRIのT<sub>1</sub>、T<sub>2</sub>強調画像に加えて造影MRI、STIR法を加えることによって質的診断能の向上が得られることが判明した。腹部実質臓器の診断においては超音波検査（US）が非侵襲的で手軽な検査として今後広く応用されるべきとの結論が得られた。USについては肥満体では診断能が著しく低下すること、死角が存在することより、CT、MRIと組み合わせた診断体系の必要性が確認された。乳腺領域についてはアナログフィルム系の銀粒子による画像表現がデジタルマンモグラフィ（1000×1000画素）レベルよりも優れておりフィルム系の優位性が確認されたが、デジタル系画像取り込み能を向上させることと画像表示モニターを3メガ以上にすることによって将来的にはフィルム系と同等またはこれを上回る診断能が得られるものと考えられた。

##### ②デジタル画像による肝がん治療評価の体系化

肝がんに対する放射線治療、アルコール注入治療、肝動脈塞栓治療後の効果判定に関する研究を行った。肝細胞癌は動脈血流に富む腫瘍であり腫瘍径の大きさの変化のみの判断では不十分であり、動脈相でのCT、MRI撮影により血流の変化に基づいた判定が必要となり、転移性肝がんについては動脈血流の乏しいものが多く基本的には大きさの変化のみでの効果判定を行うべきであることが確認された。

##### ③CR画像によるがん診断能向上と体系化

デジタルCR胸部画像とX線フィルム画像との比較を行った。比較方法として画像処理法とX線との関係によって指標E値を設定し至適E値と画像処理法別画像とフィルム画像のE値の比較を26名の画像診断医師が行った。結果は97%がデジタル画像が優れている、またはフィルムと同等との結果が得られデジタル画像への移行の必要性が確認された。画像処理方法についても一定の基準が得られた。画像の普及に伴う将来の画像保管・転送の増加を考慮に入れるとデジタル画像の圧縮が不可欠であり画像データの圧縮がどの程度か

の検討を行った結果、5 : 1 圧縮では全く問題がなく、10 : 1 の圧縮までは画像の質が保たれることが明らかとなった。

研究成果がもたらした利点としては次のことが挙げられる。

- ①頭部、腹部が中心として使用されていたCTが検診を含めた胸部領域で広く利用されるようになり、この方面での撮影方法、撮影条件、CTとMRIとの胸部領域での役割分担に関する体系の構築に寄与した。腹部領域におけるUS検査の位置づけについても利点、欠点が明らかとなり、CT、MRIとの役割分担が明らかとなった。
- ②肝がんの治療後の効果判定方法が肝細胞がんと多くの転移性肝がんとは異なることが明らかとなり正確な効果判定を行えるようになった。
- ③デジタルCR画像がフィルム系画像に対して優位であることが明らかとなるとともに、画像処理方法の今後の開発の方向が明らかとなった。

Ref.)

4-19 デジタル画像診断の精度向上とその体系化に関する研究 など

## 1 5 . NBI (Narrow Band Imaging) 内視鏡の開発

NBI (Narrow Band Imaging)は、ヘモグロビンに吸収されやすい 415nm と 540nm の狭帯域光を粘膜に照射することによって、粘膜表層及び深層の血管を顕在化し、血管像の変化によってがんの診断を可能にした内視鏡の画像強調観察の一つである。NBI の開発は、1994 年から始まったがん克服新 10 年戦略での経内視鏡的な分光測定装置の開発（国立がんセンター東病院(当時)、東京工業大学、オリンパス社の共同研究)に端を発する。この開発自体は実用化には至らなかったが、その後、415nm の狭帯域光を使うことで通常の白色光観察では困難だった微細血管像のコントラスト向上が可能になることが分かり、NBI 試作機が 1999 年にオリンパスの後野らによって開発された。以後、国立がんセンター東病院の佐野・武藤らによって、NBI の臨床での評価が開始された。佐野は、大腸病変を対象にした有用性を評価し、腫瘍・非腫瘍の鑑別診断の pilot study で NBI 内視鏡は通常内視鏡と比較して、診断能が向上することを報告した。武藤は、食道がん患者を対象に中下咽頭領域を NBI 内視鏡を用いて観察し、それまで発見が不可能だった同領域における上皮内癌の存在を報告した（写真、下咽頭表在がん、左：通常光内視鏡、右 NBI 内視鏡、がん部は茶褐色の粘膜域として視認できる）。その後、がん研究助成金工藤班の中で、佐野を中心に NBI 内視鏡の大腸病変に対する有用性の研究が継続された。その後、佐野班・井上班では中下咽頭、食道、胃でも NBI 拡大内視鏡観察を用いた早期診断の有用性が評価された。一方、厚労科研費齊藤班では武藤らが、2004 年に頭頸部及び食道における多施設前向き比較試験を行い、NBI 内視鏡が通常内視鏡と比較して有意に表在がんの診断能が高かったことを証明し、同領域における表在がん診断の標準的な検査方法と位置づけた。これらの研究の後押しで、2006 年に NBI を搭載した内視鏡システムがオリンパス社から市販され普及している。2010 年には NBI を用いた拡大観察の保険点数加算が食道、胃、大腸に対して認められた。



NBI は診療技術の向上をもたらした。NBI によって、以前は進行がんとしてしか発見できなかった頭頸部がんが表在がんとして診断できるようになり、がん部のみを内視鏡で切除する臓器温存治療が可能になった。胃では拡大観察で小陥凹病変の鑑別診断が容易になり、無駄な組織生検が減少した。食道や大腸では、色素を用いなくても早期がんの診断が可能になり、拡大観察による血管パターンの診断で鑑別診断や深達度診断が容易にできるようになった。

NBI の利用は、頭頸部から大腸まで、いずれの領域においてもがんの早期診断、鑑別診断での有用性が報告されている。特に頭頸部領域では、症状が出てから進行がんで発見され、咽喉頭全摘など侵襲の大きな治療をされていた頭頸部がんの早期診断及び臓器温存治療が可能になり、国民のメリットは極めて大きい。

Ref.)

8-39 がんの診断治療用光学機器の開発

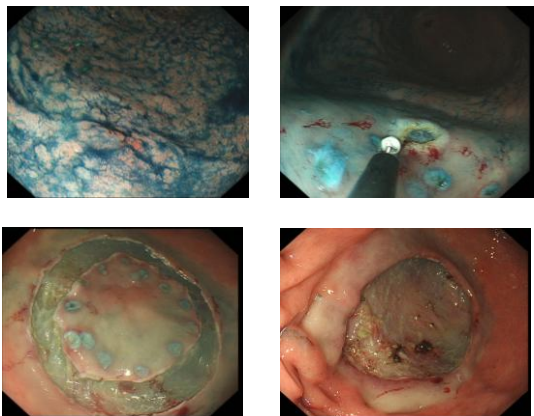
14-14 大腸癌腫瘍性病変における腺口構造の診断学的意義の解明とその臨床応用に関する研究 など



## 16. 内視鏡的粘膜下層剥離術 (Endoscopic Submucosal Dissection:ESD) の開発

早期がんに対する内視鏡治療は、60年代に開発された内視鏡的ポリペクトミーに端を発し、80年代初頭には内視鏡的粘膜切除術(Endoscopic Mucosal Resection: EMR)が早期胃がんに対する治療として開発された。EMRの手技は、①粘膜下層に生理食塩水などの局注液を入れ、病変部を膨張させる。②膨張した病変部をスネアや吸引デバイスにて絞訳し電氣的に切開するものである。EMRの適応や評価方法は白尾班で検討され、内視鏡学会の治療適応指針や胃癌取り扱い規約の評価方法の骨格となった。しかしながら、当時の手法でのEMRは分割切除が原因の非治癒切除が多く、その後に遺残再発を来すことが報告され新たな手法の開発が急務とされた。

90年代より、がん研究助成金機器開発研究班として田尻・小野・土井班において、EMRの手技開発が行われた。その一つが国立がんセンター(当時)の細川・小野らによって開発されたITナイフ(Insulation-tipped diathermic knife)を用いた内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)である。ESDは、①IT knifeを用いて病変周囲全周を切開する、②切開後、粘膜下層を剥離し、病変を一括切除する手技である(写真)。ESDの登場により、従来の適応を超えた大型の病変や潰瘍瘢痕合併例の治癒切除も可能になった。開発当初は、穿孔や出血など合併症の多さや長い治療時間のため、一般化が困難と考えられたが、切開剥離や止血に用いる様々なデバイスや新しい高周波装置が班研究で検討開発され、標準手技として確立した(2006年保険収載)。また、ESDは早期胃がんのみならず、2008年には食道がんに対する保険治療として、2009年には大腸がんに対する先進医療としてそれぞれ認められた。



ESDは診療技術の向上をもたらした。ESDが開発される前、EMRでは一括切除が難しかった大型または潰瘍合併早期胃がんに対しては、外科手術が主に行われていた。ESDの登場によって、内視鏡治療は適応病変が拡大され、その頻度は全早期胃がん中15%から45%に増えた。また、ESDはEMRに比べると一括治癒切除率が高く(EMR: 50% vs ESD: 90%)、遺残再発率が少ないため、内視鏡治療の根治性が高まったと言える。

ESD の開発によって内視鏡治療の適応が拡大され、根治性が高まったことにより、従来外科手術が必要であった患者に対しても内視鏡治療が行われるようになった。内視鏡治療後は、外科手術後と違って、治療前と同様の生活の質が保たれる。特に、ESD の開発により早期胃がんの約半数は臓器温存したまま根治が得られるため、国民にとってのメリットは極めて大きい。

Ref.)

8-39 がんの診断治療用光学機器の開発 など

## 17. 非外科的治療の標準化（胃悪性リンパ腫、食道がん化学放射線療法）

消化器悪性腫瘍においてかつては、外科手術以外の治療効果はほとんどみられていなかったが、1990年代から有効薬剤の増加や放射線治療法の進歩により非外科的治療の成績が向上し一部の腫瘍においては非外科的治療により治癒が得られる可能性がみられてきた。胃悪性リンパ腫はピロリ菌との関連性が証明された低悪性度 MALT リンパ腫が除菌療法で寛解することや高悪性度リンパ腫で化学療法＋放射線照射によって治癒が得られることが報告されたことから、1998年よりがん研究助成金「胃悪性リンパ腫に対する非外科的治療の適応と有効性評価に関する研究班」（大津班）が組織され、国内主要 33 施設の参加のもとで多施設共同第Ⅱ相試験を実施した。胃 MALT リンパ腫に対しては除菌療法、高悪性度リンパ腫に対しては化学療法（CHOP 療法）＋放射線照射を行う 2 つの試験を実施した。MALT リンパ腫は 150 例、高悪性度リンパ腫は 55 例の登録を行い、いずれも 5 年生存率が 90%を超える成績が得られ、この成績をもとに、標準治療が胃全摘手術から非外科的治療へと変化した。

一方、食道がんに対しては、5FU＋シスプラチン＋放射線同時併用による化学放射線療法が国立がんセンターを中心に行われ、最初に切除不能局所進行症例（T4/M1LYM）の第Ⅱ相試験で約 15%の症例で治癒が得られたことを報告した。さらにはがん研究助成金研究班が母体である JCOG 消化器がん内科グループにおいて、切除可能なステージⅡ/Ⅲを対象とした多施設共同第Ⅱ相試験（JCOG9906）を実施し、全国 20 施設から 76 例の登録があり、5 年生存率 37%の成績を得て、非外科的治療の標準治療としての地位が確立されている。

図：食道がん化学放射線療法治癒例

治療前

治療 5 年後



非外科的治療の標準化は診療技術の向上をもたらした。消化器悪性腫瘍に対して薬物療法や放射線療法での有効性が示されかつ治癒も得られたことはその後の薬物療法や放射線療法の飛躍的進歩に大きく貢献している。それまではがん診療では診断や内視鏡治療が主担当であった消化器内科医の多くを薬物療法の専門家である腫瘍内科医へ転向させた点での影響も大きい。

さらに、いずれの治療においても臓器が温存され、低浸襲で治癒が得られ、治療後も従来の経口摂取ができるメリットは大きい。特に高齢者などにおいてはそのメリットはさらに大きい。また食道がん局所進行症例では切除不能例でも一定の治癒が得られるなどの成果もあげられ、食道がん全体の治療成績向上に寄与している。

Ref.)

10-25 消化管悪性リンパ腫に対する非外科的治療の適応と有効性の評価に関する研究

14 指-3 消化器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究

など

## 18. 拡大手術の安全性向上

拡大手術は、切除範囲を広げることによって手術適応の拡大と根治性の向上を目指したものである。しかし、術式の拡大が臓器機能の欠損や障害を引き起こすことによって、手術の安全性が大きく損なわれる場合がある。肝胆膵外科領域、特に胆道がんの根治手術では、広範囲肝切除による肝不全などの手術死亡につながる合併症が起りやすかったため、以下のように多方面からの対策が検討された。

### 1 非手術的術前減黄処置

閉塞性黄疸による肝障害は術後肝不全の発生を助長するため、非手術的な術前減黄処置として超音波ガイドによる経皮経肝胆道ドレナージ(PTCD)、内視鏡的逆行性胆道ドレナージ(ERBD)などについて技術的な問題や適応が検討され、安定した技術として確立した。

### 2 門脈塞栓術

肝内門脈の選択的な塞栓により、切除側肝葉の萎縮と、温存側肝葉の代償性肥大を惹起することにより、肝葉切除の安全性を向上させる技術である。門脈閉塞を伴う進行がんでの経験から発案された技術であるが、安全性やその効果について基礎的・臨床的な検討を行い、現在では本邦発の標準的な技術として確立している。

### 3 血行再建術

病変が肝動脈や門脈などの主要血管に及んでいる場合、血管の浸潤部位を合併切除しただけでは、致命的な合併症が起りやすいため、血行再建を行う必要がある。

#### (ア) 門脈再建

門脈再建については、長時間の門脈遮断を可能にする門脈バイパス法や直接吻合が難しい場合に行う自家腎静脈移植などの技術開発が行われた。現在、本邦では門脈再建は広く行われるようになっており、門脈浸潤を理由に非切除となることは少なくなった。

#### (イ) 動脈再建

動脈再建には手術用顕微鏡を用いたマイクロサージャリーによる血管吻合の技術が応用され、安定した技術が確立した。予後との関連で適応の検討が進み、適切な症例を選択して積極的に行われるようになった。

これらの技術開発により、肝胆膵領域の悪性腫瘍の拡大手術の安全性は大幅に向上し、長期成績も改善した。

Ref.)

5-5 胆道系及び膵悪性腫瘍に対する拡大手術の根治性と安全性を目指した研究 など

## 19. 機能温存手術の開発

がんの根治手術による身体機能の欠失を最小限にするため、以下のような機能温存手術が開発された。

### 1 脳神経外科領域

#### (ア) 神経機能温存手術

脳神経外科手術においては、常に機能温存を考慮する必要がある。従来は、解剖学的な部位からその機能を推測し、手術を行っていた。functional MRI、体性感覚誘発電位測定、覚醒下手術などによって機能局在をより正確に把握できるようになった。また、術中のナビゲーションシステム、術中MRIなどにより、機能温存が正確に行えるようになった。

### 2 眼科領域

#### (ア) 眼球保存治療

網膜芽細胞腫は眼球摘出を行えば生命予後は良好である。しかし、視機能、整容性の両面で眼球を温存することが望まれたため、全身化学療法中心の治療開発が行われていた。こうした状況の中、選択的眼動脈注入を開発・確立し、全身化学療法に劣らない眼球温存率、視機能温存が可能になった。これにより、抗がん剤の全身投与による有害事象を回避して同等の効果を得られるようになった。

### 3 頭頸部外科領域

#### (ア) 発声機能温存手術

早期声門がんの放射線治療後再発症例に対しては喉頭全摘術が多く行われていた。これに対して、喉頭部分切除術を第1選択とする前向き試験を実施した結果、救済手術としての喉頭温存手術の安全性と有用性が示された。これにより、声門がん放射線治療後再発症例に対しても喉頭温存の機会が増加した。

下咽頭がんに対しては下咽頭喉頭全摘出術が一般的に行われていた。これに対して、遊離組織移植を導入した喉頭温存手術を開発した。その後の検討で、下咽頭がんに対する喉頭温存手術の適応基準が示され、下咽頭がんに対する喉頭温存治療の選択肢の1つとなった。

### 4 呼吸器外科領域

#### (ア) 気管・気管支再建手術

肺がんに対する肺切除術では、肺葉以上の切除が必要とされるが、術後の機能的な観点から、肺全摘術を極力回避する術式が求められていた。中枢気管支を肺実質とともに管状に切除した後で吻合再建する気管・気管支形成術は困難な技術とされていたが、これを開

発した結果、根治性を失うことなく肺機能を温存できるようになった。

## 5 肝臓外科領域

### (ア) 肝機能温存手術

初期の肝切除手術では術後の肝不全による死亡率が高かった。出血を制御するための流入血遮断法、術中超音波の導入による解剖に基づいた正確な切除技術などの開発により、障害肝でも肝機能を温存した手術が可能になり、手術の安全性が大幅に向上した。

## 6 大腸外科領域

### (ア) 低位直腸がんに対する究極的肛門温存療法

1990年代までは下部直腸がんに対しては、腹会陰式直腸切断術しか治療選択はなく、患者は永久人工肛門による生活を余儀なくされてきた。これに対して、部分的な括約筋温存により肛門機能を保つ **Intersphincteric resection**(以下 **ISR**)を開発し、治療成績を検討した結果、腹会陰式直腸切断術に匹敵する根治度を保ちながら、肛門機能を温存できることが明らかになった。これにより、下部直腸がんに対する肛門温存率が飛躍的に上昇した。

### (イ) 直腸がんに対する排尿機能および性機能温存手術開発

下部進行直腸がんの根治手術では術後に排尿機能障害や性機能障害が高頻度に発生する。これを回避するために、骨盤内の自律神経を温存する術式の開発や、臨床試験による側方リンパ節郭清の評価を進めている。

## 7 泌尿器科領域

### (ア) 代用膀胱形成術

膀胱を摘出したあとの尿路再建では回腸導管造設術が標準的な術式とされてきた。膀胱全摘後に尿道から排尿できるようにする代用膀胱形成術を導入し、術式の工夫を行った結果、安全で確実な尿路再建術として普及するに至った。これにより膀胱全摘後にも自排尿が可能という成果が達成された。

### (イ) 排尿機能温存手術

前立腺全摘手術においては静脈叢からの出血がコントロールしにくく、それに伴って尿道括約筋の損傷から術後尿失禁を起しやすという問題があった。器具の開発などにより、静脈叢の処理法を改良した結果、尿失禁の発生を回避することが容易になった。

Ref.)

17-3 良好な視機能温存を目標とした眼部悪性腫瘍の新しい集学的治療法の開発

17-4 喉頭機能を温存した頭頸部がんの標準的治療法の確立に関する研究

14-13 低位直腸がん術後の機能温存を可能とする肛門温存療法の開発に関する研究 など

## 20. 形態温存・復元手術の開発

### 【顔貌再建手術】

頭頸部悪性腫瘍の外科的治療においては、顔貌の重要な構成要素である、上顎骨や下顎骨が合併切除される場合がある。この場合、再建術を行わないと顔貌の著しい変形を来とし、がんが治癒したとしても患者の QOL は著明に低下する。上顎がんについてはがん研究助成金波利井班（平成 15-16 年度）において研究が行われ、上顎がんの切除範囲について新たな欠損分類を作成およびこれに合わせた再建術の確立をおこなった。下顎再建については欠損範囲と患者背景により、骨移植による再建、下顎プレート及び軟部組織移植による再建、軟部組織移植のみの再建の、3つの選択肢を確立してきた。これらの研究から、顔貌再建による患者の QOL の著しい改善が得られるようになった。

### 【乳房温存手術】

乳がんの外科治療においては、乳房の大きさに対して腫瘍の存在範囲が限局しており、がんの遺残なく切除可能で、十分整容性が保てると判断される場合は乳房温存術（乳房部分切除術）が適応となる。現在では、術前の正確な画像診断や術前薬物療法を施行し腫瘍を縮小化することにより、全原発乳がん手術例の 70-80% で温存が可能となっている。

### 【乳房再建手術】

一方、乳房部分切除が不可能で、全摘術が必要となる患者に対しては、乳房再建術が選択肢としてあげられる。乳房再建に対する患者のニーズの高まりや、乳がん症例自体の増加により、国立がん研究センター東病院では 2005 年から、中央病院では 2010 年から、自家遊離組織移植による乳房再建を導入した。これにより乳がん患者の治療の選択肢が増え、患者の QOL は著しく改善している。乳房再建手術の有用性を評価するため、がん研究助成金櫻庭班（平成 21 年度～）において、自家組織によるより安全な乳房再建術式の研究および、乳房温存手術+術後放射線治療 vs 乳腺全摘+再建術の 2 群における前方比較研究を開始した。

Ref.)

13-7 がん外科治療における形成再建手技の確立に関する研究 など



## 2 1 . 低侵襲手術の開発

がんに対する手術治療は、根治性を高めるために開腹や開胸で広範囲の切除を行うという方向で開発が行われてきた。しかし、一方では手術侵襲の大きさが治療に悪影響を及ぼす面があることから、低侵襲化の試みも行われて来た。特に、最近では、様々な機材が手術に使用できるようになってきたため、低侵襲手術の開発が盛んになってきた。

1990 年代初頭に腹腔鏡下胆嚢摘出術が施行されて以来、内視鏡下手術の適応拡大が進められ、悪性腫瘍の分野でも適用されるようになった。内視鏡下手術は、従来の開腹手術と比較し、整容性だけではなく、術後侵襲の軽減やさまざまな機能温存に寄与することが認知されるようになってきた。2002 年にはすべての大腸がんと胃がんに対する腹腔下手術が保険適応となり、現在実地診療の約 3 割に内視鏡下手術が浸透している。肺がんの手術も胸腔鏡を使用したものの割合が増加している。

大腸がんの分野では、内視鏡下手術の安全性や根治性を検証する臨床試験として JCOG0404 試験が行われ、登録集積がすでに終了した。欧米諸国からの第Ⅲ相臨床試験の結果では、すべて内視鏡下手術の開腹手術に対する同等性が示されたが、本邦からも大腸がんに対する内視鏡下手術の治療成績が近年示される予定である。

難易度が高い食道がんや直腸がんあるいは肝胆膵の領域でも積極的に内視鏡下手術が行われるようになってきた。

また、最近では、内視鏡下手術の傷をより小さくするという観点から、腹壁の手術創をできるだけ少なくするための単孔式内視鏡下手術や *Needlescopic surgery* といった手術の開発も進められている。

Ref.)

14 指-3 消化器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究

## 2.2. 集学的治療の開発のための多施設共同研究グループの体制整備 (JCOG)

がん治療の3本柱は、手術・放射線治療・薬物療法であるが、これら単独で治療できるがんは限られており、多くのがんに対する標準治療はこれらの複数の治療を組み合わせる「集学的治療」である。従って、標準治療の進歩は、製薬企業の治験で得られる新規抗がん剤だけでは達成されず、研究者主導での集学的治療の治療開発が不可欠である。米国では1950年代より、欧州でも1960年代より、公的な多施設共同研究グループ (Cooperative Group) がその役割を担ってきたが、日本ではその発達が遅れていた。

「がんの集学的治療の研究」班 (1978~1987: 主任研究者—末舛恵一) では1985年に班研究による臨床試験のガイドラインを作成し、恒常的に活動する臨床試験審査委員会と効果・安全性評価委員会を設置、欧米の Cooperative Group に倣った組織構築を開始した。組織化は「固形がんの集学的治療の研究」班 (1988~1998: 主任研究者—下山正徳) に継承され、研究組織は1990年に「日本臨床腫瘍研究グループ (Japan Clinical Oncology Group: JCOG) と命名、1991年には国立がんセンター内に JCOG 統計センター (現 JCOG データセンター) が設置された。下山班は1999年に11指-1~4の4つの指定班に改組、以降、17指-1~5の5班、20指-1~6の6班が JCOG の骨格を支えた。2001年からは厚生労働科学研究費の「21世紀型医療開拓推進事業」、2002年からは「効果的医療技術の確立推進臨床研究事業」、2004年からは第3次対がん「がん臨床研究事業」の多くの研究班が JCOG に加わり、2009年現在、JCOG は、がん研究助成金指定研究6班、同計画研究4班、がん臨床研究事業23班、計33研究班の集合体となった。JCOG 全体で、患者登録中の試験は約30、追跡中約20、準備中約10と常時60を超える臨床試験を実施している。

研究者が発案する研究計画は、コンセプトとプロトコルの2段階でプロトコル審査委員会の審査により科学性と倫理性が確保され、患者登録開始後は JCOG データセンターが年2回の定期モニタリングによりデータの正確性を担保し、重篤な有害事象報告は効果・安全性評価委員会の審査を経て研究者にフィードバックされて試験参加患者のリスク最小化に役立てられ、さらに施設訪問監査によりこれらのプロセスが適正に実施されていることを保証する、国際標準の臨床試験管理体制が二十余年を経て確立された。

JCOG 試験の結果公表論文は2本の NEJM 論文を初め、多数有名誌に掲載されており、国内外の各種学会の診療ガイドラインにも採択されて標準治療の進歩に貢献している。2011年現在でのガイドライン採択試験数は、胃がん8件、肺がん3件、食道がん8件、子宮頸がん1件、卵巣がん1件、乳がん2件、リンパ腫2件の計25件である。

また、JCOG により国内でいち早く確立された臨床試験の品質管理と品質保証の体制は JCOG 以外の国内 Cooperative Group からも参照され、日本全体の多施設共同研究の質的向上に貢献した。

JCOG 臨床試験で延命効果の向上に寄与した代表的な試験の成果としては、進行再発胃がんの生存期間中央値が1990年代前半の5FUでの7.1ヶ月から JCOG9912でのS1により11.4ヶ月と向上したこと、進展型小細胞肺癌で JCOG9511にて、従来標準エトポシド+シスプラチンの9.4ヶ月からイリノテカン+シスプラチンの11.4ヶ月に向上したこと、臨床病期II/III期の食道がんでは JCOG9907にて5年生存率が、従来標準の術後5FU+シスプラチンの43%から術前5FU+シスプラチンの55%に向上したこと等が挙げられる。また、JCOG9501では進行胃がんに対する傍大動脈リンパ節郭清が延命効果に寄与しないこと、JCOG9502では胃噴門がんに対する開胸郭清術が開腹郭清術に劣ることを示し、侵襲の少ない手術術式の確立に貢献した。

さらに、こうした個々の臨床試験の成果による延命効果の改善のみならず、EBMの普及とも相まって、標準治療は質の高い臨床試験の結果に基づいて決められるべきこと、およ

びそれが日本においても可能であることを示したことが、がん研究助成金による JCOG の組織構築の国民に対する貢献であると言える。

Ref.)

62 指-1 固形がんの集学的治療の研究 など

### 2.3. がん疼痛及び緩和ケアに関する研究とガイドラインの作成

がん疼痛及び緩和ケアに関するがん助成金事業は、昭和42年「悪性腫瘍手術の麻酔管理およびがんによる疼痛と除痛に関する研究」として研究班が開始されたことに始まる。当初の5年間の研究の主な研究は、がん疼痛の発生メカニズムの検討がなされ、疼痛治療として神経破壊による鎮痛を中心に部位や方法が検討された。昭和56年からはがん疼痛治療の基本となる経口モルヒネの投与方法、がん告知、精神面でのケア、患者や医療者に対する意識調査などが実施され、身体に加えて精神についての研究も実施され、がん患者の心理状態に焦点が当てられた。

昭和62年～63年には患者や家族へのアンケートなどの声を反映し、緩和ケア病棟、PCU在宅ケアなどの療養の質に関する研究や、呼吸困難や消化器症状、精神症状など痛み以外の症状緩和の研究に広がった。昭和62年～63年には療養の場としての緩和ケア病棟の意義などに検討が進み、QOLについての研究もこの時期以降継続されるようになった。がん告知のガイドラインが試作された。平成元年以降は、呼吸困難、消化器症状、放射線治療や在宅ケアでの鎮痛や地域連携による症状緩和など幅広い症状や治療法についての検討が始まった。平成3年には、経口モルヒネの使用を推進するためのモルヒネ服薬指導マニュアルが試作され、現場での試用と専門家によるレビューが行われた、この冊子は「痛み止めの薬のやさしい知識」として全国の医療機関に配布され、がん患者や家族の医療用麻薬への不安解消に貢献した。これらの研究成果のメンバーを中心に、平成12年に日本緩和医療学会はわが国の緩和ケア領域として初のガイドライン「Evidence-Based Medicineに則ったがん疼痛治療ガイドライン」（平賀一陽委員長）を創刊した。一方平成12年には緩和困難な治療についての検討も始まり、その成果などを集約した「苦痛緩和のための鎮静に関するガイドライン」（2004年、2010年改定：志真泰夫委員長）次いで、「終末期がん患者に対する輸液治療のガイドライン」（2006年：志真泰夫委員長）、「がん補完代替医療ガイドライン」（2008年：志真泰夫委員長）が日本緩和医療学会から刊行された。この時期以降には抑うつや心理社会的な対応や希死念慮、精神的ケアなどについての研究によってがん患者特有の精神領域の問題などが明らかにされ、がん対策情報センター発行の小冊子「がんと心」として、全ての時期のがん患者や家族向けの情報として発信されている。平成15年以降には医療用麻薬の効果や副作用対策などテーラーメイドの治療を目指した遺伝子解析の研究が開始された。また、神経障害性疼痛等の難治性疼痛に対する病態別の取り組みが始まり、化学療法剤による痛みなどを含めた研究が進められてきた。また、海外での研究成果をエビデンスレベルで分類し、質を高めたガイドラインが求められ、平成18年からの班研究の成果は日本緩和医療学会に引き継がれ「がん疼痛の薬物療法に関するガイドライン」（2010年：志真泰夫委員長）が刊行された。また、これまでの班研究での成果やメンバーを引きつぎ、日本緩和医療学会が「がん患者の呼吸器症状に関するガイドライン」（2011年：的場元弘委員長）、「がん患者の消化器症状に関するガイドライン」（2011年：的場元弘

委員長)として創刊した。

平成 3 年のモルヒネ服薬指導マニュアル完成前にはがん疼痛に使用される医療用麻薬の全国の消費量はモルヒネ換算で 201kg 程度であったが、「Evidence-Based Medicine に則ったがん疼痛治療ガイドライン」出版後には 1086kg、がん疼痛の薬物療法に関するガイドライン検討時期には 3151kg と 10 倍以上の伸びを示してきた。また、これらの成果は「緩和ケア指導者研修会」および「がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会」の中で PEACE プログラムの一部として 3 万人以上の医師に提供されてきた。また精神領域の研修についても、「精神腫瘍学の基本教育に関する指導者研修会」等を通じてがん患者の療養中の精神的な問題に対応できる医師の育成に貢献している。

Ref.)

42-23 悪性腫瘍手術の麻酔管理およびがんによる疼痛と除痛に関する研究 など

## 24. 心のケアに関する研究成果

国立がんセンター東病院は開院時（1992年）より、わが国で初めて全患者にがん告知をおこなった。当時、告知をすることは一般的ではなく、告知が患者・家族にどのような影響を与えるのか、またその影響に対してどのような対応が医療者に望まれるのかは明らかではなかった。そのため、患者・家族への精神心理的ケアを開発に先立ち、患者の精神心理的苦痛の実態調査をおこなった。その結果、どのがん、どの時期においても、うつ病が精神心理的苦痛として高頻度（約16%）に存在し、患者の療養生活の質を大きく低下させていることが明らかになった。

がん研究助成金による研究の結果、うつ病はがん患者における最大・最悪の精神心理的苦痛であり、精神心理的ケアの必要性が明らかになった。その成果は、がん克服新10か年戦略ならびに第3次対がん10か年総合戦略事業に引き継がれ、①がん患者のうつ病に対する各種の症状緩和プログラムの開発、②一次予防として告知に際するがん患者の苦痛軽減を目指した医師に対するコミュニケーション技術訓練法の開発、③二次予防としてがん患者のうつ病の早期発見をおこなうためのスクリーニングテストの開発、④三次予防としてがん患者のうつ病に対するケアをがん診療連携拠点病院に均てん化することを目指した診療ガイドの作成等を行った。④は、医師向けの「精神腫瘍学クイックリファレンス」、その他の医療スタッフ向けの「精神腫瘍学ポケットガイド」の発刊につながった。上記のプログラムは、がん診療に携わる医師のための緩和ケア研修会（厚労省委託事業・2007年より行われ全国で約2.5万人の医師が受講）やがん診療に携わる医師のためのコミュニケーション技術研修会（厚労省委託事業）として全国規模の研修会に用いられ、わが国のがん診療における質の向上に結びついている。

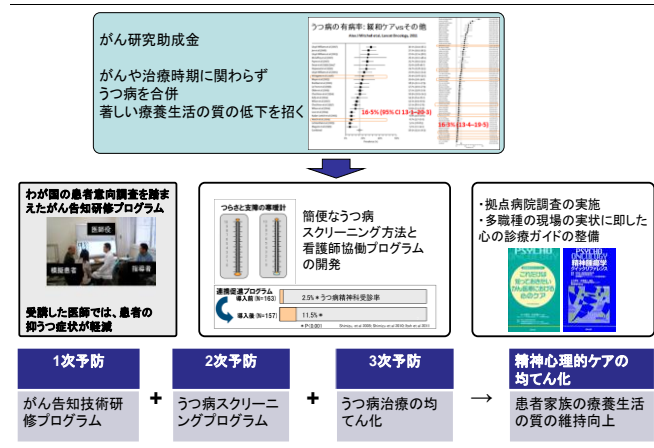
がんの社会科学研究として告知後の実態調査を時機を逸せずに行うことは競争的資金では扱われにくい分野であり、がん研究助成金による支援の意義は極めて大きい。その成果は、患者家族の苦痛を軽減するためのプログラムの開発と普及を通して、がん診療連携拠点病院の診療技術の向上に直接寄与し、ひいてはがん患者家族の療養生活の質の向上に貢献している。

Ref.)

9-31 がん患者の精神症状発現要因の解析とその対応に関する研究

13-11 がん患者の抑うつ、不安、せん妄などの発現要因の解析及びその対応に関する研究

21 分指-9-5 がん医療に資する心のケアに携わる医療従事者の育成に関する研究 など



## 25. 地域がん登録研究班によるがん罹患率全国集計

本研究班では、県（市）単位の地域がん登録データを収集し、登録精度が一定以上のデータを用いて、国全体のがん罹患率を推定した。1975年から1992年罹患データまでは、県（市）地域がん登録の集計値（部位別性年齢別罹患率）を収集していたが、1993年罹患データからは、腫瘍単位の個別データを収集して、中央で集計作業を行って全国推定値を計算した。その際、推定に使用した県と全国のがん死亡データを用いてがんリスクの地域特性に関する補正を行った。2001年罹患データからは第3次対がん10か年総合戦略事業の実態把握研究班に集計作業が引き継がれた。

がん対策を企画立案・評価する上で、がん罹患率（数）データは必須の情報である。国レベルの政府統計として、がん死亡率（数）は人口動態統計により実測されているが、がん罹患率については実測する仕組みがなく、本研究班の全国推計値が唯一の情報源であった。1975年以来、推計値ではあるものの、部位別性年齢別に年次推移を観察することにより、がん対策の方向づけを行う基礎資料として、重要な役割を果たしてきた。

国民へのメリットとして、正確ながん罹患情報を迅速に把握できれば、がん対策を実施する際に、対策の優先順位付けと事後評価を、証拠に基づいて正確に行うことができる。その結果、がん対策の目標の1つである「がん死亡の減少」を、限られた資源を有効に活用して、より早期に実現することができると思う。

Ref.)

50-16 地域がん登録の体系化と登録資料の利用に関する研究 など

## 26. 全がん協研究班による院内がん登録施設別生存率集計の公開

本研究班では、全国がん（成人病）センター協議会（全がん協）加盟施設における院内がん登録データ（患者単位の個別データ）を収集し、一定の要件を満たすデータを用いて、施設別に1997-2000年診断治療症例の5年生存率を計算し、同意の得られた施設について施設名を含めてホームページに公開した(2007年、2008年)。

がん診療の質の評価をする点で、施設別5年生存率は重要な指標である。各施設から個別データを収集し、一定の基準を設けて同一の方法を用いて生存率を計測することで、施設別に比較可能な生存率を提示することができる。さらに、施設名を含めて公開することで、情報の透明性を高め、改善に向けての施設側のインセンティブを確保できる。また、施設名を含めた公開の基準あるいはプロセスについて、他の情報の先行事例として重要である。

国民にとって、がん診療の質に関する情報は決定的に不足しており、信頼性の低い情報が各種メディアのランキング報道などに使用されている。本研究班の施設別5年生存率の公開により、信頼性の高い情報が医療機関側から提供されることで、情報の透明性が確保されるとともに、がん患者の治療選択の際の重要な情報源となりうる。また、がん診療の質が改善されることで、より質の高いがん診療を受けることができると考える。

Ref.)

16-2 地域がん専門診療施設のソフト面の整備拡充に関する研究 など



## 27. 大規模コホート研究などの疫学研究による、がん予防に資する日本人のエビデンスの構築

一つの大規模コホート研究や複数の症例対照研究などの疫学研究が推進され、がん予防による、がん罹患率・死亡率の減少に資する日本人独自のエビデンスが構築された。

それにより、喫煙・飲酒・運動・体型・食生活・感染などが、日本人のがんの原因として重要であり、その対策が、日本人のがん罹患率の減少に効果的であることが明らかになり、がん予防ガイドライン（「日本人のためのがん予防法」）の策定に貢献した。特筆すべきは、要因を保有することによるがん罹患リスクの大きさや要因の制御により予防可能な日本人のがんの割合などを定量的に示すことが可能になったことであり、がん対策や健康づくりにおいて、必須のエビデンスを提供した。

国民へのメリットとして、喫煙、食生活、運動その他の生活習慣および生活環境が健康に及ぼす影響等、がんに関する正しい知識を持てるようになり、それを実践することにより、がんのリスクを下げる、即ち、がんの予防が可能になった。実際に、国民の喫煙率の減少に、少なからず貢献し、1990年代半ばからの75歳未満のがんの年齢調整死亡率の減少をもたらした。

Ref.)

40-20 人のがんの疫学的研究

4指-2 多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究 など

## 28. がん検診の有効性評価や精度管理に資する疫学・公衆衛生研究による、がん検診に資する日本人のエビデンスの構築

がん検診の有効性評価や精度管理に資する疫学・公衆衛生研究が多数遂行された。特に、死亡率減少をエンドポイントとするがん検診有効性評価研究が、症例対照研究を中心として実施され、それらの結果を踏まえ、科学的証拠に基づくがん検診有効性ガイドラインを、国際的な手順に従って作成する体制が構築された。

それにより、わが国においても、がん検診による死亡率減少効果に関する科学的証拠が蓄積され、それらに基づくガイドラインを策定し、市町村によるがん検診を科学的根拠に基づいて行なう基盤を整備した。特に、がん検診が健康な人に対して実施されるという特性を考慮して、死亡率減少効果などの利益だけでなく、検診・精検に伴う侵襲や過剰診断・治療などの不利益の側面も評価することの重要性を確立した。また、公衆衛生施策として行う対策型検診と個人の判断で受ける任意型検診の概念を導入したことへの貢献は大きい。

国民へのメリットとして、国や地方公共団体などによる胃・大腸・肺・子宮・乳房などのがんに対する対策型検診が推進され、がん検診を受診することにより、がん死亡リスクを減少させることが効率よく、かつ、早期に実現可能となったと考える。また、任意型のがん検診の機会が与えられ、自らの判断によっても、がん死亡リスクを減少させることが可能になったと考える。その反映として、未だ低率とはいえ、国民のがん検診受診率は増加傾向にあり、2010年には21%（女性肺）～34%（男性胃）となった（国民生活基礎調査）。

Ref.)

55-7 胃集団検診効果の評価に関する研究 など

## 29. 日本独自の新たながん検診手法の開発

X線二重造影法による胃がん検診、ヒトの血液を特異的に検出する免疫学的便潜血検査、低線量CTによる肺がん検診、胃がんハイリスク群絞り込みのための血清ペプシノゲン検査など、新たな検診手法や検診を効率的に実施する方法などが開発された。

新たな検診手法などは対策型や任意型のがん検診に導入され、胃、大腸、肺などのがんの早期発見を効率的に実施することが可能になった。

それによって、最小の身体的・心理的、かつ、経済的負荷のもとに、多くの国民ががん検診を受診する機会を持つことになり、がん死亡リスクを減少させることが可能になったと考える。

Ref.)

39-2 胃がん集団検診の術式に関する研究 など

### 30. がん医療政策提言に関する研究

アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリス等諸外国におけるがん医療の政策提言に係わる各機関の役割について調査を実施し、わが国で、専門研究機関において政策提言機能を担当する組織の構成について、検討した。また、専門家による科学的根拠に基づいた政策提言を実施するための、「データに基づくがん対策を進めるために必要な情報基盤を強化するための提言」報告書について検討を行い、構成案をまとめた。さらに、わが国のがん政策における重要な課題である「がん登録の法制化」を例として、関連情報の収集・整理を行って、構成案に基づいた「科学的根拠に基づいた政策提言報告書」を作成し、その作業を通じて、構成案の評価を行った。

わが国において、未習熟であった科学的根拠に基づいた政策提言のあり方が明示されるとともに、「がん登録の法制化」の政策提言書（案）が作成された訳であるが、この案は、平成 22 年度国立がん研究センターがん研究開発費「がん登録等、がんの実態把握に資する疫学的・基盤的研究」班に継承され、「がん対策を推進するために必要ながん登録に関する提言」として、発表された。この報告書は、第 26 回がん対策推進協議会（平成 23 年 10 月 20 日）において報告され、第 2 期がん対策推進基本計画(素案)に、「法的位置づけの検討を含めて、がん登録の精度を向上させること」が、個別目標に含まれる形で反映されることとなった。

従来、わが国においては、各種研究で得られた科学的根拠をがん対策に結びつけるルートの整備が不十分であり、有用な研究成果を政策に還元することが困難であった。本研究において、がん登録の法制化に関する大きな成果を残すとともに、がん政策において、科学的根拠に基づく政策提言を実施するための組織案、政策提言報告書案を整理することで、今後、専門研究機関における研究成果を効果的・効率的に、がん対策に反映するための、道筋ができ、国民に大きなメリットを与えようとする。

Ref.)

19 指-3 がん医療政策提言に向けた研究 など

### 3 1. がんの代替療法に関する研究

がんの代替療法に関する実態調査を実施し、代替療法の利用率、利用の内訳、利用する理由、医療従事者への報告している割合、代替療法に要する費用などの実態を明らかにした。その結果を「補完代替医療ガイドブック」として、まとめ、冊子を発行するとともに、ホームページに掲載し、評価を実施した。

また、健康食品に関する文献情報を収集し、医療従事者、研究者、患者などに提供するためのデータベースを構築した。その内容を日本緩和医療学会とともに、「がん補完代替医療ガイドライン」として、まとめ、公開した。

補完代替療法については、欧米では、臨床試験により、その有効性などについて、評価が行われているが、わが国においては、情報がただでなく、誤った情報が氾濫し、患者・家族のみならず、医療者にも、混乱が見られていた。そのような状況のなかで、現状を調査して、公表するとともに、医療者に対して、正しい判断をするためのエビデンス提示することで、補完代替療法に対する普及啓発に大きく寄与した。

国民へのメリットについても、がんの医療にける補完代替療法についての正しい情報、補完代替医療の利用を考える際の注意点などをガイドブックとしてまとめ、公開するとともに、医療者に対してガイドラインを提示することで、医療者による患者への科学的根拠に基づいた情報提供を促進し、患者の不安の解消、不適切な利用による経済的負担の防止などにおいて、大きく貢献している。

Ref.)

13-20 我が国におけるがんの代替療法に関する研究 など

## V. 研究成果の要約

前項で紹介した研究成果を、がん診療・治療の技術向上と国民が享受するメリットの点に着目して、要約することとしたい。

発がん機構の研究は当時汎用されていた食品添加物 AF-2 の使用禁止など、環境中の様々な発がん物質の検索と規制をもたらした。また、ヘリコバクター・ピロリ菌の感染がヒト胃がんの原因であることが見出されることに大きく貢献する研究が行われ、現在では除菌による胃がん予防が確立しつつある。

がんの特性解明に係る研究では、長年にわたる成人 T 細胞白血病の特性解明の研究成果が、日本発の免疫療法の研究開発に発展し、現在では治療薬として抗 CCR4 ヒト化モノクローナル抗体の臨床試験が進行中である。また、日本型 C 型肝炎ウイルス (HCV) の遺伝子配列の解明が、培養細胞の HCV 感染複製系の樹立につながり、抗 HCV 薬の研究開発に展開した。さらに、小細胞肺がんの腫瘍マーカーとして見出された血中ガストリン放出ペプチド前駆体の測定法は小細胞肺がんの診断法として利用されている。

肺がんについては肺腺がん及び肺扁平上皮がんの感受性遺伝子が同定され、リスク診断を目指した探索研究が継続中である。一方、アルコール代謝酵素の遺伝的多型から、食道がんや頭頸部がんの発がん感受性の予測が可能となり、個人レベルのがん予防の周知に活かされている。また、がん組織を構成する間質細胞には生物学的変異があることが明かにされ、がん細胞のみでなく周辺の間質細胞を含むがん組織を標的とした治療法開発も検討されている。

がん治療における病理診断の標準化に関する研究ではがん種による診断一致率の違いが検討された結果、診断一致率の重要性が臨床医の間でも認知されつつある。また、増殖性の高い病変である表面型大腸がんについては、その粘膜内病変の組織像の形態学的観察から、腺腫を伴わず粘膜から直接がん化する可能性が見出され、早期発見に貢献した。さらに早期肺腺がんについては、その悪性度判定因子となりうる遺伝子を同定するとともに、薄切胸部 CT 画像による悪性度の術前診断法が開発され、早期発見と治療の発展に貢献した。

抗がん剤内包ミセル製剤の開発では、シスプラチンやタキソールなどのミセル製剤の試験が進められ、抗腫瘍効果の増強と有害事象の軽減が認められている。また、ポリ ADP リボース合成酵素 (PARP) 阻害剤の開発では、PARP の機能解析等の研究から PARP 阻害が DNA 修復応答を阻害し、さらにはがん細胞死を増強することも見出され、同阻害剤の臨床応用が進行中である。

ヘリカル X 線 CT の開発は、連続した切れ目のない画像情報によって診断能の向上をもたらすとともに、被ばくの低線量化にも貢献した。現在普及している CT のほぼすべてがヘリカル X 線 CT であり、肺がん等の検診に積極的に利用されている。また CT の普及は、MRI と組合わせた診断体系の構築に寄与するとともに、デジタル画像診断の普及に貢献した。

内視鏡の画像強調観察のひとつ Narrow Band Imaging (NBI) の開発では、頭頸部から大腸まで、がんの早期診断、鑑別診断を容易にし、侵襲の小さい又は臓器温存治療が可能となった。また早期胃がんに対する内視鏡的粘膜切除術は、IT ナイフを用いた新たな手技の開発によって、大型の病変や潰瘍瘢痕合併例の根治切除も可能にし、標準手技として確立した他、食道がんや大腸がんにも適応が拡大され、根治性が高まった。さらに、消化器悪性腫瘍のなかでも胃悪性リンパ腫や食道がんに対しては、標準治療として化学放射線療法が開発され、侵襲性の低い非外科的治療で治癒が得られるようになった。

肝胆膵外科領域の悪性腫瘍、特に胆道がんの根治を目指した拡大手術においては、非手術的な術前減黄処置、門脈塞栓術、血行再建術といった技術が開発され、広範囲肝切除の安全性が大きく向上した。また、がんの根治手術では身体機能の欠失を最小限にするため、脳神経、眼球、発声、肺、肝、肛門、排尿などの各機能を温存が行えるようになった。さらに、頭頸部悪性腫瘍の外科的治療においては顔貌（上顎骨や下顎骨）再建手術が、乳がんの外科的治療においては乳房温存手術、乳房再建手術が、それぞれ開発され、患者の QOL を著しく改善した。一方、低侵襲性手術の開発では、内視鏡下手術が大腸がんや胃がん、肺がんに適応拡大され、さらに難易度の高い食道がんや直腸がん或いは肝胆膵の領域においても、内視鏡下手術が積極的に行われるようになった。

がんの集学的治療の開発を担う多施設共同研究グループ体制として、日本臨床腫瘍研究グループ (JCOG) が組織され、国際標準の質の確保された研究者主導の臨床試験が数多く実施されるようになった。延命効果の改善や侵襲の少ない手術術式の確立などを含む、その質の高い臨床試験の結果は、がんの標準治療として国内外の各種学会の診療ガイドラインに採択されており、企業治験による抗がん剤開発と並んで、がんの標準治療の開発に大きく貢献している。

がん疼痛の治療、療養の質や痛み以外の症状緩和に関する研究の成果は、日本緩和医療学会の複数のガイドラインに採用された。特に、がん疼痛に使用される医療用麻薬の消費量はガイドライン刊行後、大きく伸長した。また、患者・家族への精神心理的ケアに関する研究では、うつ病が最大・最悪の精神心理的苦痛であることが明かにされ、その成果は

がん患者のうつ病に対する症状緩和プログラムの開発と普及に繋がり、患者・家族の療養生活の質の向上に大きく貢献した。

がん登録ではまず、県（市）単位の地域がん登録データを全国集計し、国レベルの統計としては唯一のがん罹患率の全国推計値の計算が行われ、がん対策の優先順位付けに重要な情報源を提供した。また、患者単位の院内がん登録データの収集も全国規模で行われ、がん診療の質を評価する点で重要な施設別 5 年生存率を算出し、がん患者の治療選択の際の重要な情報源を提供した。

大規模コホート研究をはじめとする疫学研究によって、日本人ががんに罹る主な要因とその要因を保有することによるがん罹患リスクの大きさ、要因の制御により予防可能ながんの割合などをエビデンスとして定量的に示すことが可能となり、がんに関する正しい知識の実践によってがんのリスクを下げるのが可能となった。

がん検診についてはまず、有効性評価に資する多数の研究から、がん検診による死亡率減少効果に関する科学的根拠が蓄積され、がん検診有効性ガイドラインの策定と市町村によるがん検診を科学的根拠に基づいて行う基盤を提供した。また、公衆衛生施策として行う対策型検診と個人の判断で受ける任意型検診の概念の導入にも貢献した。さらに、X 線二重造影法による胃がん検診、免疫学的便潜血検査、低線量 CT による肺がん検診など、新たな検診手法も開発され、がん検診に導入された。

がん対策ではまず、がん登録の法制化を例として政策提言に必要な調査研究が行われ、その提言はがん対策推進協議会への報告を経て、第 2 期がん対策推進基本計画素案に反映されることとなった。また、がんの代替療法に関する実態調査や健康食品に関する文献調査が行われ、その正確な実態や情報は一般向けのガイドブック、医療者向けのガイドラインとしてそれぞれ、ホームページや冊子にて公表し、補完代替療法に対する正しい情報の普及啓発に寄与した。

このようにして、がん研究助成金では、多くの発がん促進物質や発がん抑制物質を明らかにするとともに、数々の新しい抗がん剤の有効性と作用メカニズムを明らかにし、合理的な抗がん剤投与による治療成績の向上に貢献してきた。また、がんの本態解明や大規模疫学研究によって、新たながん予防の開発につなげる役割も果たした。

がん研究助成金ではまた、鮮明な画像や立体映像を得ることで従来の方法では検出できなかったがんを見出し、新たな診断・治療機器の開発に貢献するとともに、内視鏡治療や機能温存手術の開発のように、既に実用化され体への侵襲が少なく安全性の高い根治療法



を可能としたものや、固形がんに対する同種細胞免疫療法のように副作用が少なく有効な治療法の開発に結び付いたものなど、実用化に結び付く研究開発を行ってきた。

さらに、治療薬や診断機器そのもの以外にも、がん研究助成金では医師主導による多施設共同臨床試験の品質管理・品質保証を支援し、国際水準の質の確保された臨床試験実施体制を構築することで、がんの標準治療の確立に貢献してきた。また、がん検診の導入、がん登録の普及、正確ながん情報の提供など、公衆衛生やがん対策の施策に直接的な役割を果たした。

## VI. 今後の展望

国立がんセンター（現在、独立行政法人国立がん研究センター）においては、がん患者に対して、科学的根拠に基づく最善の医療を提供するために積極的に臨床研究に取り組むとともに、多施設が共同して実施する臨床研究に対して、必要な技術的支援を行っていくということが、がん対策基本計画にある。つまり、がん研究助成金は、国のがん研究の司令塔として国立がんセンターへ研究費を集中させ、そこから、がん医療を担う当センター、大学・研究機関、国立病院、がん専門医療施設など全国の研究者に研究費を配分し、全国の優れた研究者と共同してがん研究を効率的に推進してきたということ、そして国立がんセンターは研究所と病院を有する主力研究機関として、がん研究助成金を基礎研究と臨床研究の両方にバランスよく投入し、さらに公衆衛生やがん対策の施策に直結する研究にも投入することで、がんの原因と本態を解明し、高度・先駆的医療を開発し、がん政策医療を推進することなどを主体的に実施してきたことがわかる。

がん研究助成金事業が創設されてまもない時期と最終年度に近い時期とでは、研究費の規模も研究の数も種類も大きく増加し、時代の変遷とともに様々な観点からがん研究が助成されてきたが、一貫した研究方針をみることができる。まず、国立がんセンターを中心に行われてきた長期的戦略に基づく多施設共同型の大規模研究等を厚生労働科学研究費補助金などの研究費で実施することは長期にわたって一定の研究費を確保するという点で困難であり、JCOG による質の高い臨床試験体制の整備とその臨床試験に基づく標準治療の決定や、大規模コホート疫学研究によるがん罹患のリスクに関するエビデンスの提供などの研究成果は、がん研究助成金だからこそ達成できたということである。次に、PARP 阻害剤の開発、ヘリカル CT 等の開発などに見られるように、初期の段階はがん研究助成金で研究を展開させるための基盤を整備してから、後期の段階は厚生労働科学研究費補助金などの研究費を獲得して研究を実用化に向けて展開させるという、研究基盤の整備の役割ががん研究助成金にあったことがわかる。そして、心のケアに関する研究や外科術式の改良など、競争的資金では扱われにくい分野の研究をがん研究助成金で支援して、がん診断・治療の技術の向上やがん患者・家族に大きなメリットをもたらしたことも重要な役割と考えられる。

平成 22 年度から国立がんセンターは、独立行政法人国立がん研究センターとして生まれ変わった。がん研究助成金事業は平成 21 年度で終了したが、平成 22 年度からは独立行政法人国立がん研究センターが「がんの診断、治療、予防法を確立するために、我が国の中核的研究機関として専門的な研究を実施する」ことが求められている。

独立行政法人国立がん研究センターでは発足に伴い、その理念を①世界最高の医療と研究を行う、②患者目線で政策立案を行うとした。そして、医療と研究と政策立案を行う機

関の使命を次のとおり掲げた。①がん難民を作らない、②日本のがん患者の実態把握、がん検診の有効性に基づく普及啓発の実施、③がんの分子基盤解明に基づく新たな診断シーズの創出と最先端個別化医療の実現、大規模コホート研究による日本人のエビデンスの構築、④技術開拓、⑤先端医療の提供、⑥がん医療や研究でリーダーとして活躍する人材の育成、⑦がんの専門家集団としての政策立案、⑧国際がんネットワークへの参加。

これらの理念と使命を達成するためには、独立行政法人国立がん研究センターががん研究の先頭に立って、しかし単独ではなく、全国のがん医療を担う優れた研究者と共同して、国家戦略としてのがん対策を展開していけるように、がんの診断、治療、予防法を確立するための専門的な研究をしていかなければいけない。

がんの研究費には、厚生労働科学研究費補助金などの研究費があり、試行錯誤を伴う研究には多重性・複眼的視点が必要であることからすれば、我が国が複数の異なるがん研究費を有していることは、研究の厚み・総合力の強化につながる。また、効果的な研究予算の活用を行っていくためには、それぞれの研究費の特性を活かした適切な役割分担により、互いを強化・補完することも必要である。

複数の研究費を適切に運用する国家戦略的視点でのグランド・デザインを、独立行政法人国立がん研究センターが構築することを目指したいと考える。がん研究助成金においてみられた 3 つの特徴、①長期的戦略に基づく多施設共同型の大規模研究の推進、②研究を実用化に向けて展開させる前の研究基盤の整備、③競争的資金では扱われにくい、つまり他では行われにくい分野の研究、については、独立行政法人国立がん研究センターの運営費交付金で行われる研究として継承することが適切であり、なかでも、高度先駆的ながん医療開発又はがん対策推進施策に直結する研究を優先するという特徴を加えることで、運用を徹底していくことが重要である。そして、独立行政法人国立がん研究センターの使命達成には、全国のがん医療を担う優れた研究者の協力・応援が必須であり、それを実現し、確固とする方策を提供していかなければいけない。

# JCOGと研究班の歩み

## 【がん研究助成金】

## 【厚生（労働）科学研究費】

1978(S53)

がん研究助成金指定研究 末舛班  
「がんの集学的治療の研究」  
臨床試験審査委員会と  
効果・安全性評価委員会（1985）

1985(S60)

がん研究助成金指定研究 下山班  
「固形がんの集学的治療の研究」  
**Japan Clinical Oncology Group**  
と命名（1990）

1987(S62)

**JCOG**統計センター設置（1991）

1990(H2)

統計センター柏移転（1994～1996）  
統計センター築地再移転（1996）  
「データセンター」に改称（1998）

1999(H11)

2001(H13)

初代 下山正徳  
第二代 西條長宏

2004(H16)

2005(H17)

2008(H20)

2009(H21)

第3代 田村友秀

データベース  
システム開発  
・情報提供

科学技術庁  
省際基礎研究  
下山班  
1991-1993

がん克服  
新10か年  
戦略（第2次）  
下山班  
→津金班  
→山口班  
1994-2003

第3次対がん  
分野7若尾班  
2004～

データセンターと  
委員会事務局の  
スタッフ雇用など  
（7割人件費）

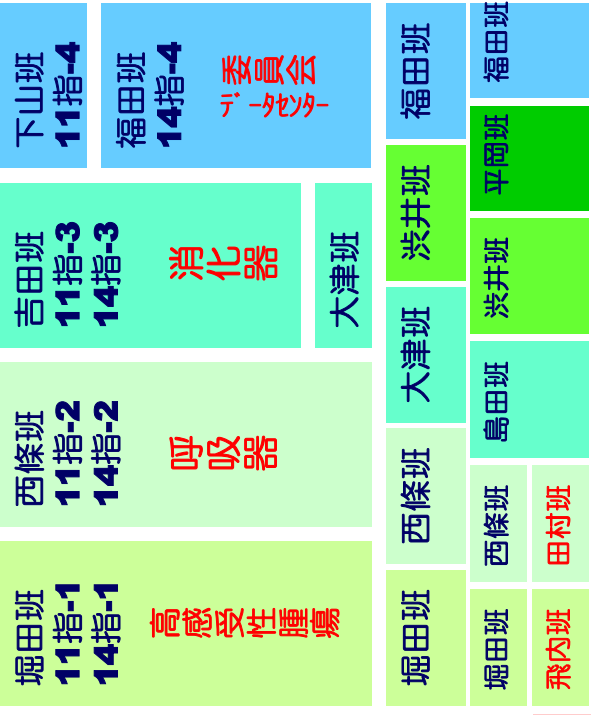
データマネージメント  
推進事業  
日本公定書協会と  
国立がんセンター  
の共同  
2001 - 2006

**NPO-CORE 2006.10～**

各試験ごとの  
研究費  
（データ管理  
委託費を含む）

デジタルロジック 2001  
効果的医療技術の確立  
推進臨床研究事業  
2002-2003

第3次対がん一  
が臨臨床研究事業  
2004～



がん研究助成金運営委員会名簿

任期 平成19年4月1日～平成21年3月31日

氏名	職名	備考
上田 龍三	名古屋市立大学大学院医学研究科教授	
北島 政樹	国際医療福祉大学 副学長	
小山 博記	大阪府立成人病センター 名誉総長	
澁谷 正史	東京大学 名誉教授（東京医科歯科大学非常勤講師）	
下山 正徳	独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター 名誉院長	
関谷 剛男	三菱化学生命科学研究所 所長	
高久 史麿	自治医科大学 学長	
高嶋 成光	独立行政法人国立病院機構四国がんセンター 院長	
田島 和雄	愛知県がんセンター研究所 所長	
塚本 直樹	独立行政法人国立病院機構九州がんセンター 名誉院長	
波利井 清紀	杏林大学医学部 教授	
久道 茂	(財)宮城県対がん協会 会長	
武藤 徹一郎	(財)癌研究会 名誉院長	
矢崎 義雄	独立行政法人国立病院機構 理事長	
吉倉 廣	国立感染症研究所 名誉所員	
米倉 義晴	独立行政法人放射線医学総合研究所 理事長	
矢島 鉄也	厚生労働省大臣官房厚生科学課長	官職指定
関山 昌人	厚生労働省医政局国立病院課長	官職指定
前田 光哉	厚生労働省健康局総務課がん対策推進室長	官職指定
廣橋 説雄	国立がんセンター総長	官職指定
土屋 了介	国立がんセンター中央病院長	官職指定
江角 浩安	国立がんセンター東病院長	官職指定
森山 紀之	国立がんセンターがん予防・検診研究センター長	官職指定
加藤 抱一	国立がんセンターがん対策情報センター長	官職指定
若林 敬二	国立がんセンター研究所長	官職指定

平成20年5月1日現在

任期 平成 17 年 10 月 1 日～平成 19 年 3 月 31 日

氏名	職名	備考
上田 龍三	名古屋市立大学大学院医学研究科教授	
山下 幸紀	独立行政法人国立病院機構北海道がんセンター 院長	
北島 政樹	慶應義塾大学医学部長 外科教授	
小山 博記	大阪府立成人病センター名誉総長	
佐々木 康人	独立行政法人放射線医学総合研究所理事長	
澁谷 正史	東京大学医科学研究所教授	
下山 正徳	独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター 名誉院長	
高久 史麿	自治医科大学長	
高嶋 成光	独立行政法人国立病院機構四国がんセンター院 長	
塚本 直樹	独立行政法人国立病院機構九州がんセンター院 長	
富永 祐民	(財)愛知県健康づくり振興事業団健康科学総合 センター長	
橋本 嘉幸	共立薬科大学理事長	
波利井 清紀	杏林大学医学部教授	
久道 茂	宮城県病院事業管理者	
武藤 徹一郎	癌研有明病院長	
矢崎 義雄	独立行政法人国立病院機構理事長	
吉倉 廣	国立感染症研究所名誉所長	
松谷 有希雄	厚生労働省大臣官房技術総括審議官	官職指定
中島 誠	厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室長	官職指定
外山 千也	厚生労働省医政局国立病院課長	官職指定
垣添 忠生	国立がんセンター総長	官職指定
野村 和弘	国立がんセンター中央病院長	官職指定
吉田 茂昭	国立がんセンター東病院長	官職指定
廣橋 説雄	国立がんセンター研究所長	官職指定
森山 紀之	国立がんセンター予防・検診研究センター長	官職指定

任期 平成 15 年 10 月 1 日～平成 17 年 9 月 30 日

氏名	職名	備考
垣添 忠生 (会長)	国立がんセンター総長	官職指定
上田 茂	厚生労働省大臣官房技術総括審議官	官職指定
上田 龍三	名古屋市立大学附属病院長	
海老原 敏	国立がんセンター東病院長	
大江 雅弘	厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室長	官職指定
荻田 征美	国立札幌病院長	
北島 政樹	慶應義塾大学医学部長	
小山 博記	大阪府立成人病センター総長	
佐々木 康人	独立行政法人放射線医学総合研究所理事長	
澁谷 正史	東京大学医科学研究所教授	
下山 正徳	国立名古屋病院名誉院長	
鈴木 英明	厚生労働省国立病院部医療指導課長	官職指定
高久 史麿	自治医科大学長	
高嶋 成光	国立病院四国がんセンター院長	
塚本 直樹	国立病院九州がんセンター院長	
富永 祐民	愛知県がんセンター名誉総長	
野村 和弘	国立がんセンター中央病院長	官職指定
橋本 嘉幸	共立薬科大学理事長	
波利井 清紀	杏林大学医学部教授	
久道 茂	宮城県立がんセンター総長	
廣橋 説雄	国立がんセンター研究所長	官職指定
武藤 徹一郎	財団法人癌研究会附属病院長	
森山 紀之	国立がんセンター予防・検診研究センター長	官職指定
矢崎 義雄	国立国際医療センター総長	
吉倉 廣	国立感染症研究所長	

平成 16 年 1 月 1 日 現在

任期 平成 13 年 10 月 1 日～平成 15 年 9 月 30 日

氏名	職名	備考
垣添 忠生 (会長)	国立がんセンター総長	官職指定
出月 康夫	東京大学名誉教授	
伊東 信行	名古屋市立大学名誉教授	
田中 慶司	厚生労働省大臣官房技術総括審議官	官職指定
上田 龍三	名古屋市立大学附属病院副院長	
海老原 敏	国立がんセンター東病院長	官職指定
北島 政樹	慶應義塾大学医学部長	
小泉 博義	神奈川県衛生部顧問	
小山 博記	大阪府立成人病センター総長	
佐々木 康人	独立行政法人放射線医学総合研究所理事長	
下山 正徳	国立名古屋病院名誉院長	
高久 史麿	自治医科大学長	
大江 雅弘	厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室長	官職指定
高嶋 成光	国立病院四国がんセンター院長	
滝澤 秀次郎	厚生労働省健康局国立病院部政策医療課長	官職指定
塚本 直樹	国立病院九州がんセンター院長	
富永 祐民	愛知県がんセンター総長	
野村 和弘	国立がんセンター中央病院長	官職指定
橋本 嘉幸	共立薬科大学理事長	
久道 茂	宮城県立がんセンター総長	
廣橋 説雄	国立がんセンター研究所長	官職指定
武藤 徹一郎	財団法人癌研究会附属病院長	
山脇 慎也	国立札幌病院長	
矢崎 義雄	国立国際医療センター総長	
吉倉 廣	国立感染症研究所長	

平成 15 年 1 月 1 日 現在



任期 平成 11 年 10 月 1 日～平成 13 年 9 月 30 日

氏名	職名	備考
寺田 雅昭 (会長)	国立がんセンター総長	官職指定
秋山 洋	国立小児病院名誉院長	
石井 勝	羽生市医師会立介護老人保健施設長	
出月 康夫	東京大学名誉教授	
伊東 信行	名古屋市立大学名誉教授	
海老原 敏	国立がんセンター東病院長	官職指定
滝澤 秀次郎	厚生労働省保健局国立病院部政策医療課長	官職指定
垣添 忠生	国立がんセンター中央病院長	官職指定
小山 博記	大阪府立成人病センター総長	
小山 靖夫	栃木県立がんセンター所長	
佐々木 壽英	新潟県労働衛生医学協会	
佐々木 康人	独立行政法人放射線医学総合研究所理事長	
下田 智久	厚生労働省大臣官房技術総括審議官	官職指定
下山 正徳	国立名古屋病院名誉院長	
高倉 信行	厚生労働省保健局総務課生活習慣病対策室長	官職指定
高久 史麿	自治医科大学長	
高嶋 成光	国立病院四国がんセンター院長	
塚本 直樹	国立病院九州がんセンター院長	
富永 祐民	愛知県がんセンター総長	
豊島 久真男	財団法人住友病院長	
橋本 嘉幸	共立薬科大学理事長	
廣橋 説雄	国立がんセンター研究所長	官職指定
武藤 徹一郎	財団法人癌研究会附属病院副院長	
山脇 愼也	国立札幌病院長	
矢崎 義雄	国立国際医療センター総長	

平成 13 年 4 月 1 日 現在



がん研究助成金予算額・研究課題数の推移

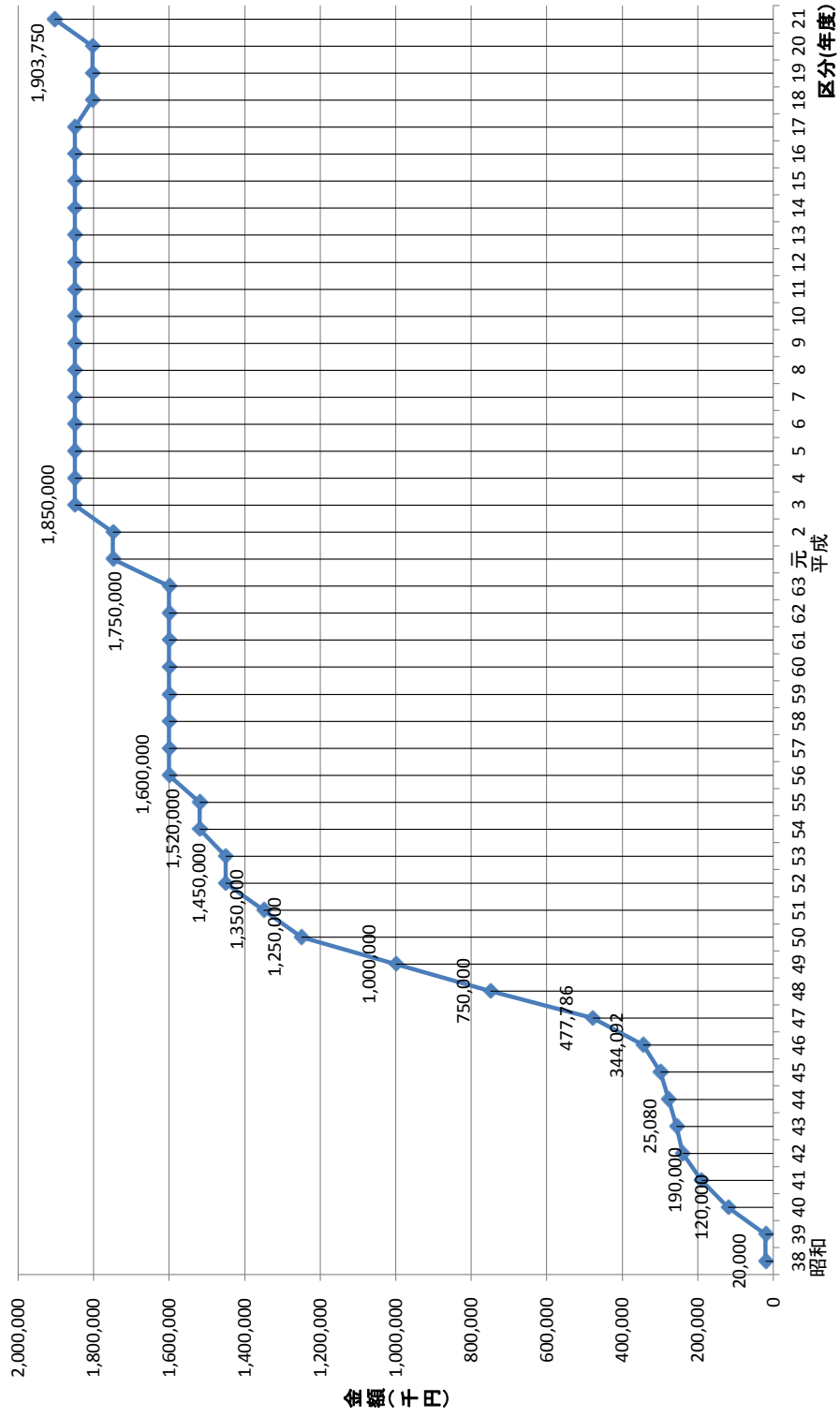
年度	S38	S39	S40	S41	S42	S43	S44	S45	S46	S47	S48	S49	S50	S51	S52	S53
がん研究助成金(百万円)	20	20	120	200	240	256	277	299	358	478	750	1000	1250	1350	1450	1450
対前年度比(%)	100	100	600	166	120	106	108	108	120	133	157	133	125	108	107	100
研究班数	7	21	21	31	24	24	28	33	35	45	53	56	57	58	57	64
総合研究															40	34
計画研究															11	22
機械開発研究															2	4
指定研究															4	4
研究者数	147	114	181	278	349	331	380	417	430	529	704	683	743	739	652	686

年度	S54	S55	S56	S57	S58	S59	S60	S61	S62	S63	H1	H2	H3	H4	H5	H6
がん研究助成金(百万円)	1520	1520	1600	1600	1600	1600	1600	1600	1600	1600	1750	1750	1750	1850	1850	1850
対前年度比(%)	104	105	105	100	100	100	100	100	100	100	109	100	100	106	100	100
研究班数	73	76	79	80	80	77	75	76	77	77	83	84	83	86	87	89
総合研究	27	23	21	19	21	21	20	19	18	18	18	17	18	16	17	13
計画研究	37	45	49	52	50	48	48	50	52	52	58	60	58	62	62	68
機械開発研究	5	4	4	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
指定研究	4	4	5	5	5	4	4	4	4	4	4	4	4	5	5	5
研究者数	712	713	705	800	820	808	780	783	770	776	854	861	876	887	909	907

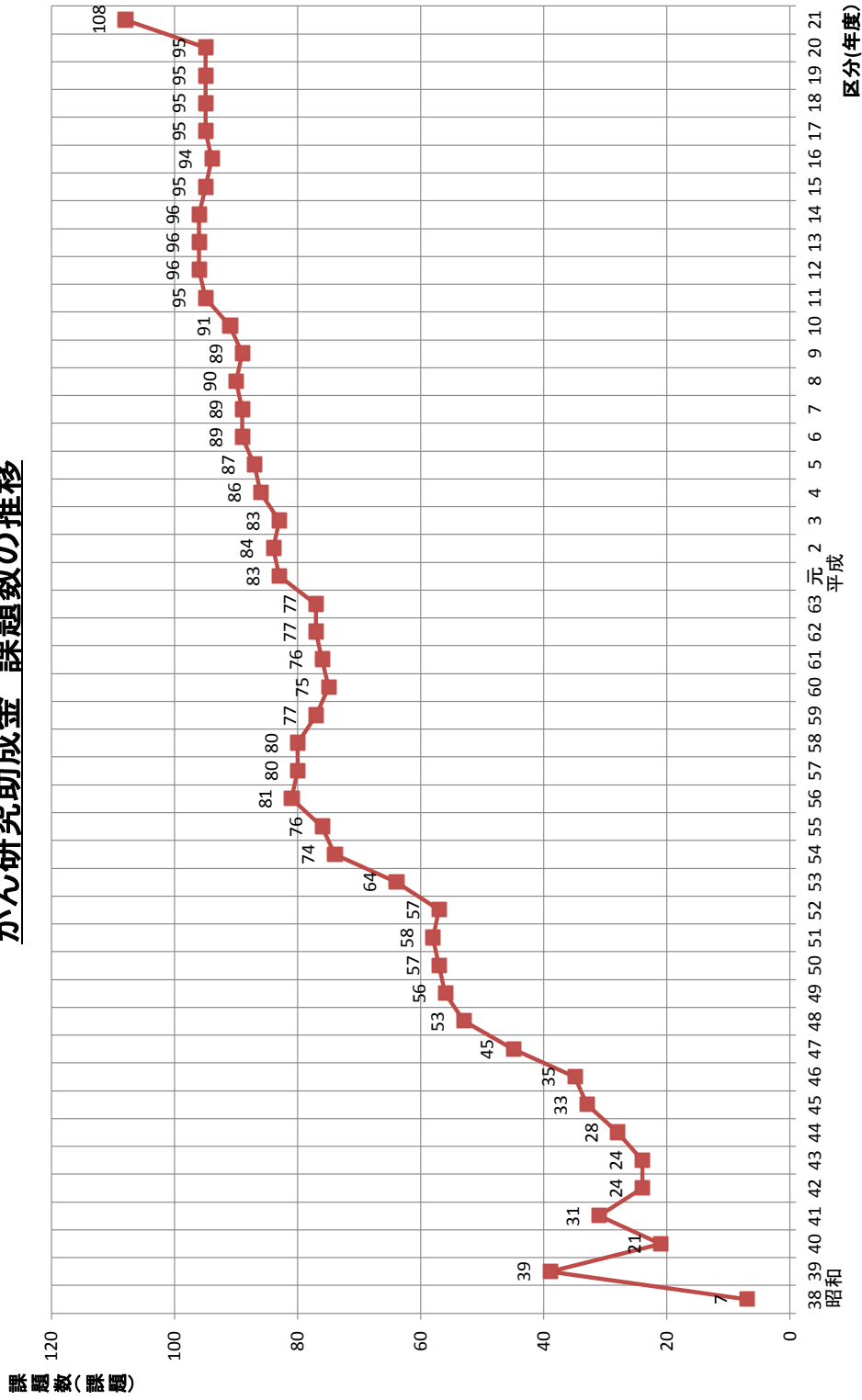
年度	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21
がん研究助成金(百万円)	1850	1850	1850	1850	1850	1850	1850	1850	1850	1850	1850	1804	1804	1804	1904
対前年度比(%)	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	98	100	100	108
研究班数	89	90	89	91	95	96	96	96	95	94	95	95	95	95	108
総合研究	12	11	12	12	10	10	9	8	8	8	8	8	7	7	4
計画研究	69	71	69	70	73	73	74	75	74	74	74	73	74	71	28
機械開発研究	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	1
指定研究	5	5	5	6	9	10	10	10	10	10	11	12	12	15	75
研究者数	910	911	899	911	994	1023	908	817	823	817	817	815	807	888	1017

注) 研究班の区分は昭和52年度からなされている。

# がん研究助成金 予算額の推移



# がん研究助成金 課題数の推移





**昭和38年度 2000万円 7課題**

課題番号	研究課題名	主任研究者
1	がんの的確な診断方法に関する研究	大槻 菊男
2	がんの新化学療法剤の適正な使用方法に関する研究	大槻 菊男
3	胃がん発生要因としての食生活に関する研究	島田 信勝
4	肺がん発生の誘因に関する研究	篠井 金吾
5	人細胞親和性ウイルスの発がんに関する研究	村上 栄
6	超高压放射線によるがん治療の研究	藤野 守次
7	がんの患者の生存率からみたがんの治療の評価に関する研究	曾田 長宗

**昭和39年度 2000万円 21課題**

課題番号	研究課題名	主任研究者
1	早期胃がんの発見に必要な診療技術の開発に関する研究	田坂 定孝
2	胃がん集団検診の術式に関する研究	有賀 槐三
3	胃がん切除と化学療法に関する研究	今永 一
4	新抗がん剤の臨床的スクリーニングに関する研究	黒川 利雄
5	再発乳がんの内分泌学的治療に関する研究	藤森 正雄
6	頭頸部がん(口腔・顎・咽頭・喉頭)の治療体系に関する研究	北村 武
7	がんの放射線治療技術の開発に関する研究	塚本 憲甫
8	胃がん発生要因としての食生活に関する研究	島田 信勝
9	がんの患者の生存率からみたがんの治療の評価に関する研究	曾田 長宗
10	がんの診療に必要な機械(がん細胞自動診断装置)の開発に関する研究	服部 正次
11	がんの診療に必要な機械(エックス線診断分析装置)の開発に関する研究	佐藤 隆弥
12	がんの診療に必要な機械(自動式制がん剤注入装置)の開発に関する研究	大島 正光
13	喫煙と肺がんの統計基準に関する研究	篠井 金吾



**昭和40年度 1億2000万円 21課題**

課題番号	研究課題名	主任研究者
1	膵臓がん及び胆道がんの診断技術の開発に関する研究	青山 進午
2	子宮がんの集団検診に関する研究	九嶋 勝司
3	環境因子等による発がん性(肺がん)に関する研究	安倍 三史
4	環境因子等による発がん性(その他)に関する研究	池田 良雄
5	がんに関する予防医療体系に関する研究	関 悌四郎
6	がんの診療に必要な機械(内視鏡用光源同調型記録装置)の開発に関する研究	松永 梧郎
7	がんの診療に必要な機械(ファイバー・ヒステロスコープ)の開発に関する研究	増淵 一正
8	胃がん集団検診の術式に関する研究	有賀 槐三
9	胃がん切除と化学療法に関する研究	今永 一
10	再発乳がんの内分泌学的治療に関する研究	藤森 正雄
11	頭頸部がん(口腔・顎・咽頭・喉頭)の治療体系に関する研究	北村 武
12	ヌクレオサイドの制がん性効果に関する研究	江上 不二夫
13	がん化学療法剤の適正な全身投与方法の確立と効果の評価に関する研究	黒川 利雄
14	抗がん剤の特殊投与方法の開発に関する研究	白羽弥右衛門
15	がんの放射線治療技術の開発に関する研究	塚本 憲甫
16	小児の悪性腫瘍に関する研究	高津 忠夫
17	早期胃がんの発見方法に関する研究	田坂 定孝
18	肺がんの早期診断の開発に関する研究	石川 七郎
19	血液及び尿等を利用するがんの診断方法に関する研究	久留 勝
20	人がんの疫学的研究	斎藤 潔
21	人がんウイルス問題に関する研究	西岡 久寿弥

昭和41年度 1億9000万円 31課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
1	植物多糖類の制がん性に関する研究	秋谷 七郎
2	ヌクレオサイドの制がん性効果に関する研究	江上 不二夫
3	人がんウイルス問題の免疫学的研究	西岡 久寿弥
4	早期胃がんの発見方法に関する研究	田坂 定孝
5	肺がんの早期診断の開発に関する研究	石川 七郎
6	膵臓がん、肝臓がんおよび胆道がんの診断および治療技術の開発に関する研究	青山 進午
7	乳がんの早期発見方法に関する研究	藤森 正雄
8	血液及び尿等を利用するがんの診断方法に関する研究	久留 勝
9	頭頸部がん(口腔・顎・咽頭・喉頭)の治療体系に関する研究	北村 武
10	骨腫瘍および骨転移に関する研究	天児 民和
11	尿路性器がんの治療体系の開発に関する研究	市川 篤二
12	がん化学療法剤の適正な全身投与方法の確立に関する研究	黒川 利雄
13	がん化学療法剤の効果の評価に関する研究	小山 善之
14	抗がん剤の特殊投与方法の開発に関する研究	白羽 弥右衛門
15	がんの放射線治療技術(高エネルギー放射線療法)の開発に関する研究	塚本 憲甫
16	悪性腫瘍手術の麻酔管理に関する研究	山村 秀夫
17	がんの外科療法と化学療法との併用に関する研究	今永 一
18	がんによる疼痛の発現と除痛に関する研究	工藤 達之
19	小児の悪性腫瘍に関する研究	高津 忠夫
20	がんの疫学調査方法論に関する研究	斎藤 潔
21	がんの既往調査及び計画調査による疫学的研究	曾田 長宗
22	がんに関する予防、医療体系に関する研究	関 悌四郎
23	大気汚染物質による発がん性に関する研究	安倍 三史
24	医薬品及び食品添加物による発がん性に関する研究	池田 良雄
25	食品中のかびによる発がん性に関する研究	浦口 健二
26	胃がん集団検診の公衆衛生学的評価に関する研究	山口 正義
27	子宮がんの集団検診に関する研究	九嶋 勝司
28	がん検診用機器(胃がん用X線間接撮影装置並びに胃及び子宮がん用X線テレビ)の開発に関する研究	入江 英雄
29	がんの病期分類と登録に関する研究	今井 環
30	乳がんの発生環境に関する研究	重松 逸造
31	絨毛性腫瘍の化学療法に関する研究	長谷川 敏雄

昭和42年度 2億4000万円 24課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
1	制がん性物質(植物多糖類およびヌクレオサイド)の効果に関する研究	秋谷 七郎
2	医薬品、食品添加物および食品中のかびなどによる発がん性とその試験法に関する研究	浦口 健二
3	人がんウイルス問題の免疫学的研究	西岡 久寿弥
4	人体液を利用するがんの診断方法に関する研究	伊藤 一二
5	酵素によるがん診断方法の開発に関する研究	沖中 重雄
6	臓器がん(内分泌系以外)における内分泌代謝に関する研究	石川 七郎
7	がん細胞の形態学的診断方法の開発に関する研究	千田 信行
8	がん予防に関する予防、医療体系の研究	関 悌四郎
9	人がんの疫学的研究	曾田 長宗
10	胃がん、子宮がんおよび肺がんの集団検診に関する研究	黒川 利雄
11	早期胃がんの発見方法に関する研究	田坂 定孝
12	肺がんの早期診断の開発に関する研究	檜林 和之
13	乳がんの早期発見方法に関する研究	藤森 正雄
14	がん化学療法剤の投与方法および他治療方法との併用に関する研究	今永 一
15	がん化学療法剤の効果の評価に関する研究	小山 善之
16	がんの放射線治療技術(高エネルギー放射線療法)の開発に関する研究	塚本 憲甫
17	膵臓がん、肝臓がんおよび胆道がんの診断および治療技術の開発に関する研究	青山 進午
18	頭頸部がんの治療体系に関する研究	北村 武
19	骨腫瘍および骨転移に関する研究	天児 民和
20	尿路性器がんの治療体系の開発に関する研究	市川 篤二
21	小児悪性腫瘍に関する研究	高津 忠夫
22	白血病とその類縁疾患に関する研究	脇坂 行一
23	悪性腫瘍手術の麻酔管理およびがんによる疼痛と除痛に関する研究	木村 忠司
24	がんの診療に必要な機械の開発に関する研究(X線テレビの胃集団検診応用、特にX線テレビ間接法の開発に関する研究)	入江 英雄

昭和43年度 2億5608万円 24課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
1	制がん性物質の効果に関する研究	秋谷 七郎
2	医薬品、食品添加物および食品中のかびなどによる発がん性とその試験法に関する研究	浦口 健二
3	未知人がんウイルスの探求に関する研究	伊藤 洋平
4	人体材料によるがんの生化学的研究	藤井 節郎
5	臓器がん(内分泌系以外)における内分泌代謝に関する研究	石川 七郎
6	がんの特異的な変化を応用する診断法の開発に関する研究	和田 武雄
7	酵素によるがん診断方法の開発に関する研究	沖中 重雄
8	がん細胞の形態学的診断方法の開発に関する研究	千田 信行
9	早期胃がんの経過追跡に関する研究	田坂 定孝
10	がん早期診断の開発に関する研究	藤森 正雄
11	がん化学療法における各種併用療法に関する研究	今永 一
12	がん化学療法の効果を高めるための条件に関する研究	小山 善之
13	がんの総合的放射線治療に関する研究	塚本 憲甫
14	頭頸部がんに対する機能、形体の保存を主旨とした治療法の開発に関する研究	切替 一郎
15	尿路性器がんの治療体系の開発に関する研究	市川 篤二
16	骨腫瘍および骨転移に関する研究	天児 民和
17	小児悪性腫瘍の特性と治療に関する研究	高津 忠夫
18	白血病とその類縁疾患に関する研究	脇坂 行一
19	悪性腫瘍手術の麻酔管理およびがんによる疼痛と除痛に関する研究	木村 忠司
20	人がんの多発原因に関する研究	曾田 長宗
21	がん予防に関する組織的活動の研究	関 悌四郎
22	がんの集団検診方法の確立に関する研究	黒川 利雄
23	がん診療に必要な機械の開発に関する研究	山下 久雄
24	がんの診断治療への医用情報処理の応用に関する研究	梅垣 洋一郎

昭和44年度 2億7657万円 28課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
1	制がん活性物質の研究	柴田 承二
2	医薬品、食品添加物及びカビ毒等の発がん性に関する研究	石館 守三
3	未知人がんウイルスの探求に関する研究	伊藤 洋平
4	条件発がん(主として胃、肝臓、皮ふ、乳腺)に関する研究	吉田 富三
5	人体材料によるがんの生化学的研究	藤井 節郎
6	臓器がん(内分泌系以外)における内分泌代謝に関する研究	石川 七郎
7	がん胃における胃液分泌に関する研究	三好 秋馬
8	癌に特異的な変化にもとづく診断法に関する研究	和田 武雄
9	酵素によるがん診断法の開発に関する研究	沖中 重雄
10	がん細胞の形態学的診断方法の開発に関する研究	千田 信行
11	早期胃癌の経過追跡に関する研究	田坂 定孝
12	がん早期診断の開発に関する研究	藤森 正雄
13	がん化学療法における各種併用療法に関する研究	今永 一
14	がん化学療法の効果を高めるための条件に関する研究	小山 善之
15	がんの総合的放射線治療に関する研究	塚本 憲甫
16	頭頸部がんに対する機能、形態の保存を主旨とした治療法の開発に関する研究	切替 一郎
17	小児悪性腫瘍の特性と治療に関する研究	高津 忠夫
18	がん患者における疼痛並にがん性ニューロパチーの研究	木村 忠司
19	悪性脳腫瘍の新しい治療法開発に関する研究	佐野 圭司
20	胃の悪性腫瘍の治療の向上に関する研究	天児 民和
21	膀胱がんの診断、治療及び予防体系の確立に関する研究	市川 篤二
22	女性、性器がん進行症例に対する治療法の開発に関する研究	岩井 正二
23	白血病とその類縁疾患に関する研究	日比野 進
24	人がんの多発原因に関する研究	曾田 長宗
25	がん予防に関する組織的活動の研究	関 悌四郎
26	がんの集団検診方法の確立に関する研究	黒川 利雄
27	がん診療に必要な機械の開発に関する研究	山下 久雄・崎田 隆夫
28	がんの診断治療への及び情報処理の応用に関する研究	梅垣 洋一郎

昭和45年度 2億9869万円 33課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
1	化学物質の癌原性発現条件に関する研究	小田嶋 成和
2	癌に対する生体固有の抵抗因子に関する研究	水野 伝一
3	癌の臨床病理学的診断法の開発に関する研究	沖中 重雄
4	細胞診の自動化の基礎となるがん細胞の形態学的研究	服部 正次
5	胃がん全国集計による治療成績の統計的評価とその治療への応用に関する研究	三輪 潔
6	造血器腫瘍の化学療法に関する研究	木村 喜代次
7	がん転移の防止と治療の基礎的ならびに臨床的研究	鈴木 千賀志
8	早期胃癌と実験胃癌の対比による前癌病変の動的な研究	村上 忠重
9	腫瘍産性ホルモンの病態とその機序に関する臨床的研究	石川 七郎
10	胃X線撮影(間接X線撮影を含む)の自動化に関する研究	有賀 槐三
11	十二指腸ファイバースコープ、大腸ファイバースコープおよび内視鏡テレビジョンの開発に関する研究	崎田 隆夫
12	制がん活性物質の研究	柴田 承二
13	医薬品、食品添加物及びカビ毒等の発がん性に関する研究	石館 守三
14	未知人がんウイルスの探求に関する研究	伊藤 洋平
15	人体材料によるがんの生化学的研究	藤井 節郎
16	がん胃の胃液分泌に関する研究	三好 秋馬
17	癌に特異的な変化にもとづく診断法の開発に関する研究	和田 武雄
18	総括研究報告書	田坂 定孝
19	サブ班 —総括報告書(総合)— がん早期診断の開発に関する研究(甲状腺、乳腺) —総括報告— 膵臓がんおよび胆道がんの早期診断の開発に関する研究 癌早期診断の開発に関する研究(肝臓) がん早期診断の開発に関する研究(肺)	藤森 正雄
20	がん化学療法における各種併用療法に関する研究	青山 進午
21	がん化学療法の効果を高めるための条件に関する研究	石川 浩一
22	がんの総合的放射線治療に関する研究	榎林 和之
23	頭けい部がんに対する機能・形体の保存を主旨とした治療法の開発に関する研究	今永 一
24	「小児悪性腫瘍の特性と治療に関する研究」総括研究報告書	小山 善之
25	がん患者に於ける疼痛並びにがん性ニューロパチーの研究	塚本 憲甫
26	悪性脳腫瘍の新しい治療法開発に関する研究	切替 一郎
27	骨の悪性腫瘍の治療の向上に関する研究	高津 忠夫
28	膀胱がんの診断、治療及び予防の体系確立に関する研究	木村 忠司
29	女性性器癌進行症例に対する治療法の開発に関する研究	佐野 圭司
30	人がんの多発原因の総括的研究	天児 民和
31	がんの予防に関する組織的活動の研究総括研究報告	市川 篤二
32	「がんの集団検診方法の確立に関する研究」報告書	岩井 正二
33	「癌の診断、治療への医用情報処理の応用に関する研究」昭和45年度 総括研究報告書	曾田 長宗
		関 悌四郎
		黒川 利雄
		梅垣 洋一郎

昭和46年度 3億5843万円 35課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
1	上咽頭がんの病因に関する研究	川村 明義
2	医薬品、食品添加物及びその他の特殊物質の発ガン性に関する研究	川城 巖
3	人がんに関する酵素学的生化学的研究	山村 雄一
4	がんの臨床免疫化学的診断法に関する研究	神前 五郎
5	悪性黒色腫治療向上のための協働的研究	川村 太郎
6	四肢軟部悪性腫瘍の臨床病理学的研究	青池 勇雄
7	肝、胆、膵及びその周辺部のがんに関する診断、治療技術の開発	本庄 一夫
8	乳がんの臨床病期別治療法の選択並びに総合的適用に関する研究	藤森 正雄
9	胃がんの各種療法法の選択並びに総合的適用に関する研究	陣内 傳之助
10	肺癌の治療面に於ける臓器特殊性と各種療法法の選択並びに総合的適用の決定に関する研究(肺癌の治療と予後実態の把握と治療法の総合的適用に関する研究)	早田 義博
11	A新抗癌剤の使用基準に関する研究	小山 義之
12	放射線難治性がんの有効な照射法の総合的開発研究	田崎 瑛生
13	放射性同位元素による癌の新しい診断治療の開発に関する研究	筧 弘毅
14	小児悪性腫瘍に対する治療法の特殊性と適正療法法の検討	井沢 道
15	絨毛がんの病因とその適正取扱いに関する研究	竹内 正七
16	がんの疫学的研究	平山 雄
17	がん予防対策に関する研究	瀧上 在弥
18	特殊環境における肺癌の早期発見に関する研究	岩崎 龍郎
19	内視鏡直視下の診断並びに治療操作を行うに必機械の開発に関する研究	崎田 隆夫
20	胃集検車(間接X線)における設備装置の改良開発に関する研究	有賀 槐三
21	コンピューターによるがん診療の総合研究	梅垣 洋一郎
22	化学物質の癌原性発現条件に関する研究	小田嶋 成和
23	がんに対する生体固有の抵抗因子に関する研究	水野 伝一
24	がんの臨床病理学的診断法の開発に関する研究	沖中 重雄
25	細胞診の自動化の基礎となるがん細胞の形態学的研究	服部 正次
26	胃がん全国集計による治療成績の統計的評価とその治療への応用に関する研究	三輪 潔
27	昭和46年度厚生省がん助成金「造血器腫瘍の化学療法に関する研究」	木村 喜代次
28	がん転移の防止と治療に関する基礎的ならびに臨床的研究	鈴木 千賀志
29	早期胃癌と実験胃癌の対比による前癌病変の動的な研究	村上 忠重
30	腫瘍産生ホルモンの病態とその機序に関する臨床的研究	石川 七郎
31	制がん活性物質の研究	柴田 承二
32	かび毒等の発ガン性に関する研究	石館 守三
33	がん患者における疼痛並びにがん性ノイロパチーの研究	木村 忠司
34	悪性脳腫瘍の新しい治療法開発に関する研究	佐野 圭司
35	膀胱がんの診断、治療及び予防の体系確立に関する研究	市川 篤二

昭和47年度 4億7779万円 45課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
1	上咽頭がんの病因に関する研究	川村 明義
2	医薬品食品添加物及びその他の特殊物質の発がん性に関する研究	川城 巖
3	人がんに関する酵素学的生化学的研究	山村 雄一
4	がんの臨床免疫化学的診断法に関する研究	神前 五郎
5	悪性異色腫治療成績向上のための協働的研究	川村 太郎
6	四肢軟部悪性腫瘍の臨床病理学的研究	青池 勇雄
7	肝、胆、膵及びその周辺部のがんに関する診断、治療技術の開発	本庄 一夫
8	乳がんの臨床病期別治療法の選択並びに総合的適用に関する研究	藤森 正雄
9	胃がんの各種療法の選択並びに総合的適用に関する研究	陣内 伝之助
10	肺癌の治療面に於ける臓器特殊性と各種療法の選択並びに総合適応の決定に関する研究	早田 義博
11	がん化学療法に関する研究 新抗癌剤の使用基準に関する研究 癌手術後の再発防止に対する抗癌剤の効果 がん化学療法における合併療法の評価とその適用に関する研究	小山 善之 今 永一 太田 和雄 田崎 瑛生
12	放射線難治性がんにも有効な照射法の総合的開発研究	田崎 瑛生
13	放射性同位元素によるがんの新らしい診断の開発 とくにRI機器と核種の開発によるがん診断の進捗について	笥 弘毅
14	小児悪性腫瘍に対する治療法の特殊性と適正療法の検討	井沢 道
15	絨毛がんの病因とその適正取扱いに関する研究	竹内 正七
16	がんの疫学的研究	平山 雄
17	がん予防対策に関する研究	淵上 在弥
18	特殊環境における肺癌の発病頻度	岩崎 龍郎
19	コンピューターによるがん診療の総合研究	梅垣 洋一郎
20	化学物質の癌原性発現条件に関する研究	小田嶋 成和
21	癌に対する生体固有の抵抗因子に関する研究	水野 伝一
22	がんの臨床病理学的診断法の開発に関する研究	沖中 重雄
23	細胞診の自動化の基礎となるがん細胞の形態学的研究	服部 正次
24	胃がん全国集計による治療成績の統計的評価と、その治療への応用に関する研究	三輪 潔
25	造血器腫瘍の化学療法に関する研究	木村 喜代次
26	がん転移の防止および治療に関する基礎的ならびに臨床的研究	鈴木 千賀志
27	早期胃癌と実験胃癌との対比による前癌病変の動的な研究	村上 忠重
28	腫瘍産性ホルモンの病態とその機序に関する臨床的研究	石川 七郎
29	制がん性物質の開発研究	秋谷 七郎
30	環境における化学的発癌因の研究	石館 守三
31	発癌におけるかび毒の位置づけに関する研究	宮木 高明
32	肝癌とオーストラリア抗原の関連性に関する研究	西岡 久寿弥
33	肺門部早期がんの診断大系の確立と診断法の開発に関する研究	池田 茂人
34	Poor Riskがん患者の病態生理	山村 秀夫
35	脳腫瘍の細胞学的研究並びにその臨床応用に関する研究	佐野 圭司
36	尿路がんの治療指針の確立に関する研究	高安 久雄
37	卵巣癌の早期診断並びに治療法に関する研究	渡辺 行正
38	食道癌の特性にもとづいた診断、治療体系の研究	赤倉 一郎
39	副鼻腔がんに対する各種治療方法の検討	鈴木 安恒
40	悪性腫瘍およびその治療に伴う神経障害の研究	里吉 宮二郎
41	がん診療機構の現状分析とがん登録を主軸とするその効率的システム確立に関する研究	二階堂 昇
42	内視鏡による消化器がんの早期診断と治療に必要な機械の開発に関する研究	崎田 隆夫
43	がん診断、治療のための高性能超音波装置の開発に関する研究	和賀井 敏夫
44	被曝量の少ないテレビ間接X線撮影装置の開発の研究	本保 善一郎
45	がんの国際的分類法の確立と胃癌に関する国際的情報の収集、解析による臨床への応用に関する研究	伊藤 一二



昭和48年度 7億7000万円 53課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
1	上咽頭がんの病因に関する研究	川村 明義
2	医薬品、食品添加物及びその他特殊物質の発がん性に関する研究	川城 巖
3	人がんに関する酵素学的生化学的研究	山村 雄一
4	がんの臨床免疫化学的診断法に関する研究	神前 五郎
5	悪性黒色腫治療成績向上のための協働的研究	川村 太郎
6	四肢軟部悪性腫瘍の臨床病理学的研究	青池 勇雄
7	肝、胆、膵及び周辺部のがんに関する診断、治療技術の開発に関する研究	本庄 一夫
8	乳がんの臨床病期別治療法の選択並びに総合的適用に関する研究	藤森 正雄
9	胃がんの各種療法を選択並びに総合的適用に関する研究	陣内 傳之助
10	肺癌の治療画に於ける臓器特殊性と各種療法を選択並びに総合適応の決定に関する研究	早田 義博
11	がん化学療法に関する研究 新抗がん剤の使用基準に関する研究 癌手術後の再防止に対する抗癌剤の効果 がん化学療法における合併療法の評価とその適用に関する研究	小山 善之 今 永一 太田 和雄
12	放射線難治性がんの有効な照射法の総合的開発研究	田崎 瑛生
13	放射性同位元素によるがんの新しい診断の開発、特にアイソトープ機器と核種の開発によるがん診断の進歩について	寛 弘毅
14	小児悪性腫瘍に対する治療法の特殊性と適性療法の検討	井沢 道
15	絨毛がんの病因とその適正取扱いに関する研究	竹内 正七
16	がんの疫学的研究	平山 雄
17	特殊環境における肺癌の発病に関する研究	岩崎 龍郎
18	コンピュータによるがん診療の総合研究	梅垣 洋一郎
19	制がん性物質の開発研究	秋谷 七郎
20	環境における化学的発がん因子の研究	石館 守三
21	発がんにおけるカビ毒の位置づけに関する研究	斎藤 守
22	肝がんとオーストラリア抗原の関連性に関する研究	西岡 久寿弥
23	肺門部早期がんの診断体系の確立と診断法の開発に関する研究	池田 茂人
24	Poor Riskがん患者の病態生理	山村 秀夫
25	脳腫瘍の細胞学的研究並びにその臨床応用に関する研究	佐野 圭司
26	尿路がんの治療法指針の確立に関する研究	高安 久雄
27	卵巣癌の早期診断並びに治療法に関する研究	渡辺 行正
28	食道癌の特性にもとづいた診断、治療体系に関する研究	飯塚 紀文
29	副鼻腔がんに対する各種治療法の検討	鈴木 安恒
30	悪性腫瘍およびその治療に伴う神経障害の研究	里吉 螢二郎
31	がん診療機構の現状分析とがん登録を主軸とするその効率的システム確立に関する研究	二階堂 昇
32	がんの国際的分類法の確立と胃癌に関する国際的情報の収集解析による臨床への応用に関する研究	伊藤 一二
33	癌診断を目標とした臨床化学の研究	沖中 重雄
34	自動細胞診システムの実用化に関する研究	服部 正次
35	胃がんの情報処理システムの確立とその治療への活用に関する研究	三輪 潔
36	子宮頸癌の全国集計による治療成績の統計的評価とその治療への活用に関する研究	笠松 達弘
37	白血病とその類縁疾患の寛解導入、維持療法に関する基礎的並びに臨床的研究	木村 喜代次
38	癌転移抑制法の開発に関する研究	鈴木 千賀志
39	ヒト早期胃癌と実験胃癌の対比による前癌性変化の病態把握	村上 忠重
40	ホルモン環境の変化を利用したがん治療効果向上に関する研究	熊岡 爽一
41	がんの免疫療法に関する基礎的研究と臨床的研究	櫻井 欽夫
42	口腔癌の診断と治療に関する研究	上野 正
43	癌に対する生体固有の防壁機構とその促進物質に関する研究	水野 伝一
44	消化器がんの診断と治療に必要な内視鏡機械の開発に関する研究	崎田 隆夫
45	がんの診療用高性能超音波装置の開発と実用化に関する研究	和賀井 敏夫
46	蛍光増倍管 (I. I) 間接に於ける解像力向上とX線被曝量についての研究	本保 善一郎
47	睪丸腫瘍の病理組織の細胞学的研究、後腹膜腔リンパ腺転移の早期発見法の追求、及び外科的、放射線的、免疫学的治療並びに化学療法に関する研究	大黒田 和生
48	抗癌性抗生物質の開発に関する基礎的研究	石田 名香雄
49	がんの薬物療法に関する研究	木村 喜代次
50	化学物質の癌原性検索法の確立	小田嶋 成和

昭和49年度 10億円 56課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
1	制がん性物質の開発に関する研究	秋谷 七郎
2	環境における化学的発癌因子の研究	石館 守三
3	発がんにおけるカビ毒の位置づけに関する研究	斎藤 守
4	肝がんとオーストラリア抗原の関連性に関する研究	西岡 久寿弥
5	肺門部早期がんの診断体系の確立と診断法の開発に関する研究	池田 茂人
6	プアリスク癌患者の病態生理	山村 秀夫
7	脳腫瘍の細胞学的研究ならびにその臨床応用に関する研究	佐野 圭司
8	尿路がんの治療指針の確立に関する研究	高安 久雄
9	卵巣癌の早期診断並びに治療法に関する研究	渡辺 正幸
10	食道がんの特性にもとづいた診断、治療体系の研究	飯塚 紀文
11	副鼻腔がんに対する各種治療方法の検討	鈴木 安恒
12	悪性腫瘍およびその治療に伴う神経障害の研究	里吉 營二郎
13	がん診療機構の現状分析とがん登録を主軸とするその効率的システム確立に関する研究	二階堂 昇
14	がんの国際的分類法の確立と胃がんに関する国際的情報の収集、解析による臨床への応用に関する研究	伊藤 一二
15	がん診断を目標とした臨床化学の研究	沖中 重雄
16	自動細胞診システムの実用化に関する研究	服部 正次
17	胃がんの情報処理システムの確立とその治療への活用に関する研究	三輪 潔
18	子宮頸癌の全国集計による治療成績の統計的評価とその治療への活用に関する研究	笠松 達弘
19	白血病とその類縁疾患の寛解導入、維持療法に関する基礎的並びに臨床的研究	木村 喜代次
20	癌転移抑制法の開発に関する研究	鈴木 千賀志
21	ヒト胃癌と実験胃癌の対比による前癌性変化の病態把握	村上 忠重
22	ホルモン環境の変化を利用したがん治療効果向上に関する研究	熊岡 爽一
23	がんの免疫療法に関する基礎的研究と臨床的研究	櫻井 欽夫
24	口腔癌の診断と治療の向上に関する研究	上野 正
25	がんに対する生体固有の防衛機構とその促進物質に関する研究	水野 伝一
26	睾丸腫瘍の病理組織、細胞学的研究、後腹膜腔リンパ腺転移早期発見法の研究、及び外科的、免疫学的治療、並びに放射線、化学療法に関する研究	大田 黒 和生
27	抗癌性抗生物質の開発に関する基礎的研究	石田 名香雄
28	上咽頭がんの病因に関する研究	川村 明義
29	医薬品、食品添加物の発がん性に関する研究	川城 巖
30	人がんの酵素学的生化学的研究	山村 雄一
31	がんの臨床免疫化学的診断法に関する研究	神前 五郎
32	肺、縦隔及び食道腫瘍の縦隔内病変に対する直接的検索法の開発	伝田 俊男
33	軟部悪性腫瘍の診断と治療の開発	青池 勇雄
34	肝、膵、胆道系がんの早期診断法の開発と最も合目的な治療法確立に関する研究	本庄 一夫
35	悪性黒色腫およびその類症の治療大系確立と病因に関する研究	久保田 淳
36	大腸癌の各種療法に関する総合的研究	梶谷 鏝
37	乳がんの各種療法の選択並びに総合的運用に関する研究	藤森 正雄
38	胃がん再発の早期発見とその対策	陣内 伝之助
39	肺がんの組織発生・細胞形態よりみた各種療法の選択並びに総合適応の決定に関する研究	早田 義博
40	術後再発防止のための癌免疫化学療法	近藤 達平
41	がん化学療法の効果増強のための合併療法に関する研究	太田 和雄
42	制癌剤の適正な投与方法の確立に関する研究	小山 善之
43	がん放射線療法において治療効果比を高くする照射法の開発	田崎 瑛生
44	癌のアイソトープ診断の開発、特に癌組織へのアイソトープ集積機構に関する研究	寛 弘毅
45	小児悪性新生物に対する診断方法の向上とその予後追求に関する諸問題の研究	石田 正統
46	絨毛性腫瘍の発症に関する基礎的研究並びに予後管理方式の確立	石塚 直隆
47	がんの疫学的研究	平山 雄
48	胃がん集団検診の適正化に関する研究	市川 平三郎
49	大気汚染による環境的ならびに職業的肺癌及びそれに先行する病変についての共同研究	渡辺 漸
50	がん診療用高性能自動化超音波装置の開発	和賀井 敏夫
51	蛍光増倍管( I . I )間接撮影における像記録系の改善、特に100mmカメラの開発について	村上 晃
52	消化器がんの内視鏡的診断と治療に必要な器械の開発に関する研究	崎田 隆夫
53	コンピューターによるがん診療の総合研究	梅垣 洋一郎
54	人がん細胞培養株の樹立とその臨床応用に関する研究	野嶽 幸雄
55	がんの薬物療法に関する研究	木村 喜代次
56	化学物資の癌原性検索法の確立	小田嶋 成和

昭和50年度 12億5000万円 57課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
48-1	がん診断を目標とした臨床化学の研究	服部 信
48-2	自動細胞診システムの実用化に関する研究	服部 正次
48-3	胃がんの情報処理システムの確立とその治療への活用に関する研究	三輪 潔
48-4	子宮頸癌の全国集計による治療成績の統計的評価とその治療への活用に関する研究	笠松 達弘
48-5	白血病とその類縁疾患の寛解導入、維持療法に関する基礎的並びに臨床的研究	木村 喜代次
48-6	癌転移抑制法の開発に関する研究	鈴木 千賀志
48-7	ヒト早期胃癌と実験胃癌の対比による前癌性変化の病態把握	村上 忠重
48-8	ホルモン環境の変化を利用したがん治療効果向上に関する研究	熊岡 爽一
48-9	がんの免疫療法に関する基礎的研究と臨床的研究	桜井 欽夫
48-10	口腔癌の診断と治療の向上に関する研究	上野 正
48-11	がんに対する生体固有の防禦機構とその促進物質に関する研究	水野 伝一
48-12	辜丸腫瘍の病理組織、細胞学的研究、後腹膜腔リンパ腺転移の早期発見法の追求、及び外科的、放射線的、免疫学的治療法並びに化学療法に関する研究	大田黒 和生
48-13	抗癌性抗生物質の開発に関する基礎的研究	石田 名香雄
49-1	上咽頭がんの病因に関する研究	川村 明義
49-2	医薬品および食品添加物の発がん性に関する研究	川城 巖
49-3	人がんに関する酵素学的、生化学研究	山村 雄一
49-4	がんの臨床免疫化学的診断法に関する研究	神前 五郎
49-5	肺縦隔及び食道腫瘍の縦隔内病変に対する直接的検索法の開発	伝田 俊男
49-6	軟部悪性腫瘍の診断と治療の開発	青池 勇雄
49-7	肝、膵、胆道系がんの早期診断法の開発と最も合目的な治療法確立に関する研究	本庄 一夫
49-8	悪性黒色腫およびその類症の治療体系確立と病因に関する研究	久木田 淳
49-9	大腸癌の各種療法に関する総合的研究	梶谷 鑲
49-10	乳がんの各種療法の選択並びに総合的適用に関する研究	藤森 正雄
49-11	胃がん再発の早期発見とその対策	陣内 伝之助
49-12	肺がんの組織発生、細胞形態よりみた各種療法の選択並びに総合適応の決定に関する研究	早田 義博
49-13	術後再発防止のための癌免疫化学療法	近藤 達平
49-14	がん化学療法の効果増強のための合併療法に関する研究	太田 和雄
49-15	制癌剤の適正な投与方法の確立に関する研究	小山 善之
49-16	がん放射線療法において治療効果比を高くする照射法の開発	田崎 瑛生
49-17	癌のアイソトープ診断の開発、特に癌組織へのアイソトープ集積機構に関する研究	笥 弘毅
49-18	小児悪性新生物に対する診断方法の向上とその予後追求に関する諸問題の研究	石田 正統
49-19	絨毛性腫瘍の発症に関する基礎的研究並びに予後管理方式の確立	石塚 直隆
49-20	がんの疫学的研究	平山 雄
49-21	胃がん集団検診の適正化に関する研究	市川 平三郎
49-22	大気汚染による環境的ならびに職業的肺癌及びそれに先行する病変についての協同研究	渡辺 漸
49-23	コンピューターによるがん診療の総合研究	梅垣 洋一郎
49-24	人がん細胞培養株の樹立とその臨床応用に関する研究	野嶽 幸雄
50-1	多糖体を含む植物成分および核酸アナログを中心とした異項環化合物の制がん性に関する研究	樽谷 和男
50-2	生活環境における化学的発がん因子の研究	石館 守三
50-3	マイコキシンの複合汚染による発がん効果に関する研究	斎藤 守
50-4	HBウイルスと肝がんの関係に関する研究	西岡 久寿弥
50-5	早期肺癌の発見と診断体系の確立に関する研究	池田 茂人
50-6	脳腫瘍の診断と治療体系の確立に関する研究	佐野 圭司
50-7	尿路がんの新しい治療技術に関する研究	松本 恵一
50-8	食道がんの治療体系の研究	飯塚 紀文
50-9	上気道におけるがんの機能保存治療の開発に関する研究	竹田 千里
50-10	がん患者の神経障害とその対策	祖父江 逸郎
50-11	がん診療機構の効率的体系化に関する研究	二階堂 昇
50-12	がんの国際的分類法の確立と胃癌に関する国際的情報の収集、解析による臨床への応用に関する研究	伊藤 一二
50-13	地域におけるがん放射線治療の体系化に関する研究	北川 俊夫
50-14	各種人癌のヌードマウス移植系の樹立とその癌診断治療への応用に関する研究	下里 幸雄
50-15	機能性悪性腫瘍に由来するホルモン様物質の特性とその臨床病態に及ぼす影響の研究	阿部 令彦
50-16	地域がん登録の体系化と登録資料の利用に関する研究	藤本 伊三郎
50-17	超音波象の画像処理、高速化によるがん診断用高性能超音波装置の開発に関する研究	和賀井 敏夫
大-1	がんの薬物療法に関する研究	木村 喜代次
大-2	突然変異原性物質の動物発癌テストに関する研究	小田嶋 成和
大-3	遺伝変異原性物質を主とする発癌物質のスクリーニングの技術開発	河内 卓

昭和51年度 13億5000万円 58課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
49-1	上咽頭がんの病因に関する研究	川村明義
49-2	医薬品および食品添加物の発がん性に関する研究	川城 巖
49-3	人がんに関する酵素学的生化学研究	山村 雄一
49-4	がんの臨床免疫化学的診断法に関する研究	神前 五朗
49-5	肺、縦隔及び食道腫瘍の縦隔内病変に対する直接的検索法の開発	伝田 俊男
49-6	軟部悪性腫瘍の診断と治療の開発	前山 巖
49-7	肝、膵、胆道系がんの早期診断法の開発と最も合目的な治療法開発に関する研究	本庄 一夫
49-8	悪性黒色腫およびその類症の治療大系確立と病因に関する研究	久木田 淳
49-9	大腸癌の各種療法に関する総合的研究	梶谷 鏝
49-10	乳がんの各種療法の選択並びに総合的適用に関する研究	藤森 正雄
49-11	胃がん再発の早期発見とその対策	陣内 伝之助
49-12	肺癌の組織発生、細胞形態よりみた各種療法の選択並びに総合適応の決定に関する研究	早田 義博
49-13	術後再発防止の為の癌免疫化学療法	近藤 達平
49-14	がん化学療法の効果増強のための合併療法の確立に関する研究	太田 和雄
49-15	制癌剤の適正な投与方法の確立に関する研究	小山 善之
49-16	がんの放射線療法において治療効果比を高くする照射法の開発	田崎 瑛生
49-17	癌のアイソトープ診断の開発、特に癌組織へのアイソトープ集積機構に関する研究	筧 弘毅
49-18	小児悪性新生物に対する診断方法の向上とその予後追求に関する諸問題の研究	石田 正統
49-19	絨毛性腫瘍の発症に関する基礎的研究並びに予後管理方式の確立	石塚 直隆
49-20	がんの疫学的研究	平山 雄
49-21	胃がん集団検診の適正化に関する研究	山田 達哉
49-22	大気汚染による環境的ならびに職業的肺癌及びそれに先行する病変についての協同研究	金澤 暁太郎
49-23	コンピュータによるがん診療の総合研究	梅垣 洋一郎
49-24	人がん細胞培養株の樹立とその臨床応用に関する研究	野嶽 幸雄
50-1	多糖体を含む植物成分および核酸アナログを中心とした異項環化合物の制がん性に関する研究	樽谷 和男
50-2	生活環境における化学的発がん因子の研究	石館 守三
50-3	マイコトキシンの複合汚染による発がん効果に関する研究	倉田 浩
50-4	HBウイルスと肝がんの関係に関する研究	西岡 久壽彌
50-5	早期肺がんの発見と診断体系の確立に関する研究	池田 茂人
50-6	脳腫瘍の診断と治療体系の確立に関する研究	佐野 圭司
50-7	尿路がんの新しい治療技術に関する研究	松本 恵一
50-8	食道癌の治療体系の研究	飯塚 紀文
50-9	上気道におけるがんの機能保存療法の開発に関する研究	竹田 千里
50-10	がん患者の神経障害とその対策	祖父江 逸郎
50-11	癌診療機構の効率的体系化に関する研究	二階堂 昇
50-12	がんの国際的分類法の確立と胃癌に関する国際的情報の収集、解析による臨床への応用に関する研究	伊藤 一二
50-13	地域における癌放射線治療の体系化に関する研究	北川 俊夫
50-14	各種人癌のヌードマウス移植系の樹立とその癌診断治療への応用に関する研究	下里 幸雄
50-15	機能性悪性腫瘍に由来するホルモン様物質の特性とその臨床病態に及ぼす影響の研究	阿部 令彦
50-16	地域がん登録の体系化と登録資料の利用に関する研究	藤本 伊三郎
51-1	がんの化学的診断法に関する研究	服部 信
51-2	自動細胞診断システムに関する研究	天神 美夫
51-3	全国登録調査によるがん患者の医用情報の収集とその情報処理システムの確立に関する研究	三輪 潔
51-4	白血病とその類似疾患の腫瘍、宿主、薬剤関係における総合的治療体系の確立に関する研究	山田 一正
51-5	癌の転移抑制に関する研究	佐藤 春朗
51-6	ヒト胃がんと実験犬がんの対比とその臨床応用に関する研究	村上 忠重
51-7	乳がんのホルモン環境と内分泌療法の作用機序	村岡 爽一
51-8	癌の免疫療法及び免疫化学療法における基礎的研究と臨床的研究	桜井 欽夫
51-9	がんに対する生体固有の防禦機構に関する研究	積田 亨
51-10	制癌性抗生物質の作用機序に基づいた人癌治療の基礎的研究	石田 名香雄
51-11	抗がん物質の新しい探索法に関する基礎的研究	梅沢 浜夫
51-12	がん放射線診療の副次現象に関する研究	山下 久雄
51-13	診断の進歩に根ざした正確な病期分類とその臨床応用	末舛 恵一
51-14	がん集団検診用高速情報処理超音波診断装置の開発に関する研究	和賀井 敏夫
51-15	低線量最大情報量撮影を目的としたがん検診用X線装置の開発	村上 晃一
大-1	がんの薬物療法に関する研究	竹田 千里
大-2	突然変異原性物質の動物発癌テストに関する研究	小田嶋 成和
大-3	遺伝変異原性を主とする発癌物質のスクリーニングの技術開発	河内 卓

昭和52年度 14億5000万円 57課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
50-1	多糖体を含む植物成分および核酸アナログを中心とした異項環化合物の制がん性に関する研究	樽谷 和男
50-2	生活環境における化学的発がん因子の研究	石館 守三
50-3	マイコトキシンの複合汚染による発がん効果に関する研究	倉田 浩
50-4	HBウイルスと肝がんの関係に関する研究	西岡 久壽彌
50-5	早期肺がんの発見と診断体系の確立に関する研究	池田 茂人
50-6	脳腫瘍の診断と治療体系の確立に関する研究	佐野 圭司
50-7	尿路がんの新しい治療技術に関する研究	松本 恵一
50-8	食道癌の治療体系の研究	飯塚 紀文
50-9	上気道におけるがんの機能保存療法の開発に関する研究	竹田 千里
50-10	がん患者の神経障害とその対策	祖父江 逸郎
50-11	癌診療機構の効率的体系化に関する研究	二階堂 昇
50-12	がんの国際的分類法の確立と胃癌に関する国際的情報の収集、解析による臨床への応用に関する研究	伊藤 一二
50-13	地域における癌放射線治療の体系化に関する研究	北川 俊夫
50-14	各種人癌のヌードマウス移植系の樹立とその癌診断治療への応用に関する研究	下里 幸雄
50-15	機能性悪性腫瘍に由来するホルモン様物質の特性とその臨床病態に及ぼす影響の研究	阿部 令彦
50-16	地域がん登録の体系化と登録資料の利用に関する研究	藤本 伊三郎
51-1	がんの化学的診断法に関する研究	服部 信
51-2	自動細胞診システムに関する研究	天神 美夫
51-3	全国登録調査によるがん患者の医用情報の収集とその情報処理システムの確立に関する研究	三輪 潔
51-4	白血病とその類似疾患の腫瘍、宿主、薬剤関係における総合的治療体系の確立に関する研究	山田 一正
51-5	癌の転移抑制に関する研究	佐藤 春朗
51-6	ヒト胃がんと実験犬がんの対比とその臨床応用に関する研究	村上 忠重
51-7	乳がんのホルモン環境と内分泌療法の作用機序	村岡 爽一
51-8	癌の免疫療法及び免疫化学療法における基礎的研究と臨床的研究	桜井 欽夫
51-9	がんに対する生体固有の防禦機構に関する研究	積田 亨
51-10	制癌性抗生物質の作用機序に基づいた人癌治療の基礎的研究	石田 名香雄
51-11	抗がん物質の新しい探索法に関する基礎的研究	梅沢 浜夫
51-12	がん放射線診療の副次現象に関する研究	山下 久雄
51-13	診断の進歩に根ざした正確な病期分類とその臨床応用	末舛 恵一
(総合研究)		
52-1	軟部悪性腫瘍の診断基準の確立と治療成績の向上に関する研究	前山 巖
52-2	大腸がんの早期発見と各種療法に関する研究	梶谷 鑲
52-3	胃がん高危険群に関する研究-胃集検における対象集約	山田 達哉
52-4	映像(imaging)によるがん診断技術の開発	飯沼 武
52-5	各専門分野を統合した肺癌の多角的集約治療に関する研究	服部 正次
52-6	リンパ腫の病因に関する研究	川村 明義
52-7	抗がん剤の効果増強の評価とその判定に関する研究	斉藤 達雄
52-8	がんの疫学的研究	平山 雄
52-9	ヒトのがん発生に関連する環境物質の変異・癌原性の研究	松島 泰次郎
52-10	がんの高危険群における酵素学的研究	藤井 節朗
52-11	人癌組織培養の基礎的研究ならびにその臨床応用に関する研究	関口 守正
52-12	新抗がん剤の臨床応用とその科学的評価に関する研究	小山 善之
(計画研究)		
52-13	小児白血病および悪性リンパ腫における免疫学的発生要因と続発的免疫異常に関する研究	合屋 長英
52-14	膀胱がん早期発見に関する新しい診断技術の開発の研究	石井 兼央
52-15	肝がんの手術適応診断及び切除成績の向上に関する研究	菅原 克彦
52-16	コンピューター断層(CT)のがん診断への寄与に関する臨床的研究	有水 昇
52-17	悪性黒色腫の集学的(multidisciplinary)治療の研究	久木田 淳
52-18	神経芽細胞腫の生物学的特性の解明と治療法の改善に関する研究	澤口 重徳
52-19	速中性子線によるがん治療の適正な評価に関する研究	垣元 博
52-20	ホルモン依存性の見地に立脚した前立腺癌アンチアンドロゲン療法確立に関する研究	志田 圭三
52-21	口腔がん治療における歯牙および顎骨の機能保存に関する研究	鷲津 邦雄
52-22	絨毛がんの発生予防と治療基準の確立	竹内 正七
52-23	検査用放射性物質の発がん性に関する臨床的研究(トロトラストによる発がんを中心として)	高橋 信次
(機械開発研究)		
52-24	診断困難臓器がんに対する新しい内視鏡器械の開発	小黒 八七郎
52-25	がん早期発見のための高速高性能超音波装置の開発に関する研究	和賀井 敏夫
(指定研究)		
指-1	がんの薬物療法に関する研究	末舛 恵一
指-2	突然変異原性物質の動物発癌テストに関する研究	小田嶋 成和
指-3	遺伝変異原性を主とする発癌物質のスクリーニングの技術開発	河内 卓
指-4	TNM分類に関する研究	小山 靖夫

昭和53年度 14億5000万円 64課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
51-1	がんの化学的診断法に関する研究	服部 信
51-2	自動細胞診断システムに関する研究	天神 美夫
51-3	全国登録調査によるがん患者の医用情報の収集とその情報処理システムの確立に関する研究	三輪 潔
51-4	白血病とその類似疾患の腫瘍、宿主、薬剤関係における総合的治療体系の確立に関する研究	山田 一正
51-5	癌の転移抑制に関する研究	佐藤 春朗
51-6	ヒト胃がんと実験犬がんの対比とその臨床応用に関する研究	村上 忠重
51-7	乳がんのホルモン環境と内分泌療法的作用機序	村岡 爽一
51-8	癌の免疫療法及び免疫化学療法における基礎的研究と臨床的研究	桜井 欽夫
51-9	がんに対する生体固有の防禦機構に関する研究	積田 亨
51-10	制癌性抗生物質の作用機序に基づいた人癌治療の基礎的研究	石田 名香雄
51-11	抗がん物質の新しい探索法に関する基礎的研究	梅沢 浜夫
51-12	がん放射線診療の副次現象に関する研究	山下 久雄
51-13	診断の進歩に根ざした正確な病期分類とその臨床応用	末舛 恵一
(総合研究)		
52-1	軟部悪性腫瘍の診断基準の確立と治療成績の向上に関する研究	前山 巖
52-2	大腸がんの早期発見と各種療法に関する研究	梶谷 鏡
52-3	胃がん高危険群に関する研究-胃集検における対象集約	山田 達哉
52-4	映像(imaging)によるがん診断技術の開発	飯沼 武
52-5	各専門分野を統合した肺癌の多角的集約治療に関する研究	服部 正次
52-6	リンパ腫の病因に関する研究	川村 明義
52-7	抗がん剤の効果増強の評価とその判定に関する研究	斉藤 達雄
52-8	がんの疫学的研究	平山 雄
52-9	ヒトのがん発生に関連する環境物質の変異・癌原性の研究	松島 泰次郎
52-10	がんの高危険群における酵素学的研究	藤井 節朗
52-11	人癌組織培養の基礎的研究ならびにその臨床応用に関する研究	関口 守正
52-12	新抗がん剤の臨床応用とその科学的評価に関する研究	小山 善之
(総合研究)		
53-1	生活環境下の発がん(原)物質の研究	谷村 顕雄
53-2	微生物代謝産物の発がん性に関する研究	倉田 浩
53-3	肺がん早期発見における高危険群とそのスクリーニング法の向上に関する研究	成毛 韶夫
53-4	腫瘍化によるホルモン生産及びホルモン受容体異常に関する研究	阿部 薫
53-5	ヌードマウス・ヒト癌系を用いた効果的な癌治療法の開発のための基礎的研究	下里 幸雄
53-6	肝炎と肝がんの関係に関する研究	横内 寛
53-7	地域がん登録による予防・医療活動の評価に関する研究	藤本 伊三郎
53-8	地域におけるがん診療施設の機能強化に関する研究	松岡 規男
53-9	胃がんの診断・治療に関する世界の情報を収集、解析することにより、わが国の胃がんの臨床に応用	松江 寛人
(計画研究)		
52-13	小児白血病および悪性リンパ腫における免疫学的発生要因と続発的免疫異常に関する研究	合屋 長英
52-14	膵がん早期発見に関する新しい診断技術の開発の研究	石井 兼央
52-15	肝がんの手術適応診断及び切除成績の向上に関する研究	菅原 克彦
52-16	コンピューター断層(CT)のがん診断への寄与に関する臨床的研究	有水 昇
52-17	悪性黒色腫の集学的(multidisciplinary)治療の研究	久木田 淳
52-18	神経芽細胞腫の生物学的特性の解明と治療法の改善に関する研究	澤口 重徳
52-19	速中性子線によるがん治療の適正な評価に関する研究	垣元 博
52-20	ホルモン依存性に見地に立脚した前立腺癌アンチアンドロゲン療法確立に関する研究	志田 圭三
52-21	口腔がん治療における歯牙および顎骨の機能保存に関する研究	鷺津 邦雄
52-22	絨毛がんの発生予防と治療基準の確立	竹内 正七
52-23	検査用放射性物質の発がん性に関する臨床的研究(トロトラストによる発がんを中心として)	高橋 信次
(計画研究)		
53-10	フラボノイド等植物性発がん物質の研究	広野 巖
53-11	5-フプロウラシル誘導体とヌクレオシド類の抗腫瘍性に関する研究	樽谷 和男
53-12	腫瘍免疫と補体との相関による新しい診断法並びに予後判定の開発に関する研究	早田 義博
53-13	実験食道がんと臨床例との対比による早期診断に関する研究	三富 利夫
53-14	深部臓器がん病巣に対する局所診断技術の開発に関する研究	北川 俊夫
53-15	神経膠腫に対する集学的治療の研究	最上 平太郎
53-16	頭頸部がん治療におけるレーザー光線及び凍結療法の研究	竹田 千里
53-17	甲状腺がんの組織型別治療体系の確立に関する研究	降旗 力男
53-18	乳腺分泌液の本態と乳がん診断への応用に関する研究	井上 権治
53-19	膀胱がんにおける浸潤がん、乳頭状腫瘍の異同、相関および治療後の異所性再発の要因の究明と	田崎 寛
53-20	消化器がん高カロリー輸液の積極的治療への応用に関する研究	葛西 森夫
(機械開発研究)		
52-24	診断困難臓器がんに対する新しい内視鏡器械の開発	小黒 八七郎
52-25	がん早期発見のための高速高性能超音波装置の開発に関する研究	和賀井 敏夫

(機械開発研究)

- 53-21 新しい密封小線源ならびにその治療装置の開発と臨床応用
- 53-22 酵素免疫測定法を応用したがん診断用オートアナライザーの開発

重松 康  
村地 孝

(指定研究)

- 50指 変異原性を主とする発癌物質のスクリーニングの技術開発
- 52指 TNM分類に関する研究
- 53指-1 がんの集学的治療の研究
- 53指-2 突然変異原性物質の動物発癌テストに関する研究

河内 卓  
小山 靖夫  
末舛 恵一  
小田嶋 成和

昭和54年度 15億2000万円 74課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
52-1	軟部悪性腫瘍の診断基準の確立と治療成績の向上に関する研究	前山 巖
52-2	大腸がんの早期発見と各種療法に関する研究	梶谷 鑑
52-3	胃がん高危険群に関する研究-胃集検における対象集約	山田 達哉
52-4	映像(imaging)によるがん診断技術の開発	飯沼 武
52-5	各専門分野を統合した肺癌の多角的集約治療に関する研究	服部 正次
52-6	リンパ腫の病因に関する研究	川村 明義
52-7	抗がん剤の効果増強の評価とその判定に関する研究	斉藤 達雄
52-8	がんの疫学的研究	平山 雄
52-9	ヒトのがん発生に関連する環境物質の変異・癌原性の研究	松島 泰次郎
52-10	がんの高危険群における酵素学的研究	藤井 節朗
52-11	人癌組織培養の基礎的研究ならびにその臨床応用に関する研究	関口 守正
52-12	新抗がん剤の臨床応用とその科学的評価に関する研究	小山 善之
(総合研究)		
53-1	生活環境下の発がん(原)物質の研究	谷村 顕雄
53-2	微生物代謝産物の発がん性に関する研究	倉田 浩
53-3	肺がん早期発見における高危険群とそのスクリーニング法の向上に関する研究	成毛 韶夫
53-4	腫瘍化によるホルモン生産及びホルモン受容体異常に関する研究	阿部 薫
53-5	ヌードマウス・ヒト癌系を用いた効果的な癌治療法の開発のための基礎的研究	下里 幸雄
53-6	肝炎と肝がんの関係に関する研究	横内 寛
53-7	地域がん登録による予防・医療活動の評価に関する研究	藤本 伊三郎
53-8	地域におけるがん診療施設の機能強化に関する研究	松岡 規男
53-9	胃がんの診断・治療に関する世界の情報を収集、解析することにより、わが国の胃がんの臨床に活用	松江 寛人
(総合研究)		
54-1	コンピュータ断層および超音波による深在性がん診断精度の向上とその臨床的評価	有水 昇
54-2	実験犬胃がんによる化学療法の研究	小山 靖夫
54-3	腫瘍におけるホルモン依存性の解明とその治療への応用に関する研究	阿部 令彦
54-4	免疫化学療法を中心とする癌治療法の基礎的臨床研究	橋本 嘉幸
54-5	白血病の治療体系確立に関する総合的研究	山田 一正
54-6	粒子線と手術とによるがん治療向上に関する研究	恒元 博
54-7	全国登録調査によるがん患者の医用情報の収集と情報処理システムの確立に関する研究	坂野 輝夫
(計画研究)		
53-10	フラボノイド等植物性発がん物質の研究	広野 巖
53-11	5-フプロウラシル誘導体とヌクレオシド類の抗腫瘍性に関する研究	樽谷 和男
53-12	腫瘍免疫と補体との相関による新しい診断法並びに予後判定の開発に関する研究	早田 義博
53-13	実験食道がんと臨床例との対比による早期診断に関する研究	三富 利夫
53-14	深部臓器がん病巣に対する局所診断技術の開発に関する研究	北川 俊夫
53-15	神経膠腫に対する集学的治療の研究	最上 平太郎
53-16	頭頸部がん治療におけるレーザー光線及び凍結療法の研究	竹田 千里
53-17	甲状腺がんの組織型別治療体系の確立に関する研究	降旗 力男
53-18	乳腺分泌液の本態と乳がん診断への応用に関する研究	井上 権治
53-19	膀胱がんにおける浸潤がん、乳頭状腫瘍の異同、相関および治療後の異所性再発の要因の究明と	田崎 寛
53-20	消化器がん高カロリー輸液の積極的治療への応用に関する研究	葛西 森夫
(計画研究)		
54-8	制がん剤の新スクリーニング法の開発に関する研究	新田 和男
54-9	宿主の免疫作用を低下させない抗がん抗生物質の探求及び人癌治療への基礎的研究	新井 正
54-10	環境中に存在する発がんプロモーターの検索に関する研究	寺田 雅昭
54-11	蛋白質加熱により生ずる発がん物質の発がん機序の解明	高山 昭三
54-12	肺の腺がんにおける亜分類と治療との相関に関する研究	米山 武志
54-13	小児固形がん、副鼻腔、唾液腺、膵がんおよび脳、骨腫瘍のTNM分類に関する研究	福間 久俊
54-14	悪性リンパ腫の臨床分類に関する基礎と臨床に関する研究	木村 喜代次
54-15	子宮体がんの早期診断に関する研究	野田 起一郎
54-16	舌がんの早期診断と治療基準の確立に関する研究	鷲津 邦雄
54-17	膵がんの早期診断に関する研究	尾崎 秀雄
54-18	がんの生化学的診断法に関する研究	森 巨
54-19	自動細胞診システムの確立に関する研究	天神 美夫
54-20	食道・胃接合部がんの治療成績を向上させる新しい術式の開発に関する研究	服部 孝雄
54-21	神経芽細胞腫の増殖動態の解明と治療法の改善に関する研究	沢口 重徳
54-22	皮膚の進行がんに対する治療大系の確立に関する研究	石原 和之
54-23	病期と生検像を考慮した前立腺癌集学的治療体系の確立に関する研究	志田 圭三
54-24	宿主のがん抵抗性増強に関する研究	水野 伝一
54-25	小児白血病の免疫療法ならびに化学療法の効果的併用方法に関する研究	合屋 長英
54-26	胃スキルス早期診断法の確立と治療法の再検討	北岡 久三
54-27	胃スキルスの治療成績向上に関する研究	和田 達雄
54-28	肝硬変を伴う肝がんの手術適応診断および切除成績の向上に関する研究	菅原 克彦



54-29	日本におけるT細胞白血病の特性	花岡 正男
54-30	絨毛がんの発生予防と治療基準に関する研究	竹内 正七
54-31	低線量率長期被曝による発がんとその治療の研究	高橋 信次
54-32	放射線被曝と発がんに関する総合的研究	山下 久雄
54-33	がんの診断および治療を目的とする医療用粒子加速器の開発とその利用に関する研究	稲田 哲雄
 (機械開発研究)		
53-21	新しい密封小線源ならびにその治療装置の開発と臨床応用	重松 康
53-22	酵素免疫測定法を応用したがん診断用オートアナライザーの開発	村地 孝
 (機械開発研究)		
54-34	コンピュータを応用した原体照射治療装置の開発	松田 忠義
54-35	がん治療用レーザー装置の仕様および臨床指針に関する研究	渥美 和彦
54-36	レーザー、赤外線、紫外線等による癌治療のための内視鏡器械の開発	小黒 八七郎
 (指定研究)		
50指	変異原性を主とする発癌物質のスクリーニングの技術開発	河内 卓
53指-1	がんの集学的治療の研究	末舛 恵一
53指-2	突然変異原性物質の動物発癌テストに関する研究	小田嶋 成和
54指	検診を指向した各種臓器がんの早期診断に関する研究	山田 達哉

昭和55年度 15億2000万円 76課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
53-1	生活環境下の発がん(原)物質の研究	谷村 顕雄
53-2	微生物代謝産物の発がん性に関する研究	倉田 浩
53-3	肺がん早期発見における高危険群とそのスクリーニング法の向上に関する研究	成毛 韶夫
53-4	腫瘍化によるホルモン生産及びホルモン受容体異常に関する研究	阿部 薫
53-5	ヌードマウス・ヒト癌系を用いた効果的な癌治療法の開発のための基礎的研究	下里 幸雄
53-6	肝炎と肝がんの関係に関する研究	横内 寛
53-7	地域がん登録による予防・医療活動の評価に関する研究	藤本 伊三郎
53-8	地域におけるがん診療施設の機能強化に関する研究	松岡 規男
53-9	胃がんの診断・治療に関する世界の情報を収集、解析することにより、わが国の胃がんの臨床に応用	松江 寛人
(総合研究)		
54-1	コンピュータ断層および超音波による深在性がん診断精度の向上とその臨床的評価	有水 昇
54-2	実験犬胃がんによる化学療法の研究	小山 靖夫
54-3	腫瘍におけるホルモン依存性の解明とその治療への応用に関する研究	阿部 令彦
54-4	免疫化学療法を中心とする癌治療法の基礎的臨床研究	橋本 嘉幸
54-5	白血病の治療体系確立に関する総合的研究	山田 一正
54-6	粒子線と手術とによるがん治療向上に関する研究	恒元 博
54-7	全国登録調査によるがん患者の医用情報の収集と情報処理システムの確立に関する研究	坂野 輝夫
(総合研究)		
55-1	大腸がんの成因と治療の総合的研究	草間 悟
55-2	進行肺癌に対する生物学的特性を加味した治療体系の確立に関する研究	服部 正次
55-3	がんの疫学的研究	富永 祐民
55-4	ヒトの癌発生に関連する環境発癌物質とその抑制因子の研究	松島 泰次郎
55-5	放射線を主とする難治がんの治療に関する研究	阿部 光幸
55-6	実験食道がんと臨床との対比による治療方法の研究	飯塚 紀文
55-7	胃集団検診効果の評価に関する研究	久道 茂
(計画研究)		
54-8	制がん剤の新スクリーニング法の開発に関する研究	新田 和男
54-9	宿主の免疫作用を低下させない抗がん抗生物質の探求及び人癌治療への基礎的研究	新井 正
54-10	環境中に存在する発がんプロモーターの検索に関する研究	寺田 雅昭
54-11	蛋白質加熱により生ずる発がん物質の発がん機序の解明	高山 昭三
54-12	肺の腺がんにおける亜分類と治療との相関に関する研究	米山 武志
54-13	小児固形がん、副鼻腔、唾液腺、膵がんおよび脳、骨腫瘍のTNM分類に関する研究	福間 久俊
54-14	悪性リンパ腫の臨床分類に関する基礎と臨床に関する研究	木村 喜代次
54-15	子宮体がんの早期診断に関する研究	野田 起一郎
54-16	舌がんの早期診断と治療基準の確立に関する研究	鷺津 邦雄
54-17	膵がんの早期診断に関する研究	尾崎 秀雄
54-18	がんの生化学的診断法に関する研究	森 亘
54-19	自動細胞診システムの確立に関する研究	天神 美夫
54-20	食道・胃接合部がんの治療成績を向上させる新しい術式の開発に関する研究	服部 孝雄
54-21	神経芽細胞腫の増殖動態の解明と治療法の改善に関する研究	沢口 重徳
54-22	皮膚の進行がんに対する治療大系の確立に関する研究	石原 和之
54-23	病期と生検像を考慮した前立腺癌集学的治療体系の確立に関する研究	志田 圭三
54-24	宿主のがん抵抗性増強に関する研究	水野 伝一
54-25	小児白血病の免疫療法ならびに化学療法の効果的併用方法に関する研究	合屋 長英
54-26	胃スキルス早期診断法の確立と治療法の再検討	北岡 久三
54-27	胃スキルスの治療成績向上に関する研究	和田 達雄
54-28	肝硬変を伴う肝がんの手術適応診断および切除成績の向上に関する研究	菅原 克彦
54-29	日本におけるT細胞白血病の特性	花岡 正男
54-30	絨毛がんの発生予防と治療基準に関する研究	竹内 正七
54-31	低線量率長期被曝による発がんとその治療の研究	高橋 信次
54-32	放射線被曝と発がんに関する総合的研究	山下 久雄
54-33	がんの診断および治療を目的とする医療用粒子加速器の開発とその利用に関する研究	稲田 哲雄
(計画研究)		
55-8	フラボノイド等植物成分の発がん性に関する研究	広野 巖
55-9	HCFUおよびその関連化合物の基礎的臨床的研究	星 昭夫
55-10	悪性脳腫瘍の集学的治療の研究	佐野 圭司
55-11	自家発生腫瘍を用いた治療実験の評価に関する研究	田ノ岡 宏
55-12	最小乳がんの診断と治療ならびに病理組織学に関する研究	久野 敬二郎
55-13	下咽頭がんの早期診断と治療に関する研究	佐藤 武男
55-14	Transcatheter Embolization による悪性腫瘍治療の研究	高橋 睦正
55-15	軟部悪性腫瘍の診断と治療に関する研究	古屋 光太郎
55-16	小分子化合物のがん免疫増強に関する研究	野島 庄七
55-17	映像(imaging)によるがん診断技術の開発	飯沼 武
55-18	ヒトがんにおけるEBV関連抗原に関する研究	橋 武彦

55-19	前白血病状態の病態解析とそれによる診療方針設定	内野 治人
55-20	Flow Cytometry の臨床応用への検索に関する研究	野村 和弘
55-21	消化器がんと糖蛋白変動に関する研究	堀田 恭子
55-22	膀胱の乳頭状腫瘍と浸潤がんの異同に関する研究	田崎 寛
55-23	がんの化学療法効果判定の基礎に関する研究	桜井 欽夫
55-24	がんの化学療法効果判定に関する研究	斉藤 達雄
55-25	乳腺分泌液の本態と乳がん診断への応用に関する研究	井上 権治
55-26	がん患者の栄養増強に関する研究	葛西 森夫
 (機械開発研究)		
54-34	コンピュータを応用した原体照射治療装置の開発	松田 忠義
54-35	がん治療用レーザー装置の仕様および臨床指針に関する研究	渥美 和彦
54-36	レーザー、赤外線、紫外線等による癌治療のための内視鏡器械の開発	小黒 八七郎
 (機械開発研究)		
55-27	酵素免疫測定法によるがん診断用自動分析機器の開発	村地 孝
 (指定研究)		
53指-1	がんの集学的治療の研究	末舛 恵一
53指-2	突然変異原性物質の動物発癌テストに関する研究	小田嶋 成和
54指	検診を指向した各種臓器がんの早期診断に関する研究	山田 達哉
55指	人がんの原因としての発がん物質の短期検索法の開発と評価に関する研究	河内 卓

昭和56年度 16億円 81課題

課題番号 (総合研究)	研究課題名	主任研究者
54-1	コンピュータ断層および超音波による深在性がん診断精度の向上とその臨床的評価	有水 昇
54-2	実験犬胃がんによる化学療法の研究	小山 靖夫
54-3	腫瘍におけるホルモン依存性の解明とその治療への応用に関する研究	阿部 令彦
54-4	免疫化学療法を中心とする癌治療法の基礎的臨床研究	橋本 嘉幸
54-5	白血病の治療体系確立に関する総合的研究	山田 一正
54-6	粒子線と手術とによるがん治療向上に関する研究	恒元 博
54-7	全国登録調査によるがん患者の医用情報の収集と情報処理システムの確立に関する研究	坂野 輝夫
(総合研究)		
55-1	大腸がんの成因と治療の総合的研究	草間 悟
55-2	進行肺癌に対する生物学的特性を加味した治療体系の確立に関する研究	服部 正次
55-3	がんの疫学的研究	富永 祐民
55-4	ヒトの癌発生に関連する環境発癌物質とその抑制因子の研究	松島 泰次郎
55-5	放射線を主とする難治がんの治療に関する研究	阿部 光幸
55-6	実験食道がんと臨床との対比による治療方法の研究	飯塚 紀文
55-7	胃集団検診効果の評価に関する研究	久道 茂
(総合研究)		
56-1	肺癌の効率的集検に関する研究	池田 茂人
56-2	がん登録による環境要因の検討と治療との相関に関する研究	福岡 誠吾
56-3	地域がんセンターと公衆衛生機関との協力体制に関する研究	三輪 潔
56-4	胃スキルスの本態究明に関する研究	和田 達雄
56-5	レーザ機器のがん診療への応用に関する研究	早田 義博
56-6	がん細胞のホルモン類似物質産生に関する研究	阿部 薫
56-7	新しいがん化学療法剤の臨床応用決定に関する基礎的研究	塚越 茂
(計画研究)		
55-8	フラボノイド等植物成分の発がん性に関する研究	広野 巖
55-9	HCFUおよびその関連化合物の基礎的臨床的研究	星 昭夫
55-10	悪性脳腫瘍の集学的治療の研究	佐野 圭司
55-11	自家発生腫瘍を用いた治療実験の評価に関する研究	田ノ岡 宏
55-12	最小乳がんの診断と治療ならびに病理組織学に関する研究	久野 敬二郎
55-13	下咽頭がんの早期診断と治療に関する研究	佐藤 武男
55-14	Transcatheter Embolization による悪性腫瘍治療の研究	高橋 睦正
55-15	軟部悪性腫瘍の診断と治療に関する研究	古屋 光太郎
55-16	小分子化合物のがん免疫増強に関する研究	野島 庄七
55-17	映像(imaging)によるがん診断技術の開発	飯沼 武
55-18	ヒトがんにおけるEBV関連抗原に関する研究	橋 武彦
55-19	前白血病状態の病態解析とそれによる診療方針設定	内野 治人
55-20	Flow Cytometry の臨床応用への検索に関する研究	野村 和弘
55-21	消化器がんと糖蛋白変動に関する研究	堀田 恭子
55-22	膀胱の乳頭状腫瘍と浸潤がんの異同に関する研究	田崎 寛
55-23	がんの化学療法効果判定の基礎に関する研究	桜井 欽夫
55-24	がんの化学療法効果判定に関する研究	斉藤 達雄
(計画研究)		
56-8	ヌードマウスを用いた最適抗がん剤の選択に関する研究	近藤 達平
56-9	宿主の免疫作用を低下させない微生物由来がん化学療法剤の開発と治療への応用に関する研究	新井 正
56-10	剤型の工夫による抗がん剤の効力の増強に関する研究	高橋 俊雄
56-11	子宮体がんの高危険群に関する研究	野田 起一郎
56-12	卵巣悪性腫瘍の診断ならびに治療法に関する基礎的・臨床的研究	加藤 俊
56-13	絨毛がんの発生過程と予防管理体系樹立に関する研究	川島 吉良
56-14	肝細胞がんの高危険群とその早期診断に関する研究	奥田 邦雄
56-15	胆嚢・胆管癌の治療成績向上を目指した集学的早期診断法の開発	葛西 洋一
56-16	膵がんの高危険群と早期診断に関する研究	尾崎 英雄
56-17	腫瘍マーカーによるがん診断の開発に関する研究	服部 信
56-18	悪性黒色腫の進行期における新しい治療法に関する研究	石原 和之
56-19	前立腺がんの集学的治療体系の確立に関する研究	松本 恵一
56-20	制がん剤の多剤・大量・長期併用療法を基盤とした骨肉腫の集学的治療法の開発	古瀬 清夫
56-21	悪性リンパ腫の適正な臨床分類の確立に関する研究	木村 喜次次
56-22	大腸がんの集団検診法の確立に関する研究	北條 慶一
56-23	小児悪性腫瘍の長期生存因子と長期生存例における晩期障害に関する研究	伊勢 泰
56-24	網膜芽細胞腫の集学的治療に関する研究	金子 明博
56-25	無菌病室を用いた白血病類似疾患の強力治療に関する研究	正岡 徹
56-26	密封小線源によるがん治療適応の拡大に関する研究	北川 俊夫
56-27	がんの放射線治療基準の設定と治療効果判定に関する研究	重松 康
56-28	トロトラスト症における発がんの臨床的研究	木戸 長一郎
56-29	放射線治療の利益と損失とに関する研究	橋本 省三

56-30	晩期がん患者の精神的および肉体的苦痛緩和(terminal care)に関する研究	水口 公信
56-31	晩期がん患者の精神的及び肉体的苦痛緩和(terminal care)に関する研究	大原 健士郎
56-32	膀胱がんの発生と進展に関する研究	垣添 忠生
56-33	高カロリー輸液のがん治療への応用に関する研究	森 昌造
56-34	生活環境特に食品、飲料水及び大気中の発がん性汚染物質の定量的解析	内山 充
56-35	わが国におけるがん原性マイコトキシンによる暴露実態に関する研究	粟飯原 景昭
56-36	細胞融合法によるモノクローナル抗腫瘍抗体の作製とその臨床的応用	浜岡 利之
56-37	ヒト胚細胞性腫瘍の実験系確立と診断・治療の基礎に関する研究	玉置 憲一
56-38	日常環境下に存在する発がんプロモーターの研究	寺田 雅昭
56-39	発がん性ニトロソ化合物の暴露実態に関する研究	谷村 顕雄
56-40	宿主の免疫機構を増強する免疫賦活剤による制癌作用の研究	水野 伝一
56-41	がん免疫増強作用を有する小分子化合物に関する研究	野島 庄七
 (機械開発研究)		
55-27	酵素免疫測定法によるがん診断用自動分析機器の開発	村地 孝
 (機械開発研究)		
56-42	CT画像を利用した放射線治療計画装置の開発	尾内 能夫
56-43	癌の診断と治療のためのレーザ内視鏡機械開発	崎田 隆夫
56-44	がんの診断及び治療を目的とする陽子線照射制御システムの開発	稲田 哲雄
 (指定研究)		
54指	検診を指向した各種臓器がんの早期診断に関する研究	山田 達哉
55指	人がんの原因としての発がん物質の短期検索法の開発と評価に関する研究	河内 卓
56指-1	がんの集学的治療の研究	末舛 恵一
56指-2	環境化学物質の動物発がん試験に関する研究	林 祐造
56指-3	細胞工学及びアジュバント工学による新しいがんの免疫療法の開発	山村 雄一

昭和57年度 16億円 80課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
55-2	進行肺癌に対する生物学的特性を加味した治療体系の確立に関する研究	服部 正次
55-3	がんの疫学的研究	富永 祐民
55-4	ヒトの癌発生に関連する環境発癌物質とその抑制因子の研究	松島 泰次郎
55-5	放射線を主とする難治がんの治療に関する研究	阿部 光幸
55-6	実験食道がんと臨床との対比による治療方法の研究	飯塚 紀文
55-7	胃集団検診効果の評価に関する研究	久道 茂
(総合研究)		
56-1	肺癌の効率的集検に関する研究	池田 茂人
56-2	がん登録による環境要因の検討と治療との相関に関する研究	福岡 誠吾
56-3	地域がんセンターと公衆衛生機関との協力体制に関する研究	三輪 潔
56-4	胃スキルスの本態究明に関する研究	和田 達雄
56-5	レーザー機器のがん診療への応用に関する研究	早田 義博
56-6	がん細胞のホルモン類似物質産生に関する研究	阿部 薫
56-7	新しいがん化学療法剤の臨床応用決定に関する基礎的研究	塚越 茂
(総合研究)		
57-1	コンピュータ断層および超音波診断法による各種深在性臓器がんの診断精度に関する研究	福田 守道
57-2	実験犬胃がんによる化学療法の研究	小山 靖夫
57-3	白血病の治療体系確立に関する総合的研究	太田 和雄
57-4	粒子線と手術とによるがん治療向上に関する研究	北川 俊夫
57-5	がん患者の全国的な情報の収集と電算機による多角的分析の研究	坂野 輝夫
57-6	がん化学療法の効果増強に関する研究	斉藤 達雄
(計画研究)		
56-8	ヌードマウスを用いた最適抗がん剤の選択に関する研究	近藤 達平
56-9	宿主の免疫作用を低下させない微生物由来がん化学療法剤の開発と治療への応用に関する研究	新井 正
56-10	剤型の工夫による抗がん剤の効力の増強に関する研究	高橋 俊雄
56-11	子宮体がんの高危険群に関する研究	野田 起一郎
56-12	卵巣悪性腫瘍の診断ならびに治療法に関する基礎的・臨床的研究	加藤 俊
56-13	絨毛がんの発生過程と予防管理体系樹立に関する研究	川島 吉良
56-14	肝細胞がんの高危険群とその早期診断に関する研究	奥田 邦雄
56-15	胆嚢・胆管癌の治療成績向上を目指した集学的早期診断法の開発	葛西 洋一
56-16	膵がんの高危険群と早期診断に関する研究	尾崎 英雄
56-17	腫瘍マーカーによるがん診断の開発に関する研究	服部 信
56-18	悪性黒色腫の進行期における新しい治療法に関する研究	石原 和之
56-19	前立腺がんの集学的治療体系の確立に関する研究	松本 恵一
56-20	制がん剤の多剤・大量・長期併用療法を基盤とした骨肉腫の集学的治療法の開発	古瀬 清夫
56-21	悪性リンパ腫の適正な臨床分類の確立に関する研究	木村 喜代次
56-22	大腸がんの集団検診法の確立に関する研究	北條 慶一
56-23	小児悪性腫瘍の長期生存因子と長期生存例における晩期障害に関する研究	伊勢 泰
56-24	網膜芽細胞腫の集学的治療に関する研究	金子 明博
56-25	無菌病室を用いた白血病類似疾患の強力治療に関する研究	正岡 徹
56-26	密封小線源によるがん治療適応の拡大に関する研究	北川 俊夫
56-27	がんの放射線治療基準の設定と治療効果判定に関する研究	重松 康
56-28	トロトラスト症における発がんの臨床的研究	木戸 長一郎
56-29	放射線治療の利益と損失とに関する研究	橋本 省三
56-30	晩期がん患者の精神的および肉体的苦痛緩和 (terminal care) に関する研究	水口 公信
56-31	晩期がん患者の精神的及び肉体的苦痛緩和 (terminal care) に関する研究	大原 健士郎
56-32	膀胱がんの発生と進展に関する研究	垣添 忠生
56-33	高カロリー輸液のがん治療への応用に関する研究	森 昌造
56-34	生活環境特に食品、飲料水及び大気中の発がん性汚染物質の定量的解析	内山 充
56-35	わが国におけるがん原性マイコトキシンによる暴露実態に関する研究	栗飯原 景昭
56-36	細胞融合法によるモノクローナル抗腫瘍抗体の作製とその臨床的応用	浜岡 利之
56-37	ヒト胚細胞性腫瘍の実験系確立と診断・治療の基礎に関する研究	玉置 憲一
56-38	日常環境下に存在する発がんプロモーターの研究	寺田 雅昭
56-39	発がん性ニトロソ化合物の暴露実態に関する研究	谷村 顕雄
56-40	宿主の免疫機構を増強する免疫賦活剤による制癌作用の研究	水野 伝一
56-41	がん免疫増強作用を有する小分子化合物に関する研究	野島 庄七
(計画研究)		
57-7	乳がんの縮小手術の適応ならびに再発に関する研究	久野 敬二郎
57-8	進行末期乳がんにおけるChemo-endocrine therapy の適応と治療成績に関する研究	野村 雍夫
57-9	下咽頭がんの早期診断と治療に関する研究	佐藤 武男
57-10	Transcatheter embolization による悪性腫瘍治療の研究	高橋 睦正
57-11	軟部悪性腫瘍の腫瘍別治療体系の研究	古屋 光太郎
57-12	悪性腫瘍におけるFlow cytometry の臨床応用への検索に関する研究	野村 和弘
57-13	がん治療に及ぼす局所的加温療法の評価	柄川 順

57-14	小児がんの発生要因に関する遺伝学的発達生化学的免疫学的研究	齊藤 純夫
57-15	門脈内腫瘍栓を重視した系統的区域・亜区域切除ならびにembolization併用肝切除の検討	長谷川 博
57-16	腎がんの早期診断と治療体系の確立	町田 豊平
57-17	がん放射線療法における化学的増感の研究	田中 敬正
57-18	がん化学療法における臨床試験の基準設定に関する研究	仁井谷 久暢
57-19	検診を指向した臓器がんの摘発技術開発の研究	山田 達哉
57-20	がんにおけるデジタルエックス線診断に関する研究	舘野 之男
57-21	実験胃がん発生に及ぼす要因の解析	高山 昭三
57-22	ヌードマウス移植がん細胞の発がん遺伝子の構造と機能、ならびにその産物の同定	西村 暹
57-23	変異原性陽性で、がん原性陰性の物質の規制取扱いに関する研究、特にフラボノイドを中心として	林 健志
57-24	がんのクローナル起源と再発がんの識別に関する研究	田ノ岡 宏
 (機械開発研究)		
56-42	CT画像を利用した放射線治療計画装置の開発	尾内 能夫
56-43	癌の診断と治療のためのレーザ内視鏡機械開発	崎田 隆夫
56-44	がんの診断及び治療を目的とする陽子線照射制御システムの開発	稲田 哲雄
 (機械開発研究)		
57-25	自動細胞診断機器開発に関する研究	田中 昇
 (指定研究)		
55指	人がんの原因としての発がん物質の短期検索法の開発と評価に関する研究	河内 卓
56指-1	がんの集学的治療の研究	末舛 恵一
56指-2	環境化学物質の動物発がん試験に関する研究	林 祐造
56指-3	細胞工学及びアジュバント工学による新しいがんの免疫療法の開発	山村 雄一
57指	日本における肺がん増加の阻止に関する総括的研究	米山 武志

昭和58年度 16億円 80課題

課題番号 (総合研究)	研究課題名	主任研究者
56-1	肺癌の効率的集検に関する研究	池田 茂人
56-2	がん登録による環境要因の検討と治療との相関に関する研究	福岡 誠吾
56-3	地域がんセンターと公衆衛生機関との協力体制に関する研究	三輪 潔
56-4	胃スキルスの本態究明に関する研究	和田 達雄
56-5	レーザ機器のがん診療への応用に関する研究	早田 義博
56-6	がん細胞のホルモン類似物質産生に関する研究	阿部 薫
56-7	新しいがん化学療法剤の臨床応用決定に関する基礎的研究	塚越 茂
(総合研究)		
57-1	コンピュータ断層および超音波診断法による各種深在性臓器がんの診断精度に関する研究	福田 守道
57-2	実験犬胃がんによる化学療法の研究	小山 靖夫
57-3	白血病の治療体系確立に関する総合的研究	太田 和雄
57-4	粒子線と手術とによるがん治療向上に関する研究	北川 俊夫
57-5	がん患者の全国的な情報の収集と電算機による多角的分析の研究	坂野 輝夫
57-6	がん化学療法の効果増強に関する研究	斉藤 達雄
(総合研究)		
58-1	ヒトのがんの高危険度群に関する分析疫学的研究	富永 祐民
58-2	肺小細胞がんの早期診断と効果的治療を目的とした基礎的、集学的研究	下里 幸雄
58-3	我が国におけるB細胞腫瘍の特性とその診断、治療及び病因解析に関する研究	下山 正徳
58-4	胃集団検診効果の評価に関する研究	久道 茂
58-5	膀胱がんの発生と進展に関する基礎的、臨床的研究	垣添 忠生
58-6	悪性腫瘍の骨髄移植療法に関する研究	正岡 徹
58-7	がんのChemopreventionの研究	藤木 博太
58-8	モノクローン技法の基礎と臨床応用に関する研究	浜岡 利之
(計画研究)		
57-7	乳がんの縮小手術の適応ならびに再発に関する研究	久野 敬二郎
57-8	進行末期乳がんにおけるChemo-endocrine therapyの適応と治療成績に関する研究	野村 雍夫
57-9	下咽頭がんの早期診断と治療に関する研究	佐藤 武男
57-10	Transcatheter embolizationによる悪性腫瘍治療の研究	高橋 睦正
57-11	軟部悪性腫瘍の腫瘍別治療体系の研究	古屋 光太郎
57-12	悪性腫瘍におけるFlow cytometryの臨床応用への検索に関する研究	野村 和弘
57-13	がん治療に及ぼす局所的加温療法の評価	柄川 順
57-14	小児がんの発生要因に関する遺伝学的発達生化学的免疫学的研究	斉藤 純夫
57-15	門脈内腫瘍栓を重視した系統的区域・亜区域切除ならびにembolization併用肝切除の検討	長谷川 博
57-16	腎がんの早期診断と治療体系の確立	町田 豊平
57-17	がん放射線療法における化学的増感の研究	田中 敬正
57-18	がん化学療法における臨床試験の基準設定に関する研究	仁井谷 久暢
57-19	検診を指向した臓器がんの摘発技術開発の研究	山田 達哉
57-20	がんにおけるデジタルエックス線診断に関する研究	舘野 之男
57-21	実験胃がん発生に及ぼす要因の解析	高山 昭三
57-22	ヌードマウス移植がん細胞の発がん遺伝子の構造と機能、ならびにその産物の同定	西村 暹
57-23	変異原性陽性で、がん原性陰性の物質の規制取扱いに関する研究、特にフラボノイドを中心として	林 健志
57-24	がんのクローナル起源と再発がんの識別に関する研究	田ノ岡 宏
(計画研究)		
58-9	がん細胞の転移機序に関する研究	小林 博
58-10	がん細胞の転移機序及び転移阻止に関する研究	田中 信男
58-11	EBウイルスのヒトにおける顕在化と発がんに関する研究	大里 外誉朗
58-12	肺がん、乳がんにおけるColony Assayの研究	星 昭夫
58-13	術中放射線療法に関する研究	阿部 光幸
58-14	神経稜より発生する皮膚悪性腫瘍の臨床病理学的研究	池田 重雄
58-15	効果の増大を目的とした抗がん剤の投与形態の研究	高橋 俊男
58-16	機能保持を指向した直腸がん治療に関する研究	安富 正幸
58-17	卵巣悪性腫瘍の診断ならびに治療向上に関する基礎的、臨床的研究	加藤 俊
58-18	肝細胞がんの初期病態に関する研究	奥田 邦雄
58-19	胆のう、胆管がんの治療成績向上を目指した集学的治療法の確立に関する研究	葛西 洋一
58-20	膵がんの早期発見に関する研究	土屋 凉一
58-21	臨床所見の分析と各種画像診断による膵がんの早期診断法の確立	安部 宗顕
58-22	がんの早期診断に寄与する腫瘍マーカーの研究	石井 勝
58-23	骨肉腫に対する患肢保存療法の研究	古瀬 清夫
58-24	モデル集団による大腸がん集団検診に関する研究	北條 慶一
58-25	小児悪性腫瘍の長期生存例における晩期障害とその対策に関する研究	伊勢 泰
58-26	小児白血病の理論的治療とその効果の解析に関する研究	赤羽 太郎
58-27	神経芽細胞腫の集学的治療に関する研究	澤口 重徳
58-28	網膜芽細胞腫の眼球保存療法に関する集学的研究	金子 明博
58-29	密封小線源におけるがん治療の向上に関する研究	金田 浩一



58-30	トトロラスト症における発がん機構の基礎的、臨床的研究	木戸 長一郎
58-31	前立腺がんの集学的治療体系の確立に関する研究	松本 恵一
58-32	形態と機能からみた胸腺腫の生物学的特性に関する研究	正岡 昭
58-33	実験食道がんの臨床との対比による治療方法の研究	飯塚 紀文
58-34	ヒト多重がんの実態と要因に関する研究	渡辺 昌
58-35	潜在性がんの顕在化への発展阻止に関する研究	北川 知行
58-36	ヒトの内因性ニトロソ発がん物質及び食品中のニトロソ化される物質の研究	大森 義仁
58-37	我が国におけるがん原性マイコキシンの汚染に関する研究	粟飯原 景昭
58-38	飲料水中及び大気中の発がん物質汚染に関する研究	内山 充
58-39	アルコールと食塩の発がんプロモーター作用の研究	高橋 道人
58-40	ヒト細胞の産生するモノクローン抗体技術の発展的研究	徳永 徹
 (機械開発研究)		
57-25	自動細胞診断機器開発に関する研究	田中 昇
 (機械開発研究)		
58-41	がんの診断と治療のためのレーザー内視鏡機械開発	崎田 隆夫
58-42	高性能シングルフォトンECT装置の開発に関する研究	田中 栄一
58-43	高エネルギー粒子線を用いたがんの診断および治療装置の開発	秋貞 雅祥
 (指定研究)		
56指-1	がんの集学的治療の研究	末舛 恵一
56指-2	環境化学物質の動物発がん試験に関する研究	林 祐造
56指-3	細胞工学及びアジュバント工学による新しいがんの免疫療法の開発	山村 雄一
57指	日本における肺がん増加の阻止に関する総括的研究	米山 武志
58指	ヒトがんの第一次予防に関する基礎的、臨床的研究	佐藤 茂秋

昭和59年度 16億円 77課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
57-1	コンピュータ断層および超音波診断法による各種深在性臓器がんの診断精度に関する研究	福田 守道
57-2	実験犬胃がんによる化学療法の研究	小山 靖夫
57-3	白血病の治療体系確立に関する総合的研究	太田 和雄
57-4	粒子線と手術とによるがん治療向上に関する研究	北川 俊夫
57-5	がん患者の全国的な情報の収集と電算機による多角的分析の研究	坂野 輝夫
57-6	がん化学療法の効果増強に関する研究	斉藤 達雄
(総合研究)		
58-1	ヒトのがんの高危険度群に関する分析疫学的研究	富永 祐民
58-2	肺小細胞がんの早期診断と効果的治療を目的とした基礎的、集学的研究	下里 幸雄
58-3	我が国におけるB細胞腫瘍の特性とその診断、治療及び病因解析に関する研究	下山 正徳
58-4	胃集団検診効果の評価に関する研究	久道 茂
58-5	膀胱がんの発生と進展に関する基礎的、臨床的研究	垣添 忠生
58-6	悪性腫瘍の骨髄移植療法に関する研究	正岡 徹
58-7	がんのChemopreventionの研究	藤木 博太
58-8	モノクローン技法の基礎と臨床応用に関する研究	浜岡 利之
(総合研究)		
59-1	腫瘍におけるホルモン産生遺伝子の発現機構と腫瘍細胞機能分化に関する研究	井村 裕夫
59-2	肺がん集検の組織化に関する研究	池田 茂人
59-3	HPDとクリプトン・イオンレーザーによる蛍光診断とHPDとアルゴン・ダイレーザーによる光学的治療	早田 義博
59-4	がん予防、医療活動におけるがん登録の役割に関する研究	福岡 誠吾
59-5	がんの全身及び局所温熱治療体系の確立に関する研究	松田 忠義
59-6	門脈内腫瘍栓を重視した肝がんの集学的治療	長谷川 博
59-7	日本人に多いがんの腫瘍遺伝子とその活性化	寺田 雅昭
(計画研究)		
58-9	がん細胞の転移機序に関する研究	小林 博
58-10	がん細胞の転移機序及び転移阻止に関する研究	田中 信男
58-11	EBウイルスのヒトにおける顕在化と発がんに関する研究	大里 外誉朗
58-12	肺がん、乳がんにおけるColony Assayの研究	星 昭夫
58-13	術中放射線療法に関する研究	阿部 光幸
58-14	神経稜より発生する皮膚悪性腫瘍の臨床病理学的研究	池田 重雄
58-15	効果の増大を目的とした抗がん剤の投与形態の研究	高橋 俊男
58-16	機能保持を指向した直腸がん治療に関する研究	安富 正幸
58-17	卵巣悪性腫瘍の診断ならびに治療向上に関する基礎的、臨床的研究	加藤 俊
58-18	肝細胞がんの初期病態に関する研究	奥田 邦雄
58-19	胆のう、胆管がんの治療成績向上を目指した集学的治療法の確立に関する研究	葛西 洋一
58-20	膵がんの早期発見に関する研究	土屋 涼一
58-21	臨床所見の分析と各種画像診断による膵がんの早期診断法の確立	安部 宗顕
58-22	がんの早期診断に寄与する腫瘍マーカーの研究	石井 勝
58-23	骨肉腫に対する患肢保存療法の研究	古瀬 清夫
58-24	モデル集団による大腸がん集団検診に関する研究	北條 慶一
58-25	小児悪性腫瘍の長期生存例における晩期障害とその対策に関する研究	伊勢 泰
58-26	小児白血病の理論的治療とその効果の解析に関する研究	赤羽 太郎
58-27	神経芽細胞腫の集学的治療に関する研究	澤口 重徳
58-28	網膜芽細胞腫の眼球保存療法に関する集学的研究	金子 明博
58-29	密封小線源におけるがん治療の向上に関する研究	金田 浩一
58-30	トロトラスト症における発がん機構の基礎的、臨床的研究	木戸 長一郎
58-31	前立腺がんの集学的治療体系の確立に関する研究	松本 恵一
58-32	形態と機能からみた胸腺腫の生物学的特性に関する研究	正岡 昭
58-33	実験食道がんの臨床との対比による治療方法の研究	飯塚 紀文
58-34	ヒト多重がんの実態と要因に関する研究	渡辺 昌
58-35	潜在性がんの顕在化への発展阻止に関する研究	北川 知行
58-36	ヒトの内因性ニトロソ発がん物質及び食品中のニトロソ化される物質の研究	大森 義仁
58-37	我が国におけるがん原性マイコトキシンの汚染に関する研究	粟飯原 景昭
58-38	飲料水中及び大気中の発がん物質汚染に関する研究	内山 充
58-39	アルコールと食塩の発がんプロモーター作用の研究	高橋 道人
58-40	ヒト細胞の産生するモノクローン抗体技術の発展的研究	徳永 徹
(計画研究)		
59-8	口腔、中咽頭がんの治療法の確立と治療後の機能評価	海老原 敏
59-9	新抗がん剤の適正な臨床評価に関する研究	仁井谷 久暢
59-10	臨床応用決定のための抗がん剤の特性に関する研究	塚越 茂
59-11	薬物によるがん放射線治療効果の増強に関する研究	田中 敬正
59-12	フロー・サイトメトリーによるがん細胞の診療面における多角的パラメーターを応用する研究	天神 美夫
59-13	耳下腺腫瘍の診断と治療に関する研究	奥田 稔
59-14	がんの診断におけるデジタルX線診断に関する研究	舘野 之男

59-15	胃スキルスの本態に基づいた早期診断および治療法の開発	北岡 久三
59-16	軟部悪性腫瘍の集学的治療	福間 久俊
59-17	がん診療施設の機能強化に関する研究	庄司 忠実
59-18	乳がんにおける耐性の検討	野村 雍夫
59-19	食品中のがん原前駆物質の生成機構の解明による生成阻止	松島 泰次郎
59-20	小児がんの細胞遺伝学的・分子細胞遺伝学的研究	中込 弥男
59-21	核磁気共鳴法によるがんの画像診断に関する研究	有水 昇
59-22	神経系腫瘍の特性と治療開発に関する研究	高倉 公朋
59-23	腫瘍における形成外科の応用	藤野 豊美
 (機械開発研究)		
58-41	がんの診断と治療のためのレーザー内視鏡機械開発	崎田 隆夫
58-42	高性能シングルフォトンECT装置の開発に関する研究	田中 栄一
58-43	高エネルギー粒子線を用いたがんの診断および治療装置の開発	秋貞 雅祥
 (機械開発研究)		
59-24	放射線治療を目的としたCTシステムの開発	尾内 能夫
 (指定研究)		
57指	日本における肺がん増加の阻止に関する総括的研究	米山 武志
58指	ヒトがんの第一次予防に関する基礎的、臨床的研究	佐藤 茂秋
59指 1	がんの集学的治療の研究	末舛 恵一
59指 2	長期動物実験による環境化学物質の発がん性評価に関する研究	林 祐造

昭和60年度 16億円 75課題

課題番号 (総合研究)	研究課題名	主任研究者
58-1	ヒトのがんの高危険度群に関する分析疫学的研究	富永 祐民
58-2	肺小細胞がんの早期診断と効果的治療を目的とした基礎的、集学的研究	下里 幸雄
58-3	我が国におけるB細胞腫瘍の特性とその診断、治療及び病因解析に関する研究	下山 正徳
58-4	胃集団検診効果の評価に関する研究	久道 茂
58-5	膀胱がんの発生と進展に関する基礎的、臨床的研究	垣添 忠生
58-6	悪性腫瘍の骨髄移植療法に関する研究	正岡 徹
58-7	がんのChemopreventionの研究	藤木 博太
58-8	モノクローン技法の基礎と臨床応用に関する研究	浜岡 利之
(総合研究)		
59-1	腫瘍におけるホルモン産生遺伝子の発現機構と腫瘍細胞機能分化に関する研究	井村 裕夫
59-2	肺がん集検の組織化に関する研究	池田 茂人
59-3	HPDとクリプトン・イオンレーザーによる蛍光診断とHPDとアルゴン・ダイレーザーによる光学的治療	早田 義博
59-4	がん予防、医療活動におけるがん登録の役割に関する研究	福岡 誠吾
59-5	がんの全身及び局所温熱治療体系の確立に関する研究	松田 忠義
59-6	門脈内腫瘍栓を重視した肝がんの集学的治療	長谷川 博
59-7	日本人に多いがんの腫瘍遺伝子とその活性化	寺田 雅昭
(総合研究)		
60-1	X線CTおよび超音波による各種臓器がん診断能の客観的評価と、精度の向上に関する研究	福田 守道
60-2	白血病の治療体系確立に関する総合的研究	太田 和雄
60-3	がん患者の全国登録による臨床的医用情報の分析と処理システムに関する研究	丸山 圭一
60-4	転移に対する積極的治療	渡辺 寛
60-5	膵がんの早期診断と治療体系の確立	土屋 涼一
(計画研究)		
59-8	口腔、中咽頭がんの治療法の確立と治療後の機能評価	海老原 敏
59-9	新抗がん剤の適正な臨床評価に関する研究	仁井谷 久暢
59-10	臨床応用決定のための抗がん剤の特性に関する研究	塚越 茂
59-11	薬物によるがん放射線治療効果の増強に関する研究	田中 敬正
59-12	フロー・サイトメトリーによるがん細胞の診療面における多角的パラメーターを応用する研究	天神 美夫
59-13	耳下腺腫瘍の診断と治療に関する研究	奥田 稔
59-14	がんの診断におけるデジタルX線診断に関する研究	館野 之男
59-15	胃スキルスの本態に基づいた早期診断および治療法の開発	北岡 久三
59-16	軟部悪性腫瘍の集学的治療	福岡 久俊
59-17	がん診療施設の機能強化に関する研究	庄司 忠実
59-18	乳がんにおける耐性の検討	野村 雍夫
59-19	食品中のがん原前駆物質の生成機構の解明による生成阻止	松島 泰次郎
59-20	小児がんの細胞遺伝学的・分子細胞遺伝学的研究	中込 弥男
59-21	核磁気共鳴法によるがんの画像診断に関する研究	有水 昇
59-22	神経系腫瘍の特性と治療開発に関する研究	高倉 公朋
59-23	腫瘍における形成外科の応用	藤野 豊美
(計画研究)		
60-6	がん化学療法の効果増強に関する研究	涌井 昭
60-7	EBウイルスのヒトにおける顕在化と発がんに関する研究	大里 外誉朗
60-8	腹部臓器に対する術中放射線療法の研究	秦 一雄
60-9	悪性黒色腫の細胞内物質を利用した新しい診断と治療に関する研究	池田 重雄
60-10	機能保持を指向した直腸がんの治療の研究	安富 正幸
60-11	卵巣悪性腫瘍の化学療法の基準化に関する研究	笠松 達弘
60-12	肝細胞がんの特性の解明と診断治療体系の確立に関する研究	服部 信
60-13	胆のう・胆管がんの治療成績向上をめざした集学的治療法の確立に関する研究	水本 龍二
60-14	骨肉腫患肢保存療法の適応と評価に関する研究	古瀬 清夫
60-15	大腸がん集団検診の精度向上に関する研究	吉田 豊
60-16	小児期悪性リンパ腫の臨床生物学的特性と治療体系の確立に関する研究	藤本 孟男
60-17	統一方式による神経芽腫の集学的治療法の確立に関する研究	澤口 重徳
60-18	網膜芽細胞腫の治療成績向上のための集学的研究	佐々木 正夫
60-19	密封小線源によるがんの治療適応の拡大に関する研究	森田 皓三
60-20	低線量長期被曝患者における発がんの病態に関する研究	金子 昌生
60-21	進行病期における化学内分泌療法を主とする集学的治療法の研究	島崎 淳
60-22	胸腺腫の生物学的特性に関する研究	正岡 昭
60-23	ヒト多重がんの実態と要因に関する研究	渡辺 昌
60-24	内因性ニトロソ発がん物質及び食品中のニトロソ化される物質の研究	大森 義仁
60-25	がん原性かび毒の免疫学的試験法の開発とその実用化に関する研究	赤松 穰
60-26	飲料水中及び大気中の発がん物質汚染に関する研究	松下 秀鶴
60-27	日常食品成分の発がんプロモーター作用の研究	高橋 道人
60-28	ポジトロンCTとプロトンCTによるがんの診断、治療に関する研究	松澤 大樹
60-29	がん患者における高カルシウム血症の治療に関する研究	木村 哲

60-30	巨核球白血病および類縁疾患の診断治療に関する基礎的研究	渡辺 陽之輔
60-31	食道・胃境界部がんの特徴とその対策	西 満正
60-32	放射線治療後の長期生存例における晩発性障害に関する研究	真崎 規江
60-33	菌状息肉症及びその類型(CTL)の診断と治療に関する研究	石原 和之
60-34	小児悪性腫瘍の分化能の解明と特異的腫瘍マーカーの確立に関する研究	秦 順一
60-35	実験胃がんを利用する胃がん発生要因の解析と新しい診断治療法の開発に関する研究	小山 靖夫
60-36	潜在がんの進展と抑制	北川 知行
60-37	胃がんの転移に関する基礎的、臨床的研究	阿曾 佳郎
(機械開発研究)		
59-24	放射線治療を目的としたCTシステムの開発	尾内 能夫
(機械開発研究)		
60-38	レーザーによるがんの診断と治療のための内視鏡機械開発	小黒 八七郎
60-39	がん免疫イメージングの精度向上を目指した計測機器システムの開発に関する研究	久田 欣一
(指定研究)		
58指	ヒトがんの第一次予防に関する基礎的、臨床的研究	佐藤 茂秋
59指-1	がんの集学的治療の研究	末舛 恵一
59指-2	長期動物実験による環境化学物質の発がん性評価に関する研究	林 祐造
60指	日本における肺がん増加の阻止に関する総括的研究	米山 武志

昭和61年度 16億円 76課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
59-1	腫瘍におけるホルモン産生遺伝子の発現機構と腫瘍細胞機能分化に関する研究	井村 裕夫
59-2	肺がん集検の組織化に関する研究	池田 茂人
59-3	HPDとクリプトン・イオンレーザーによる蛍光診断とHPDとアルゴン・ダイレーザーによる光学的治療	早田 義博
59-4	がん予防、医療活動におけるがん登録の役割に関する研究	福岡 誠吾
59-5	がんの全身及び局所温熱治療体系の確立に関する研究	松田 忠義
59-6	門脈内腫瘍栓を重視した肝がんの集学的治療	長谷川 博
59-7	日本人に多いがんの腫瘍遺伝子とその活性化	寺田 雅昭
(総合研究)		
60-1	X線CTおよび超音波による各種臓器がん診断能の客観的評価と、精度の向上に関する研究	福田 守道
60-2	白血病の治療体系確立に関する総合的研究	太田 和雄
60-3	がん患者の全国登録による臨床的医用情報の分析と処理システムに関する研究	丸山 圭一
60-4	転移に対する積極的治療	渡辺 寛
60-5	膵がんの早期診断と治療体系の確立	土屋 涼一
(総合研究)		
61-1	肺小細胞がんの病理・生物学的研究とその成果の臨床応用	下里 幸雄
61-2	我が国のB細胞腫瘍の特性とその診断・治療及び病因解析に関する研究	下山 正徳
61-3	胃がん死亡率減少における集団検診の寄与程度の算定に関する研究	田村 浩一
61-4	骨髄移植を用いた悪性腫瘍の根治療法に関する研究	正岡 徹
61-5	リンホカインによる抗腫瘍効果発現の基礎と臨床的治療効果の解明に関する研究	小倉 剛
61-6	ヒトがん一時予防の疫学的研究	広畑 富雄
61-7	がん発生を修飾する因子に関する実験的研究	武藤 泰敏
(計画研究)		
60-6	がん化学療法の効果増強に関する研究	涌井 昭
60-7	EBウイルスのヒトにおける顕在化と発がんに関する研究	大里 外誉朗
60-8	腹部臓器に対する術中放射線療法の研究	秦 一雄
60-9	悪性黒色腫の細胞内物質を利用した新しい診断と治療に関する研究	池田 重雄
60-10	機能保持を指向した直腸がんの治療の研究	安富 正幸
60-11	卵巣悪性腫瘍の化学療法の基準化に関する研究	笠松 達弘
60-12	肝細胞がんの特性の解明と診断治療体系の確立に関する研究	服部 信
60-13	胆のう・胆管がんの治療成績向上をめざした集学的治療法の確立に関する研究	水本 龍二
60-14	骨肉腫患肢保存療法の適応と評価に関する研究	古瀬 清夫
60-15	大腸がん集団検診の精度向上に関する研究	吉田 豊
60-16	小児期悪性リンパ腫の臨床生物学的特性と治療体系の確立に関する研究	藤本 孟男
60-17	統一方式による神経芽腫の集学的治療法の確立に関する研究	澤口 重徳
60-18	網膜芽細胞腫の治療成績向上のための集学的研究	佐々木 正夫
60-19	密封小線源によるがんの治療適応の拡大に関する研究	森田 皓三
60-20	低線量長期被曝患者における発がんの病態に関する研究	金子 昌生
60-21	進行病期における化学内分泌療法を主とする集学的治療法の研究	島崎 淳
60-22	胸腺腫の生物学的特性に関する研究	正岡 昭
60-23	ヒト多重がんの実態と要因に関する研究	渡辺 昌
60-24	内因性ニトロソ発がん物質及び食品中のニトロソ化される物質の研究	大森 義仁
60-25	がん原性かび毒の免疫学的試験法の開発とその実用化に関する研究	赤松 穰
60-26	飲料水中及び大気中の発がん物質汚染に関する研究	松下 秀鶴
60-27	日常食品成分の発がんプロモーター作用の研究	高橋 道人
60-28	ポジトロンCTとプロトンCTによるがんの診断、治療に関する研究	松澤 大樹
60-29	がん患者における高カルシウム血症の治療に関する研究	木村 哲
60-30	巨核球白血病および類縁疾患の診断治療に関する基礎的研究	渡辺 陽之輔
60-31	食道・胃境界部がんの特徴とその対策	西 満正
60-32	放射線治療後の長期生存例における晩発性障害に関する研究	真崎 規江
60-33	菌状息肉症及びその類型(CTL)の診断と治療に関する研究	石原 和之
60-34	小児悪性腫瘍の分化能の解明と特異的腫瘍マーカーの確立に関する研究	秦 順一
60-35	実験胃がんを利用する胃がん発生要因の解析と新しい診断治療法の開発に関する研究	小山 靖夫
60-36	潜在がんの進展と抑制	北川 知行
60-37	胃がんの転移に関する基礎的、臨床的研究	阿曾 佳郎
(計画研究)		
61-8	乳がんにおける複合ホルモン療法に関する基礎的並びに臨床的検討	富永 健
61-9	BorrmannIV型胃がんの生物学的特性に基づいた診断と治療に関する研究	田原 栄一
61-10	治療成績の向上と機能保存を目的とした口腔・咽頭がんの治療に関する研究	海老原 敏
61-11	フローサイトメトリーを用いたがん細胞の診断並びに治療のモニタリングに関する研究	高橋 学
61-12	唾液腺腫瘍の発生因子と治療体系に関する研究	奥田 稔
61-13	デジタルX線診断法の各種がんへの応用に関する臨床的研究	西谷 弘
61-14	軟部腫瘍の治療の体系確立に関する研究	福岡 久俊
61-15	がん診療の現状と時代に応じたがん診療専門施設の役割に関する研究	庄司 忠実
61-16	核磁気共鳴映像法によるがんの画像診断に関する研究	有永 昇

61-17	悪性神経腫瘍の臨床成績向上のための治療法の開発	高倉 公明
61-18	がん患者の生活の質向上のための形成外科の役割拡大に関する研究	藤野 豊美
61-19	消化器がんを中心とした化学療法における投与スケジュールの再検討	岡崎 伸生
61-20	多分割照射による放射線治療の研究	望月 幸夫
61-21	臨床応用決定を目的とする抗がん剤の条件の研究	竹内 富雄
61-22	食品中の変異原・変異原前駆物質の生成と抑制	松島 泰次郎
61-23	膀胱がん進展に基づく治療体系の確立	古武 敏彦
61-24	潜在性前立腺がんの発育・進展に関する実験的及び臨床的研究	伊東 信行
61-25	モノクローナル抗体、Flow cytometry等を用いた子宮体部前がん病変及びがんの細胞生物学的検討	栗原 操寿
 (機械開発研究)		
60-38	レーザーによるがんの診断と治療のための内視鏡機械開発	小黒 八七郎
60-39	がん免疫イメージングの精度向上を目指した計測機器システムの開発に関する研究	久田 欣一
 (機械開発研究)		
61-26	CT画像を利用したコンピュータ制御の高精度放射線治療装置の開発	赤沼 篤夫
 (指定研究)		
59指-1	がんの集学的治療の研究	末舛 恵一
59指-2	長期動物実験による環境化学物質の発がん性評価に関する研究	林 祐造
60指	日本における肺がん増加の阻止に関する総括的研究	米山 武志
61指	ヒトがん発生に関する基礎的、臨床的研究	佐藤 茂秋

昭和62年度 16億円 77課題

課題番号 (総合研究)	研究課題名	主任研究者
60-1	X線CTおよび超音波による各種臓器がん診断能の客観的評価と、精度の向上に関する研究	福田 守道
60-2	白血病の治療体系確立に関する総合的研究	太田 和雄
60-3	がん患者の全国登録による臨床的医用情報の分析と処理システムに関する研究	丸山 圭一
60-4	転移に対する積極的治療	渡辺 寛
60-5	膵がんの早期診断と治療体系の確立	土屋 涼一
(総合研究)		
61-1	肺小細胞がんの病理・生物学的研究とその成果の臨床応用	下里 幸雄
61-2	我が国のB細胞腫瘍の特性とその診断・治療及び病因解析に関する研究	下山 正徳
61-3	胃がん死亡率減少における集団検診の寄与程度の算定に関する研究	田村 浩一
61-4	骨髄移植を用いた悪性腫瘍の根治療法に関する研究	正岡 徹
61-5	リンホカインによる抗腫瘍効果発現の基礎と臨床的治療効果の解明に関する研究	小倉 剛
61-6	ヒトがん一時予防の疫学的研究	広畑 富雄
61-7	がん発生を修飾する因子に関する実験的研究	武藤 泰敏
(総合研究)		
62-1	がんの臨床上問題となる生物学的性状を決定する遺伝子の研究	横田 淳
62-2	がんの全身的並びに深部局所的温熱治療体系の確立に関する研究	松田 忠義
62-3	肝がんの外科療法を中心とした集学的研究	長谷川 博
62-4	肺がんの集団検診の正確な評価に関する研究	成毛 韶夫
62-5	地域がん登録の精度向上とその効果的利用に関する研究	藤本 伊三郎
62-6	がん情報ネットワークの構築と一次、二次予防等がん対策の評価に関する臨床疫学的研究	渡辺 昌
(計画研究)		
61-8	乳がんにおける複合ホルモン療法に関する基礎的並びに臨床的検討	富永 健
61-9	BorrmannIV型胃がんの生物学的特性に基づいた診断と治療に関する研究	田原 栄一
61-10	治療成績の向上と機能保存を目的とした口腔・咽頭がんの治療に関する研究	海老原 敏
61-11	フローサイトメリーを用いたがん細胞の診断並びに治療のモニタリングに関する研究	高橋 学
61-12	唾液腺腫瘍の発生因子と治療体系に関する研究	奥田 稔
61-13	デジタルX線診断法の各種がんへの応用に関する臨床的研究	西谷 弘
61-14	軟部腫瘍の治療の体系確立に関する研究	福岡 久俊
61-15	がん診療の現状と時代に応じたがん診療専門施設の役割に関する研究	庄司 忠実
61-16	核磁気共鳴映像法によるがんの画像診断に関する研究	有永 昇
61-17	悪性神経膠腫の臨床成績向上のための治療法の開発	高倉 公明
61-18	がん患者の生活の質向上のための形成外科の役割拡大に関する研究	藤野 豊美
61-19	消化器がんを中心とした化学療法における投与スケジュールの再検討	岡崎 伸生
61-20	多分割照射による放射線治療の研究	望月 幸夫
61-21	臨床応用決定を目的とする抗がん剤の条件の研究	竹内 富雄
61-22	食品中の変異原・変異原前駆物質の生成と抑制	松島 泰次郎
61-23	膀胱がん進展に基づく治療体系の確立	古武 敏彦
61-24	潜在性前立腺がんの発育・進展に関する実験的及び臨床的研究	伊東 信行
61-25	モノクローナル抗体、Flow cytometry等を用いた子宮体部前がん病変及びがんの細胞生物学的検討と、それに基づく新たな診断法の確立に関する研究	栗原 操寿
(計画研究)		
62-7	低線量長期被爆者における発がん病態解明及びその健康管理法の確立に関する研究	金子 昌生
62-8	食品中に含まれるN-ニトロソ化合物前駆体に関する研究	谷村 顕雄
62-9	消化器発がんの修飾要因	福島 昭治
62-10	がんのプログレッションの研究	北川 知行
62-11	変異原性を持たない物質による動物発がんとその評価	黒川 雄二
62-12	生体高分子結合型アフラトキシンの免疫学的試験法	栗飯原 景昭
62-13	胃がん発生における化生性病変の関与並びに胃がんの治療法開発に関する実験的研究	藤田 昌英
62-14	胸腺腫の生物学的特性に関する研究	有森 茂
62-15	消化管異形成上皮(dysplasia)の前がん病変としての再評価	廣田 映吾
62-16	小児腫瘍における分化形質発現の解明とそれに基づいた分子診断法の開発	秦 順一
62-17	ポジトロン断層法とモノクローナル抗体法による新しいRIがん診断法の開発	松澤 大樹
62-18	制がん剤の体液中濃度測定法の改良に関する研究	荒木 英爾
62-19	小児悪性リンパ腫の集学的治療体系の確立に関する研究	藤本 孟男
62-20	患肢温存を指向した骨肉腫の集学的治療に関する研究	川口 智義
62-21	機能保持及び肝転移の予防を指向した直腸がん治療の研究	土屋 周二
62-22	胆のう・胆管がんの集学的治療に関する研究	水本 龍二
62-23	巨核球白血病及び類縁疾患の診断・治療に関する基礎的研究	渡辺 陽之輔
62-24	網膜芽細胞腫眼球保存療法の治療成績向上のための研究	金子 明博
62-25	子宮頸部腺がんの治療法確立に関する研究	野田 起一郎
62-26	がん患者における高カルシウム血症の治療に関する研究	木村 哲
62-27	術中照射法の適応拡大に関する研究	秦 一雄
62-28	密封小線源治療の基準化に関する研究	森田 皓三
62-29	陽子線によるがん治療の適応拡大に関する研究	北川 俊夫



62-30	レーザー光線による光線力学的治療法の研究	加藤 治文
62-31	がんの化学療法の効果増強に関する研究	涌井 昭
62-32	飲料水及び空気の発がん物質汚染の定量的解析に関する研究	松下 秀鶴
62-33	大腸がん集団検診の組織化に関する研究	久道 茂
62-34	乳がんの集団検診に関する研究	富永 祐民
62-35	がん患者に対する終末期医療のあり方に関する研究	平賀 一陽
62-36	肝細胞がんの特性の解明と診断・治療体系の確立に関する研究	服部 信
62-37	食道・胃境界部がんの早期診断法と治療の確立	西 満正
62-38	菌状息肉症及びその類症(CTL)の診断と治療に関する研究	中嶋 弘
62-39	悪性黒色腫の診断と治療体系の確立に関する研究	石原 和之
62-40	前立腺がんの内分泌、手術、放射線及び化学療法の評価	島崎 淳
 (機械開発研究)		
61-26	CT画像を利用したコンピュータ制御の高精度放射線治療装置の開発	赤沼 篤夫
 (機械開発研究)		
62-41	レーザーによるがんの診断と治療のための内視鏡機械開発	小黒 八七郎
62-42	デジタルX線像によるがんの自動診断ソフトウェアの開発に関する研究	鳥脇 純一郎
 (指定研究)		
60指	日本における肺がん増加の阻止に関する総括的研究	山口 健
61指	ヒトがん発生に関与する基礎的、臨床的研究	佐藤 茂秋
62指-1	固形がんの集学的治療の研究	末舛 恵一
62指-2	発がん物質の規制決定に関する基礎的研究	林 祐造

昭和63年度 16億円 77課題

課題番号 (総合研究)	研究課題名	主任研究者
61-1	肺小細胞がんの病理・生物学的研究とその成果の臨床応用	下里 幸雄
61-2	我が国のB細胞腫瘍の特性とその診断・治療及び病因解析に関する研究	下山 正徳
61-3	胃がん死亡率減少における集団検診の寄与程度の算定に関する研究	田村 浩一
61-4	骨髄移植を用いた悪性腫瘍の根治療法に関する研究	正岡 徹
61-5	リンホカインによる抗腫瘍効果発現の基礎と臨床的治療効果の解明に関する研究	小倉 剛
61-6	ヒトがん一時予防の疫学的研究	広畑 富雄
61-7	がん発生を修飾する因子に関する実験的研究	武藤 泰敏
(総合研究)		
62-1	がんの臨床上問題となる生物学的性状を決定する遺伝子の研究	横田 淳
62-2	がんの全身的並びに深部局所的温熱治療体系の確立に関する研究	松田 忠義
62-3	肝がんの外科療法を中心とした集学的研究	長谷川 博
62-4	肺がんの集団検診の正確な評価に関する研究	成毛 韶夫
62-5	地域がん登録の精度向上とその効果的利用に関する研究	藤本 伊三郎
62-6	がん情報ネットワークの構築と一次、二次予防等がん対策の評価に関する臨床疫学的研究	渡辺 昌
(総合研究)		
63-1	画像診断のシステム化による深在性がん診断精度の向上に関する臨床疫学的研究	佐久間 貞行
63-2	がん転移の制圧に関する研究	渡辺 寛
63-3	治癒を目的とする白血病の集学的治療に関する研究	大野 竜三
63-4	主要がんの全国登録に基づく患者情報の基礎的並びに臨床的解析に関する研究	丸山 圭一
63-5	膵がんの早期発見と有効な治療法の開発に関する研究	尾崎 秀雄
(計画研究)		
62-7	低線量長期被爆者における発がん病態解明及びその健康管理法の確立に関する研究	金子 昌生
62-8	食品中に含まれるN-ニトロソ化合物前駆体に関する研究	谷村 顕雄
62-9	消化器発がんの修飾要因	福島 昭治
62-10	がんのプログレッションの研究	北川 知行
62-11	変異原性を持たない物質による動物発がんとその評価	黒川 雄二
62-12	生体高分子結合型アフラトキシンの免疫学的試験法	粟飯原 景昭
62-13	胃がん発生における化生性病変の関与並びに胃がんの治療法開発に関する実験的研究	藤田 昌英
62-14	胸腺腫の生物学的特性に関する研究	有森 茂
62-15	消化管異形成上皮(dysplasia)の前がん病変としての再評価	廣田 映吾
62-16	小児腫瘍における分化形質発現の解明とそれに基づいた分子診断法の開発	秦 順一
62-17	ポジトロン断層法とモノクローナル抗体法による新しいRIがん診断法の開発	松澤 大樹
62-18	制がん剤の体液中濃度測定法の改良に関する研究	荒木 英爾
62-19	小児悪性リンパ腫の集学的治療体系の確立に関する研究	藤本 孟男
62-20	患肢温存を指向した骨肉腫の集学的治療に関する研究	川口 智義
62-21	機能保持及び肝転移の予防を指向した直腸がん治療の研究	土屋 周二
62-22	胆のう・胆管がんの集学的治療に関する研究	水本 龍二
62-23	巨核球白血病及び類縁疾患の診断・治療に関する基礎的研究	渡辺 陽之輔
62-24	網膜芽細胞腫眼球保存療法の治療成績向上のための研究	金子 明博
62-25	子宮頸部腺がんの治療法確立に関する研究	野田 起一郎
62-26	がん患者における高カルシウム血症の治療に関する研究	木村 哲
62-27	術中照射法の適応拡大に関する研究	秦 一雄
62-28	密封小線源治療の基準化に関する研究	森田 皓三
62-29	陽子線によるがん治療の適応拡大に関する研究	北川 俊夫
62-30	レーザー光線による光線力学的治療法の研究	加藤 治文
62-31	がんの化学療法の効果増強に関する研究	涌井 昭
62-32	飲料水及び空気の発がん物質汚染の定量的解析に関する研究	松下 秀鶴
62-33	大腸がん集団検診の組織化に関する研究	久道 茂
62-34	乳がんの集団検診に関する研究	富永 祐民
62-35	がん患者に対する終末期医療のあり方に関する研究	平賀 一陽
62-36	肝細胞がんの特性の解明と診断・治療体系の確立に関する研究	服部 信
62-37	食道・胃境界部がんの早期診断法と治療の確立	西 満正
62-38	菌状息肉症及びその類症(CTL)の診断と治療に関する研究	中嶋 弘
62-39	悪性黒色腫の診断と治療体系の確立に関する研究	石原 和之
62-40	前立腺がんの内分泌、手術、放射線及び化学療法の評価	島崎 淳
(計画研究)		
63-6	変異原・変異原前駆物質の生成と修飾因子	若林 敬二
63-7	肝の微小がんと境界病変に関する研究	広橋 説雄
63-8	非A非B型肝炎と肝がんに関する研究	服部 信
63-9	新しい腫瘍マーカーによるがんの診断と動態観察法に関する研究	大倉 久直
63-10	コンピューテッド・ラジオグラフィーのがん診断への応用に関する研究	西谷 弘
63-11	磁気共鳴映像法によるがん診断の向上と適用に関する研究	竹中 栄一
63-12	消化器がんに対する合理的な化学療法体系の確立に関する研究	岡崎 伸生
63-13	固形がんの全身並びに局所化学療法の効果と宿主要因に関する研究	斎藤 達雄

63-14	膀胱がんの特性に基づく治療法の研究	古武 敏彦
63-15	子宮体がんの新たな診断法の開発に関する基礎的・臨床的研究	栗原 操寿
63-16	中枢神経腫瘍の治療体系確立に関する研究	野村 和弘
63-17	頭頸部進行がんの治療成績向上と形態及び機能保持を指向した集学治療の研究	内田 正興
63-18	術前治療を応用した悪性軟部腫瘍の患肢温存療法に関する研究	古屋 光太郎
63-19	膵がん罹患高危険度要因に関する遺伝的及び疫学的研究調査	中村 耕三
63-20	地域医療計画の策定に伴う地域がん診療施設の整備拡充に関する研究	和田 達雄
63-21	アスベストによる発がんに関する研究	北川 正信
63-22	BorrmannIV型胃がんにおける増殖因子、遺伝子情報・腫瘍マーカーの解明とその臨床応用	田原 榮一
63-23	潜在性前立腺がんの発育・進展に関する実験的及び臨床的研究	伊東 信行
 (機械開発研究)		
62-41	レーザーによるがんの診断と治療のための内視鏡機械開発	小黒 八七郎
62-42	デジタルX線像によるがんの自動診断ソフトウェアの開発に関する研究	鳥脇 純一郎
 (機械開発研究)		
63-24	高精度放射線治療に於ける3次元照合確認システムの開発	赤沼 篤夫
 (指定研究)		
61指	ヒトがん発生に関与する基礎的、臨床的研究	寺田 雅昭
62指-1	固形がんの集学的治療の研究	下山 正徳
62指-2	発がん物質の規制決定に関する基礎的研究	林 祐造
63指	難治がんの総合的な対策に関する研究	末舛 恵一

平成元年度 17億5000万円 83課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
62-1	がんの臨床上問題となる生物学的性状を決定する遺伝子の研究	横田 淳
62-2	がんの全身的並びに深部局所的温熱治療体系の確立に関する研究	松田 忠義
62-3	肝がんの外科療法を中心とした集学的研究	長谷川 博
62-4	肺がんの集団検診の正確な評価に関する研究	成毛 韶夫
62-5	地域がん登録の精度向上とその効果的利用に関する研究	藤本 伊三郎
62-6	がん情報ネットワークの構築と一次、二次予防等がん対策の評価に関する臨床疫学的研究	渡辺 昌
(総合研究)		
63-1	画像診断のシステム化による深在性がん診断精度の向上に関する臨床疫学的研究	佐久間 貞行
63-2	がん転移の制圧に関する研究	渡辺 寛
63-3	治癒を目的とする白血病の集学的治療に関する研究	大野 竜三
63-4	主要がんの全国登録に基づく患者情報の基礎的並びに臨床的解析に関する研究	丸山 圭一
63-5	膵がんの早期発見と有効な治療法の開発に関する研究	尾崎 秀雄
(総合研究)		
1-1	我が国におけるB細胞腫瘍の特性に基づく診断治療体系の確立と病因解析に関する研究	白川 茂
1-2	胃集団検診の死亡率減少効果と将来予測に関する研究	土井 偉誉
1-3	骨髄移植による悪性腫瘍の根治療法に関する研究	柴田 弘俊
1-4	サイトカインの作用機構とその成果の臨床応用	児玉 哲郎
1-5	肺小細胞がんの基礎研究とその成果の臨床応用	児玉 哲郎
1-6	発がん和生活環境要因に関する分析疫学的研究	廣畑 富雄
1-7	がんの発生と進展を修飾する化合物の臨床応用への検討	武藤 泰敏
(計画研究)		
63-6	変異原・変異原前駆物質の生成と修飾因子	若林 敬二
63-7	肝の微小がんと境界病変に関する研究	広橋 説雄
63-8	非A非B型肝炎と肝がんに関する研究	服部 信
63-9	新しい腫瘍マーカーによるがんの診断と動態観察法に関する研究	大倉 久直
63-10	コンピューテッド・ラジオグラフィーのがん診断への応用に関する研究	西谷 弘
63-11	磁気共鳴映像法によるがん診断の向上と適用に関する研究	竹中 栄一
63-12	消化器がんに対する合理的な化学療法体系の確立に関する研究	岡崎 伸生
63-13	固形がんの全身並びに局所化学療法の効果と宿主要因に関する研究	斎藤 達雄
63-14	膀胱がんの特性に基づく治療法の研究	古武 敏彦
63-15	子宮体がんの新たな診断法の開発に関する基礎的・臨床的研究	栗原 操寿
63-16	中枢神経腫瘍の治療体系確立に関する研究	野村 和弘
63-17	頭頸部進行がんの治療成績向上と形態及び機能保持を指向した集学治療の研究	内田 正興
63-18	術前治療を応用した悪性軟部腫瘍の患肢温存療法に関する研究	古屋 光太郎
63-19	膵がん罹患高危険度要因に関する遺伝的及び疫学的研究調査	中村 耕三
63-20	地域医療計画の策定に伴う地域がん診療施設の整備拡充に関する研究	和田 達雄
63-21	アスベストによる発がんに関する研究	北川 正信
63-22	BorrmannIV型胃がんにおける増殖因子、遺伝子情報・腫瘍マーカーの解明とその臨床応用	田原 榮一
63-23	潜在性前立腺がんの発育・進展に関する実験的及び臨床的研究	伊東 信行
(計画研究)		
1-8	がん薬物療法の合理的評価法に関する研究	栗原 稔
1-9	抗がん剤の臨床薬物動態と副作用対策に関する研究	荒木 英爾
1-10	がん患者における抗がん剤の代謝修飾による効果増強に関する研究	飯郷 正明
1-11	ヒト培養細胞を用いた抗がん剤のスクリーニング、及び耐性機序とその克服に関する研究	西条 長宏
1-12	適正な大腸集団検診制度の確立と精度の向上に関する研究	久道 茂
1-13	乳がんの集団検診に関する研究	富永 祐民
1-14	実験胃がんを用いたがん発生要因解析とその治療応用に関する研究	藤田 昌英
1-15	骨肉腫の患肢温存療法の治療成績向上に関する研究	川口 智義
1-16	網膜芽細胞腫の治療成績向上のための分子生物学的進歩に取り入れた集学的研究	金子 明博
1-17	悪性卵巣腫瘍の治療基準と集学的治療体系の確立に関する研究	竹内 正七
1-18	胃・腸管前がん病変としての異形成(dysplasia)上皮の細胞生物学的研究	廣田 英五
1-19	亜硝酸処理により生成するN-ニトロ化合物等の変異原性・がん原性物質に関する研究	谷村 顕夫
1-20	食品中に含まれる天然物質による消化器発がんの修飾	福島 昭治
1-21	がんのプログレッションの研究	長尾 美奈子
1-22	非変異原性発がん物質の発がん機構における活性酸素の関与に関する研究	黒川 雄二
1-23	小児がんの分子細胞生物学的的手法による病態解明及び診断・治療法の開発	明楽 泰
1-24	発がん物質による環境汚染と生体影響の定量的解析	大西 克成
1-25	トリウム、ラドン等の放射能による発がん生体刺激作用に関する研究	田ノ岡 宏
1-26	人がんに密接に関連する染色体上の塩基配列決定	吉田 輝彦
1-27	骨盤内各種臓器がんに対する機能保持を含む集学的治療に関する研究	土屋 周二
1-28	画像診断の進歩に伴う治療後再発の早期発見と外科適応に関する研究	森谷 宜皓
1-29	腫瘍遺伝子情報に基づく神経芽細胞腫の集学的治療体系の確立	土田 嘉雄
1-30	終末期がん患者の苦痛緩和に関する研究	平賀 一陽
1-31	肝細胞がんの早期診断と治療体系の確立に関する研究	池田 重雄

1-32	メラノーマの進行期における治療体系の確立に関する研究	大藤 正雄
1-33	がん患者における高カルシウム血症惹起因子の同定とそれに対応する特異的治療法の開発	江藤 澄哉
1-34	食道リンパ流の特性に基づいた胸部食道がんの合理的手術方法の研究	掛川 暉夫
1-35	密封小線源治療の生物学的、物理学的、最適化に関する研究	増田 康治
1-36	陽子線によるがん治療の適応拡大に関する研究	恒元 博
1-37	胸腺腫の生物学的特性に基づく集学的治療法に関する研究	有森 茂
1-38	胃がん手術の縮小と拡大に関する適正化の研究	中島 聰總
1-39	乳がんの乳房温存療法の検討	霞 富士雄
1-40	特異的並びに広域スペクトルがん親和性物質による新しい核医学がん診断法の開発	久田 欣一
1-41	肝転移再発の予防を指向した大腸がん治療の研究	北條 慶一
1-42	中期前立腺がんに対してホルモン療法を共通治療とし、手術療法と放射線療法の優劣を比較する prospective randomized clinical trial	垣添 忠生
1-43	頸胸境界部食道がんの治療法に関する研究	海老原 敏
1-44	自家骨髄移植を中心とした小児がんの根治療法に関する研究	大平 睦郎
1-45	大腸ポリープ及びがんの自然史に関する研究	牛尾 恭輔
1-46	骨盤内臓器がん治療にかかわる排泄QCの研究	松本 恵一
1-47	がん一次予防のための健康危険度評価及び健康教育法の開発に関する研究	大島 明
 (機械開発研究)		
63-24	高精度放射線治療に於ける3次元照合確認システムの開発	赤沼 篤夫
 (機械開発研究)		
1-48	がんの診断と治療を目的とした内視鏡器機の開発	吉田 茂昭
1-49	デジタルX線像によるがんの自動診断システムの開発に関する研究	鳥脇 純一郎
 (指定研究)		
62指-1	固形がんの集学的治療の研究	下山 正徳
62指-2	発がん物質の規制決定に関する基礎的研究	林 祐造
63指	難治がんの総合的な対策に関する研究	末舛 恵一
1指	複数発がん要因によるリスク評価の基礎的研究	寺田 雅昭

平成2年度 17億5000万円 84課題

課題番号 (総合研究)	研究課題名	主任研究者
63-1	画像診断のシステム化による深在性がん診断精度の向上に関する臨床疫学的研究	佐久間 貞行
63-2	がん転移の制圧に関する研究	渡辺 寛
63-3	治癒を目的とする白血病の集学的治療に関する研究	大野 竜三
63-4	主要がんの全国登録に基づく患者情報の基礎的並びに臨床的解析に関する研究	丸山 圭一
63-5	膵がんの早期発見と有効な治療法の開発に関する研究	尾崎 秀雄
(総合研究)		
1-1	我が国におけるB細胞腫瘍の特性に基づく診断治療体系の確立と病因解析に関する研究	白川 茂
1-2	胃集団検診の死亡率減少効果と将来予測に関する研究	土井 偉誉
1-3	骨髄移植による悪性腫瘍の根治療法に関する研究	柴田 弘俊
1-4	サイトカインの作用機構とその成果の臨床応用	児玉 哲郎
1-5	肺小細胞がんの基礎研究とその成果の臨床応用	児玉 哲郎
1-6	発がんと生活環境要因に関する分析疫学的研究	廣畑 富雄
1-7	がんの発生と進展を修飾する化合物の臨床応用への検討	武藤 泰敏
(総合研究)		
2-1	がんの臨床病態を規定する遺伝子の研究	横田 淳
2-2	肝の微小がんと境界病変に関する研究	広橋 説雄
2-3	がん予防及びがん対策を指向したがん情報ネットワークに関する研究	津金 昌一郎
2-4	肺がんの集団検診の精度管理と正確な評価に関する研究	成毛 韶夫
2-5	地域がん登録の精度向上とその効果的利用に関する研究	藤本 伊三郎
(計画研究)		
1-8	がん薬物療法の合理的評価法に関する研究	栗原 稔
1-9	抗がん剤の臨床薬物動態と副作用対策に関する研究	荒木 英爾
1-10	がん患者における抗がん剤の代謝修飾による効果増強に関する研究	飯郷 正明
1-11	ヒト培養細胞を用いた抗がん剤のスクリーニング、及び耐性機序とその克服に関する研究	西条 長宏
1-12	適正な大腸集団検診制度の確立と精度の向上に関する研究	久道 茂
1-13	乳がんの集団検診に関する研究	富永 祐民
1-14	実験胃がんを用いたがん発生要因解析とその治療応用に関する研究	藤田 昌英
1-15	骨肉腫の患肢温存療法の治療成績向上に関する研究	川口 智義
1-16	網膜芽細胞腫の治療成績向上のための分子生物学的進歩に取り入れた集学的研究	金子 明博
1-17	悪性卵巣腫瘍の治療基準と集学的治療体系の確立に関する研究	竹内 正七
1-18	胃・腸管前がん病変としての異形成(dysplasia)上皮の細胞生物学的研究	廣田 英五
1-19	亜硝酸処理により生成するN-ニトロソ化合物等の変異原性・がん原性物質に関する研究	谷村 顕夫
1-20	食品中に含まれる天然物質による消化器発がんの修飾	福島 昭治
1-21	がんのプログレッションの研究	長尾 美奈子
1-22	非変異原性発がん物質の発がん機構における活性酸素の関与に関する研究	黒川 雄二
1-23	小児がんの分子細胞生物学的手法による病態解明及び診断・治療法の開発	明楽 泰
1-24	発がん物質による環境汚染と生体影響の定量的解析	大西 克成
1-25	トリウム、ラドン等の放射能による発がん生体刺激作用に関する研究	田ノ岡 宏
1-26	人がんに密接に関連する染色体上の塩基配列決定	吉田 輝彦
1-27	骨盤内各種臓器がんに対する機能保持を含む集学的治療に関する研究	土屋 周二
1-28	画像診断の進歩に伴う治療後再発の早期発見と外科適応に関する研究	森谷 宜皓
1-29	腫瘍遺伝子情報に基づく神経芽細胞腫の集学的治療体系の確立	土田 嘉雄
1-30	終末期がん患者の苦痛緩和に関する研究	平賀 一陽
1-31	肝細胞がんの早期診断と治療体系の確立に関する研究	池田 重雄
1-32	メラノーマの進行期における治療体系の確立に関する研究	大藤 正雄
1-33	がん患者における高カルシウム血症惹起因子の同定とそれに対応する特異的治療法の開発	江藤 澄哉
1-34	食道リンパ流の特性に基づいた胸部食道がんの合理的手術方法の研究	掛川 暉夫
1-35	密封小線源治療の生物学的、物理学的、最適化に関する研究	増田 康治
1-36	陽子線によるがん治療の適応拡大に関する研究	恒元 博
1-37	胸腺腫の生物学的特性に基づく集学的治療法に関する研究	有森 茂
1-38	胃がん手術の縮小と拡大に関する適正化の研究	中島 聰總
1-39	乳がんの乳房温存療法の検討	霞 富士雄
1-40	特異的並びに広域スペクトルがん親和性物質による新しい核医学がん診断法の開発	久田 欣一
1-41	肝転移再発の予防を指向した大腸がん治療の研究	北條 慶一
1-42	中期前立腺がんに対してホルモン療法を共通治療とし、手術療法と放射線療法の優劣を比較する prospective randomized clinical trial	垣添 忠生
1-43	頸胸境界部食道がんの治療法に関する研究	海老原 敏
1-44	自家骨髄移植を中心とした小児がんの根治療法に関する研究	大平 睦郎
1-45	大腸ポリープ及びがんの自然史に関する研究	牛尾 恭輔
1-46	骨盤内臓器がん治療にかかわる排泄QCの研究	松本 恵一
1-47	がん一次予防のための健康危険度評価及び健康教育法の開発に関する研究	大島 明
(計画研究)		
2-6	食品中の変異原・がん原物質とその修飾因子	若林 敬二
2-7	胃スキルスルスの発生・増殖に関する増殖因子関連遺伝子、腫瘍抑制遺伝子の解析と新しい治療法の開発	井藤 久雄

2-8	アスベストによる発がんに関する研究	北川 正信
2-9	膵がん罹患高危険度要因に関する分子生物学的及び疫学的研究	西村 暹
2-10	地域医療計画の策定に伴う地域がん診断診療施設の整備拡充に関する研究	和田 達雄
2-11	軟部悪性腫瘍に対する集学的治療法に関する研究	古屋 光太郎
2-12	がん患者の病態及び社会的側面からみた精神的ケア及び在宅ケアの可能性に関する研究	吉森 正喜
2-13	頭頸部進行がんの治療体系の確立に関する研究	内田 正興
2-14	神経膠腫の病態の解析と治療体系の確立	高倉 公朋
2-15	磁気共鳴画像法のがん診断の適応と評価に関する研究	竹中 栄一
2-16	コンピューテッド・ラジオグラフィーによるがん診断の有効性の確立	河野 通雄
2-17	新しい腫瘍マーカーによるがんのスクリーニング診断と治療法選択のための細分類の研究	大倉 久直
2-18	深在がんの局所温熱療法に関する研究	田中 良明
2-19	C型肝炎と肝がんに関する研究	小林 健一
2-20	がん診療の効率及び需給予測に関する研究	濃沼 信夫
2-21	進行胃がんの新しい治療法の開発に関する研究	岡島 英五郎
2-22	早期がんの光線力学治療に関する研究	早田 義博
2-23	放射線治療における低酸素細胞増感剤に関する研究	小野山 靖人
2-24	前臨床がんの顕在化に関する基礎的並びに臨床的研究	津田 洋幸
2-25	転移性肝がんの動注療法に関する研究	杉原 健一
 (機械開発研究)		
1-48	がんの診断と治療を目的とした内視鏡器機の開発	吉田 茂昭
1-49	デジタルX線像によるがんの自動診断システムの開発に関する研究	鳥脇 純一郎
 (機械開発研究)		
2-26	高精度放射線治療のための画像管理システムの開発	伊藤 彬
 (指定研究)		
63指	難治がんの総合的な対策に関する研究	末舛 恵一
1指	複数発がん要因によるリスク評価の基礎的研究	寺田 雅昭
2指-1	固形がんの集学的治療の研究	下山 正徳
2指-2	環境化学物質による発がん修飾の評価に関する研究	林 祐造

平成3年度 18億5000万円 83課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
1-1	我が国におけるB細胞腫瘍の特性に基づく診断治療体系の確立と病因解析に関する研究	白川 茂
1-2	胃集団検診の死亡率減少効果と将来予測に関する研究	土井 偉誉
1-3	骨髄移植による悪性腫瘍の根治療法に関する研究	柴田 弘俊
1-4	サイトカインの作用機構とその成果の臨床応用	児玉 哲郎
1-5	肺小細胞がんの基礎研究とその成果の臨床応用	児玉 哲郎
1-6	発がんと生活環境要因に関する分析疫学的研究	廣畑 富雄
1-7	がんの発生と進展を修飾する化合物の臨床応用への検討	武藤 泰敏
(総合研究)		
2-1	がんの臨床病態を規定する遺伝子の研究	横田 淳
2-2	肝の微小がんと境界病変に関する研究	広橋 説雄
2-3	がん予防及びがん対策を指向したがん情報ネットワークに関する研究	津金 昌一郎
2-4	肺がんの集団検診の精度管理と正確な評価に関する研究	成毛 韶夫
2-5	地域がん登録の精度向上とその効果的利用に関する研究	藤本 伊三郎
(総合研究)		
3-1	膵がんの早期診断法と治療法の開発に関する研究	尾崎 秀雄
3-2	大腸がん集団検診の組織化と適正化に関する研究	吉田 豊
3-3	主要がんの全国登録に基づく患者情報の基礎的臨床的解析に関する研究	渡辺 昌
3-4	がん医療におけるQOLの向上に関する研究	岡崎 伸生
3-5	胃がんの発生要因解析と治療応用に関する研究	寺田 雅昭
3-6	難治性小児がん特に難治性白血病及び類縁疾患の病態の解明と診断・治療法の開発	長尾 大
(計画研究)		
2-6	食品中の変異原・がん原物質とその修飾因子	若林 敬二
2-7	胃スキルススの発生・増殖に関与する増殖因子関連遺伝子、腫瘍抑制遺伝子の解析と新しい治療法の開発	井藤 久雄
2-8	アスベストによる発がんに関する研究	北川 正信
2-9	膵がん罹患高危険度要因に関する分子生物学的及び疫学的研究	西村 暹
2-10	地域医療計画の策定に伴う地域がん診断診療施設の整備拡充に関する研究	和田 達雄
2-11	軟部悪性腫瘍に対する集学的治療法に関する研究	古屋 光太郎
2-12	がん患者の病態及び社会的側面からみた精神的ケア及び在宅ケアの可能性に関する研究	吉森 正喜
2-13	頭頸部進行がんの治療体系の確立に関する研究	内田 正興
2-14	神経膠腫の病態の解析と治療体系の確立	高倉 公朋
2-15	磁気共鳴画像法のがん診断の適応と評価に関する研究	竹中 栄一
2-16	コンピューテッド・ラジオグラフィによるがん診断の有効性の確立	河野 通雄
2-17	新しい腫瘍マーカーによるがんのスクリーニング診断と治療法選択のための細分類の研究	大倉 久直
2-18	深在がんの局所温熱療法に関する研究	田中 良明
2-19	C型肝炎と肝がんに関する研究	小林 健一
2-20	がん診療の効率及び需給予測に関する研究	濃沼 信夫
2-21	進行胃がんの新しい治療法の開発に関する研究	岡島 英五郎
2-22	早期がんの光線力学治療に関する研究	早田 義博
2-23	放射線治療における低酸素細胞増感剤に関する研究	小野山 靖人
2-24	前臨床がんの顕在化に関する基礎的並びに臨床的研究	津田 洋幸
2-25	転移性肝がんの動注療法確立に関する研究	杉原 健一
(計画研究)		
3-7	ヒトがんにおける抗がん剤の代謝特性と酵素修飾による治療、効果増強に関する研究	飯郷 正明
3-8	体内ニトロソ化合物の発がん影響に関する研究	江角 浩安
3-9	食品中に含まれる要因による消化器がん発生の修飾の研究	立松 正衛
3-10	がんのプログレッションの研究	長尾 美奈子
3-11	環境化学物質による活性酸素の関与した発がんとその修飾	小西 陽一
3-12	発がん物質による生体影響の定量的解析	大西 克成
3-13	ヒトがんに関連する染色体レベルでの異常の分子生物学的解析	関谷 剛男
3-14	トリウム、ラドン等の放射能による発がん生体刺激作用に関する研究	田ノ岡 宏
3-15	薬物療法の合理的な評価に関する研究	栗原 稔
3-16	胃がん手術の縮小と拡大に関する適正化の研究	中島 聰總
3-17	食道のリンパ流と食道がんのリンパ節郭清に関する研究	掛川 暉夫
3-18	頸胸境界部食道がんの治療法に関する研究	海老原 敏
3-19	四肢悪性腫瘍の集学的治療による生命及び機能的予後の改善に関する研究	山脇 慎也
3-20	メラノーマの転移の早期発見と進行期の治療に関する研究	石原 和之
3-21	大腸がんの肝転移防止と肝転移の治療体系の確立に関する研究	北條 慶一
3-22	無茎性大腸腫瘍の発育進展に関する研究	牛尾 恭輔
3-23	網膜芽細胞腫の集学的眼球保存療法の成績向上に関する研究	佐々木 正夫
3-24	小児がんにおける自家骨髄移植、並びに自家末梢血幹細胞移植に関する研究	大平 睦郎
3-25	治癒と再発防止を目的とする白血病の集学的治療に関する研究	大野 竜三
3-26	中期前立腺がんの集学的治療法の開発	島崎 淳
3-27	骨盤内悪性腫瘍に対する骨盤外科の確立に関する研究	森谷 亘皓
3-28	治療と社会生活の接点に立脚した排泄路の研究	松本 恵一



3-29	卵巣がん手術術式の基準化を目的としたProspective study及び総括研究	寺島 芳輝
3-30	乳房温存療法の安全性を実証する研究	霞 富士雄
3-31	がん転移の予防と治療及びその評価に関する研究	高橋 俊雄
3-32	密封小線源治療の最適化と適応の拡大	増田 康治
3-33	陽子線によるがん治療に関する研究	恒元 博
3-34	内視鏡を用いたがん治療法の開発とその評価に関する研究	山口 肇
3-35	がん診断の精度向上を目指したRIイメージングに関する研究	久田 欣一
3-36	終末期がん患者の集学的総括的医療に関する研究	村上 國男
3-37	がんと結核が共存する病態に関する研究	西脇 裕
3-38	再発肝がんに対する治療法の選択	山崎 晋
3-39	原発不明がんの原発巣の診断に関する研究	今岡 真義
3-40	画像診断を中心とした乳がん検診の適正化に関する研究	木戸 長一郎
3-41	がん一次予防のための危険度の評価と健康教育法の開発に関する研究	大島 明
3-42	抗がん剤の作用特性による重篤な臓器障害の防止と適切な投与方法開発のための臨床薬理学的研究	西條 長宏
3-43	分子細胞遺伝学的情報からみた神経芽腫の集学的治療法に関する研究	土田 嘉昭
3-44	がんの増殖動態の把握と治療への応用に関する研究	野村 和弘
 (機械開発研究)		
2-26	高精度放射線治療のための画像管理システムの開発	伊藤 彬
 (機械開発研究)		
3-45	デジタルX線像によるがんの自動診断システムの開発に関する研究	小畑 秀文
3-46	全身に応用可能な定位的放射線治療 (Stereotactic Radiosurgery)装置の開発とその適性線量の研究	吉岡 眞澄
 (指定研究)		
1指	複数発がん要因によるリスク評価の基礎的研究	寺田 雅昭
2指-1	固形がんの集学的治療の研究	下山 正徳
2指-2	環境化学物質による発がん修飾の評価に関する研究	林 祐造
3指	難治がんの総合的な対策に関する研究	垣添 忠生

平成4年度 18億5000万円 86課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
2-1	がんの臨床病態を規定する遺伝子の研究	横田 淳
2-2	肝の微小がんと境界病変に関する研究	広橋 説雄
2-3	がん予防及びがん対策を指向したがん情報ネットワークに関する研究	津金 昌一郎
2-4	肺がんの集団検診の精度管理と正確な評価に関する研究	成毛 韶夫
2-5	地域がん登録の精度向上とその効果的利用に関する研究	藤本 伊三郎
(総合研究)		
3-1	膵がんの早期診断法と治療法の開発に関する研究	尾崎 秀雄
3-2	大腸がん集団検診の組織化と適正化に関する研究	吉田 豊
3-3	主要がんの全国登録に基づく患者情報の基礎的臨床的解析に関する研究	渡辺 昌
3-4	がん医療におけるQOLの向上に関する研究	岡崎 伸生
3-5	胃がんの発生要因解析と治療応用に関する研究	寺田 雅昭
3-6	難治性小児がん特に難治性白血病及び類縁疾患の病態の解明と診断・治療法の開発	長尾 大
(総合研究)		
4-1	がんの発生と進展を抑制する化学物質の臨床応用に関する研究	藤木 博太
4-2	ヒトがんの環境要因と個体特性に関する疫学的研究	田島 和雄
4-3	骨髄移植療法の安全性向上に関する研究	柴田 弘俊
4-4	肺線がんの発生と特性の解析並びに治療法の開発	下里 幸雄
4-5	B細胞腫瘍の特性に基づく診療体系の確立と病因解析に関する研究	白川 茂
(計画研究)		
3-7	ヒトがんにおける抗がん剤の代謝特性と酵素修飾による治療、効果増強に関する研究	飯郷 正明
3-8	体内ニトロ化合物の発がん影響に関する研究	江角 浩安
3-9	食品中に含まれる要因による消化器がん発生の修飾の研究	立松 正衛
3-10	がんのプログレッションの研究	長尾 美奈子
3-11	環境化学物質による活性酸素の関与した発がんとその修飾	小西 陽一
3-12	発がん物質による生体影響の定量的解析	大西 克成
3-13	ヒトがんに関連する染色体レベルでの異常の分子生物学的解析	関谷 剛男
3-14	トリウム、ラドン等の放射能による発がんと生体刺激作用に関する研究	田ノ岡 宏
3-15	薬物療法の合理的な評価に関する研究	栗原 稔
3-16	胃がん手術の縮小と拡大に関する適正化の研究	中島 聰總
3-17	食道のリンパ流と食道がんのリンパ節郭清に関する研究	掛川 暉夫
3-18	頸胸境界部食道がんの治療法に関する研究	海老原 敏
3-19	四肢悪性腫瘍の集学的治療による生命及び機能的予後の改善に関する研究	山脇 慎也
3-20	メラノーマの転移の早期発見と進行期の治療に関する研究	石原 和之
3-21	大腸がんの肝転移防止と肝転移の治療体系の確立に関する研究	北條 慶一
3-22	無茎性大腸腫瘍の発育進展に関する研究	牛尾 恭輔
3-23	網膜芽細胞腫の集学的眼球保存療法の成績向上に関する研究	佐々木 正夫
3-24	小児がんにおける自家骨髄移植、並びに自家末梢血幹細胞移植に関する研究	大平 睦郎
3-25	治癒と再発防止を目的とする白血病の集学的治療に関する研究	大野 竜三
3-26	中期前立腺がんの集学的治療法の開発	島崎 淳
3-27	骨盤内悪性腫瘍に対する骨盤外科の確立に関する研究	森谷 宜皓
3-28	治療と社会生活の接点に立脚した排泄路の研究	松本 恵一
3-29	卵巣がん手術術式の基準化を目的としたProspective study及び総括研究	寺島 芳輝
3-30	乳房温存療法の安全性を実証する研究	霞 富士雄
3-31	がん転移の予防と治療及びその評価に関する研究	高橋 俊雄
3-32	密封小線源治療の最適化と適応の拡大	増田 康治
3-33	陽子線によるがん治療に関する研究	恒元 博
3-34	内視鏡を用いたがん治療法の開発とその評価に関する研究	山口 肇
3-35	がん診断の精度向上を目指したRIイメージングに関する研究	久田 欣一
3-36	終末期がん患者の集学的総括的医療に関する研究	村上 國男
3-37	がんと結核が共存する病態に関する研究	西脇 裕
3-38	再発肝がんに対する治療法の選択	山崎 晋
3-39	原発不明がんの原発巣の診断に関する研究	今岡 真義
3-40	画像診断を中心とした乳がん検診の適正化に関する研究	木戸 長一郎
3-41	がん一次予防のための危険度の評価と健康教育法の開発に関する研究	大島 明
3-42	抗がん剤の作用特性による重篤な臓器障害の防止と適切な投与方法開発のための臨床薬理学的研究	西條 長宏
3-43	分子細胞遺伝学的情報からみた神経芽腫の集学的治療法に関する研究	土田 嘉昭
3-44	がんの増殖動態の把握と治療への応用に関する研究	野村 和弘
(計画研究)		
4-6	C型肝炎と肝細胞がんに関する研究	小林 健一
4-7	日常見られるがんの家族内集積性に関する研究	福富 隆志
4-8	環境中の変異原・がん原物質の分離同定に関する研究	糖谷 東雄
4-9	アスベスト等鉱物粉じんの発がんに関する研究	成田 巨啓
4-10	膵がん初期像の解明と膵がん発生要因に関する分子生物学的研究	大橋 計彦
4-11	前臨床がんの顕在化に関する基礎及び臨床的研究	津田 洋幸

4-12	Helicobacter pyloriと胃がんの関連性に関する研究	齊藤 大三
4-13	物理的増感作用を利用する新しい放射線治療法の開発	秋根 康之
4-14	地域医療計画の策定に伴う地域がん診療施設の整備拡充に関する研究	庄司 忠實
4-15	プロトコール研究のための病理診断の精度向上に関する研究	向井 清
4-16	転移性肝がんに対する動注療法の評価に関する研究	杉原 健一
4-17	頭頸部がんの境界領域における新しい治療法に関する研究	犬山 征夫
4-18	新しい腫瘍マーカーの開発と応用に関する研究	野澤 志朗
4-19	デジタル画像診断の精度向上とその体系化に関する研究	森山 紀之
4-20	正確な放射線治療法とその効率化の研究	井上 俊彦
4-21	胃スキルス増殖・進展に関連する増殖因子関連遺伝子、がん抑制遺伝子の解析と新しい治療法の	井藤 久雄
4-22	諸臓器がんの集団検診の間に存する共通の問題点に関する研究	久道 茂
4-23	悪性グリオーマに関する研究	高倉 公朋
4-24	肺門部早期がんの新しい治療法の開発に関する研究	小野 良祐
4-25	磁気共鳴画像法によるがん診断能の向上及び治療への寄与	朝倉 英男
4-26	高齢者の胃がん検診の評価とその効率向上に関する研究	土井 偉誉
4-27	高悪性度軟部腫瘍の集学的治療に関する研究	福岡 久俊
4-28	深在がんの局所温熱療法に関する研究	田中 良明
4-29	HLA遺伝子検索によるがんの宿主要因及び予防対策の研究	辻 公美
4-30	サイトカインを用いた新しいがん治療法の開発とその臨床応用への展開	新津 洋司郎

(機械開発研究)

3-45	デジタルX線像によるがんの自動診断システムの開発に関する研究	小畑 秀文
3-46	全身に応用可能な定位的放射線治療(Stereotactic Radiosurgery)装置の開発とその適性線量の研究	吉岡 眞澄

(機械開発研究)

4-31	がんの診断・治療のためのレーザー機器開発	小黒 八七郎
------	----------------------	--------

(指定研究)

2指-1	固形がんの集学的治療の研究	下山 正徳
2指-2	環境化学物質による発がん修飾の評価に関する研究	林 祐造
3指	難治がんの総合的な対策に関する研究	垣添 忠生
4指-1	ヒトがん発生の複数要因の相互作用に関する基礎的・臨床的研究	寺田 雅昭
4指-2	多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究	渡辺 昌

平成5年度 18億5000万円 87課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
3-1	膵がんの早期診断法と治療法の開発に関する研究	尾崎 秀雄
3-2	大腸がん集団検診の組織化と適正化に関する研究	吉田 豊
3-3	主要がんの全国登録に基づく患者情報の基礎的臨床的解析に関する研究	渡辺 昌
3-4	がん医療におけるQOLの向上に関する研究	岡崎 伸生
3-5	胃がんの発生要因解析と治療応用に関する研究	寺田 雅昭
3-6	難治性小児がん特に難治性白血病及び類縁疾患の病態の解明と診断・治療法の開発	長尾 大
(総合研究)		
4-1	がんの発生と進展を抑制する化学物質の臨床応用に関する研究	藤木 博太
4-2	ヒトがんの環境要因と個体特性に関する疫学的研究	田島 和雄
4-3	骨髄移植療法の安全性向上に関する研究	柴田 弘俊
4-4	肺線がんの発生と特性の解析並びに治療法の開発	下里 幸雄
4-5	B細胞腫瘍の特性に基づく診療体系の確立と病因解析に関する研究	白川 茂
(総合研究)		
5-1	肝臓の微小がんに関する基礎的、臨床的研究	坂元 亨宇
5-2	がん対策支援を指向したがん情報ネットワークの構築に関する研究	児玉 哲郎
5-3	地域がん登録の精度向上と活用に関する研究	花井 彩
5-4	骨盤内悪性腫瘍の特性に立脚した骨盤外科の確立に関する研究	北條 慶一
5-5	胆道系及び膵悪性腫瘍に対する拡大手術の根治性と安全性の両立を目指した研究	小菅 智男
5-6	胆道がん、膵頭部がんの拡大切除における根治性と安全性向上に関する研究	羽生 富士夫
(計画研究)		
4-6	C型肝炎と肝細胞がんに関する研究	小林 健一
4-7	日常見られるがんの家族内集積性に関する研究	福富 隆志
4-8	環境中の変異原・がん原物質の分離同定に関する研究	糖谷 東雄
4-9	アスベスト等鉱物粉じんのがんに関する研究	成田 巨啓
4-10	膵がん初期像の解明と膵がん発生要因に関する分子生物学的研究	大橋 計彦
4-11	前臨床がんの顕在化に関する基礎及び臨床的研究	津田 洋幸
4-12	Helicobacter pyloriと胃がんの関連性に関する研究	斉藤 大三
4-13	物理的増感作用を利用する新しい放射線治療法の開発	秋根 康之
4-14	地域医療計画の策定に伴う地域がん診療施設の整備拡充に関する研究	庄司 忠實
4-15	プロトコール研究のための病理診断の精度向上に関する研究	向井 清
4-16	転移性肝がんに対する動注療法の評価に関する研究	杉原 健一
4-17	頭頸部がんの境界領域における新しい治療法に関する研究	犬山 征夫
4-18	新しい腫瘍マーカーの開発と応用に関する研究	野澤 志朗
4-19	デジタル画像診断の精度向上とその体系化に関する研究	森山 紀之
4-20	正確な放射線治療法とその効率化の研究	井上 俊彦
4-21	胃スキルス増殖・進展に関連する増殖因子関連遺伝子、がん抑制遺伝子の解析と新しい治療法の	井藤 久雄
4-22	諸臓器がんの集団検診の間に存する共通の問題点に関する研究	久道 茂
4-23	悪性グリオーマに関する研究	高倉 公朋
4-24	肺門部早期がんの新しい治療法の開発に関する研究	小野 良祐
4-25	磁気共鳴画像法によるがん診断能の向上及び治療への寄与	朝倉 英男
4-26	高齢者の胃がん検診の評価とその効率向上に関する研究	土井 偉誉
4-27	高悪性度軟部腫瘍の集学的治療に関する研究	福間 久俊
4-28	深在がんの局所温熱療法に関する研究	田中 良明
4-29	HLA遺伝子検索によるがんの宿主要因及び予防対策の研究	辻 公美
4-30	サイトカインを用いた新しいがん治療法の開発とその臨床応用への展開	新津 洋司郎
(計画研究)		
5-7	糖転移酵素のがん性変化と臨床応用	飯田 静夫
5-8	がんの臨床的性格決定因子の遺伝子診断に関する研究	野口 雅之
5-9	成人の難治性白血病の分子生物学的機構の解明と薬物療法の確立に関する研究	上田 龍三
5-10	前立腺がんのホルモン不応性進展の機序と不応性がんの治療に関する研究	島崎 淳
5-11	がん患者の症状緩和に関する研究	志真 泰夫
5-12	食道がんにおける重複がんの実態とその治療に関する研究	渡辺 寛
5-13	小さな腎がんの診断・治療体系の確立に関する研究	岡島 英五郎
5-14	がん診療専門施設における修練医師に対する教育システムの確立とその評価に関する研究	海老原 敏
5-15	臨床応用を目指した抗がん剤の生化学的機能修飾による効果増強に関する研究	佐々木 琢磨
5-16	自家幹細胞移植を応用した小児がんの新しい治療体系確立に関する研究	内野 純一
5-17	乳がんの乳管内進展病巣の特性に基づいた乳房温存療法の適応拡大に関する研究	小山 博記
5-18	内視鏡を用いたがん治療法の開発とその評価に関する研究	山口 肇
5-19	がんにおける体腔鏡手術の適応と手術手技向上に関する研究	鳶巢 賢一
5-20	機能温存を目指す口腔・咽頭がんの治療法の確立に関する研究	浅井 昌大
5-21	発がん物質による非腫瘍性病変誘発に関する研究	江角 浩安
5-22	大腸腫瘍性病変の発育進展とその遺伝子解析に関する研究	武藤 徹一郎
5-23	実験動物における多段階発がんに関する研究	白井 智之
5-24	192Ir密封小線源によるがん治療の研究	山下 孝

5-25	抗がん剤の臨床効果向上を目指した臨床薬理学的研究	佐々木 康綱
5-26	再発肝がんに対する適切な治療法の選択に関する研究	山崎 晋
5-27	がんに対する遺伝子治療の臨床応用を目指した基礎的研究	吉田 輝彦
5-28	がんの骨転移の機序の解明とその治療の研究	尾形 悦郎
5-29	ヘテロサイクリックアミンの生成阻害及び発がん阻止実験の研究	若林 敬二
5-30	消化器がん発生に影響する食品中の要因に関する研究	立松 正衛
5-31	代謝及び膜表面の特異的性質に基づくがんのRIイメージングに関する研究	小西 淳二
5-32	がんの増殖動態の把握と治療への応用に関する研究	野村 和弘
5-33	統一切除縁及び治療効果判定基準に基づく各腫瘍に有効な治療法の確立に関する研究	山脇 慎也
5-34	進行期悪性腫瘍に於ける画像診断と免疫化学療法に関する研究	池田 重雄
5-35	網膜芽細胞腫患者の眼球保存療法の成績向上に関する研究	金子 明博
5-36	荷電粒子線によるがんの治療に関する研究	宮本 忠昭
5-37	各臓器がん広範囲切除後の再建法の開発と術後の機能と形態の評価に関する研究	波利井 清紀
5-38	肺がん集団検診の有効性と個別検診の方法の確立に関する研究	金子 昌弘
5-39	低分子量腫瘍組織集積性誘導体によるがんの診断と治療に関する研究	早田 義博
5-40	がん治療におけるインフォームドコンセントの在り方とそれに関連する諸問題の検討	江口 研二
5-41	喫煙関連がんの一次予防のための喫煙習慣への介入に関する研究	小川 浩
5-42	高齢者肺がんの病態に基づいた適切な治療に関する研究	西脇 祐
5-43	乳がん検診における画像診断の有用性の評価に関する研究	木戸 長一郎

(機械開発研究)

4-31	がんの診断・治療のためのレーザー機器開発	小黒 八七郎
------	----------------------	--------

(機械開発研究)

5-44	デジタルX線像処理に基づくがん検診用自動スクリーニングシステムの開発	小畑 秀文
5-45	全身に応用可能な定位的放射線治療 (Stereotactic Radiosurgery) 装置の開発とその適性線量の研究	吉岡 眞澄

(指定研究)

3指	難治がんの総合的な対策に関する研究	垣添 忠生
4指-1	ヒトがん発生の複数要因の相互作用に関する基礎的・臨床的研究	寺田 雅昭
4指-2	多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究	渡辺 昌
5指-1	固形がんの集学的治療の研究	下山 正徳
5指-2	環境化学物質による発がんの一次予防に関する研究	林 祐造

平成6年度 18億5000万円 89課題

課題番号 (総合研究)	研究課題名	主任研究者
4-1	がんの発生と進展を抑制する化学物質の臨床応用に関する研究	藤木 博太
4-2	ヒトがんの環境要因と個体特性に関する疫学的研究	田島 和雄
4-3	骨髄移植療法の安全性向上に関する研究	柴田 弘俊
4-4	肺線がんの発生と特性の解析並びに治療法の開発	下里 幸雄
4-5	B細胞腫瘍の特性に基づく診療体系の確立と病因解析に関する研究	白川 茂
(総合研究)		
5-1	肝臓の微小がんに関する基礎的、臨床的研究	坂元 亨宇
5-2	がん対策支援を指向したがん情報ネットワークの構築に関する研究	児玉 哲郎
5-3	地域がん登録の精度向上と活用に関する研究	花井 彩
5-4	骨盤内悪性腫瘍の特性に立脚した骨盤外科の確立に関する研究	北條 慶一
5-5	胆道系及び膵悪性腫瘍に対する拡大手術の根治性と安全性の両立を目指した研究	小菅 智男
5-6	胆道がん、膵頭部がんの拡大切除における根治性と安全性向上に関する研究	羽生 富士夫
(総合研究)		
6-1	胃がんの発生要因解析とその臨床応用に関する研究	吉田 茂昭
6-2	主要がんの全国登録に基づく患者情報の基礎的臨床的解析に関する研究	渡辺 昌
(計画研究)		
5-7	糖転移酵素のがん性変化と臨床応用	飯田 静夫
5-8	がんの臨床的性格決定因子の遺伝子診断に関する研究	野口 雅之
5-9	成人の難治性白血病の分子生物学的機構の解明と薬物療法の確立に関する研究	上田 龍三
5-10	前立腺がんのホルモン不応性進展の機序と不応性がんの治療に関する研究	島崎 淳
5-11	がん患者の症状緩和に関する研究	志真 泰夫
5-12	食道がんにおける重複がんの実態とその治療に関する研究	渡辺 寛
5-13	小さな腎がんの診断・治療体系の確立に関する研究	岡島 英五郎
5-14	がん診療専門施設における修練医師に対する教育システムの確立とその評価に関する研究	海老原 敏
5-15	臨床応用を目指した抗がん剤の生化学的機能修飾による効果増強に関する研究	佐々木 琢磨
5-16	自家幹細胞移植を応用した小児がんの新しい治療体系確立に関する研究	内野 純一
5-17	乳がんの乳管内進展病巣の特性に基づいた乳房温存療法の適応拡大に関する研究	小山 博記
5-18	内視鏡を用いたがん治療法の開発とその評価に関する研究	山口 肇
5-19	がんにおける体腔鏡手術の適応と手術手技向上に関する研究	鳶巢 賢一
5-20	機能温存を目指す口腔・咽頭がんの治療法の確立に関する研究	浅井 昌大
5-21	発がん物質による非腫瘍性病変誘発に関する研究	江角 浩安
5-22	大腸腫瘍性病変の発育進展とその遺伝子解析に関する研究	武藤 徹一郎
5-23	実験動物における多段階発がんに関する研究	白井 智之
5-24	<sup>192</sup> Ir密封小線源によるがん治療の研究	山下 孝
5-25	抗がん剤の臨床効果向上を目指した臨床薬理学的研究	佐々木 康綱
5-26	再発肝がんに対する適切な治療法の選択に関する研究	山崎 晋
5-27	がんに対する遺伝子治療の臨床応用を目指した基礎的研究	吉田 輝彦
5-28	がんの骨転移の機序の解明とその治療の研究	尾形 悦郎
5-29	ヘテロサイクリックアミンの生成阻害及び発がん阻止実験の研究	若林 敬二
5-30	消化器がん発生に影響する食品中の要因に関する研究	立松 正衛
5-31	代謝及び膜表面の特異的性質に基づくがんのRIイメージングに関する研究	小西 淳二
5-32	がんの増殖動態の把握と治療への応用に関する研究	野村 和弘
5-33	統一切除縁及び治療効果判定基準に基づく各腫瘍に有効な治療法の確立に関する研究	山脇 慎也
5-34	進行期悪性腫瘍に於ける画像診断と免疫化学療法に関する研究	池田 重雄
5-35	網膜芽細胞腫患者の眼球保存療法の成績向上に関する研究	金子 明博
5-36	荷電粒子線によるがんの治療に関する研究	宮本 忠昭
5-37	各臓器がん広範囲切除後の再建法の開発と術後の機能と形態の評価に関する研究	波利井 清紀
5-38	肺がん集団検診の有効性と個別検診の方法の確立に関する研究	金子 昌弘
5-39	低分子量腫瘍組織集積性誘導体によるがんの診断と治療に関する研究	早田 義博
5-40	がん治療におけるインフォームドコンセントの在り方とそれに関連する諸問題の検討	江口 研二
5-41	喫煙関連がんの一次予防のための喫煙習慣への介入に関する研究	小川 浩
5-42	高齢者肺がんの病態に基づいた適切な治療に関する研究	西脇 祐
5-43	乳がん検診における画像診断の有用性の評価に関する研究	木戸 長一郎
(計画研究)		
6-3	大腸がん集団検診の精度向上と評価に関する研究	樋渡 信夫
6-4	C型肝炎ウイルス感染と肝細胞がんの発生に関する研究	井廻 道夫
6-5	進行卵巣がんに対するdose-intensive chemotherapyの有効性に関する研究	恒松 隆一郎
6-6	胃がんに対する拡大手術の評価に関する研究	笹子 充
6-7	膵がん初期像の解明と膵がん発生要因に関する分子生物学的研究	大橋 計彦
6-8	Helicobacter Pyloriと胃がんとの関連性に関する研究	斉藤 大三
6-9	プロトコール研究のための病理診断の精度向上に関する研究	向井 清
6-10	腫瘍マーカーの臨床応用に関する研究	野澤 志朗
6-11	頭頸部がんの境界領域における新しい集学的治療法の開発と評価に関する研究	犬山 征夫
6-12	がん顕在化の抑制に関する研究	福島 昭治

6-13	がんの集学的治療における放射線治療の役割とその効率化の研究	井上 俊彦
6-14	肺門部早期がんの内視鏡放射線治療に関する研究	小野 良祐
6-15	物理的増感作用を利用した新しい放射線治療に関する研究	秋根 康之
6-16	前立腺がんの集団検診の妥当性に関する研究	渡邊 決
6-17	大腸がん肝転移に対する治療体系の確立に関する研究	森 武生
6-18	サイトカインを用いた新しいがん治療法の臨床応用に関する研究	新津 洋司郎
6-19	日常見られるがんの家族内集積性に関する研究	福富 隆志
6-20	各種がん検診の共通問題に関する研究	久道 茂
6-21	治療に寄与する磁気共鳴画像法によるがん診断	朝倉 英男
6-22	HLA・TNF・TCR Vβ 遺伝子解析による新しいがん予防対策	辻 公美
6-23	高悪性度軟部腫瘍に対する治療体系の確立に関する研究	福間 久俊
6-24	小児の難治性白血病および二次性白血病の研究	長尾 大寛
6-25	アルファ放射線の発がんに対する影響に関する研究	奥村 寛
6-26	環境中の変異原・がん原物質の分離同定に関する研究	糠谷 東雄
6-27	地域医療計画からみた地域がん診療施設の整備拡充に関する研究	中條 俊夫
6-28	胃の腸上皮化生における遺伝子変化とそのがん化	田原 榮一
6-29	腫瘍産生サイトカインによるがん患者の病態に関する研究	山口 建
6-30	Interventional Radiologyの手技を用いた治療法の有効性に関する研究	荒井 保明
6-31	胃がん検診における個別検診の精度向上方策に関する研究	有末 太郎
6-32	食道がんの分子生物学的因子を加えた悪性度診断と、それに基づく適切な治療法の研究	加藤 抱一
6-33	進行膵がんに対する非手術療法に関する研究	岡田 周市

(機械開発研究)

5-44	デジタルX線像処理に基づくがん検診用自動スクリーニングシステムの開発	小畑 秀文
5-45	全身に応用可能な定位的放射線治療 (Stereotactic Radiosurgery)装置の開発とその適性線量の研究	吉岡 眞澄

(機械開発研究)

6-34	がんの診断・治療のためのレーザー機器開発	小黒 八七郎
------	----------------------	--------

(指定研究)

4指-1	ヒトがん発生の複数要因の相互作用に関する基礎的・臨床的研究	寺田 雅昭
4指-2	多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究	渡辺 昌
5指-1	固形がんの集学的治療の研究	下山 正徳
5指-2	環境化学物質による発がんの一次予防に関する研究	林 祐造
6指	難治がんの総合的な対策に関する研究	垣添 忠生

平成7年度 18億5000万円 89課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
5-1	肝臓の微小がんに関する基礎的、臨床的研究	坂元 亨宇
5-2	がん対策支援を指向したがん情報ネットワークの構築に関する研究	児玉 哲郎
5-3	地域がん登録の精度向上と活用に関する研究	花井 彩
5-4	骨盤内悪性腫瘍の特性に立脚した骨盤外科の確立に関する研究	北條 慶一
5-5	胆道系及び膵悪性腫瘍に対する拡大手術の根治性と安全性の両立を目指した研究	小菅 智男
5-6	胆道がん、膵頭部がんの拡大切除における根治性と安全性向上に関する研究	羽生 富士夫
(総合研究)		
6-1	胃がんの発生要因解析とその臨床応用に関する研究	吉田 茂昭
6-2	主要がんの全国登録に基づく患者情報の基礎的臨床的解析に関する研究	渡辺 昌
(総合研究)		
7-1	がんの予後因子決定としての遺伝子診断に関する研究	津田 均
7-2	肺腺がんの発生と特性の解析に関する研究	野口 雅之
7-3	非血縁者間移植を中心とした同種造血幹細胞移植によるがん根治療法のシステムの確立と普及に関する研究	小寺 良尚
7-4	がんにおける体腔鏡手術の適応と手術手技の確立に関する研究	成毛 韶夫
(計画研究)		
6-3	大腸がん集団検診の精度向上と評価に関する研究	樋渡 信夫
6-4	C型肝炎ウイルス感染と肝細胞がんの発生に関する研究	井廻 道夫
6-5	進行卵巣がんに対するdose-intensive chemotherapyの有効性に関する研究	恒松 隆一郎
6-6	胃がんに対する拡大手術の評価に関する研究	笹子 充
6-7	膵がん初期像の解明と膵がん発生要因に関する分子生物学的研究	大橋 計彦
6-8	Helicobacter Pyloriと胃がんとの関連性に関する研究	斉藤 大三
6-9	プロトコール研究のための病理診断の精度向上に関する研究	向井 清
6-10	腫瘍マーカーの臨床応用に関する研究	野澤 志朗
6-11	頭頸部がんの境界領域における新しい集学的治療法の開発と評価に関する研究	犬山 征夫
6-12	がん顕在化の抑制に関する研究	福島 昭治
6-13	がんの集学的治療における放射線治療の役割とその効率化の研究	井上 俊彦
6-14	肺門部早期がんの内視鏡放射線治療に関する研究	小野 良祐
6-15	物理的増感作用を利用した新しい放射線治療に関する研究	秋根 康之
6-16	前立腺がんの集団検診の妥当性に関する研究	渡邊 決
6-17	大腸がん肝転移に対する治療体系の確立に関する研究	森 武生
6-18	サイトカインを用いた新しいがん治療法の臨床応用に関する研究	新津 洋司郎
6-19	日常見られるがんの家族内集積性に関する研究	福富 隆志
6-20	各種がん検診の共通問題に関する研究	久道 茂
6-21	治療に寄与する磁気共鳴画像法によるがん診断	朝倉 英男
6-22	HLA・TNF・TCR Vβ 遺伝子解析による新しいがん予防対策	辻 公美
6-23	高悪性度軟部腫瘍に対する治療体系の確立に関する研究	福間 久俊
6-24	小児の難治性白血病および二次性白血病の研究	長尾 大
6-25	アルファ放射線の発がんに対する影響に関する研究	奥村 寛
6-26	環境中の変異原・がん原物質の分離同定に関する研究	糠谷 東雄
6-27	地域医療計画からみた地域がん診療施設の整備拡充に関する研究	中條 俊夫
6-28	胃の腸上皮化生における遺伝子変化とそのがん化	田原 榮一
6-29	腫瘍産生サイトカインによるがん患者の病態に関する研究	山口 建
6-30	Interventional Radiologyの手技を用いた治療法の有効性に関する研究	荒井 保明
6-31	胃がん検診における個別検診の精度向上方策に関する研究	有末 太郎
6-32	食道がんの分子生物学的因子を加えた悪性度診断と、それに基づく適切な治療法の研究	加藤 抱一
6-33	進行膵がんに対する非手術療法に関する研究	岡田 周市
(計画研究)		
7-5	ヒトがんの環境要因と個体特性に関する分子疫学的研究	田島 和雄
7-6	喫煙関連がんの一次予防のための喫煙習慣への介入に関する研究	小川 浩
7-7	超高齢者のがん、特に“天寿がん”に関する研究	北川 知行
7-8	マンモグラフィ導入による乳がん検診の精度管理の確立に関する研究	大内 憲明
7-9	肺がん集団検診及び個別検診の精度管理向上方法に関する研究	金子 昌弘
7-10	動物の遺伝的背景の特徴を活かした発がん機構の解析に関する研究	長尾 美奈子
7-11	実験動物における多段階発がんに関する研究	白井 智之
7-12	消化器がん発生に影響する食品中の要因に関する研究	津田 洋幸
7-13	ヘテロサイクリックアミンの生成阻害及び発がん阻止実験に関する研究	若林 敬二
7-14	発がんプロモーターによる発がん機構とその抑制に関する研究	藤木 博太
7-15	DNA修復調節と発がんに関する研究	三輪 正直
7-16	発がん過程におけるがんと間質の相互作用に関する研究	落合 孝広
7-17	発がん過程におけるApoptosisの役割とその治療への応用に関する研究	若杉 尋
7-18	がんの骨転移の機序の解明とその治療の研究	尾形 悦郎
7-19	糠転移酵素のがん性変化と臨床応用	飯田 静夫
7-20	臨床応用を目指した抗がん剤の生化学的機能修飾による効果増強に関する基礎的研究	佐々木 琢磨
7-21	がんに対する遺伝子治療の臨床応用を目指した基礎的研究	吉田 輝彦



7-22	術前・術後療法の併用による乳房温存療法の適応拡大に関する研究	小山 博記
7-23	高齢者の肺がんの病態に基づいた標準的治療の設定に関する研究	永井 完治
7-24	食道・頭頸部重複がんの実態と第二次がん発生機構の解析に関する研究	渡辺 寛
7-25	頭頸部がん治療後の機能評価に関する研究	浅井 昌大
7-26	がん治療におけるマイクロサージャリーの応用と術後の形態と機能向上に関する研究	波利井 清紀
7-27	非ポリープ性大腸腫瘍性病変の発育・進展に関する研究	武藤 徹一郎
7-28	成人の難治性白血病の分子生物学的機構の解明と薬物療法の確立に関する研究	上田 龍三
7-29	難治性リンパ系腫瘍の分子生物学的機構の解明と治療開発に関する研究	飛内 賢正
7-30	適正ながん化学療法臨床試験を目指した基礎的・臨床的研究	佐々木 康綱
7-31	小児がん治療における自家造血幹細胞移植とパーシングに関する研究	大平 睦郎
7-32	192Ir線源を用いた高線量率密封小線源治療の標準的治療法の確立と適応領域の拡大に関する研究	山下 孝
7-33	荷電粒子線の適応選択法の検討と照射技術開発に関する研究	辻井 博彦
7-34	がんに対する内視鏡的治療法の評価とその適応拡大に関する研究	白尾 国昭
7-35	がん治療の臨床試験におけるインフォームドコンセントの在り方とそれに関連する諸問題の検討	江口 研二
7-36	がん患者の症状緩和に関する研究	志真 泰夫
7-37	がん診療専門施設における修練医師に対する教育システムの確立とその評価に関する研究	土屋 了介
7-38	網膜芽細胞腫患者の眼球温存療法の成績向上に関する研究	金子 明博
7-39	小児悪性脳腫瘍の治療体系の確立に関する研究	松谷 雅生
7-40	進行期悪性黒色腫の新しい治療の開発に関する研究	齋田 俊明
7-41	触治不能前立腺がんの治療方針に関する研究	吉田 修
7-42	四肢悪性骨腫瘍に対する標準的治療法の確立と予後向上に関する研究	別府 保男
7-43	神経膠腫の予後改善のための基礎的・臨床的研究	高倉 公朋

(機械開発研究)

6-34	がんの診断・治療のためのレーザー機器開発	小黒 八七郎
------	----------------------	--------

(機械開発研究)

7-44	多元デジタルX線像処理に基づくがんの画像診断自動化システムの開発に関する研究	鳥脇 純一郎
7-45	全身用定位的放射線治療装置の開発とその適性線量の研究	近藤 達也

(指定研究)

5指-1	固形がんの集学的治療の研究	下山 正徳
5指-2	環境化学物質による発がんの一次予防に関する研究	林 祐造
6指	難治がんの総合的な対策に関する研究	垣添 忠生
7指-1	ヒト発がん要因の相互作用の科学的解明に基づくがん制御に関する研究	広橋 説雄
7指-2	多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究	渡辺 昌

平成8年度 18億5000万円 90課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
6-1	胃がんの発生要因解析とその臨床応用に関する研究	吉田 茂昭
6-2	主要がんの全国登録に基づく患者情報の基礎的臨床的解析に関する研究	渡辺 昌
(総合研究)		
7-1	がんの予後因子決定としての遺伝子診断に関する研究	津田 均
7-2	肺腺がんの発生と特性の解析に関する研究	野口 雅之
7-3	非血縁者間移植を中心とした同種造血幹細胞移植によるがん根治療法のシステムの確立と普及に関する研究	小寺 良尚
7-4	がんにおける体腔鏡手術の適応と手術手技の確立に関する研究	成毛 韶夫
(総合研究)		
8-1	がん情報ネットワークを利用した総合的がん対策支援の具体的方法に関する研究	山口 直人
8-2	地域がん登録の精度向上と活用に関する研究	大島 明
8-3	肝臓の微小がんに関する基礎的、臨床的研究	坂元 亨宇
8-4	胆道領域がんの総合的な治療成績向上を目指した多角的な研究	小菅 智男
8-5	ヘテロサイクリックアミンによる前立腺、膵、大腸、乳腺発がん分子機構に関する研究	若林 敬二
(計画研究)		
7-5	ヒトがんの環境要因と個体特性に関する分子疫学的研究	田島 和雄
7-6	喫煙関連がんの一次予防のための喫煙習慣への介入に関する研究	小川 浩
7-7	超高齢者のがん、特に“天寿がん”に関する研究	北川 知行
7-8	マンモグラフィ導入による乳がん検診の精度管理の確立に関する研究	大内 憲明
7-9	肺がん集団検診及び個別検診の精度管理向上方法に関する研究	金子 昌弘
7-10	動物の遺伝的背景の特徴を活かした発がん機構の解析に関する研究	長尾 美奈子
7-11	実験動物における多段階発がんに関する研究	白井 智之
7-12	消化器がん発生に影響する食品中の要因に関する研究	津田 洋幸
7-13	ヘテロサイクリックアミンの生成阻害及び発がん阻止実験に関する研究	若林 敬二
7-14	発がんプロモーターによる発がん機構とその抑制に関する研究	藤木 博太
7-15	DNA修復調節と発がんに関する研究	三輪 正直
7-16	発がん過程におけるがんと間質の相互作用に関する研究	落合 孝広
7-17	発がん過程におけるApoptosisの役割とその治療への応用に関する研究	若杉 尋
7-18	がんの骨転移の機序の解明とその治療の研究	尾形 悦郎
7-19	糖転移酵素のがん性変化と臨床応用	飯田 静夫
7-20	臨床応用を目指した抗がん剤の生化学的機能修飾による効果増強に関する基礎的研究	佐々木 琢磨
7-21	がんに対する遺伝子治療の臨床応用を目指した基礎的研究	吉田 輝彦
7-22	術前・術後療法併用による乳房温存療法の適応拡大に関する研究	小山 博記
7-23	高齢者の肺がんの病態に基づいた標準的治療の設定に関する研究	永井 完治
7-24	食道・頭頸部重複がんの実態と第二次がん発生機構の解析に関する研究	渡辺 寛
7-25	頭頸部がん治療後の機能評価に関する研究	浅井 昌大
7-26	がん治療におけるマイクロサージャリーの応用と術後の形態と機能向上に関する研究	波利井 清紀
7-27	非ポリープ性大腸腫瘍性病変の発育・進展に関する研究	武藤 徹一郎
7-28	成人の難治性白血病の分子生物学的機構の解明と薬物療法の確立に関する研究	上田 龍三
7-29	難治性リンパ系腫瘍の分子生物学的機構の解明と治療開発に関する研究	飛内 賢正
7-30	適正ながん化学療法臨床試験を目指した基礎的・臨床的研究	佐々木 康綱
7-31	小児がん治療における自家造血幹細胞移植とパーシングに関する研究	大平 睦郎
7-32	192Ir線源を用いた高線量率密封小線源治療の標準的治療法の確立と適応領域の拡大に関する研究	山下 孝
7-33	荷電粒子線の適応選択法の検討と照射技術開発に関する研究	辻井 博彦
7-34	がんに対する内視鏡的治療法の評価とその適応拡大に関する研究	白尾 国昭
7-35	がん治療の臨床試験におけるインフォームドコンセントの在り方とそれに関連する諸問題の検討	江口 研二
7-36	がん患者の症状緩和に関する研究	志真 泰夫
7-37	がん診療専門施設における修練医師に対する教育システムの確立とその評価に関する研究	土屋 了介
7-38	網膜芽細胞腫患者の眼球温存療法の成績向上に関する研究	金子 明博
7-39	小児悪性脳腫瘍の治療体系の確立に関する研究	松谷 雅生
7-40	進行期悪性黒色腫の新しい治療の開発に関する研究	斎田 俊明
7-41	触治不能前立腺がんの治療方針に関する研究	吉田 修
7-42	四肢悪性骨腫瘍に対する標準的治療法の確立と予後向上に関する研究	別府 保男
7-43	神経膠腫の予後改善のための基礎的・臨床的研究	高倉 公朋
(計画研究)		
8-6	がんの家族内集積性に関する研究	野口 眞三郎
8-7	胃がん検診における個別検診の精度向上方策に関する研究	有末 太郎
8-8	大腸がん集団検診の精度向上と評価に関する研究	樋渡 信夫
8-9	前立腺がんの集団検診の妥当性に関する研究	渡邊 決
8-10	各種がん検診の共通問題と総合検診に関する研究	深尾 彰
8-11	がん顕在化の抑制に関する研究	福島 昭治
8-12	地域医療計画からみた地域がん診療施設の整備拡充に関する研究	佐々木 壽英
8-13	食道がん治療法の縮小に関する研究	加藤 抱一
8-14	ヘリコバクター感染と胃がん、胃悪性リンパ腫の関連、予防に関する研究	杉山 敏郎
8-15	胃がんに対する拡大手術の評価に関する研究	笹子 充

8-16	C型肝炎ウイルス感染による肝細胞がんの発生の予防と治療に関する研究	井廻 道夫
8-17	進行膵がんに対する非手術療法に関する研究	岡田 周市
8-18	遺伝子解析に基づいた膵がんの早期診断と治療の開発に関する研究	近藤 仁
8-19	膵がんの病態解明に基づく外科手術の適応と限界に関する研究	熊田 馨
8-20	大腸がん肝転移に対する集学的治療法の開発と評価に関する研究	森 武生
8-21	小児の難治性白血病、二次性白血病の治療法の確立に関する研究	月本 一郎
8-22	進行卵巣がんに対するdose-intensive chemotherapyの有効性に関する研究	恒松 隆一郎
8-23	頭頸部がんの頸部リンパ節転移に対する標準的治療法の確立に関する研究	真島 一彦
8-24	高悪性度軟部腫瘍の診断と治療の確立に関する研究	石井 清一
8-25	画像診断に基づく肺がん、消化器がんのclinical stagingの確立と治療適応の評価に関する研究	森山 紀之
8-26	Interventional radiologyの手技を用いた治療法の有効性に関する研究	荒井 保明
8-27	各種放射線治療の適応と精度管理に関する研究	阿部 光幸
8-28	増感剤を利用した放射線治療の開発に関する研究	西尾 正道
8-29	高齢者がんに対する放射線治療の適応に関する研究	池田 恢
8-30	新しいサイトカインによるがん治療に関する研究	西條 長宏
8-31	臨床治療のための悪性腫瘍の病理診断の精度向上に関する研究	下田 忠和
8-32	腫瘍マーカーの開発と臨床応用に関する研究	神奈木 玲児
8-33	腫瘍産生サイトカインによるがん患者の病態に関する研究	山口 健
8-34	新しい変異原・発がん物質の分離同定に関する研究	木苗 直秀
8-35	放射線暴露の発がんに及ぼす影響とその分子機構の研究	丹羽 太貫
8-36	白血病における転写遺伝子異常による表現形質の変化とその臨床的意義に関する研究	大木 操
8-37	胃の腸上皮化生の遺伝子異常とそのがん化	田原 榮一
8-38	トランスジェニック動物における発がんに関する研究	牛島 俊和
(機械開発研究)		
7-44	多元デジタルX線像処理に基づくがんの画像診断自動化システムの開発に関する研究	鳥脇 純一郎
7-45	全身用定位的放射線治療装置の開発とその適性線量の研究	近藤 達也
(機械開発研究)		
8-39	がんの診断治療用光学機器の開発	田尻 久雄
(指定研究)		
6指	難治がんの総合的な対策に関する研究	垣添 忠生
7指-1	ヒト発がん要因の相互作用の科学的解明に基づくがん制御に関する研究	広橋 説雄
7指-2	多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究	渡辺 昌
8指-1	固形がんの集学的治療の研究	下山 正徳
8指-2	動物による発がん性評価のための新手法の確立とその意義に関する研究	黒川 雄二

平成9年度 18億5000万円 89課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
7-1	がんの予後因子決定としての遺伝子診断に関する研究	津田 均
7-2	肺腺がんの発生と特性の解析に関する研究	野口 雅之
7-3	非血縁者間移植を中心とした同種造血幹細胞移植によるがん根治療法のシステムの確立と普及に関する研究	小寺 良尚
7-4	がんにおける体腔鏡手術の適応と手術手技の確立に関する研究	成毛 韶夫
(総合研究)		
8-1	がん情報ネットワークを利用した総合的がん対策支援の具体的方法に関する研究	山口 直人
8-2	地域がん登録の精度向上と活用に関する研究	大島 明
8-3	肝臓の微小がんに関する基礎的、臨床的研究	坂元 亨宇
8-4	胆道領域がんの総合的な治療成績向上を目指した多角的な研究	小菅 智男
8-5	ヘテロサイクリックアミンによる前立腺、膵、大腸、乳腺発がん分子機構に関する研究	若林 敬二
(総合研究)		
9-1	主要がんの全国登録に基づく患者情報の解析と活用に関する研究	児玉 哲郎
9-2	がんの成人難治性白血病に対する治療法の開発と標準的治療法確立に関する研究	大野 竜三
9-3	胃がんの発生・進展に関わる要因の把握とその診療への応用に関する研究	松倉 則夫
(計画研究)		
8-6	がんの家族内集積性に関する研究	野口 眞三郎
8-7	胃がん検診における個別検診の精度向上方策に関する研究	有末 太郎
8-8	大腸がん集団検診の精度向上と評価に関する研究	樋渡 信夫
8-9	前立腺がんの集団検診の妥当性に関する研究	渡邊 決
8-10	各種がん検診の共通問題と総合検診に関する研究	深尾 彰
8-11	がん顕在化の抑制に関する研究	福島 昭治
8-12	地域医療計画からみた地域がん診療施設の整備拡充に関する研究	佐々木 壽英
8-13	食道がん治療法の縮小に関する研究	加藤 抱一
8-14	ヘリコバクター感染と胃がん、胃悪性リンパ腫の関連、予防に関する研究	杉山 敏郎
8-15	胃がんに対する拡大手術の評価に関する研究	笹子 充
8-16	C型肝炎ウイルス感染による肝細胞がんの発生の予防と治療に関する研究	井廻 道夫
8-17	進行膵がんに対する非手術療法に関する研究	岡田 周市
8-18	遺伝子解析に基づいた膵がんの早期診断と治療の開発に関する研究	近藤 仁
8-19	膵がんの病態解明に基づく外科手術の適応と限界に関する研究	熊田 馨
8-20	大腸がん肝転移に対する集学的治療法の開発と評価に関する研究	森 武生
8-21	小児の難治性白血病、二次性白血病の治療法の確立に関する研究	月本 一郎
8-22	進行卵巣がんに対するdose-intensive chemotherapyの有効性に関する研究	恒松 隆一郎
8-23	頭頸部がんの頸部リンパ節転移に対する標準的治療法の確立に関する研究	真島 一彦
8-24	高悪性度軟部腫瘍の診断と治療の確立に関する研究	石井 清一
8-25	画像診断に基づく肺がん、消化器がんのclinical stagingの確立と治療適応の評価に関する研究	森山 紀之
8-26	Interventional radiologyの手技を用いた治療法の有効性に関する研究	荒井 保明
8-27	各種放射線治療の適応と精度管理に関する研究	阿部 光幸
8-28	増感剤を利用した放射線治療の開発に関する研究	西尾 正道
8-29	高齢者がんに対する放射線治療の適応に関する研究	池田 恢
8-30	新しいサイトカインによるがん治療に関する研究	西條 長宏
8-31	臨床治療のための悪性腫瘍の病理診断の精度向上に関する研究	下田 忠和
8-32	腫瘍マーカーの開発と臨床応用に関する研究	神奈木 玲児
8-33	腫瘍産生サイトカインによるがん患者の病態に関する研究	山口 健
8-34	新しい変異原・発がん物質の分離同定に関する研究	木苗 直秀
8-35	放射線暴露の発がんに及ぼす影響とその分子機構の研究	丹羽 太貫
8-36	白血病における転写遺伝子異常による表現形質の変化とその臨床的意義に関する研究	大木 操
8-37	胃の腸上皮化生の遺伝子異常とそのがん化	田原 榮一
8-38	トランスジェニック動物における発がんに関する研究	牛島 俊和
(計画研究)		
9-4	がん一次予防のための生活習慣への効果的な介入に関する研究	徳留 伸寛
9-5	喫煙関連がんの一次予防のための喫煙習慣への介入方法の確立に関する研究	中村 正和
9-6	マンモグラフィを導入した乳がん検診システムの確立に関する研究	大内 憲明
9-7	肺がん検診の効果の判定とその評価方法に関する研究	藤村 重文
9-8	血清ペプシノゲン値による胃がんスクリーニングに関する研究	三木 一正
9-9	がん診療専門施設における修練医師に対する教育システムの確立に関する研究	土屋 了介
9-10	難治性リンパ系腫瘍の分子生物学的特徴の把握と治療開発に関する研究	飛内 賢正
9-11	小児がん治療における造血幹細胞移植法の開発に関する研究	大平 睦郎
9-12	小児悪性脳腫瘍の治療体系の確立に関する研究	松谷 雅正
9-13	神経膠腫の予後改善のための基礎的・臨床的研究	高倉 公朋
9-14	新国際分類を用いた神経芽腫の標準的治療法の確立に関する研究	土田 嘉昭
9-15	眼部悪性腫瘍の眼球保存的治療法の開発に関する研究	敷島 敬悟
9-16	咽頭がんの標準的治療法の確立に関する研究	斉川 雅久
9-17	がん治療におけるマイクロサージャリーの確立に関する研究	野崎 幹弘
9-18	微小肺がんの診断および治療法の開発に関する研究	西脇 祐

9-19	術前術後療法の併用による乳房温存療法の適応拡大と再発に予防に関する研究	坂元 吾偉
9-20	触治不能前立腺がんの治療方針に関する研究	吉田 修
9-21	四肢悪性腫瘍骨腫瘍に対する標準的治療法の確立と予後向上に関する研究	別府 保男
9-22	がんの骨転移機序の解明と骨転移の予防および治療法の開発	松本 俊夫
9-23	進行期悪性黒色腫の新しい治療の開発に関する研究	斎田 俊明
9-24	がんに対する内視鏡的治療法の評価とその適応拡大に関する研究	白尾 国昭
9-25	適性ながん化学療法を指向した薬物動態の解析に関する研究	田村 友秀
9-26	荷電粒子線によるがんの治療の精度向上と適正な運用に関する研究	辻井 博彦
9-27	<sup>192</sup> Ir密封小線源によるがん治療の評価に関する研究	土器屋 卓志
9-28	超高齢者のがんの病態に関する研究	北川 知行
9-29	高齢者肺がんの病態に基づいた標準的治療の設定に関する研究	永井 完治
9-30	高齢がん患者の新しい周術期管理に関する研究	高地 哲夫
9-31	がん患者の精神症状発現要因の解析とその対応に関する研究	内富 庸介
9-32	終末期がん患者の病態解明に基づいた症状緩和に関する研究	平賀 一陽
9-33	消化器がん発生に影響する食品中の要因に関する研究	朝元 誠人
9-34	表面型大腸腫瘍の発育・進展に関する基礎的・臨床的研究	渡辺 英伸
9-35	動物の遺伝的背景の特徴を活かした発がん機構の解析に関する研究	中釜 齊
9-36	実験動物における多段階発がんの研究	立松 正衛
9-37	発がんプロモーター作用の抑制に関する研究	赤座 英之
9-38	DNA修復と発がんに関する研究	三輪 正直
9-39	発がん過程におけるがんと間質の相互作用に関する研究	落合 孝広
9-40	発がん過程におけるアポトーシスの役割とその治療への応用に関する研究	若杉 尋
9-41	がんに対する複合的遺伝子治療の基礎的研究	浅野 茂隆
 (機械開発研究)		
8-39	がんの診断治療用光学機器の開発	田尻 久雄
 (機械開発研究)		
9-42	多元デジタル映像処理に基づくがんの画像自動診断システムの開発に関する研究	鳥脇 純一郎
9-43	全身用定位的放射線治療装置の開発とその適性線量の研究	近藤 達也
 (指定研究)		
7指-1	ヒト発がん要因の相互作用の科学的解明に基づくがん制御に関する研究	広橋 説雄
7指-2	多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究	渡辺 昌
8指-1	固形がんの集学的治療の研究	下山 正徳
8指-2	動物による発がん性評価のための新手法の確立とその意義に関する研究	黒川 雄二
9指	難治がんの総合的な対策に関する研究	垣添 忠生

平成10年度 18億5000万円 91課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
8-1	がん情報ネットワークを利用した総合的がん対策支援の具体的方法に関する研究	山口 直人
8-2	地域がん登録の精度向上と活用に関する研究	大島 明
8-3	肝臓の微小がんに関する基礎的、臨床的研究	坂元 亨宇
8-4	胆道領域がんの総合的な治療成績向上を目指した多角的な研究	小菅 智男
8-5	ヘテロサイクリックアミンによる前立腺、膵、大腸、乳腺発がん分子機構に関する研究	若林 敬二
(総合研究)		
9-1	主要がんの全国登録に基づく患者情報の解析と活用に関する研究	児玉 哲郎
9-2	がんの成人難治性白血病に対する治療法の開発と標準的治療法確立に関する研究	大野 竜三
9-3	胃がんの発生・進展に関わる要因の把握とその診療への応用に関する研究	松倉 則夫
(総合研究)		
10-1	非血縁者間の同種血液幹細胞移植法による悪性腫瘍の治癒率向上に関する研究	小寺 良尚
10-2	がんにおける体腔鏡手術の評価と適応拡大に関する研究	成毛 韶夫
10-3	がんの予後因子および治療適応決定のための遺伝子診断に関する研究	津田 均
10-4	肺腺がんの発生と特性の解析に関する研究	横田 淳
(計画研究)		
9-4	がん一次予防のための生活習慣への効果的な介入に関する研究	徳留 伸寛
9-5	喫煙関連がんの一次予防のための喫煙習慣への介入方法の確立に関する研究	中村 正和
9-6	マンモグラフィを導入した乳がん検診システムの確立に関する研究	大内 憲明
9-7	肺がん検診の効果の判定とその評価方法に関する研究	藤村 重文
9-8	血清ペプシノゲン値による胃がんスクリーニングに関する研究	三木 一正
9-9	がん診療専門施設における修練医師に対する教育システムの確立に関する研究	土屋 了介
9-10	難治性リンパ系腫瘍の分子生物学的特徴の把握と治療開発に関する研究	飛内 賢正
9-11	小児がん治療における造血幹細胞移植法の開発に関する研究	大平 睦郎
9-12	小児悪性脳腫瘍の治療体系の確立に関する研究	松谷 雅正
9-13	神経膠腫の予後改善のための基礎的・臨床的研究	高倉 公朋
9-14	新国際分類を用いた神経芽腫の標準的治療法の確立に関する研究	土田 嘉昭
9-15	眼部悪性腫瘍の眼球保存的治療法の開発に関する研究	敷島 敬悟
9-16	咽頭がんの標準的治療法の確立に関する研究	斉川 雅久
9-17	がん治療におけるマイクロサージャリーの確立に関する研究	野崎 幹弘
9-18	微小肺がんの診断および治療法の開発に関する研究	西脇 祐
9-19	術前術後療法併用による乳房温存療法の適応拡大と再発に予防に関する研究	坂元 吾偉
9-20	触治不能前立腺がんの治療方針に関する研究	吉田 修
9-21	四肢悪性腫瘍骨腫瘍に対する標準的治療法の確立と予後向上に関する研究	別府 保男
9-22	がんの骨転移機序の解明と骨転移の予防および治療法の開発	松本 俊夫
9-23	進行期悪性黒色腫の新しい治療の開発に関する研究	斎田 俊明
9-24	がんに対する内視鏡的治療法の評価とその適応拡大に関する研究	白尾 国昭
9-25	適性ながん化学療法を指向した薬物動態の解析に関する研究	田村 友秀
9-26	荷電粒子線によるがんの治療の精度向上と適正な運用に関する研究	辻井 博彦
9-27	<sup>192</sup> Ir密封小線源によるがん治療の評価に関する研究	土器屋 卓志
9-28	超高齢者のがんの病態に関する研究	北川 知行
9-29	高齢者肺がんの病態に基づいた標準的治療の設定に関する研究	永井 完治
9-30	高齢がん患者の新しい周術期管理に関する研究	高地 哲夫
9-31	がん患者の精神症状発現要因の解析とその対応に関する研究	内富 庸介
9-32	終末期がん患者の病態解明に基づいた症状緩和に関する研究	平賀 一陽
9-33	消化器がん発生に影響する食品中の要因に関する研究	朝元 誠人
9-34	表面型大腸腫瘍の発育・進展に関する基礎的・臨床的研究	渡辺 英伸
9-35	動物の遺伝的背景の特徴を活かした発がん機構の解析に関する研究	中釜 斉
9-36	実験動物における多段階発がんの研究	立松 正衛
9-37	発がんプロモーター作用の抑制に関する研究	赤座 英之
9-38	DNA修復と発がんに関する研究	三輪 正直
9-39	発がん過程におけるがんと間質の相互作用に関する研究	落合 孝広
9-40	発がん過程におけるアポトーシスの役割とその治療への応用に関する研究	若杉 尋
9-41	がんに対する複合的遺伝子治療の基礎的研究	浅野 茂隆
(計画研究)		
10-5	地域がん専門診療施設のソフト面の整備拡充に関する研究	佐々木 壽英
10-6	大腸がん検診の合理的な精検方法に関する臨床疫学的研究	斎藤 博
10-7	頭頸部がんの頸部リンパ節転移に対する標準的治療法の確立に関する研究	岸本 誠司
10-8	Stage I (T1N0M0)食道がんに対する、放射線・抗がん剤同時併用療法の有用性に関する研究	日月 祐司
10-9	ヘリコバクター感染の胃がん、胃悪性リンパ腫発生の関与に関する研究	斉藤 大三
10-10	胃がんに対する拡大手術の評価に関する研究	佐野 武
10-11	大腸がんの肝・肺転移例に対する治療法の確立に関する研究	加藤 知行
10-12	婦人科悪性腫瘍に対する新たな治療法の開発に関する研究	吉川 裕之
10-13	小児の難治性白血病、二次性白血病の治療法の開発の確立に関する研究	月本 一郎
10-14	乳がん、大腸がんの家族内集積性に関する研究	野口 眞三郎

10-15	画像診断に基づく肺がん、消化器がんのclinical stagingの確立と治療適応の評価に関する研究	森山 紀之
10-16	IVRの標準化の為の画像診断の研究	佐竹 光夫
10-17	放射線治療システムの精度管理と臨床評価に関する研究	井上 俊彦
10-18	化学療法剤の増感性を用いた放射線治療の開発に関する研究	酒井 邦夫
10-19	高齢者がんに対する放射線治療の適応に関する研究	池田 恢
10-20	新しいサイトカインによるがん治療に関する研究	西條 長宏
10-21	高悪性度軟部腫瘍の診断と治療の確立に関する研究	石井 清一
10-22	分子生物学的解析に基づいた膵がんの初期診断と治療の開発に関する研究	近藤 仁
10-23	共通プロトコールに基づいた膵がん外科的療法の評価に関する研究	二村 雄次
10-24	共通プロトコールによる膵がん治療の評価	今村 正之
10-25	消化管悪性リンパ腫に対する非外科的治療の適応と有効性の評価に関する研究	大津 敦
10-26	臨床治療のための悪性腫瘍の病理診断の精度向上に関する研究	下田 忠和
10-27	腫瘍マーカーの開発とがん病態診断への応用に関する研究	神奈木 玲児
10-28	増殖因子、サイトカインによるがん病態の修飾に関する研究	塚田 俊彦
10-29	水中の新しい変異原・発がん物質の検索と分布および除去に関する研究	木苗 直秀
10-30	放射線曝露の発がんに及ぼす影響とその分子機構の研究	丹羽 太貫
10-31	白血病における転写因子遺伝子異常による表現形質の変化とその臨床的意義に関する研究	大木 操
10-32	食道および胃の前がん性病変に関する分子病理学的研究	安井 弥
10-33	トランスジェニック動物における発がんに関する研究	牛島 俊和
10-34	乳がん、前立腺がんの内分泌治療抵抗性獲得の機序の解明と治療への応用	園尾 博司
10-35	肝炎ウイルス感染による肝細胞がん発生の抑制に関する研究	小林 健一
10-36	発がんにおける炎症の役割に関する研究	江角 浩安
(機械開発研究)		
9-42	多元デジタル映像処理に基づくがんの画像自動診断システムの開発に関する研究	鳥脇 純一郎
9-43	全身用定位的放射線治療装置の開発とその適性線量の研究	近藤 達也
(機械開発研究)		
10-37	がんの診断治療用光学機器の開発	田尻 久雄
(指定研究)		
8指-1	固形がんの集学的治療の研究	下山 正徳
8指-2	動物による発がん性評価のための新手法の確立とその意義に関する研究	黒川 雄二
9指	難治がんの総合的な対策に関する研究	垣添 忠生
10指-1	ヒト発がん要因の相互作用の解明に基づくがん制御に関する研究	広橋 説雄
10指-2	多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究	津金 昌一郎
10指-3	本邦におけるがん医療の適正化に関する研究	山口 健

平成11年度 18億5000万円 95課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
8-1	がん情報ネットワークを利用した総合的がん対策支援の具体的方法に関する研究	山口 直人
8-2	地域がん登録の精度向上と活用に関する研究	大島 明
8-5	ヘテロサイクリックアミンによる前立腺、膵、大腸、乳腺発がん分子機構に関する研究	若林 敬二
(総合研究)		
9-1	主要がんの全国登録に基づく患者情報の解析と活用に関する研究	児玉 哲郎
9-2	がんの成人難治性白血病に対する治療法の開発と標準的治療法確立に関する研究	大野 竜三
9-3	胃がんの発生・進展に関わる要因の把握とその診療への応用に関する研究	松倉 則夫
(総合研究)		
10-1	非血縁者間の同種血液幹細胞移植法による悪性腫瘍の治癒率向上に関する研究	小寺 良尚
10-2	がんにおける体腔鏡手術の評価と適応拡大に関する研究	成毛 韶夫
10-3	がんの予後因子および治療適応決定のための遺伝子診断に関する研究	津田 均
10-4	肺腺がんの発生と特性の解析に関する研究	横田 淳
(計画研究)		
9-4	がん一次予防のための生活習慣への効果的な介入に関する研究	徳留 伸寛
9-5	喫煙関連がんの一次予防のための喫煙習慣への介入方法の確立に関する研究	中村 正和
9-7	肺がん検診の効果の判定とその評価方法に関する研究	藤村 重文
9-8	血清ペプシノゲン値による胃がんスクリーニングに関する研究	三木 一正
9-14	新国際分類を用いた神経芽腫の標準的治療法の確立に関する研究	土田 嘉昭
9-15	眼部悪性腫瘍の眼球保存的治療法の開発に関する研究	敷島 敬悟
9-16	咽頭がんの標準的治療法の確立に関する研究	斉川 雅久
9-17	がん治療におけるマイクロサージャリーの確立に関する研究	野崎 幹弘
9-18	微小肺がんの診断および治療法の開発に関する研究	西脇 祐
9-19	術前術後療法併用による乳房温存療法の適応拡大と再発に予防に関する研究	坂元 吾偉
9-22	がんの骨転移機序の解明と骨転移の予防および治療法の開発	松本 俊夫
9-25	適性ながん化学療法を指向した薬物動態の解析に関する研究	田村 友秀
9-27	192Ir密封小線源によるがん治療の評価に関する研究	土器屋 卓志
9-31	がん患者の精神症状発現要因の解析とその対応に関する研究	内富 庸介
9-33	消化器がん発生に影響する食品中の要因に関する研究	朝元 誠人
9-34	表面型大腸腫瘍の発育・進展に関する基礎的・臨床的研究	渡辺 英伸
9-35	動物の遺伝的背景の特徴を活かした発がん機構の解析に関する研究	中釜 斉
9-36	実験動物における多段階発がんの研究	立松 正衛
9-37	発がんプロモーター作用の抑制に関する研究	赤座 英之
9-41	がんに対する複合的遺伝子治療の基礎的研究	浅野 茂隆
(計画研究)		
10-5	地域がん専門診療施設のソフト面の整備拡充に関する研究	佐々木 壽英
10-6	大腸がん検診の合理的な精検方法に関する臨床疫学的研究	斎藤 博
10-7	頭頸部がんの頸部リンパ節転移に対する標準的治療法の確立に関する研究	岸本 誠司
10-8	Stage I (T1N0M0)食道がんに対する、放射線・抗がん剤同時併用療法の有用性に関する研究	日月 祐司
10-9	ヘリコバクター感染の胃がん、胃悪性リンパ腫発生の関与に関する研究	斉藤 大三
10-10	胃がんに対する拡大手術の評価に関する研究	佐野 武
10-11	大腸がんの肝・肺転移例に対する治療法の確立に関する研究	加藤 知行
10-12	婦人科悪性腫瘍に対する新たな治療法の開発に関する研究	吉川 裕之
10-13	小児の難治性白血病、二次性白血病の治療法の開発の確立に関する研究	月本 一郎
10-14	乳がん、大腸がんの家族内集積性に関する研究	野口 眞三郎
10-15	画像診断に基づく肺がん、消化器がんのclinical stagingの確立と治療適応の評価に関する研究	森山 紀之
10-16	IVRの標準化の為の画像診断の研究	佐竹 光夫
10-17	放射線治療システムの精度管理と臨床評価に関する研究	井上 俊彦
10-18	化学療法剤の増感性を用いた放射線治療の開発に関する研究	酒井 邦夫
10-19	高齢者ががんに対する放射線治療の適応に関する研究	池田 恢
10-20	新しいサイトカインによるがん治療に関する研究	西條 長宏
10-21	高悪性度軟部腫瘍の診断と治療の確立に関する研究	石井 清一
10-22	分子生物学的解析に基づいた膵がんの初期診断と治療の開発に関する研究	近藤 仁
10-23	共通プロトコールに基づいた膵がん外科的療法の評価に関する研究	二村 雄次
10-24	共通プロトコールによる膵がん治療の評価	今村 正之
10-25	消化管悪性リンパ腫に対する非外科的治療の適応と有効性の評価に関する研究	大津 敦
10-26	臨床治療のための悪性腫瘍の病理診断の精度向上に関する研究	下田 忠和
10-27	腫瘍マーカーの開発とがん病態診断への応用に関する研究	神奈木 玲児
10-28	増殖因子、サイトカインによるがん病態の修飾に関する研究	塚田 俊彦
10-29	水中の新しい変異原・発がん物質の検索と分布および除去に関する研究	木苗 直秀
10-30	放射線曝露の発がんに及ぼす影響とその分子機構の研究	丹羽 太貫
10-31	白血病における転写因子遺伝子異常による表現形質の変化とその臨床的意義に関する研究	大木 操
10-32	食道および胃の前がん性病変に関する分子病理学的研究	安井 弥
10-33	トランスジェニック動物における発がんに関する研究	牛島 俊和
10-34	乳がん、前立腺がんの内分泌治療抵抗性獲得の機序の解明と治療への応用	園尾 博司



10-35	肝炎ウイルス感染による肝細胞がん発生の抑制に関する研究	小林 健一
10-36	発がんにおける炎症の役割に関する研究	江角 浩安
(計画研究)		
11-1	高リスクがん患者の安全な周術期管理法の確立を目指した研究	西野 卓
11-2	終末期がん患者に対する支持療法の適応に関する研究	安達 勇
11-3	がん診療専門施設における修練医師に対する総合的教育・研修システムの確立	江口 研二
11-4	胆道領域がんの切除手術における根治性の向上と合併症の予防対策に関する研究	川崎 誠治
11-5	原発性悪性骨腫瘍に対する標準的治療法の開発と治療成績の改善に関する研究	岩本 幸英
11-6	荷電粒子線を用いたがん治療の臨床応用に関する研究	荻野 尚
11-7	新しい技術を導入した悪性黒色腫の診断と治療法の確立に関する研究	山本 明史
11-8	難治性リンパ系腫瘍の分子生物学的特徴の解明と疾患特異的治療法の開発に関する研究	上田 龍三
11-9	神経腫瘍の標準的治療の確立に関する研究	野村 和弘
11-10	良好な生検所見を有する限局性前立腺がんの臨床的追跡を基礎とした病態に関する研究	筧 善行
11-11	発がんにおけるDNA修復機構の関与についての研究	石川 隆俊
11-12	発がん過程におけるがんと間質の相互作用に関する研究	落合 淳志
11-13	発がん過程におけるアポトーシスの役割とその治療への応用に関する研究	白井 智之
11-14	50歳未満の適正な乳がん検診のあり方に関する研究	遠藤 登喜子
11-15	肝細胞がんに対する肝動脈塞栓療法の延命効果に関する研究	岡田 周市
11-16	腫瘍抗原ペプチドを標的としたワクチン細胞療法に関する研究	高上 洋一
11-17	がん細胞の分子誘導機構を基盤とする新しいがん治療法の開発に関する研究	斎藤 政樹
11-18	内分泌かく乱化学物質の発がんへの関与に関する研究	津田 洋幸
11-19	神経内分泌学的な特性をもった肺がんの病態の把握と手術適応に関する研究	浅村 尚生
11-20	がん生存者の社会的適応に関する研究	山口 建
11-21	遺伝性腫瘍の遺伝子診断の実施方法とその評価に関する研究	菅野 康吉
(機械開発研究)		
10-37	がんの診断治療用光学機器の開発	田尻 久雄
(機械開発研究)		
11-22	多元デジタル映像の認識と可視化に基づくがんの自動診断システムの開発に関する研究	長谷川 純一
11-23	全身用定位的放射線治療装置の開発とその適性線量の研究	伊丹 純
(指定研究)		
9指	難治がんの総合的な対策に関する研究	垣添 忠生
10指-1	ヒト発がん要因の相互作用の解明に基づくがん制御に関する研究	広橋 説雄
10指-2	多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究	津金 昌一郎
10指-3	本邦におけるがん医療の適正化に関する研究	山口 健
11指-1	高感受性悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	堀田 知光
11指-2	呼吸器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	西條 長宏
11指-3	消化器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	吉田 茂昭
11指-4	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究	下山 正徳
11指-5	動物による発がん性評価のための新手法の確立とその意義に関する研究	黒川 雄二

平成12年度 18億5000万円 96課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
8-1	がん情報ネットワークを利用した総合的がん対策支援の具体的方法に関する研究	山口 直人
8-2	地域がん登録の精度向上と活用に関する研究	大島 明
8-5	ヘテロサイクリックアミンによる前立腺、膵、大腸、乳腺発がん分子機構に関する研究	若林 敬二
(総合研究)		
9-1	主要がんの全国登録に基づく患者情報の解析と活用に関する研究	児玉 哲郎
9-2	がんの成人難治性白血病に対する治療法の開発と標準的治療法確立に関する研究	大野 竜三
9-3	胃がんの発生・進展に関わる要因の把握とその診療への応用に関する研究	松倉 則夫
(総合研究)		
10-1	非血縁者間の同種血液幹細胞移植法による悪性腫瘍の治癒率向上に関する研究	小寺 良尚
10-2	がんにおける体腔鏡手術の評価と適応拡大に関する研究	成毛 韶夫
10-3	がんの予後因子および治療適応決定のための遺伝子診断に関する研究	津田 均
10-4	肺腺がんの発生と特性の解析に関する研究	横田 淳
(計画研究)		
9-4	がん一次予防のための生活習慣への効果的な介入に関する研究	徳留 伸寛
9-5	喫煙関連がんの一次予防のための喫煙習慣への介入方法の確立に関する研究	中村 正和
9-7	肺がん検診の効果の判定とその評価方法に関する研究	藤村 重文
9-8	血清ペプシノゲン値による胃がんスクリーニングに関する研究	三木 一正
9-14	新国際分類を用いた神経芽腫の標準的治療法の確立に関する研究	土田 嘉昭
9-15	眼部悪性腫瘍の眼球保存的治療法の開発に関する研究	敷島 敬悟
9-16	咽頭がんの標準的治療法の確立に関する研究	斉川 雅久
9-17	がん治療におけるマイクロサージャリーの確立に関する研究	野崎 幹弘
9-18	微小肺がんの診断および治療法の開発に関する研究	西脇 祐
9-19	術前術後療法併用による乳房温存療法の適応拡大と再発に予防に関する研究	坂元 吾偉
9-22	がんの骨転移機序の解明と骨転移の予防および治療法の開発	松本 俊夫
9-25	適性ながん化学療法を指向した薬物動態の解析に関する研究	田村 友秀
9-27	192Ir密封小線源によるがん治療の評価に関する研究	土器屋 卓志
9-31	がん患者の精神症状発現要因の解析とその対応に関する研究	内富 庸介
9-33	消化器がん発生に影響する食品中の要因に関する研究	朝元 誠人
9-34	表面型大腸腫瘍の発育・進展に関する基礎的・臨床的研究	渡辺 英伸
9-35	動物の遺伝的背景の特徴を活かした発がん機構の解析に関する研究	中釜 斉
9-36	実験動物における多段階発がんの研究	立松 正衛
9-37	発がんプロモーター作用の抑制に関する研究	赤座 英之
9-41	がんに対する複合的遺伝子治療の基礎的研究	浅野 茂隆
(計画研究)		
10-6	大腸がん検診の合理的な精検方法に関する臨床疫学的研究	斎藤 博
10-7	頭頸部がんの頸部リンパ節転移に対する標準的治療法の確立に関する研究	岸本 誠司
10-8	Stage I (T1N0M0)食道がんに対する、放射線・抗がん剤同時併用療法の有用性に関する研究	日月 祐司
10-9	ヘリコバクター感染の胃がん、胃悪性リンパ腫発生の関与に関する研究	斉藤 大三
10-10	胃がんに対する拡大手術の評価に関する研究	佐野 武
10-11	大腸がんの肝・肺転移例に対する治療法の確立に関する研究	加藤 知行
10-12	婦人科悪性腫瘍に対する新たな治療法の開発に関する研究	吉川 裕之
10-16	IVRの標準化の為に画像診断の研究	佐竹 光夫
10-17	放射線治療システムの精度管理と臨床評価に関する研究	井上 俊彦
10-23	共通プロトコールに基づいた膵がん外科的療法の評価に関する研究	二村 雄次
10-24	共通プロトコールによる膵がん治療の評価	今村 正之
10-25	消化管悪性リンパ腫に対する非外科的治療の適応と有効性の評価に関する研究	大津 敦
10-28	増殖因子、サイトカインによるがん病態の修飾に関する研究	塚田 俊彦
10-32	食道および胃の前がん性病変に関する分子病理学的研究	安井 弥
10-35	肝炎ウイルス感染による肝細胞がん発生の抑制に関する研究	小林 健一
10-36	発がんにおける炎症の役割に関する研究	江角 浩安
(計画研究)		
11-1	高リスクがん患者の安全な周術期管理法の確立を目指した研究	西野 卓
11-2	終末期がん患者に対する支持療法の適応に関する研究	安達 勇
11-3	がん診療専門施設における修練医師に対する総合的教育・研修システムの確立	江口 研二
11-4	胆道領域がんの切除手術における根治性の向上と合併症の予防対策に関する研究	川崎 誠治
11-5	原発性悪性骨腫瘍に対する標準的治療法の開発と治療成績の改善に関する研究	岩本 幸英
11-6	荷電粒子線を用いたがん治療の臨床応用に関する研究	荻野 尚
11-7	新しい技術を導入した悪性黒色腫の診断と治療法の確立に関する研究	山本 明史
11-8	難治性リンパ系腫瘍の分子生物学的特徴の解明と疾患特異的治療法の開発に関する研究	上田 龍三
11-9	神経膠腫の標準的治療法の確立に関する研究	野村 和弘
11-10	良好な生検所見を有する限局性前立腺がんの臨床的追跡を基礎とした病態に関する研究	筧 善行
11-11	発がんにおけるDNA修復機構の関与についての研究	石川 隆俊
11-12	発がん過程におけるがんと間質の相互作用に関する研究	落合 淳志
11-13	発がん過程におけるアポトーシスの役割とその治療への応用に関する研究	白井 智之

11-14	50歳未満の適正な乳がん検診のあり方に関する研究	遠藤 登喜子
11-15	肝細胞がんに対する肝動脈塞栓療法 of 延命効果に関する研究	岡田 周市
11-16	腫瘍抗原ペプチドを標的としたワクチン細胞療法に関する研究	高上 洋一
11-17	がん細胞の分子誘導機構を基盤とする新しいがん治療法の開発に関する研究	斎藤 政樹
11-18	内分泌かく乱化学物質の発がんへの関与に関する研究	津田 洋幸
11-19	神経内分泌学的な特性をもった肺がんの病態の把握と手術適応に関する研究	浅村 尚生
11-20	がん生存者の社会的適応に関する研究	山口 建
11-21	遺伝性腫瘍の遺伝子診断の実施方法とその評価に関する研究	菅野 康吉
(計画研究)		
12-1	地域がん専門診療施設のソフト面の整備拡充に関する研究	岡本 直幸
12-2	小児の難治性白血病、二次性白血病の治療法に関する研究	水谷 修紀
12-3	乳がん、大腸がんの家族内集積性に関する研究	三好 康雄
12-4	画像診断に基づく消化器がん、肺がんのclinical staging の確立とstaging別の治療法の選択に関する研究	石川 勉
12-5	がん治療選択のための病理診断の標準化と精度向上に関する研究	松野 吉宏
12-6	環境中の新しい変異原・発がん物質の検索とその生物活性	糖谷 東雄
12-7	ヒト放射線誘発がんを中心とした分子機構の解明と試料のバンク化に関する研究	福本 学
12-8	造血器腫瘍における染色体転座関連遺伝子の基礎的・臨床的研究	平井 久丸
12-9	in vivo での突然変異と発がんの関連に関する研究	能美 健彦
12-10	がんの早期診断および治療法の選択に役立つ腫瘍マーカーの開発	渡邊 昌彦
12-11	高悪性軟部肉腫の診断と治療の確立に関する研究	梅田 透
12-12	食道がん、頭頸部がんのリスクとアルコール代謝酵素の関連に関する研究	横山 顕
12-13	放射線治療における臨床試験の体系化に関する研究	加賀美 芳和
12-14	局所進行前立腺がんに対する内分泌療法・放射線療法併用の意義に関する研究	山中 英壽
12-15	脳高次機能保全をはかった小児悪性脳腫瘍治療法の確立	松谷 雅生
12-16	がんの化学予防効果の検索モデルの検討	福島 昭治
(機械開発研究)		
10-37	がんの診断治療用光学機器の開発	田尻 久雄
(機械開発研究)		
11-22	多元デジタル映像の認識と可視化に基づくがんの自動診断システムの開発に関する研究	長谷川 純一
11-23	全身用定位的放射線治療装置の開発とその適性線量の研究	伊丹 純
(指定研究)		
10指-1	ヒト発がん要因の相互作用の解明に基づくがん制御に関する研究	広橋 説雄
10指-2	多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究	津金 昌一郎
10指-3	本邦におけるがん医療の適正化に関する研究	山口 健
11指-1	高感受性悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	堀田 知光
11指-2	呼吸器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	西條 長宏
11指-3	消化器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	吉田 茂昭
11指-4	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究	下山 正徳
11指-5	動物による発がん性評価のための新手法の確立とその意義に関する研究	黒川 雄二
12指-1	難治がんの総合的な対策に関する研究	垣添 忠生
12指-2	がん専門医施設を活用したがん治療の標準化に関する共同研究	海老原 敏

平成13年度 18億5000万円 96課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
8-1	がん情報ネットワークを利用した総合的がん対策支援の具体的方法に関する研究	山口 直人
8-2	地域がん登録の精度向上と活用に関する研究	大島 明
8-5	ヘテロサイクリックアミンによる前立腺、膵、大腸、乳腺発がん分子機構に関する研究	若林 敬二
(総合研究)		
9-1	主要がんの全国登録に基づく患者情報の解析と活用に関する研究	児玉 哲郎
9-2	がんの成人難治性白血病に対する治療法の開発と標準的治療法確立に関する研究	大野 竜三
9-3	胃がんの発生・進展に関わる要因の把握とその診療への応用に関する研究	松倉 則夫
(総合研究)		
10-4	肺腺がんの発生と特性の解析に関する研究	横田 淳
(総合研究)		
13-1	非血縁者間の同種血液幹細胞移植による悪性腫瘍の治癒率の向上に関する研究	原田 実根
13-2	個体レベルにおける多段階発がんに関する研究	牛島 俊和
(計画研究)		
10-6	大腸がん検診の合理的な精検方法に関する臨床疫学的研究	斎藤 博
10-7	頭頸部がんの頸部リンパ節転移に対する標準的治療法の確立に関する研究	岸本 誠司
10-8	Stage I (T1N0M0)食道がんに対する、放射線・抗がん剤同時併用療法の有用性に関する研究	日月 祐司
10-9	ヘリコバクター感染の胃がん、胃悪性リンパ腫発生の関与に関する研究	齊藤 大三
10-10	胃がんに対する拡大手術の評価に関する研究	佐野 武
10-11	大腸がんの肝・肺転移例に対する治療法の確立に関する研究	加藤 知行
10-12	婦人科悪性腫瘍に対する新たな治療法の開発に関する研究	吉川 裕之
10-16	IVRの標準化の為に画像診断の研究	佐竹 光夫
10-17	放射線治療システムの精度管理と臨床評価に関する研究	井上 俊彦
10-23	共通プロトコールに基づいた膵がん外科的療法の評価に関する研究	二村 雄次
10-24	共通プロトコールによる膵がん治療の評価	今村 正之
10-25	消化管悪性リンパ腫に対する非外科的治療の適応と有効性の評価に関する研究	大津 敦
10-28	増殖因子、サイトカインによるがん病態の修飾に関する研究	塚田 俊彦
10-32	食道および胃の前がん性病変に関する分子病理学的研究	安井 弥
10-35	肝炎ウイルス感染による肝細胞がん発生の抑制に関する研究	小林 健一
10-36	発がんにおける炎症の役割に関する研究	江角 浩安
(計画研究)		
11-1	高リスクがん患者の安全な周術期管理法の確立を目指した研究	西野 卓
11-2	終末期がん患者に対する支持療法の適応に関する研究	安達 勇
11-3	がん診療専門施設における修練医師に対する総合的教育・研修システムの確立	江口 研二
11-4	胆道領域がんの切除手術における根治性の向上と合併症の予防対策に関する研究	川崎 誠治
11-5	原発性悪性骨腫瘍に対する標準的治療法の開発と治療成績の改善に関する研究	岩本 幸英
11-6	荷電粒子線を用いたがん治療の臨床応用に関する研究	荻野 尚
11-7	新しい技術を導入した悪性黒色腫の診断と治療法の確立に関する研究	山本 明史
11-8	難治性リンパ系腫瘍の分子生物学的特徴の解明と疾患特異的治療法の開発に関する研究	上田 龍三
11-9	神経膠腫の標準的治療法の確立に関する研究	野村 和弘
11-10	良好な生検所見を有する限局性前立腺がんの臨床的追跡を基礎とした病態に関する研究	寛 善行
11-11	発がんにおけるDNA修復機構の関与についての研究	石川 隆俊
11-12	発がん過程におけるがんと間質の相互作用に関する研究	落合 淳志
11-13	発がん過程におけるアポトーシスの役割とその治療への応用に関する研究	白井 智之
11-14	50歳未満の適正な乳がん検診のあり方に関する研究	遠藤 登喜子
11-15	肝細胞がんに対する肝動脈塞栓療法による延命効果に関する研究	岡田 周市
11-16	腫瘍抗原ペプチドを標的としたワクチン細胞療法に関する研究	高上 洋一
11-17	がん細胞の分子誘導機構を基盤とする新しいがん治療法の開発に関する研究	斎藤 政樹
11-18	内分泌かく乱化学物質の発がんへの関与に関する研究	津田 洋幸
11-19	神経内分泌学的な特性をもった肺がんの病態の把握と手術適応に関する研究	浅村 尚生
11-20	がん生存者の社会的適応に関する研究	山口 建
11-21	遺伝性腫瘍の遺伝子診断の実施方法とその評価に関する研究	菅野 康吉
(計画研究)		
12-1	地域がん専門診療施設のソフト面の整備拡充に関する研究	岡本 直幸
12-2	小児の難治性白血病、二次性白血病の治療法に関する研究	水谷 修紀
12-3	乳がん、大腸がんの家族内集積性に関する研究	三好 康雄
12-4	画像診断に基づく消化器がん、肺がんのclinical stagingの確立とstaging別の治療法の選択に関する研究	石川 勉
12-5	がん治療選択のための病理診断の標準化と精度向上に関する研究	松野 吉宏
12-6	環境中の新しい変異原・発がん物質の検索とその生物活性	糖谷 東雄
12-7	ヒト放射線誘発がんを中心とした分子機構の解明と試料のバンク化に関する研究	福本 学
12-8	造血器腫瘍における染色体転座関連遺伝子の基礎的・臨床的研究	平井 久丸
12-9	in vivoでの突然変異と発がんの関連に関する研究	能美 健彦
12-10	がんの早期診断および治療法の選択に役立つ腫瘍マーカーの開発	渡邊 昌彦
12-11	高悪性軟部肉腫の診断と治療の確立に関する研究	梅田 透
12-12	食道がん、頭頸部がんのリスクとアルコール代謝酵素の関連に関する研究	横山 顕

12-13	放射線治療における臨床試験の体系化に関する研究	加賀美 芳和
12-14	局所進行前立腺がんに対する内分泌療法・放射線療法併用の意義に関する研究	山中 英壽
12-15	脳高次機能保全をはかった小児悪性脳腫瘍治療法の確立	松谷 雅生
12-16	がんの化学予防効果の検索モデルの検討	福島 昭治
(計画研究)		
13-3	医療施設受診喫煙者に対する喫煙誘導方法の確立に関する研究	浜島 信之
13-4	低線量CTによる肺がん検診における適正な診断基準の作成とその効果の証明の研究	金子 昌弘
13-5	眼部悪性腫瘍患者における生活の質の向上を目指した治療法開発に関する研究	金子 明博
13-6	頭頸部がんにおける機能温存治療の標準化に関する研究	林 隆一
13-7	がん外科的治療における形成再建手技の確立に関する研究	木股 敬裕
13-8	肺野型早期肺がんの診断及び治療法の開発に関する研究	柿沼 龍太
13-9	長期の追跡結果に基づく乳がんに対する適正な乳房温存療法の確立に関する研究	稲治 英生
13-10	抗悪性腫瘍薬の至適投与方法確立のための薬理学的指標に関する研究	佐々木 康
13-11	がん患者の抑うつ、不安、せん妄などの発現要因の解析及びその対応に関する研究	山脇 成人
13-12	表面型大腸がんの悪性度解析及び発育進展に関する研究	下田 忠和
13-13	がんに対する遺伝子治療の基礎的及び臨床的研究 -癌遺伝子治療増強法の開発-	金田 安史
13-14	大腸がんの高危険度群を対象とする予防介入試験に関する研究	石川 秀樹
13-15	食品中の発がん抑制要因に関する研究	田中 卓二
13-16	高精度小線源治療の開発及び評価に関する研究	山下 孝
13-17	がんにおける体腔鏡手術の適応拡大に関する研究	北野 正剛
13-18	ポジトロンCTのがん診断への応用及び診断精度向上に関する研究	遠藤 啓吾
13-19	難治性小児悪性固形腫瘍に対する新たな治療法の臨床への導入に関する研究	金子 道夫
13-20	がんの代替療法の実態調査と科学的評価に関する研究	兵頭 一之
13-21	がんにおける微小転移(マイクロメタスタシス)の診断及び治療適応に関する研究	笹子 充
13-22	脂質によるがん制御に関する研究	西島 正弘
13-23	胆膵がんに対する術中放射線療法の有効性評価に関する多施設共同研究	木下 平
(機械開発研究)		
10-37	がんの診断治療用光学機器の開発	田尻 久雄
(機械開発研究)		
11-22	多元デジタル映像の認識と可視化に基づくがんの自動診断システムの開発に関する研究	長谷川 純一
11-23	全身用定位的放射線治療装置の開発とその適性線量の研究	伊丹 純
(指定研究)		
11指-1	高感受性悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	堀田 知光
11指-2	呼吸器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	西條 長宏
11指-3	消化器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	吉田 茂昭
11指-4	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究	福田 治彦
11指-5	動物による発がん性評価のための新手法の確立とその意義に関する研究	黒川 雄二
12指-1	難治がんの総合的な対策に関する研究	垣添 忠生
12指-2	がん専門医施設を活用したがん治療の標準化に関する共同研究	海老原 敏
13指-1	ヒトがん発生に係る環境要因及び感受性要因に関する研究	若林 敬二
13指-2	多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究	津金 昌一
13指-3	本邦におけるがん医療の適正化に関する研究	山口 建

平成14年度 18億5000万円 96課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
9-1	主要がんの全国登録に基づく患者情報の解析と活用に関する研究	児玉 哲郎
9-2	がんの成人難治性白血病に対する治療法の開発と標準的治療法確立に関する研究	大野 竜三
9-3	胃がんの発生・進展に関わる要因の把握とその診療への応用に関する研究	松倉 則夫
(総合研究)		
10-4	肺腺がんの発生と特性の解析に関する研究	横田 淳
(総合研究)		
13-1	非血縁者間の同種血液幹細胞移植による悪性腫瘍の治癒率の向上に関する研究	原田 実根
13-2	個体レベルにおける多段階発がんに関する研究	牛島 俊和
(総合研究)		
14-1	がん情報ネットワークを利用した総合的がん対策支援の具体的方法に関する研究	若尾 文彦
14-2	地域がん登録精度向上と活用に関する研究	津熊 秀明
(計画研究)		
11-1	高リスクがん患者の安全な周術期管理法の確立を目指した研究	西野 卓
11-2	終末期がん患者に対する支持療法の適応に関する研究	安達 勇
11-3	がん診療専門施設における修練医師に対する総合的教育・研修システムの確立	江口 研二
11-4	胆道領域がんの切除手術における根治性の向上と合併症の予防対策に関する研究	川崎 誠治
11-5	原発性悪性骨腫瘍に対する標準的治療法の開発と治療成績の改善に関する研究	岩本 幸英
11-6	荷電粒子線を用いたがん治療の臨床応用に関する研究	荻野 尚
11-7	新しい技術を導入した悪性黒色腫の診断と治療法の確立に関する研究	山本 明史
11-8	難治性リンパ系腫瘍の分子生物学的特徴の解明と疾患特異的治療法の開発に関する研究	上田 龍三
11-9	神経膠腫の標準的治療の確立に関する研究	野村 和弘
11-10	良好な生検所見を有する限局性前立腺がんの臨床的追跡を基礎とした病態に関する研究	筧 善行
11-11	発がんにおけるDNA修復機構の関与についての研究	石川 隆俊
11-12	発がん過程におけるがんと間質の相互作用に関する研究	落合 淳志
11-13	発がん過程におけるアポトーシスの役割とその治療への応用に関する研究	白井 智之
11-14	50歳未満の適正な乳がん検診のあり方に関する研究	遠藤 登喜子
11-15	肝細胞がんに対する肝動脈塞栓療法 of 延命効果に関する研究	岡田 周市
11-16	腫瘍抗原ペプチドを標的としたワクチン細胞療法に関する研究	高上 洋一
11-17	がん細胞の分子誘導機構を基盤とする新しいがん治療法の開発に関する研究	斎藤 政樹
11-18	内分泌かく乱化学物質の発がんへの関与に関する研究	津田 洋幸
11-19	神経内分泌学的な特性をもった肺がんの病態の把握と手術適応に関する研究	浅村 尚生
11-20	がん生存者の社会的適応に関する研究	山口 建
11-21	遺伝性腫瘍の遺伝子診断の実施方法とその評価に関する研究	菅野 康吉
(計画研究)		
12-1	地域がん専門診療施設のソフト面の整備拡充に関する研究	岡本 直幸
12-2	小児の難治性白血病、二次性白血病の治療法に関する研究	水谷 修紀
12-3	乳がん、大腸がんの家族内集積性に関する研究	三好 康雄
12-4	画像診断に基づく消化器がん、肺がんのclinical staging の確立とstaging別の治療法の選択に関する研究	石川 勉
12-5	がん治療選択のための病理診断の標準化と精度向上に関する研究	松野 吉宏
12-6	環境中の新しい変異原・発がん物質の検索とその生物活性	糖谷 東雄
12-7	ヒト放射線誘発がんを中心とした分子機構の解明と試料のバンク化に関する研究	福本 学
12-8	造血器腫瘍における染色体転座関連遺伝子の基礎的・臨床的研究	平井 久丸
12-9	in vivo での突然変異と発がんの関連に関する研究	能美 健彦
12-10	がんの早期診断および治療法の選択に役立つ腫瘍マーカーの開発	渡邊 昌彦
12-11	高悪性軟部肉腫の診断と治療の確立に関する研究	梅田 透
12-12	食道がん、頭頸部がんのリスクとアルコール代謝酵素の関連に関する研究	横山 顕
12-13	放射線治療における臨床試験の体系化に関する研究	加賀美 芳和
12-14	局所進行前立腺がんに対する内分泌療法・放射線療法併用の意義に関する研究	山中 英壽
12-15	脳高次機能保全をはかった小児悪性脳腫瘍治療法の確立	松谷 雅生
12-16	がんの化学予防効果の検索モデルの検討	福島 昭治
(計画研究)		
13-3	医療施設受診喫煙者に対する喫煙誘導方法の確立に関する研究	浜島 信之
13-4	低線量CTによる肺がん検診における適正な診断基準の作成とその効果の証明の研究	金子 昌弘
13-5	眼部悪性腫瘍患者における生活の質の向上を目指した治療法開発に関する研究	金子 明博
13-6	頭頸部がんにおける機能温存治療の標準化に関する研究	林 隆一
13-7	がん外科的治療における形成再建手技の確立に関する研究	木股 敬裕
13-8	肺野型早期肺がんの診断及び治療法の開発に関する研究	柿沼 龍太
13-9	長期の追跡結果に基づく乳がんに対する適正な乳房温存療法の確立に関する研究	稲治 英生
13-10	抗悪性腫瘍薬の至適投与法確立のための薬理学的指標に関する研究	佐々木 康
13-11	がん患者の抑うつ、不安、せん妄などの発現要因の解析及びその対応に関する研究	山脇 成人
13-12	表面型大腸がんの悪性度解析及び発育進展に関する研究	下田 忠和
13-13	がんに対する遺伝子治療の基礎的及び臨床的研究 -癌遺伝子治療増強法の開発-	金田 安史
13-14	大腸がんの高危険度群を対象とする予防介入試験に関する研究	石川 秀樹
13-15	食品中の発がん抑制要因に関する研究	田中 卓二

13-16	高精度小線源治療の開発及び評価に関する研究	山下 孝
13-17	がんにおける体腔鏡手術の適応拡大に関する研究	北野 正剛
13-18	ポジトロンCTのがん診断への応用及び診断精度向上に関する研究	遠藤 啓吾
13-19	難治性小児悪性固形腫瘍に対する新たな治療法の臨床への導入に関する研究	金子 道夫
13-20	がんの代替療法の実態調査と科学的評価に関する研究	兵頭 一之
13-21	がんにおける微小転移(マイクロメタスタシス)の診断及び治療適応に関する研究	笹子 充
13-22	脂質によるがん制御に関する研究	西島 正弘
13-23	胆膵がんに対する術中放射線療法の有効性評価に関する多施設共同研究	木下 平
(計画研究)		
14-3	stage I 食道がんに対する放射線・抗がん剤併用療法と手術単独療法の有効性の比較	加藤 抱一
14-4	ヘリコバクター・ピロリ感染と胃発がんに関する研究	藤岡 利生
14-5	がん治療におけるIVRの技術向上と標準化に関する研究	荒井 保明
14-6	放射線治療システムの精度管理と臨床評価に関する研究	手島 昭樹
14-7	共通プロトコールに基づいた膵がんの外科的療法の評価に関する研究	柳野 正人
14-8	共通プロトコールによる膵がん治療の評価	高崎 健
14-9	原発性胃悪性リンパ腫に対する非外科的治療の適応と有効性の評価に関する研究	石倉 聡
14-10	食道がん、胃がんの悪性度の分子情報の把握とそれを応用した生検診断法の確立	横崎 宏
14-11	発がんにおける炎症の役割に関する研究	赤池 孝章
14-12	婦人科悪性腫瘍に対する新たな治療法に関する研究	嘉村 敏治
14-13	低位直腸がん術後の機能温存を可能とする肛門温存療法の開発に関する研究	齋藤 典男
14-14	大腸癌腫瘍性病変における腺口構造の診断学的意義の解明とその臨床応用に関する研究	工藤 進英
14-15	頭頸部がんに対する放射線化学療法の適応と有効性の評価に関する研究	不破 信和
14-16	各種臓器における見張りリンパ節ナビゲーション手術標準手技の確立	北川 雄光
14-17	外科通院がん治療の安全性の確立とその評価法に関する研究	坂 英雄
14-18	膵がん診療の新たな標的分子の探索と遺伝子治療法の開発	青木 一教
14-19	がんの骨転移に対する予後予測方法の確立と集学的治療法の開発	荒木 信人
(機械開発研究)		
11-22	多元デジタル映像の認識と可視化に基づくがんの自動診断システムの開発に関する研究	長谷川 純一
11-23	全身用定位的放射線治療装置の開発とその適性線量の研究	伊丹 純
(機械開発研究)		
14-20	がんの診断治療用光学機器の開発	小野 裕之
(指定研究)		
12指-1	難治がんの総合的な対策に関する研究	垣添 忠生
12指-2	がん専門医施設を活用したがん治療の標準化に関する共同研究	海老原 敏
13指-1	ヒトがん発生に係る環境要因及び感受性要因に関する研究	若林 敬二
13指-2	多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究	津金 昌一
13指-3	本邦におけるがん医療の適正化に関する研究	山口 建
14指-1	高感受性悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	堀田 知光
14指-2	呼吸器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	西條 長宏
14指-3	消化器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	吉田 茂昭
14指-4	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究	福田 治彦
14指-5	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究	立松 正衛

平成15年度 18億5000万円 95課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
10-4	肺腺がんの発生と特性の解析に関する研究	横田 淳
(総合研究)		
13-1	非血縁者間の同種血液幹細胞移植による悪性腫瘍の治癒率の向上に関する研究	原田 実根
13-2	個体レベルにおける多段階発がんに関する研究	牛島 俊和
(総合研究)		
14-1	がん情報ネットワークを利用した総合的がん対策支援の具体的方法に関する研究	若尾 文彦
14-2	地域がん登録精度向上と活用に関する研究	津熊 秀明
(総合研究)		
15-1	主要がんの全国登録に基づく患者情報の解析と活用に関する研究	山崎 晋
15-2	がん生物学に基づく新しい治療法の開発に関する研究	江角 浩安
15-3	がん検診の適切な方法とその評価法の確立に関する研究	祖父江 友
(計画研究)		
12-1	地域がん専門診療施設のソフト面の整備拡充に関する研究	岡本 直幸
12-2	小児の難治性白血病、二次性白血病の病態と治療法に関する研究	水谷 修紀
12-3	乳がん、大腸がんの家族内集積性に関する研究	三好 康雄
12-4	画像診断に基づく消化器がん、肺がんのclinical staging 別の治療法の選択に関する研究	石川 勉
12-5	がん治療選択のための病理診断の標準化と精度向上に関する研究	松野 吉宏
12-6	環境中の新しい変異原・発がん物質の検索とその生物活性	糠谷 東雄
12-7	ヒト放射線誘発癌を中心とした分子機構の解明と試料のバンク化	福本 学
12-8	造血器腫瘍における染色体転座関連遺伝子の基礎的・臨床的研究	三谷 絹子
12-9	in vivoでの突然変異と発がんの関連に関する研究	能美 健彦
12-10	がんの早期診断および治療法の選択に役立つ腫瘍マーカーの開発	渡邊 昌彦
12-11	高悪性軟部腫瘍の診断と標準的治療の確立に関する研究	吉川 秀樹
12-12	食道がん、頭頸部がんのリスクとアルコール代謝酵素の関連に関する研究	横山 顕
12-13	放射線治療における臨床試験の体系化に関する研究	加賀美 芳
12-14	局所進行前立腺がんに対する内分泌療法・放射線療法併用の意義に関する研究	山中 英壽
12-15	脳高次機能保全をはかった小児悪性脳腫瘍治療法の確立	松谷 雅生
12-16	がん化学予防効果の検索モデルの検討	福島 昭治
(計画研究)		
13-3	医療施設受診喫煙者に対する喫煙誘導方法の確立に関する研究	浜島 信之
13-4	低線量CTによる肺がん検診における適正な診断基準の作成とその効果の証明の研究	金子 昌弘
13-5	眼部悪性腫瘍患者における生活の質の向上を目指した治療法開発に関する研究	金子 明博
13-6	頭頸部がんにおける機能温存治療の標準化に関する研究	林 隆一
13-7	がん外科的治療における形成再建手技の確立に関する研究	木股 敬裕
13-8	肺野型早期肺がんの診断及び治療法の開発に関する研究	柿沼 龍太
13-9	長期の追跡結果に基づく乳がんに対する適正な乳房温存療法法の確立に関する研究	稲治 英生
13-10	抗悪性腫瘍薬の至適投与法確立のための薬理学的指標に関する研究	佐々木 康
13-11	がん患者の抑うつ、不安、せん妄などの発現要因の解析及びその対応に関する研究	山脇 成人
13-12	表面型大腸がんの悪性度解析及び発育進展に関する研究	下田 忠和
13-13	がんに対する遺伝子治療の基礎的及び臨床的研究 -癌遺伝子治療増強法の開発-	金田 安史
13-14	大腸がんの高危険度群を対象とする予防介入試験に関する研究	石川 秀樹
13-15	食品中の発がん抑制要因に関する研究	田中 卓二
13-16	高精度小線源治療の開発及び評価に関する研究	山下 孝
13-17	がんにおける体腔鏡手術の適応拡大に関する研究	北野 正剛
13-18	ポジトロンCTのがん診断への応用及び診断精度向上に関する研究	遠藤 啓吾
13-19	難治性小児悪性固形腫瘍に対する新たな治療法の臨床への導入に関する研究	金子 道夫
13-20	がんの代替療法の実態調査と科学的評価に関する研究	兵頭 一之
13-21	がんにおける微小転移(マイクロメタスタシス)の診断及び治療適応に関する研究	笹子 充
13-22	脂質によるがん制御に関する研究	西島 正弘
13-23	胆膵がんに対する術中放射線療法の有効性評価に関する多施設共同研究	木下 平
(計画研究)		
14-3	stage I 食道がんに対する放射線・抗がん剤併用療法と手術単独療法の有効性の比較	加藤 抱一
14-4	ヘリコバクター・ピロリ感染と胃発がんに関する研究	藤岡 利生
14-5	がん治療におけるIVRの技術向上と標準化に関する研究	荒井 保明
14-6	放射線治療システムの精度管理と臨床評価に関する研究	手島 昭樹
14-7	共通プロトコールに基づいた膵がんの外科的療法の評価に関する研究	柳野 正人
14-8	共通プロトコールによる膵がん治療の評価	高崎 健
14-9	原発性胃悪性リンパ腫に対する非外科的治療の適応と有効性の評価に関する研究	石倉 聡
14-10	食道がん、胃がんの悪性度の分子情報の把握とそれを応用した生検診断法の確立	横崎 宏
14-11	発がんにおける炎症の役割に関する研究	赤池 孝章
14-12	婦人科悪性腫瘍に対する新たな治療法の開発に関する研究	嘉村 敏治
14-13	低位直腸がん術後の機能温存を可能とする肛門温存療法の開発に関する研究	齋藤 典男
14-14	大腸癌腫瘍性病変における腺口構造の診断学的意義の解明とその臨床応用に関する研究	工藤 進英
14-15	頭頸部がんに対する放射線化学療法法の適応と有効性の評価に関する研究	不破 信和



14-16	各種臓器における見張りリンパ節ナビゲーション手術標準手技の確立	北川 雄光
14-17	外科通院がん治療の安全性の確立とその評価法に関する研究	坂 英雄
14-18	膵がん診療の新たな標的分子の探索と遺伝子治療法の開発	青木 一教
14-19	がんの骨転移に対する予後予測方法の確立と集学的治療法の開発 (計画研究)	荒木 信人
15-4	成人難治性白血病の分子生物学的特徴に基づく治療法に関する研究	直江 知樹
15-5	発がん機序に基づいた胃がんの予防に関する研究	斉藤 大三
15-6	がん患者に対する周術期及び各種治療前後における集中治療法の確立に関する研究	本田 完
15-7	がん患者に対する支持療法及び緩和療法の技術の向上に関する研究	下山 直人
15-8	胆道領域がんに対する合理的な術前術中進展度診断法の開発に関する研究	小西 大
15-9	荷電粒子線を用いたがん治療技術の開発及びその向上に関する研究	菱川 良夫
15-10	悪性黒色腫の新しい診断及び治療法の開発に関する研究	斎田 俊明
15-11	分子基盤に基づく難治性リンパ系腫瘍の診断及び治療法の開発に関する研究	中村 栄男
15-12	発がんにおける染色体動態異常に関する研究	中釜 斉
15-13	がん生物像を規定するがん組織内微小環境に関する研究	岡田 保典
15-14	乳がん検診の精度及び効率の向上に関する研究	大内 憲明
15-15	神経内分泌学的特性を有する肺がんの病態の把握及び治療法に関する研究	永井 完治
15-16	がんの遺伝相談実施施設の連携による遺伝性腫瘍の解析及び診断の精度の向上に関する研究	吉田 輝彦
15-17	抗腫瘍抗原ペプチドの臨床への導入に関する研究	河上 裕
15-18	悪性胸膜中皮腫の早期診断及び紙療法に関する研究	森永 謙二
15-19	ホルモン補充療法が乳がんの診療に及ぼす影響とその対策に関する研究	佐伯 俊昭
15-20	がんの早期診断及び予後の予測を目指したヒト多段階発がん過程におけるDNAメチル化の変化に関する研究	金井 弥栄
15-21	がん化学療法におけるドラッグデリバリーシステム(DDS)の開発に関する研究	松村 保広
15-22	環境化学発がん物質の暴露評価法の開発及び疫学研究に基づく発がんリスク評価に関する研究	花岡 知之
15-23	がん治療による口腔内合併症の実態調査及びその予防法の確立に関する研究	大田 洋二
15-24	がん患者QOL向上のため、再生医学を用いた複合組織再建技術の開発	高戸 毅
(機械開発研究)		
14-20	がん情報のがんの診断治療用光学機器の開発に関する研究	小野 裕之
(機械開発研究)		
15-25	デジタル画像を利用した診断支援システムの開発と利用に関する研究	縄野 繁
(指定研究)		
13指-1	ヒトがん発生に係る環境要因及び感受性要因に関する研究	若林 敬二
13指-2	多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究	津金 昌一
13指-3	本邦におけるがん医療の適正化に関する研究	山口 建
14指-1	高感受性悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	堀田 知光
14指-2	呼吸器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	西條 長宏
14指-3	消化器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	吉田 茂昭
14指-4	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究	福田 治彦
14指-5	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究	立松 正衛
15指-1	難治がんの総合的な対策に関する研究	野村 和弘
15指-2	がん専門医施設を活用したがん診断の標準化に関する共同研究	海老原 敏

平成16年度 18億5000万円 94課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
13-1	非血縁者間の同種血液幹細胞移植による悪性腫瘍の治癒率の向上に関する研究	原田 実根
13-2	個体レベルにおける多段階発がんに関する研究	牛島 俊和
(総合研究)		
14-1	がん情報ネットワークを利用した総合的がん対策支援の具体的方法に関する研究	若尾 文彦
14-2	地域がん登録精度向上と活用に関する研究	津熊 秀明
(総合研究)		
15-1	主要がんの全国登録に基づく患者情報の解析と活用に関する研究	山崎 晋
15-2	がん生物学に基づく新しい治療法の開発に関する研究	江角 浩安
15-3	がん検診の適切な方法とその評価法の確立に関する研究	祖父江 友
(総合研究)		
16-1	肺がんの要因と病態に関する研究	野口 雅之
(計画研究)		
13-3	医療施設受診喫煙者に対する喫煙誘導方法の確立に関する研究	浜島 信之
13-4	低線量CTによる肺がん検診における適正な診断基準の作成とその効果の証明の研究	金子 昌弘
13-5	眼部悪性腫瘍患者における生活の質の向上を目指した治療法開発に関する研究	金子 明博
13-6	頭頸部がんにおける機能温存治療の標準化に関する研究	林 隆一
13-7	がん外科的治療における形成再建手技の確立に関する研究	波利井 清
13-8	肺野型早期肺がんの診断及び治療法の開発に関する研究	柿沼 龍太
13-9	長期の追跡結果に基づく乳がんに対する適正な乳房温存療法に関する研究	稲治 英生
13-10	抗悪性腫瘍薬の至適投与方法確立のための薬理学的指標に関する研究	佐々木 康
13-11	がん患者の抑うつ、不安、せん妄などの発現要因の解析及びその対応に関する研究	山脇 成人
13-12	表面型大腸がんの悪性度解析及び発育進展に関する研究	下田 忠和
13-13	がんに対する遺伝子治療の基礎的及び臨床的研究	金田 安史
13-14	大腸がんの高危険度群を対象とする予防介入試験に関する研究	石川 秀樹
13-15	食品中の発がん抑制要因に関する研究	田中 卓二
13-16	高精度小線源治療の開発及び評価に関する研究	山下 孝
13-17	がんにおける体腔鏡手術の適応拡大に関する研究	北野 正剛
13-18	ポジトロンCTのがん診断への応用及び診断精度向上に関する研究	遠藤 啓吾
13-19	難治性小児悪性固形腫瘍に対する新たな治療法の臨床への導入に関する研究	金子 道夫
13-20	がんの代替療法の実態調査と科学的評価に関する研究	兵頭 一之
13-21	がんにおける微小転移(マイクロメタスタシス)の診断及び治療適応に関する研究	笹子 充
13-22	脂質によるがん制御に関する研究	西島 正弘
13-23	胆膵がんに対する術中放射線療法の有効性評価に関する多施設共同研究	木下 平
(計画研究)		
14-3	stage I 食道がんに対する放射線・抗がん剤併用療法と手術単独療法の有効性の比較	加藤 抱一
14-4	ヘリコバクター・ピロリ感染と胃発癌機序の解明とワクチンの開発	藤岡 利生
14-5	がん治療におけるIVRの技術向上と標準化に関する研究	荒井 保明
14-6	放射線治療システムの精度管理と臨床評価に関する研究	手島 昭樹
14-7	原発性胃悪性リンパ腫に対する非外科的治療の適応と有効性の評価に関する研究	石倉 聰
14-8	食道がん、胃がんの悪性度の分子情報の把握とそれを応用した生検診断法の確立	横崎 宏
14-9	発がんにおける炎症の役割と発がん予防に関する研究	赤池 孝章
14-10	婦人科悪性腫瘍に対する新たな治療法の開発に関する研究	嘉村 敏治
14-11	低位直腸がん術後の機能温存を可能とする肛門温存療法の開発に関する研究	齋藤 典男
14-12	大腸癌腫瘍性病変における腺口構造の診断学的意義の解明とその臨床応用に関する研究	工藤 進英
14-13	頭頸部がんに対する放射線化学療法の適応と有効性の評価に関する研究	不破 信和
14-14	見張りリンパ節ナビゲーション手術(Sentinel Node Navigation Surgery)の開発に関する研究	北川 雄光
14-15	外科通院がん治療の安全性の確立とその評価法に関する研究	坂 英雄
14-16	膵がんの特性に基づいた診断・治療法開発に関する研究	青木 一教
14-17	がんの骨転移に対する予後予測方法の確立と集学的治療法に関する研究	荒木 信人
(計画研究)		
15-4	成人難治性白血病の分子生物学的特徴に基づく治療法に関する研究	直江 知樹
15-5	発がん機序に基づいた胃がんの予防に関する研究	齊藤 大三
15-6	がん患者に対する周術期及び各種治療前後における集中治療法の確立に関する研究	本田 完
15-7	がん患者に対する支持療法及び緩和療法の技術の向上に関する研究	下山 直人
15-8	胆道領域がんに対する合理的な術前術中進展度診断法の開発に関する研究	小西 大
15-9	荷電粒子線を用いたがん治療技術の開発及びその向上に関する研究	菱川 良夫
15-10	悪性黒色腫の新しい診断及び治療法の開発に関する研究	齋田 俊明
15-11	分子基盤に基づく難治性リンパ系腫瘍の診断及び治療法の開発に関する研究	中村 栄男
15-12	発がんにおける染色体動態異常に関する研究	中釜 斉
15-13	がん生物像を規定するがん組織内微小環境に関する研究	岡田 保典
15-14	乳がん検診の精度及び効率の向上に関する研究	大内 憲明
15-15	神経内分泌学的特性を有する肺がんの病態の把握及び治療法に関する研究	永井 完治
15-16	がんの遺伝相談実施施設の連携による遺伝性腫瘍の解析及び診断の精度の向上に関する研究	吉田 輝彦
15-17	抗腫瘍抗原ペプチドの臨床への導入に関する研究	河上 裕

15-18	悪性胸膜中皮腫の早期診断及び紙療法に関する研究	森永 謙二
15-19	ホルモン補充療法が乳がんの診療に及ぼす影響とその対策に関する研究	佐伯 俊昭
15-20	がんの早期診断及び予後の予測を目指したヒト多段階発がん過程におけるDNAメチル化の変化に関する研究	金井 弥栄
15-21	がん化学療法におけるドラッグデリバリーシステム(DDS)の開発に関する研究	松村 保広
15-22	環境化学発がん物質の暴露評価法の開発及び疫学研究に基づく発がんリスク評価に関する研究	花岡 友之
15-23	がん治療による口腔内合併症の実態調査及びその予防法の確立に関する研究	大田 洋二
15-24	がん患者QOL向上のため、再生医学を用いた複合組織再建技術の開発	高戸 毅
(計画研究)		
16-2	地域がん専門診療施設のソフト面の整備拡充に関する研究	猿木 信裕
16-3	小児の難治性白血病、骨髄異形性症候群のゲノム異常の解析と治療法に関する研究	中畑 龍俊
16-4	乳がん易罹患性の診断とそれに基づく予防に関する研究	玉木 康博
16-5	画像診断に基づく消化器がん、肺がん、乳がんのclinical stagingの確立と治療法選択に関する研究	関口 隆三
16-6	がん診療を標準化するための病理診断基準の確立に関する研究	長谷川 匡
16-7	新規化学発がん要因の検索とその生物活性	渡辺 徹志
16-8	ヒト放射線誘発がんの分子機構に関する研究	神谷 研二
16-9	造血器腫瘍における染色体転座関連遺伝子の基礎的・臨床的研究	北林 一生
16-10	がんの早期診断および予後診断に役立つ腫瘍マーカーの開発	中森 正二
16-11	気道食道領域がんのリスクとアルコール代謝酵素との関連性とその臨床評価に関する研究	武藤 学
16-12	放射線治療における臨床試験の体系化に関する研究—安全管理と質の管理を含む—	小口 正彦
16-13	がん化学予防の短・中期検索モデルの開発に関する研究	津田 洋幸
16-14	放射線・化学療法が有効な悪性神経膠腫の遺伝子学的特徴の解析と新規治療法の開発	洪井 壮一郎
16-15	進行膵・胆道がんに対する標準的全身化学療法確立に関する研究	古瀬 純司
16-16	生検組織を用いた消化器がん・肺がんの治療感受性予知法および治療効果判定法の確立に関する研究	落合 淳志
16-17	神経芽腫進展の診断基準確立・分子機構解析とそれに基づく診断・治療法の確立	中川原 章
16-18	各種がん免疫療法の開発と臨床的有効性の評価に関する研究	若杉 尋
(機械開発研究)		
14-18	がんの診断治療用光学機器の開発	小野 裕之
(機械開発研究)		
15-25	デジタル画像を利用した診断支援システムの開発と利用に関する研究	縄野 繁
(指定研究)		
14指-1	高感受性悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	堀田 知光
14指-2	呼吸器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	西條 長宏
14指-3	消化器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	吉田 茂昭
14指-4	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究	福田 治彦
14指-5	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究	立松 正衛
15指-1	難治がんの総合的な対策に関する研究	野村 和弘
15指-2	がん専門医施設を活用したがん診断の標準化に関する共同研究	海老原 敏
16指-1	ヒトがん発生にかかわる環境要因及び感受性要因に関する研究	若林 敬二
16指-2	多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究	津金 昌一
16指-3	本邦におけるがん医療の適正化に関する研究	山口 建

平成17年度 18億5000万円 95課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
13-1	非血縁者間の同種血液幹細胞移植による悪性腫瘍の治癒率の向上に関する研究	原田 実根
13-2	個体レベルでの多段階発がんに関する研究	牛島 俊和
(総合研究)		
14-1	がん情報ネットワークを利用した総合的がん対策支援の具体的方法に関する研究	若尾 文彦
14-2	地域がん登録精度向上と活用に関する研究	津熊 秀明
(総合研究)		
15-1	主要がんの全国登録に基づく患者情報の解析と活用に関する研究	山崎 晋
15-2	がん生物学に基づく新しい治療法の開発に関する研究	江角 浩安
15-3	がん検診の適切な方法とその評価法の確立に関する研究	祖父江 友
(総合研究)		
16-1	肺がんの要因と病態に関する研究	野口 雅之
(計画研究)		
14-3	stage I 食道がんに対する放射線・抗がん剤併用療法と手術単独療法の有効性の比較	加藤 抱一
14-4	ヘリコバクター・ピロリ感染と胃発癌機序の解明とワクチンの開発	藤岡 利生
14-5	がん治療におけるIVRの技術向上と標準化に関する研究	荒井 保明
14-6	放射線治療システムの精度管理と臨床評価に関する研究	手島 昭樹
14-7	食道がん、胃がんの悪性度の分子情報の把握とそれを応用した生検診断法の確立	横崎 宏
14-8	発がんにおける炎症の役割と発がん予防に関する研究	赤池 孝章
14-9	婦人科悪性腫瘍に対する新たな治療法の開発に関する研究	嘉村 敏治
14-10	低位直腸がん術後の機能温存を可能とする肛門温存療法の開発に関する研究	齋藤 典男
14-11	大腸癌腫瘍性病変における腺口構造の診断学的意義の解明とその臨床応用に関する研究	工藤 進英
14-12	頭頸部がんに対する放射線化学療法の適応と有効性の評価に関する研究	不破 信和
14-13	見張りリンパ節ナビゲーション手術(Sentinel Node Navigation Surgery)の開発に関する研究	北川 雄光
14-14	外科通院がん治療の安全性の確立とその評価法に関する研究	坂 英雄
14-15	膵がんの特性に基づいた診断・治療法開発に関する研究	青木 一教
14-16	がんの骨転移に対する予後予測方法の確立と集学的治療法に関する研究	荒木 信人
(計画研究)		
15-4	成人難治性白血病の分子生物学的特徴に基づく治療法に関する研究	直江 知樹
15-5	発がん機序に基づいた胃がんの予防に関する研究	斉藤 大三
15-6	がん患者に対する周術期及び各種治療前後における集中治療法の確立に関する研究	本田 完
15-7	がん患者に対する支持療法及び緩和療法の技術の向上に関する研究	下山 直人
15-8	胆道領域がんに対する合理的な術前術中進展度診断法の開発に関する研究	小西 大
15-9	荷電粒子線を用いたがん治療技術の開発及びその向上に関する研究	菱川 良夫
15-10	悪性黒色腫の新しい診断及び治療法の開発に関する研究	斎田 俊明
15-11	分子基盤に基づく難治性リンパ系腫瘍の診断及び治療法の開発に関する研究	中村 栄男
15-12	発がんにおける染色体動態異常に関する研究	中釜 斉
15-13	がん生物像を規定するがん組織内微小環境に関する研究	岡田 保典
15-14	乳がん検診の精度及び効率の向上に関する研究	大内 憲明
15-15	神経内分泌学的特性を有する肺がんの病態の把握及び治療法に関する研究	永井 完治
15-16	がんの遺伝相談実施施設の連携による遺伝性腫瘍の解析及び診断の精度の向上に関する研究	吉田 輝彦
15-17	抗腫瘍抗原ペプチドの臨床への導入に関する研究	河上 裕
15-18	悪性胸膜中皮腫の早期診断及び紙療法に関する研究	森永 謙二
15-19	ホルモン補充療法が乳がんの診療に及ぼす影響とその対策に関する研究	佐伯 俊昭
15-20	がんの早期診断及び予後の予測を目指したヒト多段階発がん過程におけるDNAメチル化の変化に関する研究	金井 弥栄
15-21	がん化学療法におけるドラッグデリバリーシステム(DDS)の開発に関する研究	松村 保広
15-22	環境化学発がん物質の暴露評価法の開発及び疫学研究に基づく発がんリスク評価に関する研究	花岡 友之
15-23	がん治療による口腔内合併症の実態調査及びその予防法の確立に関する研究	大田 洋二
15-24	がん患者QOL向上のため、再生医学を用いた複合組織再建技術の開発	高戸 毅
(計画研究)		
16-2	地域がん専門診療施設のソフト面の整備拡充に関する研究	猿木 信裕
16-3	小児の難治性白血病、骨髄異形性症候群のゲノム異常の解析と治療法に関する研究	中畑 龍俊
16-4	乳がん易罹患性の診断とそれに基づく予防に関する研究	玉木 康博
16-5	画像診断に基づく消化器がん、肺がん、乳がんのclinical stagingの確立と治療法選択に関する研究	関口 隆三
16-6	がん診療を標準化するための病理診断基準の確立に関する研究	長谷川 匡
16-7	新規化学発がん要因の検索とその生物活性	渡辺 徹志
16-8	ヒト放射線誘発がんの分子機構に関する研究	神谷 研二
16-9	造血器腫瘍における染色体転座関連遺伝子の基礎的・臨床的研究	北林 一生
16-10	がんの早期診断および予後診断に役立つ腫瘍マーカーの開発	中森 正二
16-11	気道食道領域がんのリスクとアルコール代謝酵素との関連性とその臨床評価に関する研究	武藤 学
16-12	放射線治療における臨床試験の体系化に関する研究—安全管理と質の管理を含む—	小口 正彦
16-13	がん化学予防の短・中期検索モデルの開発に関する研究	津田 洋幸
16-14	放射線・化学療法が有効な悪性神経膠腫の遺伝子学的特徴の解析と新規治療法の開発	洪井 壮一郎
16-15	進行膵・胆道がんに対する標準的全身化学療法の確立に関する研究	古瀬 純司

16-16	生検組織を用いた消化器がん・肺がんの治療感受性予知法および治療効果判定法の確立に関する	落合 淳志
16-17	神経芽腫進展の診断基準確立・分子機構解析とそれに基づく診断・治療法の確立	中川原 章
16-18	各種がん免疫療法の開発と臨床的有効性の評価に関する研究	若杉 尋
(計画研究)		
17-1	保健・医療機関受診者を対象とした禁煙支援方法の開発と評価に関する研究	田中 英夫
17-2	低線量CTによる肺がん検診の効率化とその基準の作成に関する研究	坪井 正博
17-3	良好な視機能温存を目標とした眼部悪性腫瘍の新しい集学的治療法の開発	柳澤 隆昭
17-4	喉頭機能を温存した頭頸部がんの標準的治療法の確立に関する研究	吉野 邦俊
17-5	がん外科治療における形成再建手技の確立に関する研究	木股 敬裕
17-6	すりガラス状陰影を伴う肺がんの診断・治療方法の確立に関する研究	大松 広伸
17-7	乳房温存療法切除断端の病理診断の標準化と術後観察の適正化に関する研究	秋山 太
17-8	抗悪性腫瘍薬治療を最適化するための臨床薬理学的研究	南 博信
17-9	大腸がん等、増加しているがんの予防を目指した疫学研究	古野 純典
17-10	がんの小線源放射線治療の評価と品質管理に関する研究	土器屋 卓志
17-11	胃がんに対するリンパ節郭清を伴う腹腔鏡下手術と開腹手術との比較に関する研究	片井 均
17-12	ポジトロンCTのがん診断への応用と診断精度向上に関する研究	村上 康二
17-13	小児横紋筋肉腫に対する中央病理診断および遺伝子診断にもとづく臨床試験の確立と新規治療開発に関する研究	森川 康英
17-14	がんの代替療法の科学的検証と臨床応用に関する研究	住吉 義光
17-15	固形癌の骨髄・末梢血・リンパ節中における転移形成能を有する遊離癌細胞 (Isolated Tumor Cell ITC) の検出とその臨床応用	森 正樹
17-16	胆膵がんに対する術中放射線療法の有効性評価に関する多施設共同研究	中郡 聡夫
17-17	多発性骨髄腫の発症と進展に関与する分子基盤の解明と新規分子標的療法の確立に関する研究	飯田 真介
17-18	放射線治療期間の短縮に関する多施設共同臨床試験の確立に関する研究	加賀美 芳和
17-19	臨床試験登録患者検体の有効利用に関する検討	松村 保広
17-20	公的がん専門医療機関の機能と経営の評価に関する研究	長谷川 敏彦
17-21	難治性内分泌腫瘍の最適な治療法の確立に関する研究	塚田 俊彦
17-22	大腸がん肝転移の予知ならびに予防的治療に関する研究	藤田 伸
(機械開発研究)		
14-17	がんの診断治療用光学機器の開発	小野 裕之
(機械開発研究)		
15-25	デジタル画像を利用した診断支援システムの開発と利用に関する研究	縄野 繁
(指定研究)		
15指-1	難治がんの総合的な対策に関する研究	野村 和弘
15指-2	がん専門医施設を活用したがん診断の標準化に関する共同研究	吉田 茂昭
16指-1	ヒトがん発生にかかわる環境要因及び感受性要因に関する研究	若林 敬二
16指-2	多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究	津金 昌一
16指-3	本邦におけるがん医療の適正化に関する研究	山口 建
17指-1	高感受性悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	堀田 知光
17指-2	呼吸器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	西條 長宏
17指-3	消化器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	大津 敦
17指-4	希少悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	洪井 壮一郎
17指-5	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究	福田 治彦
17指-6	個体レベルでの発がん予知と予防に関する基盤的研	立松 正衛

平成18年度 18億円 95課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
13-1	非血縁者間の同種血液幹細胞移植による悪性腫瘍の治癒率向上に関する研究	原田 実根
13-2	個体レベルにおける多段階発がんに関する研究	牛島 俊和
(総合研究)		
14-1	がん情報ネットワークを利用した総合的がん対策支援の具体的方法に関する研究	若尾 文彦
14-2	地域がん登録精度向上と活用に関する研究	津熊 秀明
(総合研究)		
15-1	主要がんの全国登録に基づく患者情報の解析と活用に関する研究	浅村 尚生
15-2	がん生物学に基づく新しい治療法の開発に関する研究	富田 章弘
15-3	がん検診の適切な方法とその評価法の確立に関する研究	濱島 ちさと
(総合研究)		
16-1	肺がんの要因と病態に関する研究	野口 雅之
(計画研究)		
15-4	成人難治性白血病の分子生物学的特徴に基づく治療法に関する研究	直江 知樹
15-5	発がん機序に基づいた胃がんの予防に関する研究	斉藤 大三
15-6	がん患者に対する周術期及び各種治療前後における集中治療の確立に関する研究	本田 完
15-7	がん患者に対する支持療法及び緩和療法の技術の向上に関する研究	下山 直人
15-8	胆道領域がんに対する合理的な術前術中進展度診断法の開発に関する研究	小西 大
15-9	荷電粒子線を用いたがん治療技術の開発およびその向上に関する研究	菱川 良夫
15-10	悪性黒色腫の新しい診断及び治療法の開発に関する研究	斎田 俊明
15-11	分子基盤に基づく難治性リンパ系腫瘍の診断及び治療法の開発に関する研究	中村 栄男
15-12	発がんにおける染色体動態異常に関する研究	中釜 斉
15-13	がん生物像を規定するがん組織内微小環境に関する研究	岡田 保典
15-14	乳がん検診の精度及び効率の向上に関する研究	大内 憲明
15-15	神経内分泌学的特性を有する肺がんの病態の把握及び治療に関する研究	永井 完治
15-16	がんの遺伝相談実地施設の連携による遺伝性腫瘍の解析及び診断の精度向上に関する研究	吉田 輝彦
15-17	抗腫瘍抗原ペプチドの臨床への導入に関する研究	河上 裕
15-18	悪性胸膜中皮腫の診断精度の向上及び治療法に関する研究	森永 謙二
15-19	ホルモン補充療法が乳がんの検診に及ぼす影響とその対策に関する研究	佐伯 俊明
15-20	がんの早期診断及び予後の予測を目指したヒト多段階発がん過程におけるDNAメチル化の変化に関する研究	金井 弥栄
15-21	がん化学療法におけるドラッグデリバリーシステム(DDS)の開発に関する研究	松村 保広
15-22	環境化学発がん物質の暴露評価法の開発及び疫学研究への応用による発がんリスク評価に関する研究	梶村 春彦
15-23	がん治療による口腔内合併症の実態調査及びその予防法の確立に関する研究	大田 洋二郎
15-24	がん患者QOL向上のための再生医学を用いた複合組織再建技術の開発に関する研究	高戸 毅
(計画研究)		
16-2	地域がん専門診療施設のソフト面の整備拡充に関する研究	猿木 信裕
16-3	小児の難治性白血病、骨髄異形性症候群のゲノム異常の解析と治療法に関する研究	中畑 龍俊
16-4	乳がん易罹患者の診断とそれに基づく予防に関する研究	玉木 康博
16-5	画像診断に基づく消化器がん、肺がん、乳がんのclinical stagingの確立と治療法選択に関する研究	関口 隆三
16-6	がん診療を標準化するための病理診断基準の確立に関する研究	長谷川 匡
16-7	新規化学発がん要因の検索とその生物活性	渡辺 徹志
16-8	ヒト放射線誘発がんの分子機構に関する研究	神谷 研二
16-9	造血器腫瘍における染色体転座関連遺伝子の基礎的・臨床的研究	北林 一生
16-10	がんの早期診断および予後診断に役立つ腫瘍マーカーの開発	中森 正二
16-11	気道食道領域がんのリスクとアルコール代謝酵素との関連性とその臨床評価に関する研究	武藤 学
16-12	放射線治療における臨床試験の体系化に関する研究—安全管理と質の管理を含む—	小口 正彦
16-13	がん化学予防の短・中期検索モデルの開発に関する研究	津田 洋幸
16-14	進行膵・胆道がんに対する標準的全身化学療法法の確立に関する研究	古瀬 純司
16-15	生検組織を用いた消化器がん・肺がんの治療感受性予知法および治療効果判定法の確立に関する研究	落合 淳志
16-16	神経芽腫進展の分子機構解析に基づく診断・治療法の確立	中川原 章
16-17	各種がん免疫療法法の開発と臨床的有効性の評価に関する研究	高上 洋一
(計画研究)		
17-1	保健・医療機関受診者を対象とした禁煙支援方法の開発と評価に関する研究	田中 英夫
17-2	低線量CTによる肺がん検診の効率化とその基準の作成に関する研究	坪井 正博
17-3	良好な視機能温存を目標とした眼部悪性腫瘍の新しい集学的治療法の開発	柳澤 隆昭
17-4	喉頭機能を温存した頭頸部がんの標準的治療法の確立に関する研究	吉野 邦俊
17-5	がん外科治療における形成再建手技の確立に関する研究	木股 敬裕
17-6	すりガラス状陰影を伴う肺がんの診断・治療法の確立に関する研究	大松 広伸
17-7	乳房温存療法切除断端の病理診断の標準化と術後観察の適正化に関する研究	秋山 太
17-8	抗悪性腫瘍薬治療を最適化するための臨床薬理学的研究	南 博信
17-9	大腸がん等、増加しているがんの予防を目指した疫学研究	古野 純典
17-10	がんの小線源放射線治療の評価と品質管理に関する研究	土器屋 卓志
17-11	胃がんに対するリンパ節郭清を伴う腹腔鏡下手術と開腹手術との比較に関する研究	片井 均
17-12	ポジトロンCTのがん診断への応用と診断精度向上に関する研究	村上 康二

17-13	小児横紋筋肉腫に対する中央病理診断および遺伝子診断にもとづく臨床試験の確立と新規治療開発に関する研究	森川 康英
17-14	がんの代替療法の科学的検証と臨床応用に関する研究	住吉 義光
17-15	固形癌の骨髄・末梢血・リンパ節中における転移形成能を有する遊離癌細胞 (Isolated Tumor Cell ITC) の検出とその臨床応用	森 正樹
17-16	胆膵がんに対する術中放射線療法の有効性評価に関する多施設共同研究	中郡 聡夫
17-17	多発性骨髄腫の発症と進展に関与する分子基盤の解明と新規分子標的療法の確立に関する研究	飯田 真介
17-18	放射線治療期間の短縮に関する多施設共同臨床試験の確立に関する研究	加賀美 芳和
17-19	臨床試験登録患者検体の有効利用に関する検討	松村 保広
17-20	公的がん専門医療機関の機能と経営の評価に関する研究	長谷川 敏彦
17-21	難治性内分泌腫瘍の最適な治療法の確立に関する研究	塚田 俊彦
17-22	大腸がん肝転移の予知ならびに予防的治療に関する研究	藤田 伸
(計画研究)		
18-1	Stage I 食道がんに対する放射線・抗がん剤併用と手術単独療法の有効性の比較	井垣 弘康
18-2	ヘリコバクター・ピロリ感染による胃発癌の修飾因子に基づく予防策の検討	福田 能啓
18-3	がん治療におけるIVRの技術向上と標準化に関する研究	稲葉 吉隆
18-4	放射線治療システムの精度管理と臨床評価に関する研究	光森 通英
18-5	生体における炎症発がんの分子機構の解明とその予防に関する研究	村上 明
18-6	婦人科悪性腫瘍に対する新たな治療法に関する研究	小西 郁生
18-7	低位直腸がん手術における肛門温存療法の開発に関する研究	森谷 亘皓
18-8	拡大内視鏡による消化器がんの早期発見診断法の確立に関する研究	井上 晴洋
18-9	根治切除不能な頭頸部がんに対するS-1+CDDPを同時併用する化学放射線療法の第II相試験	藤井 正人
18-10	膵がん治療の新たな標的分子の探索と遺伝子治療法の開発	砂村 眞琴
18-11	がん診療における分子イメージングの臨床応用に関する研究	井上 登美夫
18-12	脂質を介した“がん”の分子標的治療法の開発	西島 正弘
18-13	食道腺癌の高危険群の同定および予防介入試験に関する研究	後藤田 卓志
18-14	小児がん経験者のQOLと予後の把握およびその追跡システムの確立に関する研究	石田 也寸志
(機械開発研究)		
15-25	デジタル画像を利用した診断支援システムの開発と利用に関する研究	縄野 繁
(機械開発研究)		
18-15	がんの診断治療用光学機器の開発	土井 俊彦
(指定研究)		
16指-1	ヒトがん発生に係わる環境要因及び感受性要因に関する研究	若林 敬二
16指-2	多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究	津金 昌一郎
16指-3	本邦におけるがん医療の最適化に関する研究	山口 健
17指-1	高感受性悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	堀田 知光
17指-2	呼吸器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	西條 長宏
17指-3	消化器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	大津 敦
17指-4	希少悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	洪井 壮一郎
17指-5	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究	福田 治彦
17指-6	個体レベルでの発がん予知と予防に関する基盤的研究	立松 正衛
18指-1	難治がんの総合的な対策に関する研究	土屋 了介
18指-2	がん専門医療施設を活用したがん診療の標準化に関する共同研究	吉田 茂昭
18指-3	がん対策企画と情報発信の方法論に関する研究	廣橋 説雄

平成19年度 18億円 95課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
14-1	がん情報ネットワークを利用した総合的がん対策支援の具体的方法に関する研究	若尾 文彦
14-2	地域がん登録精度向上と活用に関する研究	津熊 秀明
(総合研究)		
15-1	主要がんの全国登録に基づく患者情報の解析と活用に関する研究	浅村 尚生
15-2	がん生物学に基づく新しい治療法の開発に関する研究	富田 章弘
15-3	がん検診の適切な方法とその評価法の確立に関する研究	濱島 ちさと
(総合研究)		
16-1	肺がんの要因と病態に関する研究	野口 雅之
(総合研究)		
19-1	成人難治性造血器腫瘍に対する非血縁者間の同種造血幹細胞移植法の確立に関する研究	森島 泰雄
(計画研究)		
16-2	地域がん専門診療施設のソフト面の整備拡充に関する研究	猿木 信裕
16-3	小児の難治性白血病、骨髄異形性症候群のゲノム異常の解析と治療法に関する研究	中畑 龍俊
16-4	乳がん易罹患性の診断とそれに基づく予防に関する研究	玉木 康博
16-5	画像診断に基づく消化器がん、肺がん、乳がんのclinical stagingの確立と治療法選択に関する研究	関口 隆三
16-6	がん診療を標準化するための病理診断基準の確立に関する研究	長谷川 匡
16-7	新規化学発がん要因の検索とその生物活性	渡辺 徹志
16-8	ヒト放射線誘発がんの分子機構に関する研究	神谷 研二
16-9	造血器腫瘍における染色体転座関連遺伝子の基礎的・臨床的研究	北林 一生
16-10	がんの早期診断および予後診断に役立つ腫瘍マーカーの開発	中森 正二
16-11	気道食道領域がんのリスクとアルコール代謝酵素との関連性とその臨床評価に関する研究	武藤 学
16-12	放射線治療における臨床試験の体系化に関する研究－安全管理と質の管理を含む－	小口 正彦
16-13	がん化学予防の短・中期検索モデルの開発に関する研究	津田 洋幸
16-14	進行膵・胆道がんに対する標準的全身化学療法法の確立に関する研究	古瀬 純司
16-15	生検組織を用いた消化器がん・肺がんの治療感受性予知法および治療効果判定法の確立に関する研究	落合 淳志
16-16	神経芽腫進展の診断基準確立・分子機構解析とそれに基づく診断・治療法の確立	中川原 章
16-17	各種がん免疫療法の開発と臨床的有効性の評価に関する研究	高上 洋一
(計画研究)		
17-1	保健・医療機関受診者を対象とした禁煙支援方法の開発と評価に関する研究	田中 英夫
17-2	低線量CTによる肺がん検診の効率化とその基準の作成に関する研究	坪井 正博
17-3	良好な視機能温存を目標とした眼部悪性腫瘍の新しい集学的治療法の開発	柳澤 隆昭
17-4	喉頭機能を温存した頭頸部がんの標準的治療法の確立に関する研究	吉野 邦俊
17-5	がん外科治療における形成再建手技の確立に関する研究	木股 敬裕
17-6	すりガラス状陰影を伴う肺がんの診断・治療方法の確立に関する研究	大松 広伸
17-7	乳房温存療法切除断端の病理診断の標準化と術後観察の適正化に関する研究	秋山 太
17-8	抗悪性腫瘍薬治療を最適化するための臨床薬理学的研究	南 博信
17-9	大腸がん等、増加しているがんの予防を目指した疫学研究	古野 純典
17-10	がんの小線源放射線治療の評価と品質管理に関する研究	土器屋 卓志
17-11	胃がんに対するリンパ節郭清を伴う腹腔鏡下手術と開腹手術との比較に関する研究	片井 均
17-12	ポジトロンCTのがん診断への応用と診断精度向上に関する研究	村上 康二
17-13	小児横紋筋肉腫に対する中央病理診断および遺伝子診断にもとづく臨床試験の確立と新規治療開発に関する研究	森川 康英
17-14	がんの代替療法の科学的検証と臨床応用に関する研究	住吉 義光
17-15	固形癌の骨髄・末梢血・リンパ節中における転移形成能を有する遊離癌細胞 (Isolated Tumor Cell ITC) の検出とその臨床応用	森 正樹
17-16	多発性骨髄腫の発症と進展に関与する分子基盤の解明と新規分子標的療法法の確立に関する研究	飯田 真介
17-17	放射線治療期間の短縮に関する多施設共同臨床試験の確立に関する研究	加賀美 芳和
17-18	臨床試験登録患者検体の有効利用に関する検討	松村 保広
17-19	公的がん専門医療機関の機能と経営の評価に関する研究	長谷川 敏彦
17-20	難治性内分泌腫瘍の最適な治療法の確立に関する研究	塚田 俊彦
17-21	大腸がん肝転移の予知ならびに予防的治療に関する研究	藤田 伸
(計画研究)		
18-1	Stage I 食道がんに対する放射線・抗がん剤併用と手術単独療法の有効性の比較	井垣 弘康
18-2	ヘリコバクター・ピロリ感染による胃発癌の修飾因子に基づく予防策の検討	福田 能啓
18-3	がん治療におけるIVRの技術向上と標準化に関する研究	稲葉 吉隆
18-4	放射線治療システムの精度管理と臨床評価に関する研究	光森 通英
18-5	生体における炎症発がんの分子機構の解明とその予防に関する研究	村上 明
18-6	婦人科悪性腫瘍に対する新たな治療法に関する研究	小西 郁生
18-7	低位直腸がん手術における肛門温存療法の開発に関する研究	森谷 宣皓
18-8	拡大内視鏡による消化器がんの早期発見診断法の確立に関する研究	井上 晴洋
18-9	根治切除不能な頭頸部がんに対するS-1+CDDPを同時併用する化学放射線療法法の第II相試験	藤井 正人
18-10	膵がん治療の新たな標的分子の探索と遺伝子治療法の開発	砂村 眞琴
18-11	がん診療における分子イメージングの臨床応用に関する研究	井上 登美夫
18-12	脂質を介した“がん”の分子標的治療法の開発	西島 正弘



18-13	食道腺癌の高危険群の同定および予防介入試験に関する研究	後藤田 卓志
18-14	小児がん経験者のQOLと予後の把握およびその追跡システムの確立に関する研究 (計画研究)	石田 也寸志
19-2	肥満・高脂血症・糖尿病モデル動物の発がん感受性と発がん機構に関する研究	高橋 真美
19-3	成人白血病の難治機構の分子レベルでの解明とそれに基づく分子標的治療の開発に関する研究	朝長 万左男
19-4	がん患者の支持療法・緩和療法の技術の向上及びその評価に関する研究	的場 元弘
19-5	胆道膵悪性腫瘍の至適外科治療選択基準を確立するための術前総合診断能向上を目指した研究	島田 和明
19-6	荷電粒子線を用いたがん治療の標準化と効率化に関する研究	鎌田 正
19-7	悪性黒色腫に対する新しい診療体系の確立に関する研究	山崎 直也
19-8	分子基盤に基づく難治性リンパ系腫瘍の診断及び治療法の開発に関する研究	木下 朝博
19-9	発がんにおけるゲノム異常誘発の誘因に関する研究	益谷 美都子
19-10	がん生物像を規定するがん組織微小環境に関する研究	石井 源一郎
19-11	デジタルマンモグラフィによる乳がん検診の効率及び精度向上・評価に関する研究(検診の精度管理のためのデータベース構築、モニタ診断法の確立、CAD導入にあたって)	石橋 忠司
19-12	神経内分泌腫瘍としての特性を持つ肺がん(小細胞がんを除く)の標準的治療法の確立に関する研究:臨床病理学的特徴の把握を含む	石川 雄一
19-13	がんの遺伝子相談実施施設の連携による遺伝性腫瘍の診断と、長期予後およびQOL改善に関する研究	菅野 康吉
19-14	抗腫瘍抗原ペプチド免疫療法の改良に向けた研究	佐藤 昇志
19-15	中皮腫の診断精度の向上に関する研究	樋野 興夫
19-16	日本人女性の乳がん発症リスクに対する新しいロジスティック回帰モデルの臨床への応用に関する研究	菰池 佳史
19-17	前がん状態におけるDNAメチル化異常の意義に関する研究	豊田 実
19-18	がん組織の特異性を利用したドラッグデリバリーシステム(DDS)薬剤の基礎的・臨床的開発に関する研究	濱口 哲弥
19-19	環境化学発がん物質の曝露評価法の開発と発がんリスク評価に関する研究	大島 寛史
19-20	がん治療による口腔内合併症の予防法及び治療法の確立に関する研究	浅井 昌大
19-21	固形がんにおけるがん性幹細胞の役割の究明とがん性幹細胞を標的とした治療法開発に関する研究	増富 健吉
19-22	がん放射線診断における患者被ばくの実態調査と放射線誘発がんリスク推定に関する研究	遠藤 啓吾
19-23	局所療法適応外の肝細胞がんに対する経動脈的治療法標準化(手技を含む)の研究	荒井 保明
19-24	ホルモン療法耐性機序の分子生物学的解明と治療効果予測に関する研究	青儀 健二郎
(機械開発研究)		
18-15	がんの診断治療用光学機器の開発	土井 俊彦
(機械開発研究)		
19-25	デジタル画像処理によるがん診断支援システムの開発と利用に関する研究	長谷川 純一
(指定研究)		
17指-1	高感受性悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	堀田 知光
17指-2	呼吸器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	西條 長宏
17指-3	消化器悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	大津 敦
17指-4	希少悪性腫瘍に対する標準的治療確立のための多施設共同研究	洪井 壮一郎
17指-5	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究	福田 治彦
17指-6	個体レベルでの発がん予知と予防に関する基盤的研究	立松 正衛
18指-1	難治がんの総合的な対策に関する研究	田村 友秀
18指-2	がん専門医療施設を活用したがん診療の標準化に関する共同研究	吉田 茂昭
18指-3	がん対策企画と情報発信の方法論に関する研究	吉田 輝彦
19指-1	ヒトがん発生に係わる環境要因及び感受性要因に関する研究	中釜 齊
19指-2	多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究	津金 昌一郎
19指-3	がん医療政策提言に向けた研究	祖父江 友孝

平成20年度 18億円 95課題

課題番号	研究課題名	主任研究者
(総合研究)		
15-1	主要がんの全国登録に基づく患者情報の解析と活用に関する研究	浅村 尚生
15-2	がん生物学に基づく新しい治療法の開発に関する研究	富田 章弘
15-3	がん検診の適切な方法とその評価法の確立に関する研究	濱島 ちさと
(総合研究)		
16-1	肺がんの要因と病態に関する研究	野口 雅之
(総合研究)		
19-1	成人難治性造血器腫瘍に対する非血縁者間の同種造血幹細胞移植法の確立に関する研究	森島 泰雄
(総合研究)		
20-1	がん情報ネットワークを利用した総合的がん対策支援とその評価の具体的方法に関する研究	石川ベンジャミン <sup>光一</sup>
20-2	地域がん登録資料のがん対策およびがん研究への活用に関する研究	井岡 亜希子
(計画研究)		
17-1	保健・医療機関受診者を対象とした禁煙支援方法の開発と評価に関する研究	田中 英夫
17-2	低線量CTによる肺がん検診の効率化とその基準の作成に関する研究	坪井 正博
17-3	良好な視機能温存を目標とした眼部悪性腫瘍の新しい集学的治療法の開発	柳澤 隆昭
17-4	喉頭機能を温存した頭頸部がんの標準的治療法の確立に関する研究	吉野 邦俊
17-5	がん外科治療における形成再建手技の確立に関する研究	木股 敬裕
17-6	すりガラス状陰影を伴う肺がんの診断・治療方法の確立に関する研究	大松 広伸
17-7	乳房温存療法切除断端の病理診断の標準化と術後観察の適正化に関する研究	秋山 太
17-8	抗悪性腫瘍薬治療を最適化するための臨床薬理学的研究	南 博信
17-9	大腸がん等、増加しているがんの予防を目指した疫学研究	古野 純典
17-10	がんの小線源放射線治療の評価と品質管理に関する研究	土器屋 卓志
17-11	胃がんに対するリンパ節郭清を伴う腹腔鏡下手術と開腹手術との比較に関する研究	片井 均
17-12	ポジトロンCTのがん診断への応用と診断精度向上に関する研究	村上 康二
17-13	小児横紋筋肉腫に対する中央病理診断および遺伝子診断にもとづく臨床試験の確立と新規治療開発に関する研究	森川 康英
17-14	がんの代替療法の科学的検証と臨床応用に関する研究	住吉 義光
17-15	固形癌の骨髄・末梢血・リンパ節中における転移形成能を有する遊離癌細胞 (Isolated Tumor Cell ITC) の検出とその臨床応用	森 正樹
17-16	多発性骨髄腫の発症と進展に関与する分子基盤の解明と新規分子標的療法の確立に関する研究	飯田 真介
17-17	放射線治療期間の短縮に関する多施設共同臨床試験の確立に関する研究	加賀美 芳和
17-18	臨床試験登録患者検体の有効利用に関する検討	松村 保広
17-19	公的がん専門医療機関の機能と経営の評価に関する研究	長谷川 敏彦
17-20	難治性内分泌腫瘍の最適な治療法の確立に関する研究	塚田 俊彦
17-21	大腸がん肝転移の予知ならびに予防的治療に関する研究	藤田 伸
(計画研究)		
18-1	Stage I 食道がんに対する放射線・抗がん剤併用と手術単独療法の有効性の比較	井垣 弘康
18-2	ヘリコバクター・ピロリ感染による胃発癌の修飾因子に基づく予防策の検討	福田 能啓
18-3	がん治療におけるIVRの技術向上と標準化に関する研究	稲葉 吉隆
18-4	放射線治療システムの精度管理と臨床評価に関する研究	光森 通英
18-5	生体における炎症発がんの分子機構の解明とその予防に関する研究	村上 明
18-6	婦人科悪性腫瘍に対する新たな治療法に関する研究	小西 郁生
18-7	低位直腸がん手術における肛門温存療法の開発に関する研究	森谷 宜皓
18-8	拡大内視鏡による消化器がんの早期発見診断法の確立に関する研究	井上 晴洋
18-9	根治切除不能な頭頸部がんに対するS-1+CDDPを同時併用する化学放射線療法の第II相試験	藤井 正人
18-10	膵がん治療の新たな標的分子の探索と遺伝子治療法の開発	砂村 眞琴
18-11	がん診療における分子イメージングの臨床応用に関する研究	井上 登美夫
18-12	脂質を介した“がん”の分子標的治療法の開発	西島 正弘
18-13	食道腺癌の高危険群の同定および予防介入試験に関する研究	後藤田 卓志
18-14	小児がん経験者のQOLと予後の把握およびその追跡システムの確立に関する研究	石田 也寸志
(計画研究)		
19-2	肥満・高脂血症・糖尿病モデル動物の発がん感受性と発がん機構に関する研究	高橋 真美
19-3	成人白血病の難治機構の分子レベルでの解明とそれに基づく分子標的治療の開発に関する研究	朝長 万左男
19-4	がん患者の支持療法・緩和療法の技術の向上及びその評価に関する研究	的場 元弘
19-5	胆道膵悪性腫瘍の至適外科治療選択基準を確立するための術前総合診断能向上を目指した研究	島田 和明
19-6	荷電粒子線を用いたがん治療の標準化と効率化に関する研究	鎌田 正
19-7	悪性黒色腫に対する新しい診療体系の確立に関する研究	山崎 直也
19-8	分子基盤に基づく難治性リンパ系腫瘍の診断及び治療法の開発に関する研究	木下 朝博
19-9	発がんにおけるゲノム異常誘発の誘因に関する研究	益谷 美都子
19-10	がん生物像を規定するがん組織微小環境に関する研究	石井 源一郎
19-11	デジタルマンモグラフィによる乳がん検診の効率及び精度向上・評価に関する研究(検診の精度管理のためのデータベース構築、モニタ診断法の確立、CAD導入にあたって)	石橋 忠司
19-12	神経内分泌腫瘍としての特性を持つ肺がん(小細胞がんを除く)の標準的治療法の確立に関する研究:臨床病理学的特徴の把握を含む	石川 雄一
19-13	がんの遺伝子相談実施施設の連携による遺伝性腫瘍の診断と、長期予後およびQOL改善に関する研究	菅野 康吉

19-14	抗腫瘍抗原ペプチド免疫療法の改良に向けた研究	佐藤 昇志
19-15	中皮腫の診断精度の向上に関する研究	樋野 興夫
19-16	日本人女性の乳がん発症リスクに対する新しいロジスティック回帰モデルの臨床への応用に関する	菰池 佳史
19-17	前がん状態におけるDNAメチル化異常の意義に関する研究	豊田 実
19-18	がん組織の特異性を利用したドラッグデリバリーシステム(DDS)薬剤の基礎的・臨床的開発に 関する研究	濱口 哲弥
19-19	環境化学発がん物質の曝露評価法の開発と発がんリスク評価に関する研究	大島 寛史
19-20	がん治療による口腔内合併症の予防法及び治療法の確立に関する研究	浅井 昌大
19-21	固形がんにおけるがん性幹細胞の役割の究明とがん性幹細胞を標的とした治療法開発に関する研	増富 健吉
19-22	がん放射線診断における患者被ばくの実態調査と放射線誘発がんリスク推定に関する研究	遠藤 啓吾
19-23	局所療法適応外の肝細胞がんに対する経動脈的治療法標準化(手技を含む)の研究	荒井 保明
19-24	ホルモン療法耐性機序の分子生物学的解明と治療効果予測に関する研究	青儀 健二郎

(計画研究)

20-3	地域がん専門診療施設のソフト面の整備拡充に関する研究	三上 春夫
20-4	小児造血器腫瘍の発生機序に基づく治療研究	水谷 修紀
20-5	がん診療を標準化するための病理診断基準確立に関する研究	津田 均
20-6	新規発がん要因の検索とヒト発がんへの関与に関する研究	戸塚 ゆ加里
20-7	放射線被ばくによる発がんの分子機構に関する研究	山下 俊一
20-8	造血器腫瘍の発症と難治化に関わる分子標的の基礎的・臨床的研究	黒川 峰夫
20-9	血液サンプルを用いた、難治性固形癌のがん薬物療法の効果予測因子の臨床的有効性の検討	西尾 和人
20-10	気道食道領域がんのリスクとアルコール代謝酵素との関連性とその臨床評価に関する研究	金子 和弘
20-11	進行肝胆膵がんに対する標準的治療法の確立に関する研究	奥坂 拓志
20-12	生検組織や細胞を用いたがんの治療感受性予知法および治療効果判定法の確立に関する研究	横崎 宏
20-13	神経芽腫の増殖・分化機構の解明による新規治療法開発の基盤研究	上條 岳彦
20-14	各種がん免疫療法の開発と臨床的有効性の評価に関する研究	平家 勇司
20-15	画像によるがんの診断、治療法選択、治療効果判定に関する研究	渡辺 裕一
20-16	標準的乳がんセンチネルリンパ節生検法の確立のため多施設共同研究	木下 貴之

(機械開発研究)

18-15	がんの診断治療用光学機器の開発	土井 俊彦
-------	-----------------	-------

(機械開発研究)

19-25	デジタル画像処理によるがん診断支援システムの開発と利用に関する研究	長谷川 純一
-------	-----------------------------------	--------

(指定研究)

18指-1	難治がんの総合的な対策に関する研究	田村 友秀
18指-2	がん専門医療施設を活用したがん診療の標準化に関する共同研究	吉田 茂昭
18指-3	がん対策企画と情報発信の方法論に関する研究	吉田 輝彦
19指-1	ヒトがん発生に係わる環境要因及び感受性要因に関する研究	中釜 斉
19指-2	多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究	津金 昌一郎
19指-3	がん医療政策提言に向けた研究	祖父江 友孝
20指-1	高感受性悪性腫瘍に対する標準治療確立のための多施設共同研究	飛内 賢正
20指-2	呼吸器悪性腫瘍に対する標準治療確立のための多施設共同研究	田村 友秀
20指-3	消化器悪性腫瘍に対する標準治療確立のための多施設共同研究	島田 安博
20指-4	希少悪性腫瘍に対する標準治療確立のための多施設共同研究	洪井 壮一郎
20指-5	放射線治療を含む標準治療確立のための多施設共同研究	平岡 真寛
20指-6	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究	福田 治彦
20指-7	がんの集学的治療の早期開発の研究体制確立に関する研究	大津 敦
20指-8	個体レベルでの発がん予知と予防に関する基盤的研究	白井 智之
20指-9	がん検診の評価とあり方に関する研究	垣添 忠生

平成21年度 19億円 108課題

課題番号 (総合研究)	研究課題名	主任研究者
16-1	肺がんの要因と病態に関する研究	野口 雅之
19-1	成人難治性造血器腫瘍に対する非血縁者間の同種造血幹細胞移植法の確立に関する研究	森島 泰雄
20-1	がん情報ネットワークを利用した総合的がん対策支援とその評価の具体的方法に関する研究	石川ベンジャミン光一
20-2	地域がん登録資料のがん対策およびがん研究への活用に関する研究	井岡 亜希子
<b>(計画研究)</b>		
18-1	Stage I 食道がんに対する放射線・抗がん剤併用と手術単独療法の有効性の比較	井垣 弘康
18-2	ヘリコバクター・ピロリ感染による胃発癌の修飾因子に基づく予防策の検討	福田 能啓
18-3	がん治療におけるIVRの技術向上と標準化に関する研究	稲葉 吉隆
18-4	放射線治療システムの精度管理と臨床評価に関する研究	光森 通英
18-5	生体における炎症発がんの分子機構の解明とその予防に関する研究	村上 明
18-6	婦人科悪性腫瘍に対する新たな治療法に関する研究	小西 郁生
18-7	低位直腸がん手術における肛門温存療法の開発に関する研究	森谷 亘皓
18-8	拡大内視鏡による消化器がんの早期発見診断法の確立に関する研究	井上 晴洋
18-9	根治切除不能な頭頸部がんに対するS-1+CDDPを同時併用する化学放射線療法の第II相試験	藤井 正人
18-10	膵がん治療の新たな標的分子の探索と遺伝子治療法の開発	砂村 眞琴
18-11	がん診療における分子イメージングの臨床応用に関する研究	井上 登美夫
18-12	脂質を介した“がん”の分子標的治療法の開発	西島 正弘
18-13	食道腺癌の高危険群の同定および予防介入試験に関する研究	後藤田 卓志
18-14	小児がん経験者のQOLと予後の把握およびその追跡システムの確立に関する研究	石田 也寸志
<b>(計画研究)</b>		
20-3	地域がん専門診療施設のソフト面の整備拡充に関する研究	三上 春夫
20-4	小児造血器腫瘍の発生機序に基づく治療研究	水谷 修紀
20-5	がん診療を標準化するための病理診断基準確立に関する研究	津田 均
20-6	新規発がん要因の検索とヒト発がんへの関与に関する研究	戸塚 ゆ加里
20-7	放射線被ばくによる発がんの分子機構に関する研究	山下 俊一
20-8	造血器腫瘍の発症と難治化に関わる分子標的の基礎的・臨床的研究	黒川 峰夫
20-9	血液サンプルを用いた、難治性固形癌のがん薬物療法の効果予測因子の臨床的有効性の検討	西尾 和人
20-10	気道食道領域がんのリスクとアルコール代謝酵素との関連性とその臨床評価に関する研究	金子 和弘
20-11	進行肝胆膵がんに対する標準的治療法の確立に関する研究	奥坂 拓志
20-12	生検組織や細胞を用いたがんの治療感受性予知法および治療効果判定法の確立に関する研究	横崎 宏
20-13	神経芽腫の増殖・分化機構の解明による新規治療法開発の基盤研究	上條 岳彦
20-14	各種がん免疫療法の開発と臨床的有効性の評価に関する研究	平家 勇司
20-15	画像によるがんの診断、治療法選択、治療効果判定に関する研究	渡辺 裕一
20-16	標準的乳がんセンチネルリンパ節生検法の確立のため多施設共同研究	木下 貴之
<b>(機械開発研究)</b>		
14-20	がんの診断治療用光学機器の開発	土井 俊彦
<b>(分野別指定研究)</b>		
21分指-1	がんの原因解明に関わる基礎的・基盤的研究	中釜 斉
21分指-1-①	発がんにおけるゲノム異常誘発の誘因に関する研究	益谷 美都子
21分指-1-②	環境化学発がん物質の曝露評価法の開発と発がんリスク評価に関する研究	大島 寛史
21分指-2	発がん感受性と予防法の確立に関わる基礎的・基盤的研究	横田 淳
21分指-2-①	肥満・高脂血症・糖尿病モデル動物における発がん感受性と発がん機構に関する研究	高橋 真美
21分指-2-②	前がん状態におけるDNAメチル化異常の意義に関する研究	豊田 実
21分指-3	がんの特性の解明に関わる基礎的・基盤的研究	落合 淳志
21分指-3-①	がんの生物的特性に着目した治療法および診断法の評価系の確立に関わる研究	富田 章弘
21分指-3-②	がん生物像を規定するがん組織微小環境に関する研究	石井 源一郎
21分指-3-③	固形癌におけるがん性幹細胞の役割の究明とがん性幹細胞を標的とした治療法開発に関する研究	増富 健吉
21分指-4	基礎と臨床の橋渡的研究	落谷 孝広
21分指-4-①	大腸癌肝転移関連分子の究明と関連分子を標的とした新たな治療開発	杉原 健一
21分指-4-②	中皮腫の診断制度の向上に関する研究	樋野 興夫
21分指-4-③	がん組織の特異性を利用したドラッグデリバリーシステム(DDS)薬剤の基礎的・臨床的開発に関する研究	濱口 哲弥
21分指-4-④	本邦での乳癌検体におけるホルモン受容体、HER2受容体発現評価の精度管理システム構築に関する研究	青儀 健二
21分指-4-⑤	消化器がん分子標的治療薬の標的・感受性規定分子検出法の適正化に関する研究	吉野 孝之
21分指-4-⑥	抗悪性腫瘍薬による肝炎ウイルス再活性化の調査とその対応に関する研究	池田 公史
21分指-5	新たな診断法の開発と有効性評価に関する臨床的・基盤的研究	藤井 博史
21分指-5-①	肺野限局性すりガラス様陰影の自然史解明のための前向き研究	柿沼 龍太郎
21分指-5-②	がん診療におけるPETの有用性および至適撮影条件の標準化に関する研究	寺内 隆司
21分指-5-③	(機械開発) デジタル画像処理によるがん診断支援システムの開発と利用に関する研究	飯沼 元
21分指-5-④	がん放射線診断における患者被ばくの実態調査と放射線誘発がんのリスク推定に関する研究	遠藤 啓吾
21分指-6	新たな治療法の開発に資する臨床的・基盤的研究	大津 敦
21分指-6-①	成人白血病の難治機構の分子レベルでの解明とそれに基づく分子標的治療の開発に関する研究	直江 知樹
21分指-6-③	分子基盤に基づく難治性リンパ系腫瘍の診断及び治療法の開発に関する研究	木下 朝博
21分指-6-④	抗腫瘍抗原ペプチド免疫療法の改良に向けた研究	佐藤 昇志
21分指-6-⑤	医薬品・医療機器開発プロセスに関する、評価・コンサルティング体制の確立に関する研究	大津 敦

21分指-6-⑥	臨床試験登録症例の安全かつ適正な外来化学療法管理システムに関する研究班	後藤 功一
21分指-7	標準的治療法の確立に関する臨床研究(手術療法)	小菅 智男
21分指-7-①	眼部悪性腫瘍の診療体制確立のための研究	鈴木 茂伸
21分指-7-②	口腔・咽頭がんに対する標準的な診断・治療法の確立に関する研究	林 隆一
21分指-7-③	がん外科治療における形成再建外科標準術式の確立に関する研究	桜庭 実
21分指-7-④	再発リスクに応じた適正な乳がん局所療法確立に関する研究	大住 省三
21分指-7-⑤	肝胆膵外科手術手技の客観的評価と科学的根拠に基づいた有用性の検討および肝胆膵がんに対	島田 和明
21分指-7-⑥	悪性黒色腫に対する新しい診療体系の確立に関する研究	山崎 直也
21分指-8	標準的治療法の確立に関する臨床研究(放射線治療・薬物療法)	田村 友秀
21分指-8-①	臨床試験を実地医療とするための抗悪性腫瘍薬の臨床薬理学研究	田村 研治
21分指-8-②	HDR組織内照射等の標準化の研究	小口 正彦
21分指-8-③	小児・若年成人等の多様な希少がん腫に対して効果的治療開発に関する研究	原 純一
21分指-8-④	がんの代替医療の科学的検証に関する研究	山下 素弘
21分指-8-⑤	多発性骨髄腫の病態解明と分子基盤に基づく効果的な分子標的療法の確立に関する研究	木崎 昌弘
21分指-8-⑥	難治性内分泌腫瘍の診断と治療に関する研究	島津 章
21分指-8-⑦	局所療法適応外の肝細胞がんに対する経動脈的治療法標準化(手技を含む)に関する研究	荒井 保明
21分指-8-⑧	安全で高精度な放射線治療を実現する放射線治療体制に関する研究	伊丹 純
21分指-9	支持療法・がん患者支援にかかわる研究	的場 元弘
21分指-9-①	がん患者の支持療法・緩和療法の技術の向上及びその評価に関する研究	的場 元弘
21分指-9-②	がんの遺伝子相談実施施設の連携による遺伝性腫瘍の診断と、長期予後およびQOL改善に関す	菅野 康吉
21分指-9-③	がん治療による口腔内合併症の予防法及び治療法の確立に関する研究	浅井 昌大
21分指-9-④	若年乳癌患者のサバイバーシップ支援プログラムの構築に関する研究	大野 真司
21分指-9-⑤	がん医療に資する心のケアに携る医療従事者の育成に関する研究	内富 庸介
21分指-10	がん登録等、がんの実態把握に資する疫学的・基盤的研究	祖父江 友孝
21分指-10-①	(総合)院内がん登録および臓器がん登録と連携した診療科データベースの構築と活用に関する研	西本 寛
21分指-11	適切ながん予防法および検診の確立に資する基盤的研究	津金 昌一
21分指-11-①	膵臓・胆道がんのリスク要因の分子疫学的分析のための検体セットの構築と仮説の設定	菊地 正悟
21分指-11-②	日本人女性における乳がん罹患リスクに基づいた効率的な乳がん検診システムの確立に関する研	菰池 佳史
21分指-11-③	我が国における対策型がん検診・任意型がん検診の比較と現状把握に基づいた今後のがん検診に	村松 幸男
21分指-13	がん対策の企画・支援・情報発信に関する研究	若尾 文彦
21分指-13-①	たばこ政策への戦略基盤の構築と政策提言・実施・評価メカニズムに関する研究-特に、禁煙支援	望月 友美

(特別指定研究)

19指-1	ヒトがん発生に係わる環境要因及び感受性要因に関する研究	中釜 齊
19指-2	多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究	津金 昌一郎
19指-3	がん医療政策提言に向けた研究	祖父江 友孝
20指-1	高感受性悪性腫瘍に対する標準治療確立のための多施設共同研究	飛内 賢正
20指-2	呼吸器悪性腫瘍に対する標準治療確立のための多施設共同研究	田村 友秀
20指-3	消化器悪性腫瘍に対する標準治療確立のための多施設共同研究	島田 安博
20指-4	希少悪性腫瘍に対する標準治療確立のための多施設共同研究	渋井 壮一郎
20指-5	放射線治療を含む標準治療確立のための多施設共同研究	平岡 真寛
20指-6	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究	福田 治彦
20指-7	がんの集学的治療の早期開発の研究体制確立に関する研究	大津 敦
20指-8	個体レベルでの発がん予知と予防に関する基盤的研究	白井 智之
20指-9	がん検診の評価とあり方に関する研究	垣添 忠生
21特指-1	難治がん対策推進のための総合的研究	藤原 康弘
21特指-2	がん専門医療施設を活用したがん診療の標準化に関する共同研究	木下 平
21特指-3	がん研究企画と評価の方法論に関する研究	山本 精一郎
21特指-4	がんに関する適切ながん情報提供の在り方に関する研究	若尾 文彦
21特指-5	がん研究基盤としてのバイオバンク・データベース及び分子解析拠点の整備と運営に関する研究	吉田 輝彦



## がん研究助成金によるシンポジウム

1977（昭和 52）年度からがん研究助成金によるシンポジウムが企画実施されている。これまでに行われてきた「がんシンポジウム」のテーマは下記のとおりである。

### 第 1 回（昭和 52 年度）

- 1) 基礎面からみたがん研究の進歩（司会：杉村 隆）
- 2) 臨床面からみたがん研究の進歩（司会：市川 平三郎）

### 第 2 回（昭和 53 年度）

- 1) 生化学的及び分子レベルのアプローチ（司会：杉村 隆）
- 2) 臨床病理的アプローチ（司会：市川 平三郎）

### 第 3 回（昭和 54 年度）

- 1) 腹部臓器を主とする疾患モデルとしての実験がん（司会：杉村 隆）
- 2) 腹部臓器がんの画像診断（司会：市川 平三郎）

### 第 4 回（昭和 55 年度）

肺がん研究の基礎と臨床（司会：河内 卓・末舛 恵一）

### 第 5 回（昭和 56 年度）

成人 T 細胞性白血病・リンパ腫（ATL）とその病因（司会：末舛恵一・河内卓）

### 第 6 回（昭和 57 年度）

多重がんの基礎と臨床（司会：佐藤 茂秋）

### 第 7 回（昭和 58 年度）

頭頸部がんの基礎と臨床（司会：下里 幸雄）

### 第 8 回（昭和 59 年度）

抗がん剤感受性テストの基礎と臨床（司会：西條 長宏）

### 第 9 回（昭和 60 年度）

胚細胞性腫瘍の基礎と臨床（司会：下里 幸雄）

### 第 10 回（昭和 61 年度）

胸腺腫ならびにその関連腫瘍（司会：下里 幸雄）

### 第 11 回（昭和 62 年度）

腫瘍マーカーの基礎と臨床（司会：大倉 久直）

### 第 12 回（昭和 63 年度）

がんの画像診断（司会：山田 達哉）

### 第 13 回（平成元年度）

がんの予後因子（司会：下里 幸雄）

### 第 14 回（平成 2 年度）

薬物療法を主体とする固形がんの集学的治療の臨床試験研究（司会：下山正徳）

### 第 15 回（平成 3 年度）

- がん研究・がん対策における情報システムの基礎と臨床（司会：渡辺 昌）
- 第 16 回（平成 4 年度）  
肝細胞がん：発症機構と診療の新しい展開（司会：江角 浩安）
- 第 17 回（平成 5 年度）  
がん診療における内視鏡の役割 - 診断・治療の進歩 - （司会：広橋 説雄）
- 第 18 回（平成 6 年度）  
がん治療と QOL（司会：広橋 説雄）
- 第 19 回（平成 7 年度）  
放射線診断・治療の新展開（司会：吉田 茂昭・広橋 説雄）
- 第 20 回（平成 8 年度）  
がんと遺伝：基礎と臨床（司会：成毛 韶夫・江角 浩安）
- 第 21 回（平成 9 年度）  
がん治療開発の課題とその対策  
- ブレイクスルーのための様々な工夫をめぐって-（司会：広橋説雄・江角浩安）
- 第 22 回（平成 10 年度）  
がん臨床試験の問題点と今後の課題（司会：広橋 説雄・江角 浩安）
- 第 23 回（平成 11 年度）  
膵がんの基礎と臨床（司会：山口 建・江角 浩安）
- 第 24 回（平成 12 年度）  
「がん-挑戦から克服へ」-21 世紀への提言-（司会：山口 建・江角 浩安）
- 第 25 回（平成 13 年度）  
がん診療における放射線治療の役割（司会：江角 浩安・野村 和弘）
- 第 26 回（平成 14 年度）  
がんの予防-課題と克服に向けて-
- 第 27 回（平成 15 年度）  
機能温存手術-評価と今後の展開-
- 第 28 回（平成 16 年度）  
食道がん診療の現状と展望
- 第 29 回（平成 17 年度）  
肺がん〈予防から診断・治療まで〉（司会：若林 敬二・江角 浩安）
- 第 30 回（平成 18 年度）  
正しいがん情報の提供とその利用（市民公開講座）  
がん対策情報センターとがん診療連携拠点病院の機能と役割（研究者向け）
- 第 31 回（平成 19 年度）  
がんになっても最期まで安心できるまちづくり（市民公開講座）  
がん診療連携拠点病院における緩和ケア（研究者向け）



第 32 回（平成 20 年度）

有効な新薬をより早く（市民公開講座）

がん薬物療法の進歩と課題（研究者向け）

第 33 回（平成 21 年度）

わが国発の新しいがん治療薬の開発を目指して（市民公開講座）

わが国における TR の課題とその克服（研究者向け）



【日本癌学会賞】

吉田富三賞(6名)

受賞年度	受賞者名	業績
7	佐藤 春郎	吉田肉腫・腹水肝癌を用いたがん細胞の生物学的研究において優れた業績を挙げ、また広く癌研究の発展に寄与した。
		51 癌の転移抑制に関する研究
		52 癌の転移抑制に関する研究
8	伊東 信行	化学発癌研究、特に環境物質の発癌性同定の研究において優れた業績を挙げ、また広く癌研究の発展に寄与した。
		61 潜在性前立腺がんの発育・進展に関する実験的及び臨床的研究
		62 潜在性前立腺がんの発育・進展に関する実験的及び臨床的研究
		63 潜在性前立腺がんの発育・進展に関する実験的及び臨床的研究
9	橋本 嘉幸	膀胱発癌の実験的研究及び免疫学、ことにモノクローナル抗体の医学、薬学への応用研究に於いて優れた業績を挙げ、また広く癌研究の発展に寄与した。
		54 免疫化学療法を中心とする癌治療法の基礎的臨床研究
		55 免疫化学療法を中心とする癌治療法の基礎的臨床研究
		56 免疫化学療法を中心とする癌治療法の基礎的臨床研究
12	小林 博	腫瘍病理学、特にがんの異物化研究において優れた業績を上げ、また、札幌がんセミナーの運営などを通して広くがん研究の発展に寄与した。
		58 がん細胞の転移機序に関する研究
		59 がん細胞の転移機序に関する研究
13	関谷 剛男	微細なDNA変異を簡便に検出するSSCP法の発明により広く癌研究の発展に寄与し、又機関誌JJCRの編集に多大な貢献をなした。
		3 ヒトがんに密接に関連する染色体レベルでの異常の分子生物学的解析
		4 ヒトがんに密接に関連する染色体レベルでの異常の分子生物学的解析
21	上田 龍三	CCR4が、成人T細胞白血病リンパ腫(ATLL)等に強く発現しており、抗CCR4抗体の糖鎖を修飾することにより、強力な抗体依存性細胞障害活性と抗腫瘍効果が発現することを発見した。更に、抗CCR4抗体を用いたCCR4陽性T細胞性腫瘍に対する臨床試験を展開することに成功した。
		5 成人の難治性白血病の分子生物学的機構の解明と薬物療法の確立に関する研究
		6 成人の難治性白血病の分子生物学的機構の解明と薬物療法の確立に関する研究
		7 成人の難治性白血病の分子生物学的機構の解明と薬物療法の確立に関する研究
		8 成人の難治性白血病の分子生物学的機構の解明と薬物療法の確立に関する研究
		11 難治性リンパ系腫瘍の分子生物学的特徴の解明と疾患特異的治療法の開発に関する研究
		12 難治性リンパ系腫瘍の分子生物学的特徴の解明と疾患特異的治療法の開発に関する研究
		13 難治性リンパ系腫瘍の分子生物学的特徴の解明と疾患特異的治療法の開発に関する研究
		14 難治性リンパ系腫瘍の分子生物学的特徴の解明と疾患特異的治療法の開発に関する研究

長與又郎賞(9名)

受賞年度	受賞者名	業績
8	和田 武雄	消化管系癌の病態整理と治療の研究においてすぐれた業績を挙げ、また広く癌研究の発展に寄与した。
		43 がんの特異的な変化を応用する診断法の開発に関する研究
		44 癌に特異的な変化にもとづく診断法に関する研究
9	西 満正	胃がんの進展様式と適正手術の研究においてまた常に患者とともにある医師としての実践を通じ優れた業績を挙げ、広く癌研究と癌治療の発展に寄与した。
		60 食道・胃境界部がんの特徴とその対策
		61 食道・胃境界部がんの特徴とその対策
		62 食道・胃境界部がんの早期診断法と治療の確立
10	市川 平三郎	胃の二重X線造影法の開発と普及を通じて優れた業績を挙げ、広く癌研究と癌治療の発展に寄与した。
		49 胃がん集団検診の適正化に関する研究
		50 胃がん集団検診の適正化に関する研究
14	田原 栄一	ヒト消化器がんの分子病理学的研究において多大なる業績を挙げ、更にその結果をがんの分子診断学として発展させた。
		61 BorrmannIV型胃がんの生物学的特性に基づいた診断と治療に関する研究
		62 BorrmannIV型胃がんの生物学的特性に基づいた診断と治療に関する研究
		63 BorrmannIV型胃がんにおける増殖因子、遺伝子情報・腫瘍マーカーの解明とその臨床応用
		元 BorrmannIV型胃がんにおける増殖因子、遺伝子情報・腫瘍マーカーの解明とその臨床応用
		6 胃の腸上皮化生における遺伝子変化とそのがん化
		7 胃の腸上皮化生における遺伝子変化とそのがん化
		8 胃の腸上皮化生の遺伝子異常とそのがん化
		9 胃の腸上皮化生の遺伝子異常とそのがん化
15	北川 知行	肝癌発生の初期段階に発生するEnzyme-altered-island(EAI)の同定により、生体内での発癌の多段階プロセスを実証して肝癌の多段階発癌モデルを確立し、さらにその概念をヒトの癌発生・進展や自然史の考察に応用して「天寿がん」構想を提唱した。
		58 潜在性がんの顕在化への発展阻止に関する研究
		59 潜在性がんの顕在化への発展阻止に関する研究
		60 潜在性がんの進展と抑制
		61 潜在性がんの進展と抑制
		62 がんのプログレッションの研究
		63 がんのプログレッションの研究
		7 超高齢者のがん、特に「天寿がん」に関する研究
		8 超高齢者のがん、特に「天寿がん」に関する研究
		9 超高齢者のがんの病態に関する研究
10 超高齢者のがんの病態に関する研究		

16	久道 茂	日本のがん検診を科学的根拠にもとづくものとするため、世界で初めての大腸がん検診の症例・対照研究によって。大腸がん検診の有効性を明らかにし、その他各種のがん検診の疫学研究によりその有効性の有無とその大きさを証明した。更に、大規模集団を対象にした医療費と検診に関する研究でがん検診が経済的にも有意義であることを証明している。
		55 胃集団検診効果の評価に関する研究 56 胃集団検診効果の評価に関する研究 57 胃集団検診効果の評価に関する研究 58 胃集団検診効果の評価に関する研究 59 胃集団検診効果の評価に関する研究 60 胃集団検診効果の評価に関する研究 62 大腸がん集団検診の組織化に関する研究 63 大腸がん集団検診の組織化に関する研究 元 適正な大腸集団検診制度の確立と精度の向上に関する研究 2 適正な大腸集団検診制度の確立と精度の向上に関する研究 4 諸臓器がんの集団検診の間に存する共通の問題点に関する研究 5 諸臓器がんの集団検診の間に存する共通の問題点に関する研究 6 各種がん検診の共通問題に関する研究 7 各種がん検診の共通問題に関する研究
17	下山 正徳	質の高いがん臨床試験を実施する日本臨床腫瘍研究グループ(JCOG)の実現に尽力し、各種の臓器グループ、委員会組織、統計センターから構成されるグループ共同研究機構のJCOGを我が国で初めて確立した。がん化学療法を中心とした室の高い臨床試験が可能となり、自らもリンパ系腫瘍に対する優れた多剤併用療法を確立し、治癒率向上に貢献した。更に、国際的に広く利用されている成人T細胞白血病・リンパ腫の病型診断基準と治療指針を作成した。
		58 我が国におけるB細胞腫瘍の特性とその診断、治療及び病因解析に関する研究 59 我が国におけるB細胞腫瘍の特性とその診断、治療及び病因解析に関する研究 60 我が国におけるB細胞腫瘍の特性とその診断、治療及び病因解析に関する研究 61 我が国のB細胞腫瘍の特性とその診断・治療及び病因解析に関する研究 62 我が国のB細胞腫瘍の特性とその診断・治療及び病因解析に関する研究 63 我が国のB細胞腫瘍の特性とその診断・治療及び病因解析に関する研究 63 固形がんの集学的治療の研究 元 固形がんの集学的治療の研究 2 固形がんの集学的治療の研究 3 固形がんの集学的治療の研究 4 固形がんの集学的治療の研究 5 固形がんの集学的治療の研究 6 固形がんの集学的治療の研究 7 固形がんの集学的治療の研究 8 固形がんの集学的治療の研究 9 固形がんの集学的治療の研究 10 固形がんの集学的治療の研究 11 多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究 12 多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究
19	垣添 忠生	ラットの単離膀胱上皮のコンカナバリンAによる凝集性を指標として、膀胱がん物質、発がん促進物質の短期検索法を開発した。また、尿路移行上皮がんの多発性に関する臨床研究を行うとともに、浸潤性膀胱がんに対する膀胱全摘後、自然排尿が可能な新しい術式を開発した。さらに、厚生労働省の委員会等の役職及び日本対がん協会の理事、会長を務め、我が国のがん対策の推進に貢献した。
		56 膀胱がんの発生と進展に関する研究 57 膀胱がんの発生と進展に関する研究 58 膀胱がんの発生と進展に関する基礎的、臨床的研究 59 膀胱がんの発生と進展に関する基礎的、臨床的研究 60 膀胱がんの発生と進展に関する基礎的、臨床的研究 元 中期前立腺がんに対してホルモン療法を共通治療とし、手術療法と放射線療法の優劣を比較するprospective randomized clinical trial 2 中期前立腺がんに対してホルモン療法を共通治療とし、手術療法と放射線療法の優劣を比較するprospective randomized clinical trial 3 難治がんの総合的な対策に関する研究 4 難治がんの総合的な対策に関する研究 5 難治がんの総合的な対策に関する研究 6 難治がんの総合的な対策に関する研究 7 難治がんの総合的な対策に関する研究 8 難治がんの総合的な対策に関する研究 9 難治がんの総合的な対策に関する研究 10 難治がんの総合的な対策に関する研究 11 難治がんの総合的な対策に関する研究 12 難治がんの総合的な対策に関する研究 13 難治がんの総合的な対策に関する研究 14 難治がんの総合的な対策に関する研究 20 がん検診の評価とあり方に関する研究 21 がん検診の評価とあり方に関する研究
20	梅垣 洋一郎	術中照射法や高精度高濃度治療法を開発し、多くの患者を救った。またコンピューターの診断・治療への導入やポジトロン核医学等、現在の最先端技術に直接結びつく数多くの先駆的、独創的研究を行い、がんの放射線診断と治療の発展に多大な貢献をなした。特に、強い指導力を発揮して放医研に実現した炭素線治療は大きな成果を挙げ、日本をこの分野における世界の牽引車にした。
		43 がんの診断治療への医用情報処理の応用に関する研究 44 がんの診断治療への及び情報処理の応用に関する研究 45 「癌の診断、治療への医用情報処理の応用に関する研究」昭和45年度 総括研究報告書 46 コンピューターによるがん診療の総合研究 47 コンピューターによるがん診療の総合研究 48 コンピューターによるがん診療の総合研究 49 コンピューターによるがん診療の総合研究 50 コンピューターによるがん診療の総合研究 51 コンピューターによるがん診療の総合研究

## 【朝日がん大賞】

受賞年度	受賞者名	業績
13	大内 憲明	乳がんのマンモグラフィ併用検診普及に功績
		7 マンモグラフィ導入による乳がん検診の精度管理の確立に関する研究
		8 マンモグラフィ導入による乳がん検診の精度管理の確立に関する研究
		9 マンモグラフィを導入した乳がん検診システムの確立に関する研究
		10 マンモグラフィを導入した乳がん検診システムの確立に関する研究
		15 乳がん検診の精度及び効率の向上に関する研究
		16 乳がん検診の精度及び効率の向上に関する研究
		17 乳がん検診の精度及び効率の向上に関する研究
		18 乳がん検診の精度及び効率の向上に関する研究
14	斎藤 博	人間の血液を特異的に検出する免疫学的便潜血検査を研究、大腸がんのマス・スクリーニングの検査法を完成
		10 大腸がん検診の合理的な精検方法に関する臨床疫学的研究
		11 大腸がん検診の合理的な精検方法に関する臨床疫学的研究
		12 大腸がん検診の合理的な精検方法に関する臨床疫学的研究
		13 大腸がん検診の合理的な精検方法に関する臨床疫学的研究
15	山中 英壽	前立腺がんの集団検診システムの開発と普及に功績
		12 局所進行前立腺がんに対する内分泌療法・放射線療法併用の意義に関する研究
		13 局所進行前立腺がんに対する内分泌療法・放射線療法併用の意義に関する研究
		14 局所進行前立腺がんに対する内分泌療法・放射線療法併用の意義に関する研究
		15 局所進行前立腺がんに対する内分泌療法・放射線療法併用の意義に関する研究
16	大島 明	地域がん登録の推進、登録データの集計分析によるがん実態調査と、がん予防のための禁煙指導法やプログラムの開発など
		元 がん一次予防のための健康危険度評価及び健康教育法の開発に関する研究
		2 がん一次予防のための健康危険度評価及び健康教育法の開発に関する研究
		3 がん一次予防のための危険度の評価と健康教育法の開発に関する研究
		4 がん一次予防のための危険度の評価と健康教育法の開発に関する研究
		8 地域がん登録の精度向上と活用に関する研究
		9 地域がん登録の精度向上と活用に関する研究
		10 地域がん登録の精度向上と活用に関する研究
		11 地域がん登録の精度向上と活用に関する研究
		12 地域がん登録の精度向上と活用に関する研究
		13 地域がん登録の精度向上と活用に関する研究
17	三木 一正	ペプシノゲンの血液検査薬による検診で胃がんの早期発見と胃がん検診の有効性を検証し、検診システムを確立
		9 血清ペプシノゲン値による胃がんスクリーニングに関する研究
		10 血清ペプシノゲン値による胃がんスクリーニングに関する研究
		11 血清ペプシノゲン値による胃がんスクリーニングに関する研究
		12 血清ペプシノゲン値による胃がんスクリーニングに関する研究
17	金子 昌生	低線量、高速らせんCTによる肺がん検診方法を研究し、検診現場に導入
		60 低線量長期被曝患者における発がんの病態に関する研究
		61 低線量長期被曝患者における発がんの病態に関する研究
		62 低線量長期被曝患者における発がん病態解明及びその健康管理法の確立に関する研究
		63 低線量長期被曝患者における発がん病態解明及びその健康管理法の確立に関する研究
		5 肺がん集団検診の有効性と個別検診の方法の確立に関する研究
		6 肺がん集団検診の有効性と個別検診の方法の確立に関する研究
		7 肺がん集団検診及び個別検診の精度管理向上方法に関する研究
		8 肺がん集団検診及び個別検診の精度管理向上方法に関する研究
		13 低線量CTによる肺がん検診における適正な診断基準の作成とその効果の証明の研究
		14 低線量CTによる肺がん検診における適正な診断基準の作成とその効果の証明の研究
		15 低線量CTによる肺がん検診における適正な診断基準の作成とその効果の証明の研究
		16 低線量CTによる肺がん検診における適正な診断基準の作成とその効果の証明の研究
19	森山 紀之	人体の様子が詳しくわかるらせんCTの開発に企業と協力して取り組む
		4 デジタル画像診断の精度向上とその体系化に関する研究
		5 デジタル画像診断の精度向上とその体系化に関する研究
		8 画像診断に基づく肺がん、消化器がんのclinical staging の確立と治療適応の評価に関する研究
		9 画像診断に基づく肺がん、消化器がんのclinical staging の確立と治療適応の評価に関する研究
		10 画像診断に基づく肺がん、消化器がんのclinical staging の確立と治療適応の評価に関する研究
		11 画像診断に基づく肺がん、消化器がんのclinical staging の確立と治療適応の評価に関する研究
22	津金 昌一郎	大規模疫学調査「多目的コホート(JPHC Study)」などがん予防研究の推進
		2 がん予防及びがん対策を指向したがん情報ネットワークに関する研究
		3 がん予防及びがん対策を指向したがん情報ネットワークに関する研究
		4 がん予防及びがん対策を指向したがん情報ネットワークに関する研究
		10 多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究
		11 多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究
		12 多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究
		13 多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究
		14 多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究
		15 多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究
		16 多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究
		17 多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究
		18 多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究
		19 多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究
		20 多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究
		21 適切ながん予防法および検診の確立に資する基盤的研究
		21 多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究

## 【高松宮妃癌研究基金学術賞(54名)】

受賞年度	受賞者名	業績
45	佐藤 春郎	4・ニトロキノリン誘導体による試験管内発癌に関する研究
		51 癌の転移抑制に関する研究
		52 癌の転移抑制に関する研究
		53 癌の転移抑制に関する研究
51	梅澤 濱夫	癌と微生物二次代謝産物の研究
		51 抗がん物質の新しい探索法に関する基礎的研究
		52 抗がん物質の新しい探索法に関する基礎的研究
		53 抗がん物質の新しい探索法に関する基礎的研究
52	長谷川 博	肝切除の安全性と治療成績向上に関する研究
		57 門脈内腫瘍栓を重視した系統的区域・亜区域切除ならびにembolization併用肝切除の検討
		58 門脈内腫瘍栓を重視した系統的区域・亜区域切除ならびにembolization併用肝切除の検討
		59 門脈内腫瘍栓を重視した肝がんの集学的治療
		60 門脈内腫瘍栓を重視した肝がんの集学的治療
		61 門脈内腫瘍栓を重視した肝がんの集学的治療
		62 肝がんの外科療法を中心とした集学的研究
		63 肝がんの外科療法を中心とした集学的研究
		元 肝がんの外科療法を中心とした集学的研究
53	山村 雄一	胆癌生体及びがん細胞の生化学的研究
		46 人がんに関する酵素学的生化学的研究
		47 人がんに関する酵素学的生化学的研究
		48 人がんに関する酵素学的生化学的研究
		49 人がんの酵素学的生化学的研究
		50 人がんに関する酵素学的、生化学研究
		51 人がんに関する酵素学的生化学研究
		56 細胞工学及びアジュバント工学による新しいがんの免疫療法の開発
		57 細胞工学及びアジュバント工学による新しいがんの免疫療法の開発
		58 細胞工学及びアジュバント工学による新しいがんの免疫療法の開発
54	池田 茂人	気管支ファイバースコープの開発と、それによる肺癌の診断・治療の改善に関する研究
		47 肺門部早期がんの診断大系の確立と診断法の開発に関する研究
		48 肺門部早期がんの診断体系の確立と診断法の開発に関する研究
		49 肺門部早期がんの診断体系の確立と診断法の開発に関する研究
		50 早期肺癌の発見と診断体系の確立に関する研究
		51 早期肺がんの発見と診断体系の確立に関する研究
		52 早期肺がんの発見と診断体系の確立に関する研究
		56 肺癌の効率的集検に関する研究
		57 肺癌の効率的集検に関する研究
		58 肺癌の効率的集検に関する研究
		59 肺がん集検の組織化に関する研究
		60 肺がん集検の組織化に関する研究
		61 肺がん集検の組織化に関する研究
55	河内 卓	自然界及び日常環境下に存在する発癌物質の研究
		50 遺伝変異原性物質を主とする発癌物質のスクリーニングの技術開発
		51 遺伝変異原性を主とする発癌物質のスクリーニングの技術開発
		52 遺伝変異原性を主とする発癌物質のスクリーニングの技術開発
		53 変異原性を主とする発癌物質のスクリーニングの技術開発
		54 変異原性を主とする発癌物質のスクリーニングの技術開発
		55 人がんの原因としての発がん物質の短期検索法の開発と評価に関する研究
		56 人がんの原因としての発がん物質の短期検索法の開発と評価に関する研究
		57 人がんの原因としての発がん物質の短期検索法の開発と評価に関する研究
55	高山 昭三	自然界及び日常環境下に存在する発癌物質の研究
		54 蛋白質加熱により生ずる発がん物質の発がん機序の解明
		55 蛋白質加熱により生ずる発がん物質の発がん機序の解明
		57 実験胃がん発生に及ぼす要因の解析
		58 実験胃がん発生に及ぼす要因の解析
55	長尾 美奈子	自然界及び日常環境下に存在する発癌物質の研究
		元 がんのプログレッションの研究
		2 がんのプログレッションの研究
		3 がんのプログレッションの研究
		4 がんのプログレッションの研究
		7 動物の遺伝的背景の特徴を活かした発がん機構の解析に関する研究
		8 動物の遺伝的背景の特徴を活かした発がん機構の解析に関する研究
55	広野 巖	自然界及び日常環境下に存在する発癌物質の研究
		53 フラボノイド等植物性発がん物質の研究
		54 フラボノイド等植物性発がん物質の研究
		55 フラボノイド等植物成分の発がん性に関する研究
		56 フラボノイド等植物成分の発がん性に関する研究
55	松島 泰次郎	自然界及び日常環境下に存在する発癌物質の研究
		52 ヒトのがん発生に関連する環境物質の変異・癌原性の研究
		53 ヒトのがん発生に関連する環境物質の変異・癌原性の研究
		54 ヒトのがん発生に関連する環境物質の変異・癌原性の研究
		55 ヒトの癌発生に関連する環境発癌物質とその抑制因子の研究
		56 ヒトの癌発生に関連する環境発癌物質とその抑制因子の研究
		57 ヒトの癌発生に関連する環境発癌物質とその抑制因子の研究
		59 食品中のがん原前駆物質の生成機構の解明による生成阻止

	60	食品中のがん原前駆物質の生成機構の解明による生成阻止
	61	食品中の変異原・変異原前駆物質の生成と抑制
	62	食品中の変異原・変異原前駆物質の生成と抑制
55	小田嶋 成和	自然界及び日常環境下に存在する発癌物質の研究
	45	化学物質の癌原性発現条件に関する研究
	46	化学物質の癌原性発現条件に関する研究
	47	化学物質の癌原性発現条件に関する研究
	48	化学物質の癌原性検索法の確立
	49	化学物質の癌原性検索法の確立
	50	突然変異原性物質の動物発癌テストに関する研究
	51	突然変異原性物質の動物発癌テストに関する研究
	52	突然変異原性物質の動物発癌テストに関する研究
	53	突然変異原性物質の動物発癌テストに関する研究
	54	突然変異原性物質の動物発癌テストに関する研究
	55	突然変異原性物質の動物発癌テストに関する研究
56	藤木 博太	発癌機構に関する変異原とプロモーターの研究
	58	がんのChemopreventionの研究
	59	がんのChemopreventionの研究
	60	がんのChemopreventionの研究
	4	がんの発生と進展を抑制する化学物質の臨床応用に関する研究
	5	がんの発生と進展を抑制する化学物質の臨床応用に関する研究
	6	がんの発生と進展を抑制する化学物質の臨床応用に関する研究
	7	発がんプロモーターによる発がん機構とその抑制に関する研究
	8	発がんプロモーターによる発がん機構とその抑制に関する研究
59	伊東 信行	膀胱癌の実験的研究
	61	潜在性前立腺がんの発育・進展に関する実験的及び臨床的研究
	62	潜在性前立腺がんの発育・進展に関する実験的及び臨床的研究
	63	潜在性前立腺がんの発育・進展に関する実験的及び臨床的研究
	元	潜在性前立腺がんの発育・進展に関する実験的及び臨床的研究
59	垣添 忠生	膀胱癌の実験的研究
	56	膀胱がんの発生と進展に関する研究
	57	膀胱がんの発生と進展に関する研究
	58	膀胱がんの発生と進展に関する基礎的、臨床的研究
	59	膀胱がんの発生と進展に関する基礎的、臨床的研究
	60	膀胱がんの発生と進展に関する基礎的、臨床的研究
	元	中期前立腺がんに対してホルモン療法を共通治療とし、手術療法と放射線療法の優劣を比較する prospective randomized clinical trial
	2	中期前立腺がんに対してホルモン療法を共通治療とし、手術療法と放射線療法の優劣を比較する prospective randomized clinical trial
	3	難治がんの総合的な対策に関する研究
	4	難治がんの総合的な対策に関する研究
	5	難治がんの総合的な対策に関する研究
	6	難治がんの総合的な対策に関する研究
	7	難治がんの総合的な対策に関する研究
	8	難治がんの総合的な対策に関する研究
	9	難治がんの総合的な対策に関する研究
	10	難治がんの総合的な対策に関する研究
	11	難治がんの総合的な対策に関する研究
	12	難治がんの総合的な対策に関する研究
	13	難治がんの総合的な対策に関する研究
	14	難治がんの総合的な対策に関する研究
	20	がん検診の評価とあり方に関する研究
	21	がん検診の評価とあり方に関する研究
59	橋本 嘉幸	膀胱癌の実験的研究
	54	免疫化学療法を中心とする癌治療法の基礎的臨床研究
	55	免疫化学療法を中心とする癌治療法の基礎的臨床研究
	56	免疫化学療法を中心とする癌治療法の基礎的臨床研究
59	吉田 修	膀胱癌の実験的研究
	7	触治不能前立腺がんの治療方針に関する研究
	8	触治不能前立腺がんの治療方針に関する研究
	9	触治不能前立腺がんの治療方針に関する研究
	10	触治不能前立腺がんの治療方針に関する研究
60	下里 幸雄	ヒト肺癌の病理学的・生物学的研究
	50	各種人癌のヌードマウス移植系の樹立とその癌診断治療への応用に関する研究
	51	各種人癌のヌードマウス移植系の樹立とその癌診断治療への応用に関する研究
	52	各種人癌のヌードマウス移植系の樹立とその癌診断治療への応用に関する研究
	53	ヌードマウス・ヒト癌系を用いた効果的な癌治療法の開発のための基礎的研究
	54	ヌードマウス・ヒト癌系を用いた効果的な癌治療法の開発のための基礎的研究
	55	ヌードマウス・ヒト癌系を用いた効果的な癌治療法の開発のための基礎的研究
	58	肺小細胞がんの早期診断と効果的治療を目的とした基礎的、集学的研究
	59	肺小細胞がんの早期診断と効果的治療を目的とした基礎的、集学的研究
	60	肺小細胞がんの早期診断と効果的治療を目的とした基礎的、集学的研究
	61	肺小細胞がんの病理・生物学的研究とその成果の臨床応用
	62	肺小細胞がんの病理・生物学的研究とその成果の臨床応用
	63	肺小細胞がんの病理・生物学的研究とその成果の臨床応用
	4	肺線がんの発生と特性の解析並びに治療法の開発
	5	肺線がんの発生と特性の解析並びに治療法の開発

		6 肺線がんの発生と特性の解析並びに治療法の開発
61	寺田 雅昭	新しいがん遺伝子を含むがんの分子生物学的研究
		54 環境中に存在する発がんプロモーターの検索に関する研究
		55 環境中に存在する発がんプロモーターの検索に関する研究
		56 日常環境下に存在する発がんプロモーターの研究
		57 日常環境下に存在する発がんプロモーターの研究
		59 日本人に多いがんの腫瘍遺伝子とその活性化
		60 日本人に多いがんの腫瘍遺伝子とその活性化
		61 日本人に多いがんの腫瘍遺伝子とその活性化
		63 ヒトがん発生に関与する基礎的、臨床的研究
		元 複数発がん要因によるリスク評価の基礎的研究
		2 複数発がん要因によるリスク評価の基礎的研究
		3 胃がんの発生要因解析と治療応用に関する研究
		3 複数発がん要因によるリスク評価の基礎的研究
		4 胃がんの発生要因解析と治療応用に関する研究
		4 ヒトがん発生の複数要因の相互作用に関する基礎的・臨床的研究
		5 胃がんの発生要因解析と治療応用に関する研究
		5 ヒトがん発生の複数要因の相互作用に関する基礎的・臨床的研究
		6 ヒトがん発生の複数要因の相互作用に関する基礎的・臨床的研究
62	梶谷 環	癌の外科治療による遠隔成績向上に関する研究－特に胃癌について
		49 大腸癌の各種療法に関する総合的研究
		50 大腸癌の各種療法に関する総合的研究
		51 大腸癌の各種療法に関する総合的研究
		52 大腸がんの早期発見と各種療法に関する研究
		53 大腸がんの早期発見と各種療法に関する研究
		54 大腸がんの早期発見と各種療法に関する研究
62	末舛 恵一	癌の外科治療による遠隔成績向上に関する研究－特に肺癌について
		51 診断の進歩に根ざした正確な病期分類とその臨床応用
		52 診断の進歩に根ざした正確な病期分類とその臨床応用
		52 がんの薬物療法に関する研究
		53 診断の進歩に根ざした正確な病期分類とその臨床応用
		53 がんの集学的治療の研究
		54 がんの集学的治療の研究
		55 がんの集学的治療の研究
		56 がんの集学的治療の研究
		57 がんの集学的治療の研究
		58 がんの集学的治療の研究
		59 がんの集学的治療の研究
		60 がんの集学的治療の研究
		61 がんの集学的治療の研究
		62 固形がんの集学的治療の研究
		63 難治がんの総合的な対策に関する研究
		元 難治がんの総合的な対策に関する研究
		2 難治がんの総合的な対策に関する研究
創立20周年特別	西村 暹	c-Ha-rasがん遺伝子産物、p21タンパク質の3次構造の決定
		57 ヌードマウス移植人がん細胞の発がん遺伝子の構造と機能、ならびにその産物の同定
		58 ヌードマウス移植人がん細胞の発がん遺伝子の構造と機能、ならびにその産物の同定
		2 膵がん罹患高危険度要因に関する分子生物学的及び疫学的研究
		3 膵がん罹患高危険度要因に関する分子生物学的及び疫学的研究
2	櫻井 欽夫	抗癌剤耐性に関する研究
		48 がんの免疫療法に関する基礎的研究と臨床的研究
		49 がんの免疫療法に関する基礎的研究と臨床的研究
		50 がんの免疫療法に関する基礎的研究と臨床的研究
		51 癌の免疫療法及び免疫化学療法における基礎的研究と臨床的研究
		52 癌の免疫療法及び免疫化学療法における基礎的研究と臨床的研究
		53 癌の免疫療法及び免疫化学療法における基礎的研究と臨床的研究
		55 がんの化学療法効果判定の基礎に関する研究
		56 がんの化学療法効果判定の基礎に関する研究
2	高橋 俊雄	癌の選択的療法による治療成績の向上に関する研究
		56 剤型の工夫による抗がん剤の効力の増強に関する研究
		57 剤型の工夫による抗がん剤の効力の増強に関する研究
		58 効果の増大を目的とした抗がん剤の投与形態の研究
		59 効果の増大を目的とした抗がん剤の投与形態の研究
		3 がん転移の予防と治療及びその評価に関する研究
		4 がん転移の予防と治療及びその評価に関する研究
3	阿部 光幸	開創照射・術中照射を含む放射線治療の発展に対する寄与
		55 放射線を主とする難治がんの治療に関する研究
		56 放射線を主とする難治がんの治療に関する研究
		57 放射線を主とする難治がんの治療に関する研究
		58 術中放射線療法に関する研究
		59 術中放射線療法に関する研究
		8 各種放射線治療の適応と精度管理に関する研究
		9 各種放射線治療の適応と精度管理に関する研究
3	梅垣 洋一郎	開創照射・術中照射を含む放射線治療の発展に対する寄与
		43 がんの診断治療への医用情報処理の応用に関する研究
		44 がんの診断治療への及び情報処理の応用に関する研究



	45	「癌の診断、治療への医用情報処理の応用に関する研究」昭和45年度 総括研究報告書
	46	コンピューターによるがん診療の総合研究
	47	コンピューターによるがん診療の総合研究
	48	コンピューターによるがん診療の総合研究
	49	コンピューターによるがん診療の総合研究
	50	コンピューターによるがん診療の総合研究
	51	コンピューターによるがん診療の総合研究
4	関谷 剛男	がん抑制遺伝子の研究
	3	ヒトがんに密接に関連する染色体レベルでの異常の分子生物学的解析
	4	ヒトがんに密接に関連する染色体レベルでの異常の分子生物学的解析
4	横田 淳	がん抑制遺伝子の研究
	62	がんの臨床問題となる生物学的性状を決定する遺伝子の研究
	63	がんの臨床問題となる生物学的性状を決定する遺伝子の研究
	元	がんの臨床問題となる生物学的性状を決定する遺伝子の研究
	2	がんの臨床病態を規定する遺伝子の研究
	3	がんの臨床病態を規定する遺伝子の研究
	4	がんの臨床病態を規定する遺伝子の研究
	10	肺腺がんの発生と特性の解析に関する研究
	11	肺腺がんの発生と特性の解析に関する研究
	12	肺腺がんの発生と特性の解析に関する研究
	13	肺腺がんの発生と特性の解析に関する研究
	14	肺腺がんの発生と特性の解析に関する研究
	15	肺腺がんの発生と特性の解析に関する研究
	21	発がん感受性と予防法の確立に関わる基礎的・基盤的研究
4	牛尾 恭輔	大腸癌の自然史の研究とその成果の臨床への応用
	元	大腸ポリープ及びびがんの自然史に関する研究
	2	大腸ポリープ及びびがんの自然史に関する研究
	3	無茎性大腸腫瘍の発育進展に関する研究
	4	無茎性大腸腫瘍の発育進展に関する研究
4	武藤 徹一郎	大腸癌の自然史の研究とその成果の臨床への応用
	5	大腸腫瘍性病変の発育進展とその遺伝子解析に関する研究
	6	大腸腫瘍性病変の発育進展とその遺伝子解析に関する研究
	7	非ポリープ性大腸腫瘍性病変の発育・進展に関する研究
	8	非ポリープ性大腸腫瘍性病変の発育・進展に関する研究
5	大木 操	8番、21番染色体転座急性骨髄性白血病の原因遺伝子の同定と機能解析
	8	白血病における転写遺伝子異常による表現形質の変化とその臨床的意義に関する研究
	9	白血病における転写遺伝子異常による表現形質の変化とその臨床的意義に関する研究
	10	白血病における転写因子遺伝子異常による表現形質の変化とその臨床的意義に関する研究
	11	白血病における転写因子遺伝子異常による表現形質の変化とその臨床的意義に関する研究
5	市川 平三郎	消化器癌のX線二重造影法の開発と普及
	49	胃がん集団検診の適正化に関する研究
	50	胃がん集団検診の適正化に関する研究
6	広橋 説雄	カドヘリン・カテニン細胞接着系の発見と、そのがん細胞における異常の研究
	63	肝の微小がんと境界病変に関する研究
	元	肝の微小がんと境界病変に関する研究
	2	肝の微小がんと境界病変に関する研究
	3	肝の微小がんと境界病変に関する研究
	4	肝の微小がんと境界病変に関する研究
	7	ヒト発がん要因の相互作用の科学的解明に基づくがん制御に関する研究
	8	ヒト発がん要因の相互作用の科学的解明に基づくがん制御に関する研究
	9	ヒト発がん要因の相互作用の科学的解明に基づくがん制御に関する研究
	10	ヒト発がん要因の相互作用の科学的解明に基づくがん制御に関する研究
	11	ヒト発がん要因の相互作用の科学的解明に基づくがん制御に関する研究
	12	ヒト発がん要因の相互作用の科学的解明に基づくがん制御に関する研究
	18	がん対策企画と情報発信の方法論に関する研究
6	藤本 伊三郎	地域がん登録によるがん疫学の研究
	50	地域がん登録の体系化と登録資料の利用に関する研究
	51	地域がん登録の体系化と登録資料の利用に関する研究
	52	地域がん登録の体系化と登録資料の利用に関する研究
	53	地域がん登録による予防・医療活動の評価に関する研究
	54	地域がん登録による予防・医療活動の評価に関する研究
	55	地域がん登録による予防・医療活動の評価に関する研究
	62	地域がん登録の精度向上とその効果的利用に関する研究
	63	地域がん登録の精度向上とその効果的利用に関する研究
	元	地域がん登録の精度向上とその効果的利用に関する研究
	2	地域がん登録の精度向上とその効果的利用に関する研究
	3	地域がん登録の精度向上とその効果的利用に関する研究
	4	地域がん登録の精度向上とその効果的利用に関する研究
6	花井 彩	地域がん登録によるがん疫学の研究
	5	地域がん登録の精度向上と活用に関する研究
	6	地域がん登録の精度向上と活用に関する研究
	7	地域がん登録の精度向上と活用に関する研究
7	石原 和之	本邦における悪性黒色腫の治療成績の向上に関する研究
	54	皮膚の進行がんに対する治療大系の確立に関する研究
	55	皮膚の進行がんに対する治療大系の確立に関する研究
	56	悪性黒色腫の進行期における新しい治療法に関する研究
	57	悪性黒色腫の進行期における新しい治療法に関する研究

	60	菌状息肉症及びその類型(CTL)の診断と治療に関する研究
	61	菌状息肉症及びその類型(CTL)の診断と治療に関する研究
	62	悪性黒色腫の診断と治療体系の確立に関する研究
	63	悪性黒色腫の診断と治療体系の確立に関する研究
	3	メラノーマの転移の早期発見と進行期の治療に関する研究
	4	メラノーマの転移の早期発見と進行期の治療に関する研究
8	成毛 韶夫	肺がん患者の治療成績およびQOL向上のための研究と成果
	53	肺がん早期発見における高危険群とそのスクリーニング法の向上に関する研究
	54	肺がん早期発見における高危険群とそのスクリーニング法の向上に関する研究
	55	肺がん早期発見における高危険群とそのスクリーニング法の向上に関する研究
	62	肺がんの集団検診の正確な評価に関する研究
	63	肺がんの集団検診の正確な評価に関する研究
	元	肺がんの集団検診の正確な評価に関する研究
	2	肺がんの集団検診の精度管理と正確な評価に関する研究
	3	肺がんの集団検診の精度管理と正確な評価に関する研究
	4	肺がんの集団検診の精度管理と正確な評価に関する研究
	7	がんにおける体腔鏡手術の適応と手術手技の確立に関する研究
	8	がんにおける体腔鏡手術の適応と手術手技の確立に関する研究
	9	がんにおける体腔鏡手術の適応と手術手技の確立に関する研究
	10	がんにおける体腔鏡手術の評価と適応拡大に関する研究
	11	がんにおける体腔鏡手術の評価と適応拡大に関する研究
	12	がんにおける体腔鏡手術の評価と適応拡大に関する研究
9	二村 勇次	肝門部胆管癌の根治手術法の確立
	10	共通プロトコールに基づいた膵がん外科的療法の評価に関する研究
	11	共通プロトコールに基づいた膵がん外科的療法の評価に関する研究
	12	共通プロトコールに基づいた膵がん外科的療法の評価に関する研究
	13	共通プロトコールに基づいた膵がん外科的療法の評価に関する研究
10	海老原 敏	頭頸部がんの機能温存外科手術式の開発
	59	口腔、中咽頭がんの治療法の確立と治療後の機能評価
	60	口腔、中咽頭がんの治療法の確立と治療後の機能評価
	61	治療成績の向上と機能保存を目的とした口腔・咽頭がんの治療に関する研究
	62	治療成績の向上と機能保存を目的とした口腔・咽頭がんの治療に関する研究
	元	頸胸境界部食道がんの治療法に関する研究
	2	頸胸境界部食道がんの治療法に関する研究
	3	頸胸境界部食道がんの治療法に関する研究
	4	頸胸境界部食道がんの治療法に関する研究
	5	がん診療専門施設における修練医師に対する教育システムの確立とその評価に関する研究
	6	がん診療専門施設における修練医師に対する教育システムの確立とその評価に関する研究
	12	がん専門医施設を活用したがん治療の標準化に関する共同研究
	13	がん専門医施設を活用したがん治療の標準化に関する共同研究
	14	がん専門医施設を活用したがん治療の標準化に関する共同研究
	15	がん専門医施設を活用したがん診断の標準化に関する共同研究
	16	がん専門医施設を活用したがん診断の標準化に関する共同研究
11	山口 健	肺小細胞がんの腫瘍マーカーProGRPの開発
	62	日本における肺がん増加の阻止に関する総括的研究
	6	腫瘍産生サイトカインによるがん患者の病態に関する研究
	7	腫瘍産生サイトカインによるがん患者の病態に関する研究
	8	腫瘍産生サイトカインによるがん患者の病態に関する研究
	9	腫瘍産生サイトカインによるがん患者の病態に関する研究
	10	本邦におけるがん医療の適正化に関する研究
	11	がん生存者の社会的適応に関する研究
	11	本邦におけるがん医療の適正化に関する研究
	12	がん生存者の社会的適応に関する研究
	12	本邦におけるがん医療の適正化に関する研究
	13	がん生存者の社会的適応に関する研究
	13	本邦におけるがん医療の適正化に関する研究
	14	がん生存者の社会的適応に関する研究
	14	本邦におけるがん医療の適正化に関する研究
	15	本邦におけるがん医療の適正化に関する研究
	16	本邦におけるがん医療の適正化に関する研究
	17	本邦におけるがん医療の適正化に関する研究
	18	本邦におけるがん医療の最適化に関する研究
12	小西 陽一	実験腫瘍に関する研究
	3	環境化学物質による活性酸素の関与した発がんとその修飾
	4	環境化学物質による活性酸素の関与した発がんとその修飾
12	下山 正徳	質の高い臨床がん化学療法確立への貢献
	58	我が国におけるB細胞腫瘍の特性とその診断、治療及び病因解析に関する研究
	59	我が国におけるB細胞腫瘍の特性とその診断、治療及び病因解析に関する研究
	60	我が国におけるB細胞腫瘍の特性とその診断、治療及び病因解析に関する研究
	61	我が国のB細胞腫瘍の特性とその診断、治療及び病因解析に関する研究
	62	我が国のB細胞腫瘍の特性とその診断、治療及び病因解析に関する研究
	63	我が国のB細胞腫瘍の特性とその診断、治療及び病因解析に関する研究
	63	固形がんの集学的治療の研究
	元	固形がんの集学的治療の研究
	2	固形がんの集学的治療の研究
	3	固形がんの集学的治療の研究
	4	固形がんの集学的治療の研究

	5	固形がんの集学的治療の研究
	6	固形がんの集学的治療の研究
	7	固形がんの集学的治療の研究
	8	固形がんの集学的治療の研究
	9	固形がんの集学的治療の研究
	10	固形がんの集学的治療の研究
	11	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究
	12	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究
13	田島 和雄	成人T細胞白血病ウイルス(HTLV-1)の断乳による母子感染防止
	4	ヒトがんの環境要因と個体特性に関する疫学的研究
	5	ヒトがんの環境要因と個体特性に関する疫学的研究
	6	ヒトがんの環境要因と個体特性に関する疫学的研究
	7	ヒトがんの環境要因と個体特性に関する分子疫学的研究
	8	ヒトがんの環境要因と個体特性に関する分子疫学的研究
14	樋野 興夫	遺伝性腎癌がんモデルを用いた実験病理学的研究
	19	中皮腫の診断精度の向上に関する研究
	20	中皮腫の診断精度の向上に関する研究
	21	中皮腫の診断制度の向上に関する研究
15	金子 明博	眼部悪性腫瘍の眼球保存療法に関する研究
	56	網膜芽細胞腫の集学的治療に関する研究
	57	網膜芽細胞腫の集学的治療に関する研究
	58	網膜芽細胞腫の眼球保存療法に関する集学的研究
	59	網膜芽細胞腫の眼球保存療法に関する集学的研究
	62	網膜芽細胞腫眼球保存療法の治療成績向上のための研究
	63	網膜芽細胞腫眼球保存療法の治療成績向上のための研究
	元	網膜芽細胞腫の治療成績向上のための分子生物学的進歩に取り入れた集学的研究
	2	網膜芽細胞腫の治療成績向上のための分子生物学的進歩に取り入れた集学的研究
	5	網膜芽細胞腫患者の眼球保存療法の成績向上に関する研究
	6	網膜芽細胞腫患者の眼球保存療法の成績向上に関する研究
	7	網膜芽細胞腫患者の眼球温存療法の成績向上に関する研究
	8	網膜芽細胞腫患者の眼球温存療法の成績向上に関する研究
	13	眼部悪性腫瘍患者における生活の質の向上を目指した治療法開発に関する研究
	14	眼部悪性腫瘍患者における生活の質の向上を目指した治療法開発に関する研究
	15	眼部悪性腫瘍患者における生活の質の向上を目指した治療法開発に関する研究
	16	眼部悪性腫瘍患者における生活の質の向上を目指した治療法開発に関する研究
16	新津 洋司郎	大腸癌の原因物質及びその抑制物質に関する研究
	4	サイトカインを用いた新しいがん治療法の開発とその臨床応用への展開
	5	サイトカインを用いた新しいがん治療法の開発とその臨床応用への展開
	6	サイトカインを用いた新しいがん治療法の臨床応用に関する研究
	7	サイトカインを用いた新しいがん治療法の臨床応用に関する研究
16	若林 敬二	大腸癌の原因物質及びその抑制物質に関する研究
	63	変異原・変異原前駆物質の生成と修飾因子
	元	変異原・変異原前駆物質の生成と修飾因子
	2	食品中の変異原・がん原物質とその修飾因子
	3	食品中の変異原・がん原物質とその修飾因子
	5	ヘテロサイクリックアミンの生成阻害及び発がん阻止実験の研究
	6	ヘテロサイクリックアミンの生成阻害及び発がん阻止実験の研究
	7	ヘテロサイクリックアミンの生成阻害及び発がん阻止実験に関する研究
	8	ヘテロサイクリックアミンによる前立腺、膵、大腸、乳腺発がん分子機構に関する研究
	8	ヘテロサイクリックアミンの生成阻害及び発がん阻止実験に関する研究
	9	ヘテロサイクリックアミンによる前立腺、膵、大腸、乳腺発がん分子機構に関する研究
	10	ヘテロサイクリックアミンによる前立腺、膵、大腸、乳腺発がん分子機構に関する研究
	11	ヘテロサイクリックアミンによる前立腺、膵、大腸、乳腺発がん分子機構に関する研究
	12	ヘテロサイクリックアミンによる前立腺、膵、大腸、乳腺発がん分子機構に関する研究
	13	ヘテロサイクリックアミンによる前立腺、膵、大腸、乳腺発がん分子機構に関する研究
	13	ヒトがん発生に係る環境要因及び感受性要因に関する研究
	14	ヒトがん発生に係る環境要因及び感受性要因に関する研究
	15	ヒトがん発生に係る環境要因及び感受性要因に関する研究
	16	ヒトがん発生にかかわる環境要因及び感受性要因に関する研究
	17	ヒトがん発生にかかわる環境要因及び感受性要因に関する研究
	18	ヒトがん発生に係る環境要因及び感受性要因に関する研究
16	辻井 博彦	重粒子線がん治療装置の開発とその臨床応用
	7	荷電粒子線の適応選択法の検討と照射技術開発に関する研究
	8	荷電粒子線の適応選択法の検討と照射技術開発に関する研究
	9	荷電粒子線によるがんの治療の精度向上と適正な運用に関する研究
	10	荷電粒子線によるがんの治療の精度向上と適正な運用に関する研究
17	森山 紀之	ヘリカルCTの開発に関する研究
	4	デジタル画像診断の精度向上とその体系化に関する研究
	5	デジタル画像診断の精度向上とその体系化に関する研究
	8	画像診断に基づく肺がん、消化器がんのclinical stagingの確立と治療適応の評価に関する研究
	9	画像診断に基づく肺がん、消化器がんのclinical stagingの確立と治療適応の評価に関する研究
	10	画像診断に基づく肺がん、消化器がんのclinical stagingの確立と治療適応の評価に関する研究
	11	画像診断に基づく肺がん、消化器がんのclinical stagingの確立と治療適応の評価に関する研究
18	江角 浩安	がん微小環境中の栄養飢餓耐性細胞制御薬の開発
	3	体内ニトロソ化合物の発がん影響に関する研究
	4	体内ニトロソ化合物の発がん影響に関する研究
	5	発がん物質による非腫瘍性病変誘発に関する研究

	6	発がん物質による非腫瘍性病変誘発に関する研究
	10	発がんにおける炎症の役割に関する研究
	11	発がんにおける炎症の役割に関する研究
	12	発がんにおける炎症の役割に関する研究
	13	発がんにおける炎症の役割に関する研究
	15	がん生物学に基づく新しい治療法の開発に関する研究
	16	がん生物学に基づく新しい治療法の開発に関する研究
	17	がん生物学に基づく新しい治療法の開発に関する研究
18	立松 正衛	ヘリコバクターピロリ感染スナネズミを用いた胃発癌と予防に関する実験的研究
	3	食品に含まれる要因による消化器がん発生の修飾の研究
	4	食品に含まれる要因による消化器がん発生の修飾の研究
	5	消化器がん発生に影響する食品中の要因に関する研究
	6	消化器がん発生に影響する食品中の要因に関する研究
	9	実験動物における多段階発がんの研究
	10	実験動物における多段階発がんの研究
	11	実験動物における多段階発がんの研究
	12	実験動物における多段階発がんの研究
	14	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究
	15	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究
	16	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究
	17	個体レベルでの発がん予知と予防に関する基盤的研
	18	個体レベルでの発がん予知と予防に関する基盤的研
	19	個体レベルでの発がん予知と予防に関する基盤的研
19	三木 一正	血清ペプシノゲン値を用いた効率のよい胃がん検診法の開発
	9	血清ペプシノゲン値による胃がんスクリーニングに関する研究
	10	血清ペプシノゲン値による胃がんスクリーニングに関する研究
	11	血清ペプシノゲン値による胃がんスクリーニングに関する研究
	12	血清ペプシノゲン値による胃がんスクリーニングに関する研究
20	中川原 章	神経芽腫の発生、悪性化、自然耐縮の分子機構解明と予後予測系の構築
	16	神経芽腫進展の診断基準確立・分子機構解析とそれに基づく診断・治療法の確立
	17	神経芽腫進展の診断基準確立・分子機構解析とそれに基づく診断・治療法の確立
	18	神経芽腫進展の分子機構解析に基づく診断・治療法の確立
	19	神経芽腫進展の診断基準確立・分子機構解析とそれに基づく診断・治療法の確立
21	田尻 久雄	内視鏡による早期がん診断の革新的技術開発と臨床研究
	8	がんの診断治療用光学機器の開発
	9	がんの診断治療用光学機器の開発
	10	がんの診断治療用光学機器の開発
	11	がんの診断治療用光学機器の開発
	12	がんの診断治療用光学機器の開発
	13	がんの診断治療用光学機器の開発
21	武藤 学	内視鏡による早期がん診断の革新的技術開発と臨床研究
	16	気道食道領域がんのリスクとアルコール代謝酵素との関連性とその臨床評価に関する研究
	17	気道食道領域がんのリスクとアルコール代謝酵素との関連性とその臨床評価に関する研究
	18	気道食道領域がんのリスクとアルコール代謝酵素との関連性とその臨床評価に関する研究
	19	気道食道領域がんのリスクとアルコール代謝酵素との関連性とその臨床評価に関する研究

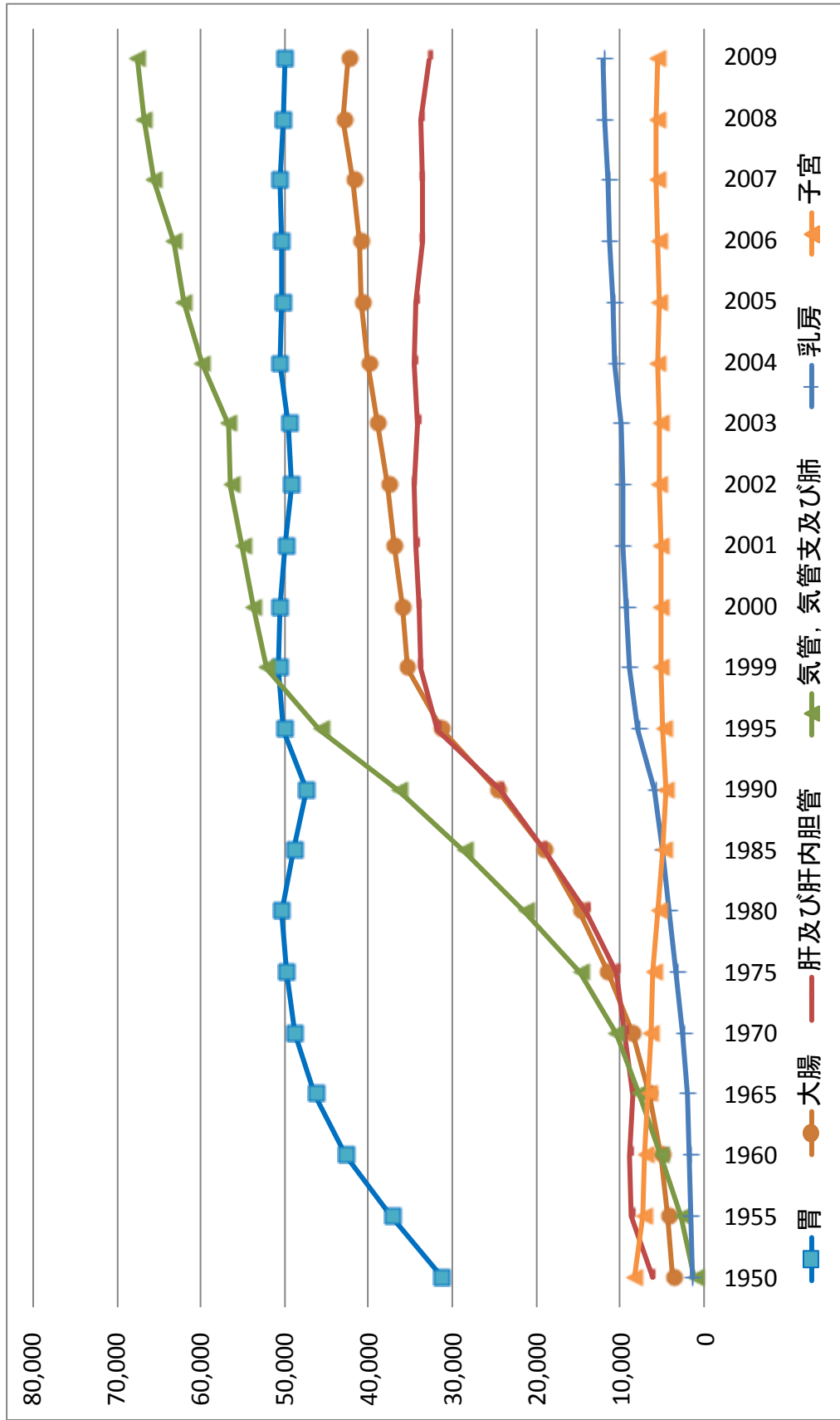
研究課題名に特定の部位名が記載されている研究班数

年度	S38	S39	S40	S41	S42	S43	S44	S45	S46	S47	S48	S49	S50	S51	S52	S53
研究班数	7	21	21	31	24	24	28	33	35	45	53	56	57	58	57	64
胃	1	4	3	3	3	1	4	4	4	3	4	5	4	4	3	3
大腸	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	1	1	1
肝臓及び肝内胆管	0	0	1	1	1	0	1	2	1	2	2	2	2	2	2	2
気管、気管支及び肺	1	1	2	1	2	0	0	1	1	2	2	4	4	5	3	1
乳房	0	1	1	2	1	0	1	0	1	1	1	1	1	2	1	2
子宮	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0

年度	S54	S55	S56	S57	S58	S59	S60	S61	S62	S63	H1	H2	H3	H4	H5	H6
研究班数	73	76	79	80	80	77	75	76	77	77	83	84	83	86	87	89
胃	6	6	3	3	4	3	5	5	4	4	5	6	5	5	4	5
大腸	1	1	2	1	1	1	2	2	1	1	2	3	3	3	2	3
肝臓及び肝内胆管	2	2	2	3	3	3	3	3	4	6	4	5	4	4	6	5
気管、気管支及び肺	3	3	2	2	3	4	3	3	2	2	2	2	2	3	3	4
乳房	1	2	1	2	3	3	1	1	2	1	2	2	2	1	2	2
子宮	1	1	1	1	0	0	0	1	2	2	1	0	0	0	0	0

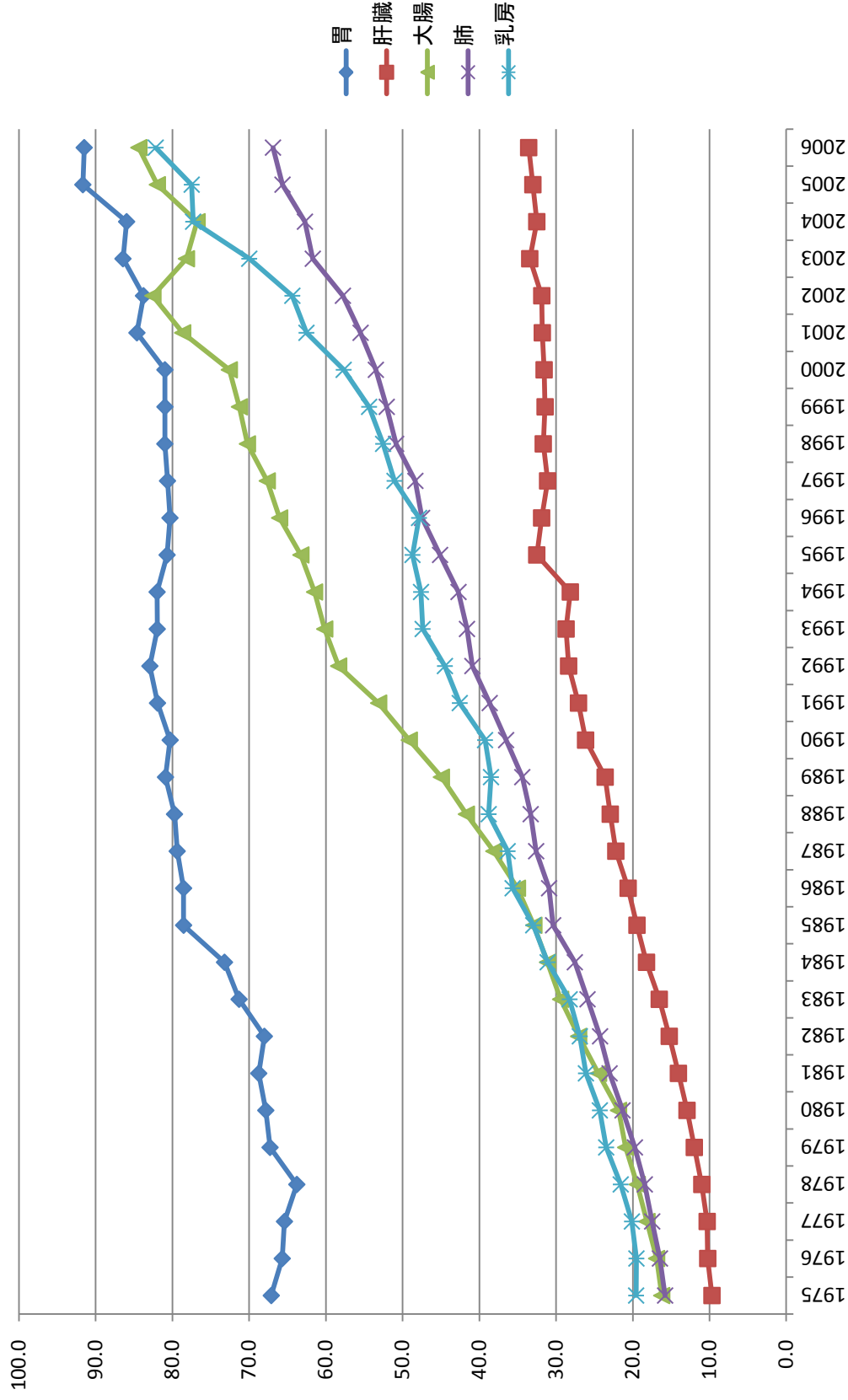
年度	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21
研究班数	89	90	89	91	95	96	96	96	95	94	95	95	95	95	108
胃	5	4	6	5	5	5	4	3	4	4	4	2	2	2	1
大腸	2	3	4	5	4	5	6	5	5	4	4	3	3	3	2
肝臓及び肝内胆管	5	4	3	4	4	3	3	3	1	3	4	3	3	3	5
気管、気管支及び肺	4	3	5	6	6	5	4	5	4	5	5	5	3	5	2
乳房	1	2	3	5	5	3	4	3	4	5	5	4	6	4	4
子宮	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

がんの主な部位別死亡者数の年次推移



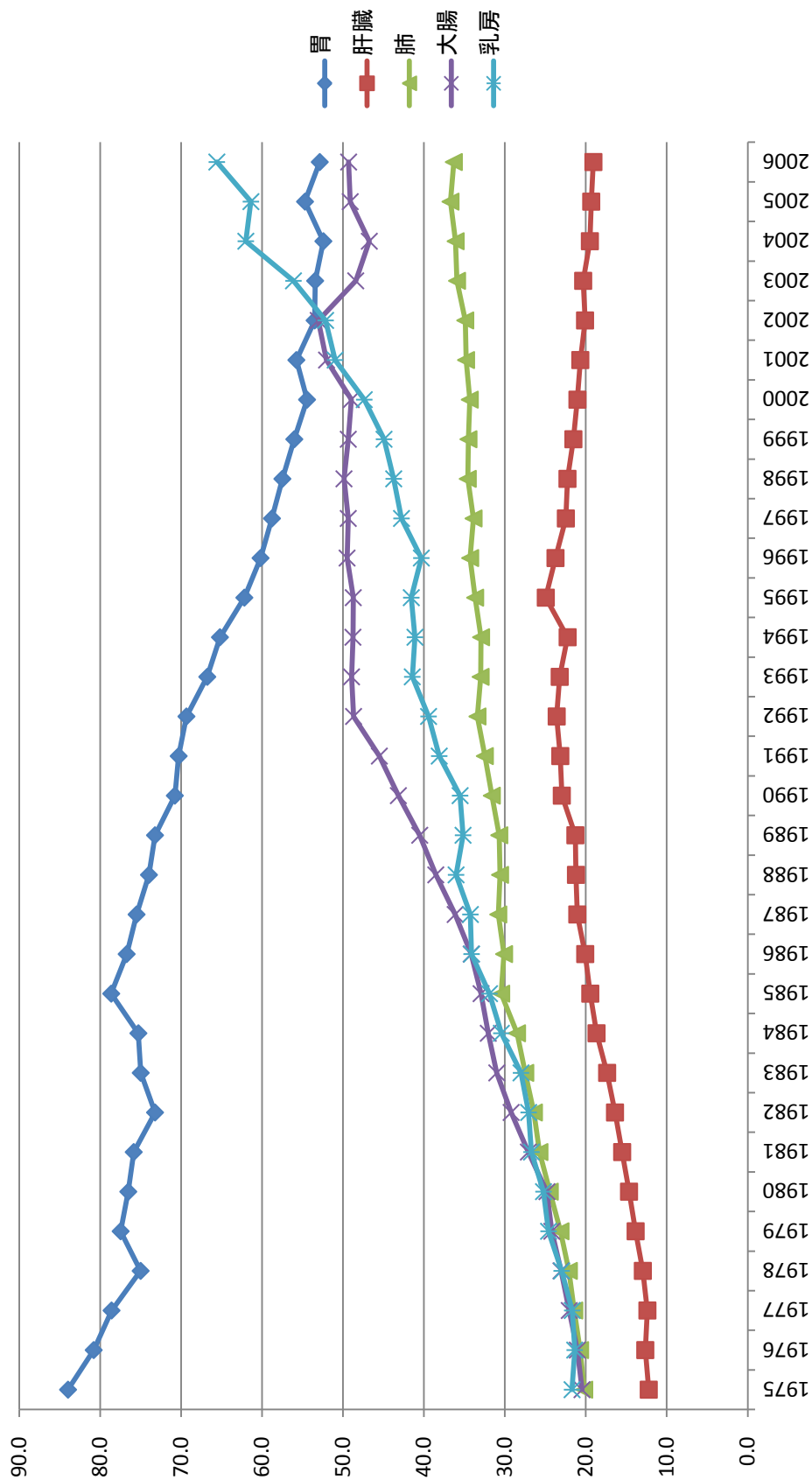
厚生労働省「H21年人口動態統計」より

# 主ながんの罹患率(粗罹患率)の推移(対人口10万人)



地域がん登録全国推計によるがん罹患データ(1975年～2006年)  
 国立がん研究センターがん対策情報センター

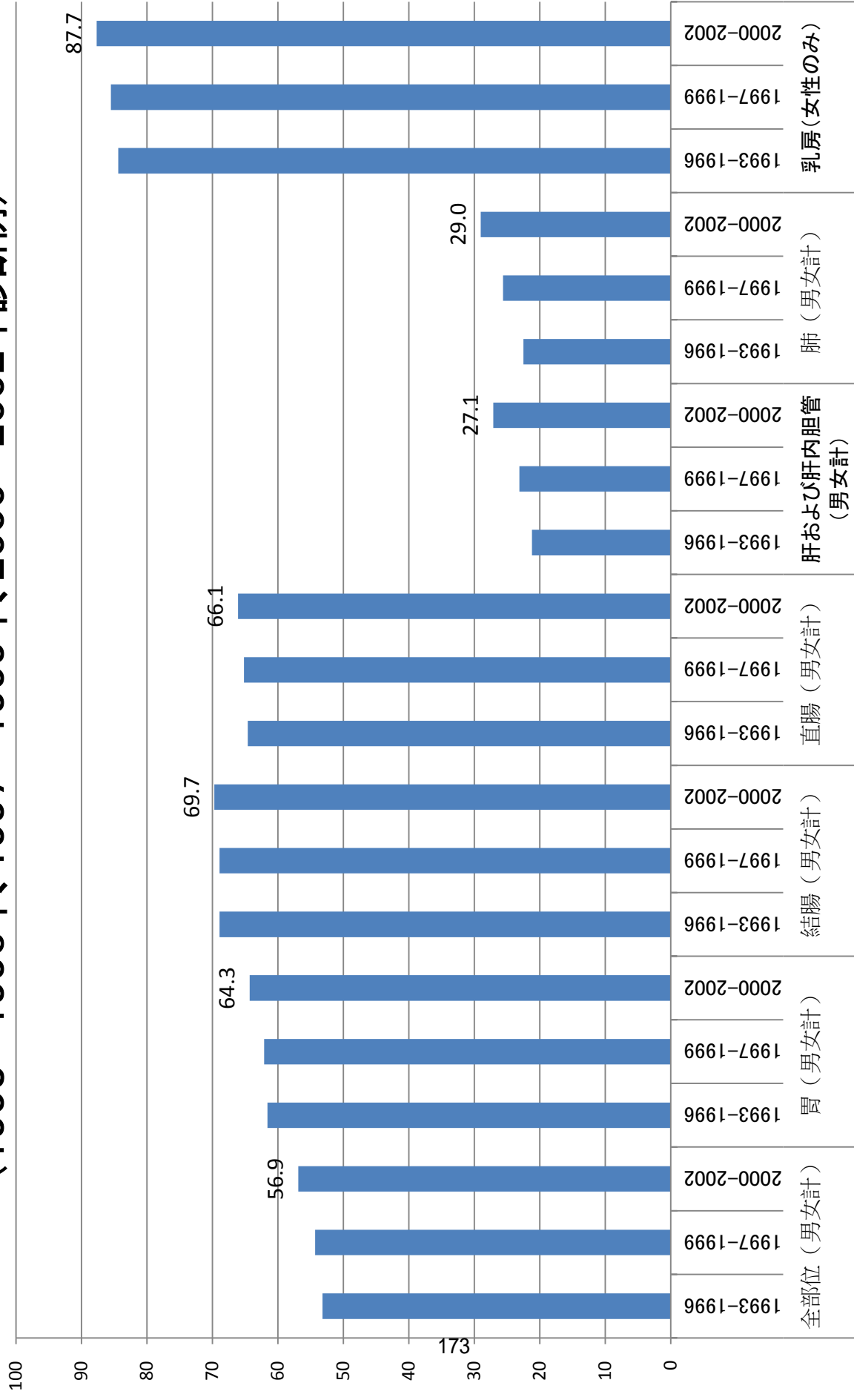
# 主ながんの年齢調整罹患率(注1)の推移(対人口10万人)



地域がん登録全国推計によるがん罹患データ(1975年~2006年)  
 国立がん研究センターがん対策情報センター



# 主ながんにおける5年相対生存率(注2) (%)の推移 (1993-1996年、1997-1999年、2000-2002年診断例)



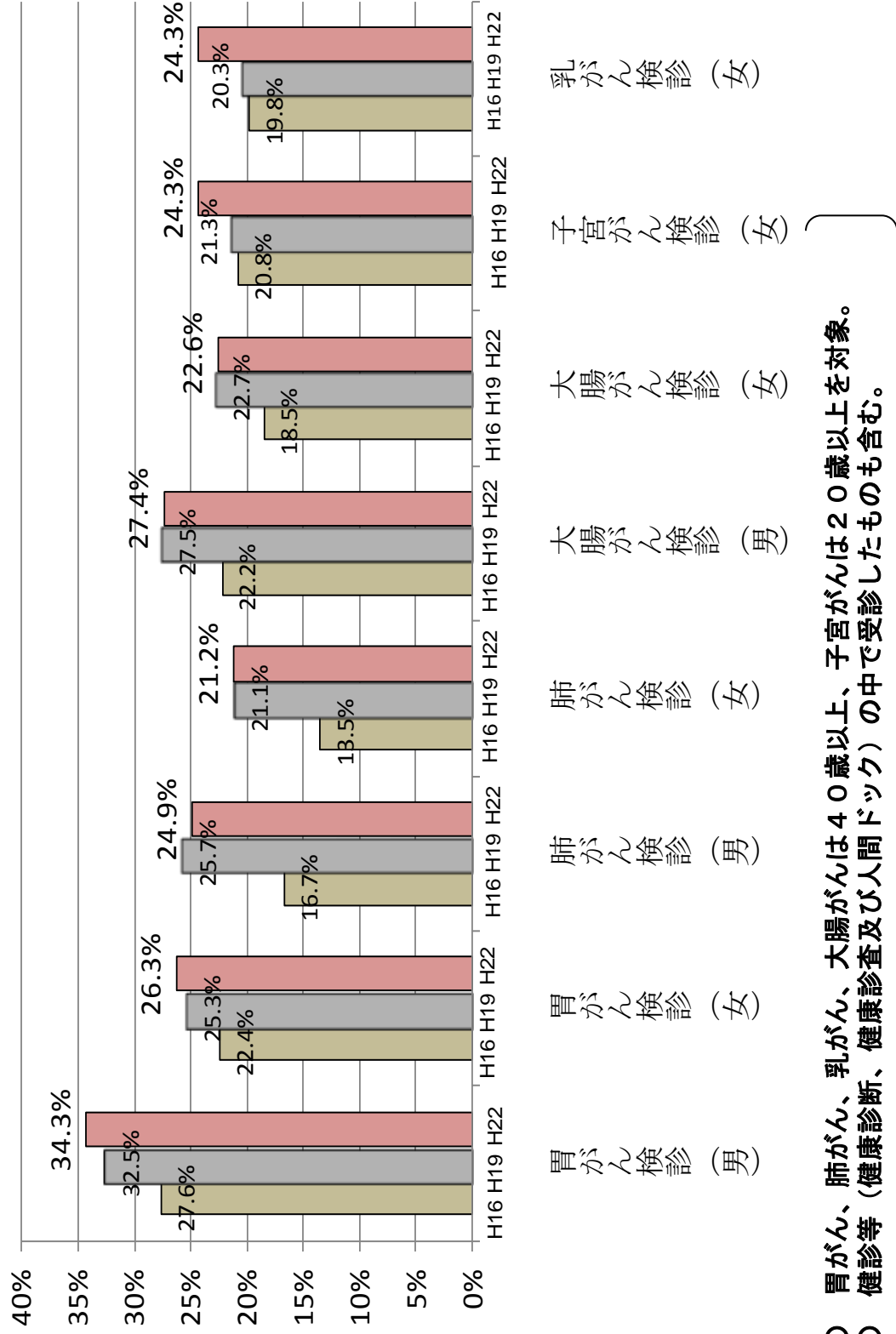
○ 全国がん罹患モニタリング集計2000-2002年生存率報告

(独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センター)

○ 独立行政法人国立がん研究センターがん研究開発費

「地域がん登録精度向上と活用に関する研究」平成22年度報告書

# がん検診の受診率の推移



○ 胃がん、肺がん、乳がん、大腸がんは40歳以上、子宮がんは20歳以上を対象。  
 ○ 健診等（健康診断、健康診査及び人間ドック）の中で受診したものも含む。

出典：平成22年国民生活基礎調査（厚生労働省大臣官房統計情報部）

### (注1)年齢調整罹患率(ねんれいちようせいりかんりつ)

もし人口構成が基準人口と同じだったら実現されたであろう罹患率。がんは高齢になるほど罹患率が高くなりますので、高齢者が多い集団は高齢者が少ない集団よりがんの粗罹患率が高くなります。そのため、仮に2つの集団の粗罹患率に差があっても、その差が真の罹患率の差なのか、単に年齢構成の違いによる差なのかの区別が付きません。そこで、年齢構成が異なる集団の間で罹患率を比較する場合や、同じ集団で罹患率の年次推移を見る場合に年齢調整罹患率が用いられます。年齢調整罹患率は、集団全体の罹患率を、基準となる集団の年齢構成(基準人口)に合わせた形で求められます。基準人口として、国内では通例昭和60年(1985年)モデル人口(昭和60年人口をベースに作られた仮想人口モデル)が用いられ、国際比較などでは世界人口が用いられます。年齢調整罹患率は、基準人口として何を用いるかによって値が変わります。年齢調整罹患率は、比較的人口規模が大きく、かつ年齢階級別罹患率のデータが得られる場合に用いられます。

年齢調整罹患率 =  $\left\{ \left[ \text{基準人口(昭和60年モデル人口)} \times \text{観察集団の各年齢(年齢階級)の罹患率} \right] \times \text{基準人口集団のその年齢(年齢階級)の人口} \right\}$  の総和 / 基準人口集団の総人口 (通例人口10万人当たりで表示)

### (注2)相対生存率(そうたいせいぞんりつ)

生存率を計算する対象者と同じ特性(性、年齢、暦年、地域など)を持つ一般集団の期待生存確率より算出した期待生存率で実測生存率を割ることによって、その影響を補正する方法。対象者と同じ特性を持つ一般の集団(一般の日本国民)の期待生存率は、国立がんセンター(現国立がん研究センター)が計算して公表しているコホート生存率表を利用して求めます。相対生存率は、対象疾患(例えば胃がんや肺がんなど)以外による死亡を補正する方法として広く用いられています。この方法は、死因について正確な情報がない場合にも、用いることができます。

出典:国立がん研究センターがん対策情報センター がん情報サービス

がんセンターの職員が主任研究者である研究班数と割合

年度	S38	S39	S40	S41	S42	S43	S44	S45	S46	S47	S48	S49	S50	S51	S52	S53
研究班数	7	21	21	31	24	24	28	33	35	45	53	56	57	58	57	64
がんセンターの職員が主任研究者である研究班数と割合	不明	不明	不明	不明	3 13%	3 13%	4 14%	5 15%	4 11%	8 18%	10 19%	12 21%	15 26%	12 21%	16 28%	15 23%

年度	S54	S55	S56	S57	S58	S59	S60	S61	S62	S63	H1	H2	H3	H4	H5	H6
研究班数	73	76	79	80	80	77	75	76	77	77	83	84	83	86	87	89
がんセンターの職員が主任研究者である研究班数と割合	22 30%	20 26%	21 27%	23 29%	24 30%	21 27%	20 27%	17 22%	20 26%	24 31%	32 39%	31 37%	31 37%	38 44%	39 45%	40 45%

年度	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21
研究班数	89	90	89	91	95	96	96	96	95	94	95	95	95	95	108
がんセンターの職員が主任研究者である研究班数と割合	43 48%	44 49%	40 45%	44 48%	44 46%	38 40%	39 41%	32 33%	34 36%	40 43%	43 45%	44 46%	42 44%	44 46%	63 58%

注) 昭和 38 年度から昭和 41 年度に関しては主任研究者の所属に関する資料が現存しない。

## がん研究助成金事業 事後評価委員会

### 委員名簿

(五十音順：敬称略)

今井 通子	株式会社ル・ベルソー 代表取締役
岩谷 力	国際医療福祉大学大学院 副大学院長
川越 厚	クリニック川越 院長
福井 次矢	聖路加国際病院 院長
望月 正隆	東京理科大学薬学部 教授